



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代社会における育児困難の構造分析
Author(s)	岩田, 美香
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第4914号
Issue Date	1999-09-30
DOI	https://doi.org/10.11501/3159448
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32508
Type	doctoral thesis
File Information	4914_Iwata.pdf



学位論文

現代社会における育児困難の構造分析

教 育 学 専 攻
教 育 計 画 講 座

岩 田 美 香

目 次

序 問題と目的

第1章 育児期の母親の不安

- 第1節 本章での課題と研究方法
- 第2節 育児行動のリスク・ファクターと諸要因
- 第3節 育児問題の解決からみた母親のソーシャル・ネットワーク
- 第4節 母親の不安と社会的孤立

第2章 縦断調査からみた「育児不安」の性格

- 第1節 本章での課題と研究方法
- 第2節 母親からみた「育児不安」
- 第3節 「育児不安」の解消過程
- 第4節 他児比較と早期教育

第3章 育児困難の構造分析

- 第1節 本章での課題と研究方法
- 第2節 母親たちの階層的相違
- 第3節 母親の行動にみる資源の活用
- 第4節 資源の制約と母親

終章 育児困難の構造と類型

- 第1節 育児困難の類型的把握
- 第2節 「育児不安」の社会的性格

まとめと今後の課題

謝辞

参考文献

- 資料1：質問紙調査の質問項目（平成5年調査）
- 資料2：面接調査の質問項目（平成5年調査）
- 資料3：追跡再調査での質問項目（平成9年調査）
- 資料4：育児困難に関する面接調査での質問項目（平成9年調査）

序 問題と目的

子どもの数が減り、一方で家電・外食産業・家事代行サービスなどの普及による家事の省力化によって、本来であればゆったりと育児をできそうな社会であるはずなのに、実際には、育児・子育てが難しくなっていると言われている。そこには、育児・子育てコストの上昇や就労している親にとっての就労・保育条件の不備など、生活レベルでの育児の困難さと、育児をしている母親の不安や悩みといった意識レベルでの負担感とが存在していると思われる。実際、子どもが産まれるのを待ち望み、育児を楽しみにしていたにもかかわらず、産まれてきた子どもを目の前にして繰り返される育児からは、必ずしも喜びや楽しみだけではなく、育児や子どもに対するネガティブな感情も生じてしまう。それらを単に母親の個人的資質に原因を求めるのではなく、母親を取り巻いている要因に注目しながら、母親の心理的な負荷の軽減をはかろうとした研究として、一連の「育児不安」研究がある。

「育児不安」に関する研究は積み重ねられ、筆者自身も、「育児不安」を中心にして、「育児不安」軽減のための要因分析を進めてきた。しかし、そもそも「育児不安」とは何を意味しているのだろうか、という根本的な疑問が自分自身の中に生じてきた。それは、生活困難層と言われる母親たちの育児や子育てを通して、「育児不安」研究ではとらえられない母親たちの存在を知り、彼女たちの生活や気持ちに直面したことに依っている。社会全体の中では、その存在は少数派として例外的に取り扱われる場合が多いのかもしれないが、彼女たちの育児や子育ては何も特別のものではなく、彼女たちにとっては、ごくあたりまえの育児が日々営まれている。そうした、とらえにくい（ということは、対応策の対象としてもなりにくい）母親たちをも組み入れた育児の困難さを表せないものかと考えたことが、本研究の原点である。

さらに、子育て全般において、わが子がどのように育つか、自分の子育てで大丈夫かといった先の見えない不安は自ずと存在するものであるのに、とりわけ「育児」期に限定して、その不安が注目されるのは、なぜであろうかという疑問も生じた。現代社会では、イジメ、不登校、受験競争など学校や教育に関する問題が数多く取り上げられている。そうした中であって、育児期以降の子どもを育てていくうえでの親の心配や不安感というのは、育児不安と同様か、それ以上に深刻なものであるに違いない。しかし、そうした小学生や中学生、あるいはそれ以降の子どもを育てている母親の不安感を、「育児不安」あるいは

「子育て不安」のような形で社会的に問題視されることは少ない。この時期の子育て問題は、子ども自身や教育者の立場からの苦悩として教育問題で取り上げられることが多く、親が注目されるのは、この時期の子育ての大変さというよりも、その責任が問われる際に、学校と家庭と地域という構図の中で述べられる場合が多い。そもそも「育児」とは、広辞苑に「幼児を育てること」とあるように、就学前の子どもを育てることを意味している。また、「子育て」が「子どもを育てること」であるならば、「子」という言葉が何歳までを意味するのかという個々の母親のとらえ方によって、その期間の範囲は異なってくる。

本論文では、一般的に母親が抱く育児の悩みや不安感を育児不安として示し、その中でも特に母親の心理・意識的側面に注目して形に表そうとしたものを「育児不安」として示していく。これに対し、育児不安や「育児不安」といった意識レベルでの現象形態の有無に関わらず、生活・行動レベルで生じる育児の困難さを育児困難という用語で示していく。

これらの問題意識をもとに、本論文の目的は、育児期の母親に焦点を合わせながら、「育児不安」の性格を相対化して検討し、「育児不安」を含めた育児困難の構造を分析することにある。すなわち、どのような生活を営んでいる母親が、どういった育児困難をもち、それをいかに感じているのかを整理し、それによって、社会問題化されている「育児不安」の相対的位置や社会的位置づけを明らかにしていく。「育児不安」は、母親個人の苦悩としてだけではなく、社会的にも注目されているにもかかわらず、社会的に問題視されることの意味づけは成されていないからである。

母親がおかれている生活条件が、母親の意識レベルでの現象形態を規定しているということを実証していく中から、生活基盤のありようと「育児不安」の位置が説明されると思われる。子どもを育てている上での悩みや戸惑いといった一般的な育児不安は、生活条件に関係なく、誰しもが抱くものであろう。しかし、その中から「育児不安」という形で取り上げられ、社会的にも注目されている現象は、生活基盤が安定している母親たちに代表され、その問題や不安も顕在化している場合が多い。一方、生活基盤が脆弱であるために生じる育児の問題や育児不安は、潜在化されてみえにくく、ときには放置されたまま育児の困難さが顕在化されない場合もある。現れ方に違いはあっても、どちらも育児のうえでの困難であることには変わりがなく、一方だけが問題視されることは、育児困難の全体的な社会状況を説明してはいない。本論文は、育児困難の現象形態が生活構造に規定されているという仮説を全体的な育児状況の中で検討していくものである。

また、本論文の構成は、2部構成に近い内容となっている。第1・2章が「育児不安」

研究であり、第3章および終章が「育児不安」を含めた「育児困難」の研究である。すなわち、第1・2章が、「育児不安」研究と「育児不安」という概念で扱われる対象が、一定部分階層性をもっているという仮説を作り上げる過程であり、第3章・終章が、その仮説をもとに育児困難を構造化していく試みである。具体的には、第1章において「育児不安」尺度の精密化を通して「育児不安」を構造化し、その関連する要因を検討した。さらに、第2章においては、「育児不安」を時間軸において相対化してとらえるために、「育児」期を終えた母親たちへの縦断調査を実施し、母親自身が「育児不安」をどのようにとらえているのかを検討した。しかし、こうした「育児不安」研究を進めていく中で、「育児不安」概念の曖昧さと対象把握の限界が示唆され、育児困難研究の必要性を感じた。また、第1・2章ともに、事例研究においては、母親のもつソーシャル・ネットワークに重きを置いて分析していった。これは、現代の育児が、親族・地域・諸機関を巻き込む育児ネットワークに支えられてはじめて可能になっていると考える方が現実に近い⁽¹⁾と思われるからである。続く第3章では、現代社会の育児困難を構造的に把握するための分析枠組みを提出したうえで、育児不安も組み入れた社会全体の「育児困難」の構造と現象形態について、母親の資源と行動の分析を通して把握した。そして最後に、終章において育児困難の構造と類型について整理し、全体社会における育児困難のなかでも、とりわけ「育児不安」が社会的に問題視されている状況を考察した。

ところで、「育児不安」を感じる対象は母親だけに限られたものではなく、父親の育児不安⁽²⁾や、祖母⁽³⁾など、親たちに代わる人々の育児不安の問題もある。しかし、乳幼児の子育ての実際がまだまだ母親中心であること⁽⁴⁾から、本論文においては、まず母親の「育児不安」に対象を限定して研究を進めていく。

本論文第1章は「育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク」として『北海道大学教育学部紀要』第68号（1995年）に掲載された論文を、第2章は「縦断調査からみた「育児不安」の性格」として『北海道大学教育学部紀要』第74号（1997年）に掲載された論文を、第3章は「母親の資源と行動の分析」として『教育福祉研究』第4号（1998年）に掲載された論文を、終章は「育児困難の構造と類型」として『教育福祉研究』第5号（1999年）に掲載した論文を、それぞれ加筆訂正したものである。

【序の注と引用文献】

- (1) 落合恵美子「現代の乳幼児とその親たち―母子関係の神話と現実」三沢謙一他著『現代人のライフコース』ミネルヴァ書房,1989 年。
- (2) 専業主夫になった父親も「育児不安」になったという事例としては、吉田義仁『僕らのパパは駆け出し主夫』朝日新聞社、1992 年や太田睦「育休父さんの成長日記」『朝日新聞』連載など。また、父子家庭の父親の育児不安に注目したものとしては、渡邊秀樹「父親の育児不安」大日向雅美・佐藤達也 編『現代のエスプリ 342 子育て不安・子育て支援』至文堂、1996 年。
- (3) 祖母の育児ストレスについては、「おばあちゃんも育児でつらい？」『日本経済新聞』1999 年 3 月 30 日夕刊。
- (4) 働く母親が増加し、M字型就労の底辺は上がってきているが、子どもの年齢が3歳未満で見ると 73.3 %、3～5歳で見ても 63.3 %が、専業主婦による子育てをしている。『児童をとりまく世帯の状況』厚生統計協会、1995 年。

第1章 育児期の母親の不安

第1節 本章での課題と研究方法

1. 先行研究と課題の設定

育児をしている母親のネガティブな感情を表す用語としては、育児不安・育児ストレス・育児ノイローゼ・育児疲労など様々であるが、これらの用語の明確な定義や相互の関連、相違点についての説明は、ほとんど成されていない⁽¹⁾。しかし一般には、これらを代表する形で「育児不安」が用いられ、「育児不安」という用語を用いることによって、母親の子どもや育児に対する心配ごとや不安、そして嫌悪感をイメージする場合が多い。すなわち、育児全般についての困難な状況や危機状況を母親の心理的側面にとらえ、「育児不安」という用語で代表させていると考えられる。そもそも「育児不安」という用語が使われるようになったのは、学術的には1976年の高橋・中の論文⁽²⁾においてであり、その後、育児・助産婦雑誌を通じて1980年代に普及し始めたとされている⁽³⁾。

「育児不安」に代表される、こうした母親の問題に関する研究としては、服部祥子と原田正文を中心とした「大阪レポート」が注目された⁽⁴⁾。また、それに先立つ研究としては、兵庫県と兵庫県家庭問題研究所による「核家族の育児援助に関する調査報告書」⁽⁵⁾や、さらに「育児不安」については牧野による一連の研究⁽⁶⁾がある。

これらの先行研究の中で、まず「大阪レポート」について評価できる点としては、医師や保健婦が調査のスタッフであることから、アンケートだけではなく健診をも含めた母親の育児ストレスや子どもの発達特性についての詳細な検討が成されていることがあげられる。さらに、市全体の子どもの縦断研究であり、その健診の回数も多い。また、思春期までを見通して、子育てをその原点として捉える視点も特徴的である。しかし「大阪レポート」では、母子をとりまく環境については、「地域社会における子育て家庭の孤立化と人間関係の希薄化」という言葉で警鐘¹⁷しているが、育児の援助体制については「育児の手伝いをしてくれる人はいますか」という項目のみで~~あ~~、母親の社会関係についても「話し相手」の数をたずねる項目だけで、具体的な質問項目に反映されていない。さらに、母親自身の社会的活動については、就労についてのみ考察されているだけである。

一方、兵庫県家庭問題研究所による調査では、数量的データと同時にインタビューによる質的データも使って、「母親たちが、毎日どのような生活を送り、何を思い、何を求めているのかを知る」ことを課題としている。母親の育児に関する生活だけではなく、母親

個人としての生活にも目を向けており、さらに、ネットワークとの関連の中で、母親が抱える育児上の諸問題を捉えている点は注目できる。また、面接調査においては、「ネットワーク形成の条件」も述べられ、母親が主体的に社会関係をつくり出していく過程についても触れられている。しかし、「育児援助」という概念を分析の鍵として用いているため、母親が自ら問題を解決していくというよりも、外側にある育児援助を受けるだけの対象として捉えがちである。

これに対し牧野の研究は、母親の育児意識について、牧野自身の「育児不安」尺度を作成するという点が特徴的である。この尺度作成についての検討は、後述の「分析の方法」において行うが、彼女の研究では、「育児不安」に関わる要因を一連の研究で綿密に分析している。さらに、母親の学習活動という限定はあるものの、母親が自発的に社会活動に参加していくことも研究に組み入れられていることは、先の2つの研究に比べ評価できる。しかしながら、全ての研究がアンケート調査のため、母親の具体的な問題解決といった、面接調査から得られる個別の問題についてのデータが欠落している。

本研究では、牧野の「育児不安」尺度を土台にした育児期の母親の感情の構造化の試みと、母親達の主体的な社会関係の形成、いわゆるネットワーキングに注目した調査を行った。すなわち、牧野の「育児不安」尺度を本村他⁽⁷⁾の指摘をもとに検討しなおし、構造化のための因子分析を行った。また、サポート研究からは、今後の研究が取り組むべき課題として、「どんな問題の時に、誰からのどんなサポートが、どんな人にとって有効なのかを一つ一つ検討していく」ことの必要性が指摘されている⁽⁸⁾ことから、母親の妊娠期、子どもが乳児の時期、幼児である現在とで、どのような問題のときに、母親はどのように解決していったか、また、誰からのサポートが有効であったかを検討していく。

したがって、本章での課題を次のように設定する。

課題1：育児期にある母親の不安の構造を探り、その関連要因を検討する。

その関連要因の中でも母親の「社会的活動」と「ソーシャル・ネットワーク」に注目し、
課題2：母親の問題解決をめぐるソーシャル・ネットワークの現状を把握する。

最後に、問題解決の際のソーシャル・ネットワークの活用の違いから、
課題3：母親の不安とソーシャル・ネットワークの関係を考察する。

2. 調査の概要

(1) 質問紙調査の対象と調査内容

1) 手続きと期間

札幌市にある9つの全保健所を通して、3歳児健診で来所した母親に110項目にわたるアンケート用紙を配布し、後日郵送による回収を行った。947票を配布し、291票を回収した（回収率31%）。アンケート配布は平成5年7月上旬～8月上旬。

2) 調査対象

3歳児をもつ母親291名。3歳児健診に焦点をあてたのは、母親が自発的に家から外へと働きかけた状況を捉えたかったからである。すなわち、母親にとって3歳の子どもは、乳児よりも一緒に連れて活動しやすい段階であり、また、子ども自身の行動は活発となり、その要求も外へと向かう。それでいて、幼稚園や「仲良し子ども館」⁽⁹⁾に参加する前の年齢だからである。4歳になれば、多くの子どもたちが幼稚園をはじめとした集団生活に参加し、母親も自ずと社会的活動に促されるからである。

当初、3歳児健診の来所者全てにアンケート用紙を配布するという調査方法をとったため、母親以外の養育者による回答もあり得ると考えていたが、回収の結果、母親以外の養育者からの回答はなく、「3歳児をもつ母親」のみが今回の対象者となった。

調査対象の子どもの構成は表1-1の通りであり、対象児の性は男女児約半数ずつであった（表1-2）。家族の形態は、75%が核家族である（表1-3）。また、母親の学歴は、半数が高校卒業である（表1-4）。

3) 調査内容（巻末資料1参照）

調査票は、次のような項目で構成されている。

- ①フェイスシート（家族構成、居住形態、居住年数、母親の学歴、家庭収入、夫の職業）
…11項目
- ②母親の社会的活動…4項目
- ③親の日常の育児と他人との付き合い…8項目
- ④夫の家事・育児参加とその評価…26項目
- ⑤育児情報の利用と評価、習い事の希望と現状…13項目
- ⑥育児についての充実感や不安感、行動に現れるストレス…26項目
- ⑦育児上の問題についての相談者、援助者…20項目
- ⑧育児についての自由回答…2項目

表 1-1

子どもの構成 〈質問紙データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
1 人 っ 子	81	(27.8)
兄弟あり第1子	58	(19.9)
兄弟あり第2子	152	(52.3)

表 1-2

対象児の性 〈質問紙データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
男	149	(51.2)
女	141	(48.5)
N A	1	(0.3)

表 1-3

家族形態 〈質問紙データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
父 母 + 子	219	(75.3)
父母+子+祖父母	55	(18.9)
母 + 子	9	(3.1)
母+子+祖父母	5	(1.7)
そ の 他	3	(1.0)

表 1-4

母親の学歴 〈質問紙データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
中 学 卒 業	12	(4.1)
高 校 卒 業	159	(54.7)
短 大 卒 業	92	(31.6)
大学卒業以上	27	(9.3)
N A	1	(0.3)

（２）面接調査の対象と調査内容

１）対象者の抽出と調査期間

質問紙調査の最後で、面接調査に協力してもらえる人に名前と連絡先を書いてもらった。291名のアンケート回答者のうち、59名が応諾してくれた。その中で、連絡がとれない、日程の調整ができない、子どもの病気などで調査が不可能になった15名を除いた44名が最終的な面接調査の対象者となった。面接は調査協力者の自宅で実施したが、仕事をしている内の2名については職場の昼休みを利用して行った。実施期間は、平成5年9月上旬～10月中旬である。

２）調査対象

調査対象の子どもの構成は、一人っ子が11人、対象児が第1子で下に弟妹のいる者が9名、対象児の上に兄姉がいる者が24名であり、対象児の性は、男児が23名、女児が21名で、質問紙調査と同様に約半数ずつであった。

家族の形態は、同居が4名、半同居（一階と二階で住分けるなど、生活の主な部分を別に行っている）が3名、核家族が37名である。また、母親の学歴は、中卒が1名、高卒が20名、短大卒が16名、大卒が7名であり、質問紙調査の構成よりは高学歴傾向であった。

３）面接調査の方法と調査内容（巻末資料2参照）

面接調査はあらかじめ用意した面接調査用紙に、質問紙調査の結果を書き込み、質問紙調査で、すでにたずねた項目をさらに深めてたずねる項目と、面接調査で新たにたずねる項目とで構成した。

面接調査項目は、以下の通りであり、所要時間は一人1時間半～2時間である。

①母親のもつ社会的資源、ネットワークの内容・大きさ・親密度・形成理由、母親にとっての Key persons。

最初に母親のもつ親族・友人等のネットワークをたずね、その人が母親からみて心理的にどれだけ近いのか、遠いのかを Kahn & Antonicci⁽¹⁹⁾ のコンボイ（convoy）モデルを参考にした図（図1-1）に書き込んでもらう形で確認していった。Kahn & Antonicci のいうコンボイ概念とは、Bowlby の愛着理論をもとに、それを個人の一生を通じての対人相互作用にまで拡張したものである。そして、ライフ・コースを通じて変化するソーシャル・サポート・ネットワークを「個人の護衛隊（コンボイ）」と呼び、個人を中心とした同心円構造としてモデル化している。

次に、妊娠期から乳児期そして現在の育児について、先にあげたネットワークの構成員の、どの人がどのようなときにサポーターとなったかをたずねていく（書き忘れていた構成員がいた場合にはここで書き入れてもらう）。

最後に、個別の問題を越えて全般的にみて母親にとって支えとなってくれた人（Key persons）を3人まで挙げてもらった。

②妊娠中からこれまでの母親としてのライフコース（妊娠中の生活と悩み、これまでの育児と悩み、それらへの対処の仕方、夫のかかわり、ネットワークの利用について）。

③母親の育児観、育児責任、子どもへの期待、夫とのしつけ方略の違い。

④母親自身の日常生活、母親の育児以外のストレス、社会活動の実態、仕事を辞めたきっかけ、仕事の様子（就業している母親の場合）、人生観。

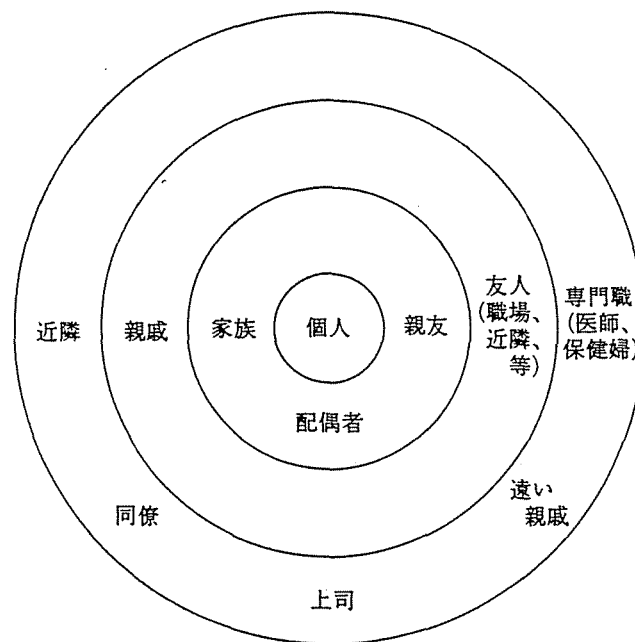


図1-1 コンボイ（convoy）モデル

3. 分析の方法

(1) 育児期の「母親の不安」の構造化の試み

1) 牧野の「育児不安」尺度とその問題点

母親の育児におけるストレスや不安の傾向について、本研究では、牧野の「育児不安」尺度を参考にしながら新たに作成したものによって測定した。

牧野は、育児不安を『新社会学事典（1993）』において、「育児を担当している人が、子どもの状態や育児のやり方などについて感じる漠然とした恐れを含む不安の感情。疲労感や焦り、イライラなどの精神状態を伴う。悩みや恐れはそれを引き起こす特定の対象があるのに対して、不安は明確な対象がなく漠然としている。」と説明し⁽¹¹⁾、反対概念として育児に対する自信や満足感、幸福感を想定した。彼女の「育児不安」尺度作成においても、「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」と操作的に定義されている⁽¹²⁾。「育児不安」という対象そのものが漠然としており、内容も無限定的（diffuse）な性質であり、母親自身も不安の状態を明確に意識しているとは限らないことから、その調査や測定には困難さがあることは、牧野自身も述べている⁽¹³⁾。そこで彼女は、その特性が似ていることから、産業疲労測定のための「蓄積的疲労徴候調査」⁽¹⁴⁾を参考にし、育児不安の尺度化を試みた。

「蓄積的疲労徴候調査」とは、「“症状”ではなく“徴候”という表現をとった」とあるように、産業疲労が病的な症状を調べる以前の問題として、労働者の労働・生活条件が、その人たちの“健康な”生活の維持増進を阻害するものとなっていないかどうかをとらえようとしたものであり、負荷事象（超過負担）を主観（感情）への投影という形で把握しようとしている。すなわち、一定の時点で発現される主観の状態を問うのではなく、「何日間か継続して、あるいは停留して感じられるような症状徴候を調べる」というものである。牧野は、育児不安の問題が、「いわゆる健康な育児行動を阻害するような一種の“負荷事象”を主観的に表明したもの」であり、この「蓄積的疲労徴候」の問題と共通するところが多いと考えたのである。

牧野の「育児不安」尺度の作成では、育児期の母親達が自分達の生活感情や意識を表明した言葉を、新聞の投書、乳幼児学級等での発言を中心に収集し、次の五つの特性に対応する表現に分類していく作業を経て、調査項目を採用している。五つの特性とは、Ⅰ．一般的疲労感、Ⅱ．一般的気力の低下、Ⅲ．イライラの状態、Ⅳ．育児不安徴候、Ⅴ．育児意欲の低下であり、これは先の「蓄積的疲労候調査」の特性を参考にしている。

牧野の「育児不安尺度」による具体的な調査項目は、次の14項目である。

I. 一般的疲労感を測定する項目

- ①毎日くたくたに疲れる。(N)
- ②朝、目ざめがさわやかである。(P)

II. 一般的気力の低下を測定する項目

- ③考えごとがおっくうでいやになる。(N)
- ④毎日はりつめた緊張感がある。(P)

III. イライラの状態を測定する項目

- ⑤生活の中にゆとりを感じる。(P)
- ⑥子どもがわずらわしくてイライラしてしまう。(N)

IV. 育児不安徴候を測定する項目

- ⑦自分は子どもをうまく育てていると思う。(P)
- ⑧子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある。(N)
- ⑨子どもは結構一人で育っていくものだと思う。(P)
- ⑩子どもをおいて外出するのは、心配で仕方がない。(N)

V. 育児意欲の低下を測定する項目

- ⑪自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう。(N)
- ⑫育児によって自分が成長していると感じられる。(P)
- ⑬毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う。(N)
- ⑭子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う。(N)

それぞれの項目について、「よくある」～「ほとんどない」までの4件法で得点化して計算し、個々の母親の「育児不安」の高低が出される。なお、上述の項目中の(P)は肯定的な方向を、(N)は否定的方向を示しており、得点化においては(P)得点のコンバートを行っている。

牧野の育児不安尺度は、彼女の一連の研究⁽¹⁵⁾において、また、本村他⁽¹⁶⁾の研究においても、おおむね良好であると評価されたが、育児不安得点の低い母親については、本村が次のように指摘をしている⁽¹⁷⁾。「子どもに関心の低い母親は、育児不安徴候を表しにくく、

育児全般の問題を考える上では、こうした、無関心な母親の問題も決して無視できない」のであり、『不安の低い母親』は、だから問題がないとは限らず、筆者は、不安が低ければ低いほど『健康』な『望ましい』母親ではあるとは言えないと考えている。」すなわち、「育児不安は、母親ならば、だれしもある程度はもっているものである。問題は不安があることではなく、その不安が病的なほどに高く、通常の判断力や感覚のバランスを失うことにある。」

こうした問題提起をもとに、牧野自身も彼女の育児不安尺度についての問題点を指摘している⁽⁴⁵⁾。その結果、「育児不安尺度」の14項目のうち「④毎日はりつめた緊張感がある」については、牧野自身の結果においても本村他の結果においても、ポジティブな感覚にもネガティブな感覚にもつながるものであり、内容的妥当性が最も低く、尺度として適当でなかったとしている。また、「育児不安」という概念が、過度の母子一体（接近）の感情とイライラや子ども嫌い（離反）の感情の両極性をもつ「育児における負荷事象」であると再検討したうえで、「子どもが好きではない」・「子どもが足手まといに感じられる」などの拒否的感情を加える方が適切であること、さらに本村の指摘に答えるため、育児不安得点が低いことが負荷事象が低いことであり、望ましい状態であることを明確にするために、「子どもがとても可愛い」「子どもを育てるのは楽しい」など、子育てにおける充実感と幸福感を測定できるような項目を採用する必要があるとしている。

2) 育児期の「母親の不安」尺度の作成

筆者は、以上の指摘されている問題点をもとにしながら、新たに「(育児期の)母親の不安尺度」を作成した。まず、牧野の指摘に従って、尺度としては妥当でなかった「④毎日はりつめた緊張感がある」の項目を除き、離反の感情である「子どもが好きではない」「子どもが足手まといに感じられる」の2項目と、ポジティブな項目である「子育てが楽しく毎日が充実している」・「子どもがとても可愛い」の2項目を加えた。

さらに、筆者が、実際に子育てをしている母親からの指摘を受けて、育児による閉塞感「子どもとばかりいて、孤立した感じがする」と、育児による犠牲感「子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を活かしているという充実感がない」の2項目も加えた19項目で尺度作成を試みた。以下、これらの項目を用いて、主に尺度の等質性についての尺度分析を行った。具体的には、今回採用した19の項目は次のようなものである。

- A.毎日くたくたに疲れる(N)
- B.朝、目ざめがさわやかである(P)
- C.考えごとがおっくうでいやになる(何も考えたくなくなる)(N)
- D.生活の中にゆとりを感じる(P)
- E.子どもがわずわらしくてイライラしてしまう(N)
- F.自分は子どもをうまく育てていると思う(P)
- G.子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある(N)
- H.子どもは結構一人で育ってゆくものだと思う(P)
- I.子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない(人に預けて出かけた場合も含む)(N)
- J.自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう(N)
- K.育児によって自分が成長していると感じられる(P)
- L.毎日毎日、同じことの繰り返しかしていないと思う(N)
- M.子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う(N)
- N.子どもが好きではない(N)
- O.子育てが楽しく毎日が充実している(P)
- P.子どもが足手まといに感じられる(N)
- Q.子どもがとても可愛い(P)
- R.子どもとばかりいて、孤立した感じがする(N)
- S.子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を活かしているという充実感がない(N)

上述の項目中の(P)は肯定的な方向を、(N)は否定的方向を示している。19の各項目について、「よくある」・「ときどきある」・「ほとんどない」・「まったくない」の4件法による回答をし、1～4点で得点化を行った。得点が高いほど不安度が高くなる形で、得点方向の調整を行った(ポジティブ項目については得点のコンバートを行った)。

質問紙調査の291名のデータについて、因子分析(主因子法、バリマクス回転)を行い、いずれの因子に対しても負荷量が小さい「GとH」および、二つの因子に対して.40程度の因子負荷量をもっている「CとP」を除いて、再度、因子分析を実施した結果、これまで「育児不安」として一次元を想定して測定されていたものから、表1-5に示すような3つの因子が抽出された。

表 1-5

「母親の不安尺度」の因子分析の結果				
項 目	因子負荷量			共 通 性
	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	
B	.713	.114	.163	.548
D	.710	.159	.144	.550
A	.686	.147	-.012	.493
R	.007	.737	.124	.559
J	.193	.712	.060	.547
S	.109	.681	.200	.515
M	.160	.670	.203	.516
L	.163	.562	.317	.444
I	.099	.551	-.348	.434
O	.251	.118	.726	.605
N	-.025	.254	.679	.526
K	.123	-.063	.618	.400
Q	-.239	.097	.596	.422
F	.243	.137	.490	.318
E	.253	.182	.448	.298
因子寄与率 (%)	18.5	27.9	25.4	71.8

このうち第Ⅰ因子は、因子負荷量の高い順に、B「朝、目ざめがさわやかで（ない）」、D「生活の中にゆとりを感じ（ない）」、A「毎日くたくたに疲れる」の3項目が推定され、内容から「育児や生活に対する疲労感」を表している因子と解釈され、f 1「生活疲労」とする。

また、第Ⅱ因子は、R「子どもとばかりいて、孤立した感じがする」、J「自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」、S「子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を活かしているという充実感がない」、M「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う」、L「毎日毎日、同じことの繰り返しかしていないと思う」、I「子どもをおいて外出するのは心配でしかたがない」、の6項目が推定され、「育児のために自分が犠牲となって、やりたいことができず、充実感を感じられない状態」を表している因子と解釈される。したがって、f 2「充実感欠如」因子とする。

これに対して、第Ⅲ因子は、O「子育てが楽しく（なく）毎日が充実して（いない）」、N「子どもが好きではない」、K「育児によって自分が成長してると感じられ（ない）」、Q「子どもがとても可愛い（くない）」、F「自分は子どもをうまく育てていると思（わない）」、E「子どもがわずらわしくて、イライラしてしまう」、の6項目が推定され、「育児や子どもに対するストレスや不安の感情」の因子と解釈された。したがって、f 3「育児不安」因子とする。また、これら f 1、f 2、f 3は、子育てをしている母親の抱く不安全般であり、総称して育児期の「母親の不安尺度」と呼んでおく。

因子ⅠとⅡの間には $r=.32$ ($<.001$)、因子ⅠとⅢの間には $r=.28$ ($<.001$)、因子ⅡとⅢの間には $r=.34$ (< 0.001) とそれぞれ中程度の相関があり、3つの因子は、いずれも育児期の母親のネガティブな感情（リスク・ファクター）を構成しているものの、やや独立した因子とみなし3つの側面から分析していく。

「母親の不安尺度」得点は、21点から53点にわたって図1-2のように分布した（Mean = 35.7点、SD = 5.67）。

f 1「生活疲労」の得点は、3点から12点にわたって図1-3のように分布した（Mean = 8.0点、SD = 1.54）。一方、f 2「充実感欠如」因子の得点は、6点から22点にわたって図1-4のように分布した（Mean = 14.0点、SD = 3.31）。f 3「育児不安」因子得点は6点から22点にわたって図1-5のように分布した（Mean = 12.8点、SD = 2.62）。

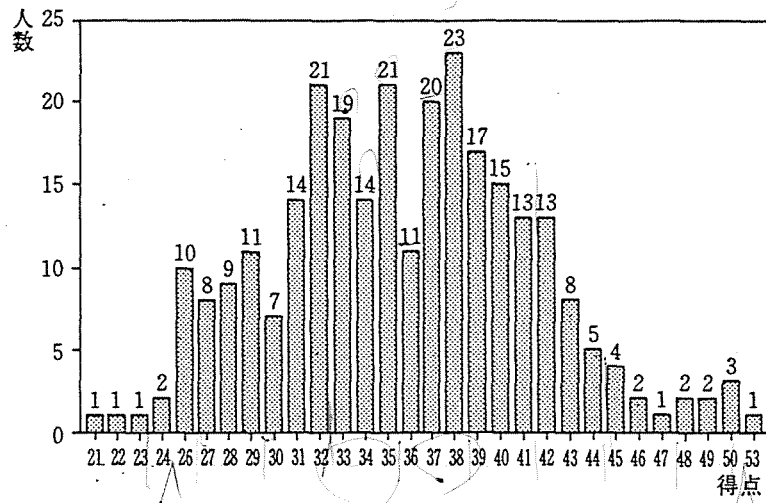


図 1-2 「母親の不安得点」のヒストグラム

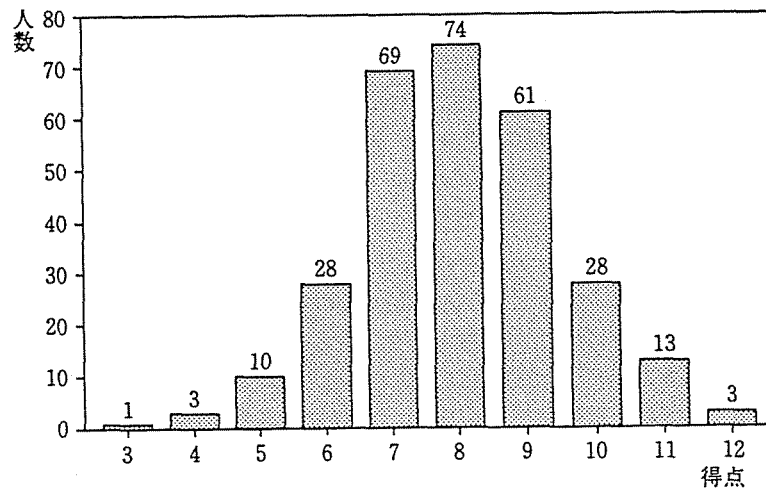


図 1-3 f1 「生活疲労」得点のヒストグラム

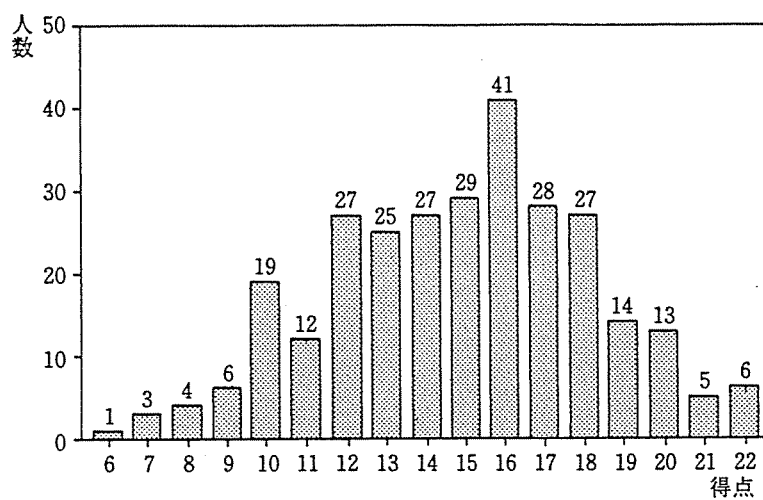


図 1-4 f 2 「充実感欠如」 得点のヒストグラム

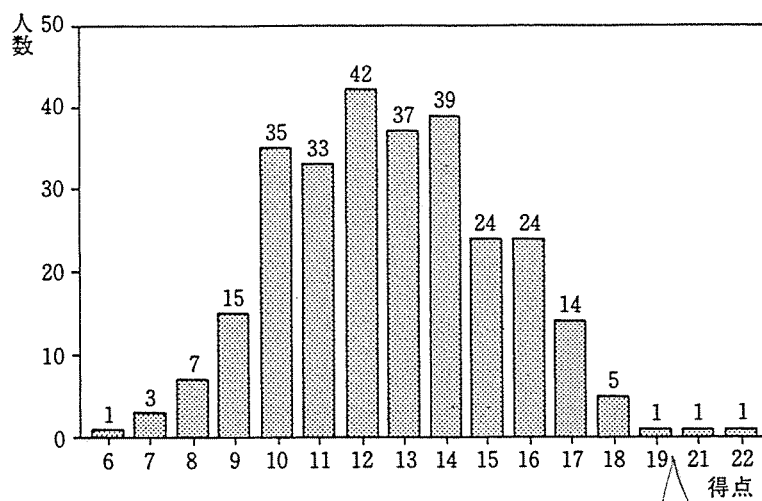


図 1-5 f 3 「育児不安」 得点のヒストグラム 20

(2) ソーシャル・ネットワーク分析の方法

ソーシャル・サポート研究については、様々なアプローチがとられている⁽¹⁹⁾が、本章では、母親が問題解決のために用いたネットワークとして、受容されたサポートからのアプローチをとる。すなわち、受け手である母親が、「サポート」として認知した相手について考察していく。

このアプローチは、「ストレスに苦しむ人に対して、他者がいかに介入すればよいのか」という実践的な問題から生じたものである。ここでは、サポートとして意図された行動に焦点を当て、ある人のストレスや安寧と、その人に向けて実行されたサポートとの関連を見ることで、人の適応を促進するサポートとは具体的にどのような行動なのかを知ることができる⁽²⁰⁾。

また、ソーシャル・ネットワークの分類カテゴリーとしては、夫・親族のネットワーク、医師や保健婦などの専門家のネットワークのほかに、Jennings, Stagg, and Connors の分類を参考にして、Personal ネットワーク、Maternal ネットワークを用いた⁽²¹⁾。Personal ネットワークとは、母親の学生時代や元あるいは現在の職場の友人など、母親役割に関係なくできたネットワークのことであり、Maternal ネットワークとは、産院や母親学級で知り合ったり、上の子を通して知り合ったりというように、母親としての立場を通してできたネットワークのことである。同様に、それぞれのネットワークでの友人を Personal 友人、Maternal 友人と用いる。

さらに、面接調査で用いる「コンボイ (convoy) モデル」も分析の対象とする。Kahn & Antonicci によれば、個人に一番近い第1円が「長期間安定しており役割に影響されないコンボイ・メンバー」であり、第2円が「やや役割に関係しており、時間の経過にともなって変化を示すコンボイメンバー」、第3円が「役割の関係に直接結びついており、役割の変化に影響を受けやすいコンボイ・メンバー」である。そして、このコンボイモデルの第1円にいるメンバーが「さまざまな状況で支えを提供することができる」としている⁽²²⁾。

第2節 育児行動のリスク・ファクターと諸要因

1. 育児行動とリスク・ファクター

今日の母親は、子どもに対してどのくらいイライラしたり手をあげて怒ることがあるのだろうか。ここでは、主に質問紙調査のデータを用いて述べていく。表1-6に示すように、「子どもに対してイライラする」ことがある、「子どもを大声で怒る」ことがある母親は、ともに91%を越える高率である。さらに、「子どもに衝動的に手をあげてしまう」母親が60%を越えている。回収前、筆者は、「衝動的に」という言葉を使って質問項目を作ったことや、社会的望ましさの影響も加わって、この設問は現実との乖離が生じて、かなり低率になるであろうと予測したが、実際には全サンプルの半分以上を上回る結果になった。これらの質問紙調査の結果からも、今日の育児に携わっている母親がかかえている育児ストレスの多さと育児の現状を垣間みることができる。

先に、こうした行動に表れる背後にある因子として、3つのリスク・ファクター、f1「生活疲労」因子、f2「充実感の欠如」因子、およびf3「育児不安」因子とを想定したが、母親のストレスフルな育児行動とこれら三つの因子とは、どのような関係があるのだろうか。

「イライラする」・「大声で怒る」・「手をあげる」のそれぞれとf1「生活疲労」、f2「充実感の欠如」およびf3「育児不安」因子について、1要因の分散分析をおこなった。

その結果、f1「生活疲労」は「イライラ」との関連が $F = (1,279) = 7.42$ ($P < .01$)で有意であり、条件の違いによるf1「生活疲労」の平均得点を表1-7に示す。

f2「充実感の欠如」は、「イライラ」 $F(1,269) = 9.38$ ($P < .01$)、「大声」 $F(1,268) = 10.46$ ($P < .01$)、「手をあげる」 $F(1,270) = 4.26$ ($P < .05$)と、それぞれに有意であった。条件のちがいによるf2「充実感の欠如」の平均得点も、表1-7に示す通りである。f3「育児不安」についても、「イライラ」 $F(1,271) = 10.74$ ($P < .01$)、「大声」 $F(1,272) = 4.48$ ($P < .05$)、「手をあげる」 $F(1,271) = 10.74$ ($P < .01$)といずれとも有意な関連があった。同様に、条件の違いによるf3「育児不安」の平均得点を表1-7に示す。なお、これらをまとめたのが図1-6である。

こうした育児行動をとる母親の方が「充実感欠如」得点・「育児不安」得点ともに高くなることがわかった。ストレスフルな行動を多く出す母親は、その背後に心理的な充実感の欠如や育児不安をもっている傾向がある。

表 1-6 子どもに対してイライラして怒ることがあるか
〈質問紙データ〉

(N=291)

	ある	(%)	ない	(%)	N A	(%)
イライラする	266	(91.4)	16	(5.5)	9	(3.1)
大声で怒る	267	(91.8)	16	(5.5)	8	(2.7)
衝動的に手をあげる	177	(60.8)	99	(34.0)	15	(5.2)

表 1-7 「育児行動」の条件による f 1・f 2・f 3 得点
〈質問紙データ〉

	f 1 得点			f 2 得点			f 3 得点		
	N	Mean	S D	N	Mean	S D	N	Mean	S D
イライラする	266	8.1	1.54	255	15.1	3.28	257	12.9	2.58
しない	16	7.0	1.21	16	12.5	2.22	16	10.8	2.35
大声で怒る	266	8.0	1.52	254	15.1	3.27	259	12.9	2.63
怒らない	16	7.6	1.89	16	12.4	2.39	15	11.4	2.13
手をあげる	176	8.1	1.51	176	15.2	3.40	174	13.3	2.57
あげない	99	7.8	1.55	96	14.4	3.02	94	11.9	2.42

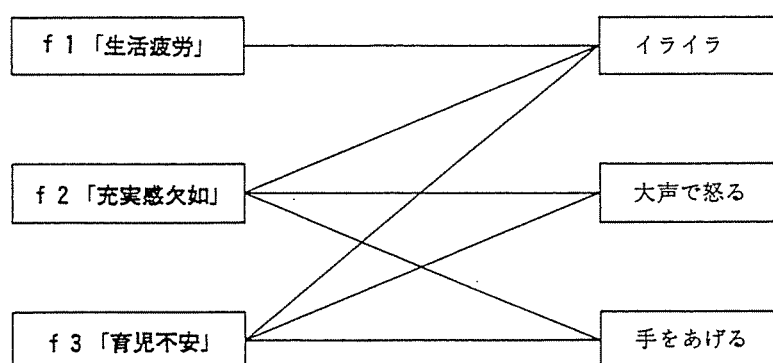


図 1-6 f 1, f 2, f 3 と育児行動

2. リスク・ファクターに関連する諸要因

こうした行動の背後にある因子には、どのような要因が関連しているのでしょうか。今回の調査では、f 1「生活疲労」には統計的に有意な関連のあった要因がなかったため、f 2、f 3について考察していく。

最初に、f 2「充実感の欠如」因子に関連のある要因は、「母親の社会参加」・「ソーシャル・ネットワーク」・「他児比較」・「夫の協力」・「夫に対する評価」であった。一方、f 3「育児不安」因子については、「ソーシャル・ネットワーク」・「他児比較」・「夫に対する評価」・「家族構成」との関連が有意であった。

母親が生活に充実感を感じなくなるのは、①社会的な活動をしていない、②親戚以外に世間話をする人が少なく家族ぐるみの付き合いも少ない、③他の家の子どもと比較して気にしてしまう、④夫の協力も少なく、⑤夫に満足していない場合である。

一方、母親が「育児不安」を感じるのは、①世間話や家族ぐるみの付き合いといった社会的なネットワークが乏しい②他の家の子どもと比較して気にしてしまう、③夫に満足していない場合である。また、④家族構成では、父母子+祖父母といった拡大家族よりも父母子だけの核家族の方が、「育児不安」の高さに関連があった。

以下、これらの関連している要因について説明し、なかでも、母親の主体的活動である「母親の社会的活動」と母親の社会関係の形態に注目した「ソーシャル・ネットワーク」については、第3節において、質問紙調査で得られた結果が、個別の問題としてたずねていく面接調査の結果の中で、どのような形で表れるかについて検討していく。

(1) 母親の社会的活動

3歳児をもつ母親は、日頃、こういった活動をしているのだろうか。質問紙調査において「家事以外の活動のうちで、あなたが現在なさっているものをすべて選んでください。」という項目では、表1-8のような結果が得られた。フルタイム、パートタイムによる職業をもっている者が13.7%、内職や自営業・自由業が8.9%であり、専業主婦は約8割である。3歳の子どもを育てながらも、ボランティア、趣味などの育児以外の活動をしている母親は31.5%と約1/3いるが、反対に「家事以外の活動」はしていない者は47.4%と半数近くにのぼっており、子育てに大部分の時間を使わなければならない現状を反映している。

ここでいう社会的参加とは、就業だけを意味するのではなく、ボランティア、趣味・教

養などの母親の社会的活動を含めたものである。育児期に家の中で孤立しがちな母親が社会との接点をもつことが、育児の充実ひいては「育児不安」の低減に関わっている要因と考えるからである。

表 1-8 における①「フルタイム勤務の仕事」～⑧「その他」までを「社会的活動をしている」母親とし、「家事以外の活動はしていない」母親との 2 群に分けて（表 1-9）、f 2「充実感欠如」得点をみると、前者の条件に入る母親たちの充実感欠如得点は平均 14.2 点であり、後者の群の母親では 15.6 点であった（表 1-10）。分散分析の結果、両群の間には、 $F(1,277) = 12.80$ ($P < .001$) で有意な差が得られた。母親が仕事や趣味などで社会的活動をしていることが、生活の充実感を高めることに関連しているのである。

しかし、この「社会的活動」という要因は f 3「育児不安」の低減には結びついておらず、「充実感」に選択的に効いている項目である。これは「育児不安」が、子どもの発達への心配や自分の育児への不信感からつくられるもので、どちらかといえば、子どもとの直接的なかわりの中でうまれてくると考えると、母親が社会的活動をしていたとしても直ちに「育児不安」の低下につながらないのは当然と思われる。

表 1-8 現在していること (①～⑧複数回答)
〈質問紙データ〉

	件 数	(N=291での%)
① フルタイム勤務の仕事	21	(7.2)
② パートタイム勤務の仕事	19	(6.5)
③ 内 職	10	(3.4)
④ 自 営 業	13	(4.5)
⑤ 自 由 業	3	(1.0)
⑥ ボランティア・地域活動など	18	(2.7)
⑦ 趣味・教養に関すること	58	(19.9)
⑧ そ の 他	26	(8.9)
「家事以外の活動」はしていない	138	(47.4)
N A	8	(2.7)

表 1-9 社会的な活動をしているか
〈質問紙データ〉 (N=291)

	件 数	(%)
している	145	(49.9)
「家事以外の活動」はしていない	138	(47.4)
N A	8	(2.7)

表 1-10 社会活動の違いによる f 2 得点
〈質問紙データ〉

	活動している	家事以外していない
N	144	135
Mean	14.2	15.6
S D	3.23	3.28

(2) ソーシャル・ネットワーク

今回の調査では専業主婦が全体の約8割を占めているが、そうした家にいる生活が中心となっている、母親の普段の付き合いについてみていく。質問紙において「親戚以外に、ふだん世間話をしたり、子どもの話をしたりする人がいますか」の質問では、77%の人が数名以上の話し相手をもっており、1人以上の話し相手をもっている人は90%を越えている（表1-11）。しかし、「親戚以外に、ふだん子どもを預けたり、預かったりするような付き合いをしてる人がいますか」や「親戚以外で、子どもを含めた家族ぐるみの付き合いがありますか」の質問では、子どもを預けあえる人をもたない母親、家族ぐるみの付き合いがない方の母親がともに40%にのぼっている（表1-12～1-13）。表面的に会話を交わす相手はたくさんいても、育児を通してより深い付き合いへ発展しているものは約半数にすぎないというのが現実である。

リスク・ファクターとの関連でみると、「世間話」と「家族ぐるみ」の質問が、f2「充実感欠如」f3「育児不安」ともに関連していた。「世間話」の違いによるf2「充実感欠如」は、 $F(3,268) = 4.37$ ($P < .01$) で有意であり、多重比較の結果（表1-14）、「たくさんいる<1～2名いる」の間で有意差があった。「世間話」の条件によるf2得点の平均（表1-15）から、世間話の相手が「1～2名しかいない」母親の方が、「たくさんいる」母親よりも「充実感欠如」得点は高かった。

f3「育児不安」に対しては、 $F(3,278) = 7.54$ ($P < .001$) で有意であり、多重比較の結果は、世間話の相手が「たくさんいる<数名いる」・「たくさんいる<1～2名いる」・「数名いる<1～2名いる」の間で有意差が認められた（表1-16）。「世間話」の条件によるf3得点の平均（表1-15）から、世間話をする相手が少ない方が、「育児不安」得点は高くなっている。

次に「家族ぐるみ」の付き合いの違いによるf2「充実感欠如」は、 $F(1,269) = 6.50$ ($P < .05$) で有意であり、条件によるf2の平均得点の違いから、家族ぐるみの付き合いがある方が「充実感の欠如」得点は、低くなっている（表1-17）。f3「育児不安」因子についても、 $F(1,279) = 10.00$ ($P < .01$) で有意であり、「家族ぐるみ」の条件によるf3の平均得点の違いから、こちらも家族ぐるみの付き合いがある方が、「育児不安」得点は低くなっている（表1-17）。

表 1 -11

親戚以外に世間話をする人 〈質問紙データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
たくさんいる	71	(24.4)
数名いる	154	(52.9)
1～2名いる	47	(16.2)
いない	19	(6.5)

表 1 -12

親戚以外で子どもを預け合える人 〈質問紙データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
たくさんいる	5	(1.7)
数名いる	58	(19.9)
1～2名いる	111	(38.1)
いない	117	(40.2)

表 1 -13

親戚以外の家族ぐるみの付き合い 〈質問紙データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
よくある	38	(13.1)
たまにある	132	(45.4)
あまりない	55	(18.9)
ない	64	(22.0)
NA	2	(0.7)

親戚以外の家族ぐるみの付き合い
(2群にまとめたもの) (N=291)

	件 数	(%)
ある方	170	(58.4)
ない方	119	(40.9)
NA	2	(0.7)

表 1-14

多重比較の結果			
左項VS右項	数名	1～2名	いない
たくさん	=	<	=
数名		=	=
1～2名			=
不等号 p<.05, 等号 n.s.			

表 1-15

「世間話」の条件による f 2・f 3 得点
 〈質問紙データ〉

	f 2 得点			f 3 得点		
	N	Mean	S D	N	Mean	S D
「世間話」 たんさんいる	68	13.9	3.04	67	11.8	2.82
数名いる	142	15.0	3.31	149	12.8	2.39
1～2名いる	45	16.2	3.23	47	14.0	2.35
ほとんどいない	17	14.9	3.31	19	12.9	2.97

表 1-16

多重比較の結果			
左項VS右項	数名	1～2名	いない
たくさん	<	<	=
数名		<	=
1～2名			=
不等号 p<.05, 等号 n.s.			

表 1-17

「家族ぐるみ」の条件による f 2・f 3 得点
 〈質問紙データ〉

	f 2 得点			f 3 得点		
	N	Mean	S D	N	Mean	S D
「家族ぐるみ」ある方	157	14.5	3.04	165	12.3	2.63
〃 ない方	114	15.5	3.53	116	13.3	2.51

今回、質問紙調査では、母親の日常生活を支えるネットワークとして「世間話」・「預けあい」・「家族ぐるみ」という3つの側面の付き合いについて質問が設定された。「預けあい」の設問は、f 2「充実感欠如」やf 3「育児不安」の高低とは直接関係しなかった。しかし、ソーシャル・ネットワークをたずねた3つの質問のそれぞれについて4段階の選択肢を1～4点で得点化し、相関を求めた結果、 $r=.39 \sim .50$ ($p < .01$) の中程度の相関があった(図1-7)。すなわち、日常の世間話や家族ぐるみの付き合いのネットワークをもっている人は、子どもを預け合える「育児仲間」のような友人をもっている傾向があり、こうした日常的な中で支え合いができるネットワークをもつことが、育児からくる心理的問題の緩衝のためには重要であると思われる。

さらに、ソーシャル・ネットワークの中で「子どもの預けあい」だけは、「子どもの属性」と関連がみられた($F(2,288) = 8.70$, $P < .001$)。

「子どもの属性」について、本調査では、①「対象となる3歳児が一人っ子の場合」、②「対象となる3歳児が第1子で下に弟や妹がいる場合」、③「対象となる3歳児が第2子以下で上に兄や姉がいる場合」の3種類に分類して分析した。多重比較の結果、表1-18のように、「①一人っ子<③第2子以下」「②第1子<③第2子以下」の間で有意差が認められた。条件の違いによる預けあい得点の平均点は、表1-19の通りである。すなわち、「対象となる3歳児が一人っ子」あるいは「3歳児の下に弟や妹がいる場合」よりも、「3歳児の上に兄や姉がいる場合」の方が「子どもの預けあい」は多くなった。

3歳児が第2子である場合、その上の兄や姉は幼稚園や小学校に行っている年齢であり、上の子を通して母親のネットワークが広がる可能性が大きくなると考えられる。反対に、きょうだいの数は多くても、3歳の子を頭にして、その下に弟や妹がいる場合には、母親はその下の子たちに手がかかり、ソーシャル・ネットワークを広げる機会をもたないまま、母親への負担だけが増加してしまうという推測を支持する結果となっている。

子どもの数や子どもの年齢について、牧野⁽³³⁾や本村他⁽³⁴⁾の調査においては「育児不安」との有意な関連はなかった。本調査においてもf 2「充実感欠如」・f 3「育児不安」ともに直接の関連はなく、子の数が多く育児経験が豊かになれば、あるいは上に兄や姉がいる第2子だからといって、それだけで母親の不安が軽減するものではないことがわかる。やはり、母親のネットワークの広がりが必要となってくるのである。

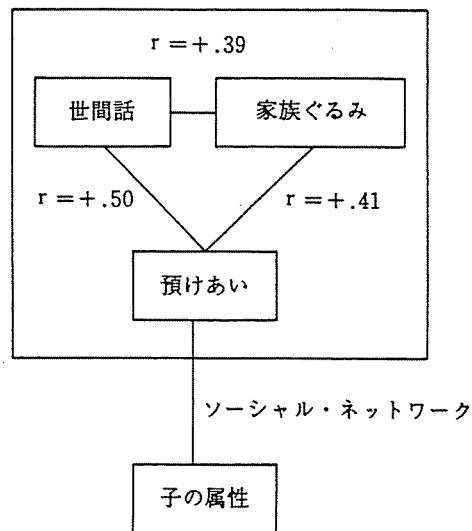


図 1-7 ソーシャル・ネットワークと子どもの属性

表 1-18

多重比較の結果

左項VS右項	第1子	第2子以下
一人っ子	=	<
第1子		<

不等号 $p < .05$, 等号 n.s.

表 1-19

対象児の属性による預け合い得点
〈質問紙データ〉

	一人っ子	第1子	第2子以下
N	81	58	152
Mean	1.60	1.67	2.01
SD	0.70	0.78	0.82

(3) 他児比較

1) リスクファクターと他児比較

子どもを育てていく中で、自分の育児はこれでいいのか、あるいは、わが子はうまく育っているのかといった心配から、他の子どもと比較してしまうことはよくあるものである。今回の調査でも、質問紙調査での「自分の子どもを他人の子どもと比較して気になることがあるか」という問いについては、表 1-20 に示すように、「よくある」・「たまにある」を含めると半数近くの母親が、他の家の子と比較するために気になっているのである。よく指摘されているように、他児と比較するあまり過剰な発達要求をわが子へ向けてしまい、そのことが母親自身のあせりやイライラといった感情をおこさせているのであろう。表 1-20 の「よくある」+「たまにある」と「あまりない」+「ない」との 2 条件で分散分析を行った結果、リスク・ファクターを構成している f 2、f 3 の両方に関連があった。

f 2「充実感の欠如」とは、 $F(1,270)=22.35$ ($P<.001$) で有意であった。条件による f 2 得点の平均(表 1-21) から、他児と比較する母親の方が「充実感欠如得点」は高くなっている。f 3「育児不安」についても、 $F(1,280)=6.34$ ($P<.05$) で有意あり、条件による f 3 得点の平均(表 1-21) をみると、やはり、他児との比較する母親の方が「育児不安」得点は高くなっている。

他児と比較するということは、他の家の育児や他の母親と自分とを比較することである。そうした比較が多くなると、中でも自分が他者よりも劣っていると感じる場合には、自分の生活に充実感を見いだすことはできず、育児のために自分が犠牲になっていると感じてしまい、「充実感欠如」得点が高くなってしまうのであろう。同様に、子どもに対する過剰期待や自分の育児に対する不信感を通して「育児不安」の得点も高くなるようである。

2) 他児比較と習い事

こうした母親の期待や他児との比較は、具体的に、どのような形で子どもたちへと投げかけられるのだろうか。今回の質問紙調査では、子どもに現在どのような習い事をさせているのか、また就学前までに何を習わせたいと考えているのかをたずねてみた。その結果、スポーツを始めとして、学習や通信教育、その他の幼児教育を含めると、かなりの数の習い事をしており、それが「就学前に習わせたい希望の習い事の数」になると、その数は一気に増加する(表 1-22 ～表 1-24)。3 歳から後、就学までの 2 ～ 3 年間で、子どもたちはたくさんの習い事を始めると予想される。

表 1-20 他児との比較
〈質問紙データ〉 (N=291)

	件 数	(%)
よくある	9	(3.1)
たまにある	121	(41.6)
あまりない	129	(44.3)
ない	31	(10.7)
NA	1	(0.3)

表 1-21 「他児との比較」の条件による f 2・f 3 得点
〈質問紙データ〉

	f 2 得点			f 3 得点		
	N	Mean	S D	N	Mean	S D
「他児比較」 する方	124	15.9	2.76	127	13.2	2.66
しない方	148	14.1	3.47	155	12.4	2.54

表 1-22 習い事 (複数回答)

	習わせたい (%)		習わせている (%)		NA (%)	
スポーツ	168	(57.7)	38	(13.1)	85	(29.2)
学 習	59	(20.3)	16	(5.5)	216	(74.2)
芸 術	106	(36.4)	11	(3.8)	174	(59.8)
し っ け	12	(4.1)	2	(0.7)	277	(95.2)
通信教育	7	(2.4)	21	(7.2)	263	(90.4)
その他の幼児教育	12	(4.1)	27	(9.3)	252	(86.6)
そ の 他	6	(2.1)	1	(0.3)	284	(97.6)

表 1-23 現在の習い事の数

〈質問紙データ〉 (N=291)	
	N (%)
0個	203 (69.8)
1個	67 (23.0)
2個	14 (4.8)
3個	7 (2.4)

表 1-24 就学前までに習わせたい習い事の数

〈質問紙データ〉 (N=291)	
	N (%)
0個	58 (19.9)
1個	125 (43.0)
2個	87 (29.9)
3個	19 (6.5)
4個	2 (0.7)

こうした幼児の習い事と育児に対するネガティブな感情との関連は、本研究からも表れていた。先に f 2「充実感の欠如」、f 3「育児不安」とともに「他児比較」との関連があったという結果は述べたが、その「他児比較」は、母親が抱く子どもの習い事への期待との関連があった。すなわち「他児比較」による「希望の習い事の数」の違いは、分散分析では $F(3,286) = 3.92$ ($P < .01$) で有意であり、多重比較の結果、他の家の子どもとの比較が「よくある>ない」と「たまにある>ない」の間に有意差が認められた(表 1-25)。条件の違いによる希望の習い事数(表 1-26)から、他児比較をする母親の方が、比較をしない母親に比べて希望の習い事数は多かった。親の発達期待(希望の習い事数)は、他児との比較を通して、育児の充実感や育児不安へと関連していると思われる(図 1-8)。

他の子どもと比較することが親の発達期待を高め、反対に、親の発達期待が高いと他の子どもと比較する頻度も高くなり、この2つの要因の間は、相互に影響を及ぼしていると考えられる。したがって、リスク・ファクターとの関連も、「発達期待」や「他児との比較」からリスク・ファクターへ方向と同時に、リスク・ファクターである「充実感の欠如」や「育児不安」が他の子どもとの比較を強め、その結果、発達期待が高くなっているという逆の方向の影響も考えられる。いずれにせよ、これらの要因は、相互に関連していることから、一つの要因のリスクが大きくなると、他の要因も相乗的に大きくなりやすい。

しかし、単に母親の発達期待だけが、子どもの習い事を始める動機となっている訳ではないことも見落としてはならない。面接調査をした母親の中に、本章第3節での事例をはじめとして、「子どもの友達作りのため」に習い事を始めた母親は少なくない。そして、そこで他の子どもとの比較が生じ、幼児教育がエスカレートしていくという悪循環を生むのである。母親個人の問題だけではなく、社会的な要因も拍車を加えているのである。

表 1 -25

多重比較の結果

左項VS右項	たまに	あまりない	ない
よくある	=	=	>
たまに		=	>
あまりない			=

不等号 $p<.05$, 等号 n.s.表 1 -26 他児比較による希望の習い事の数
(質問紙データ)

希望の習い事数			
	N	Mean	SD
よくある	9	2.67	0.50
たまに	121	2.36	0.87
あまりない	129	2.22	0.86
ない	31	1.84	0.69

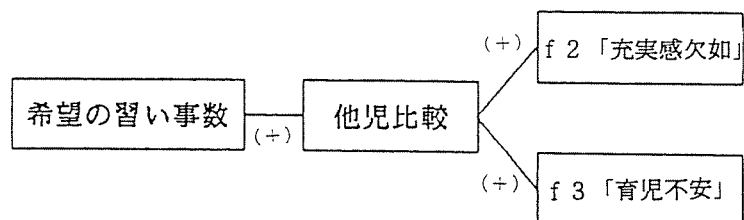


図 1 -8 「希望の習い事数」、「他児比較」および「母親の充実感・育児不安」との関連

(4) 夫の要因

1) リスク・ファクターと夫の要因

リスク・ファクターに関連する夫の要因として、今回の調査で採用した項目として「夫の協力」と「夫に対する評価」がある。ところで、「夫の協力」とは、育児や家事についての18項目について、夫が協力してくれる頻度をたずねた4段階の選択肢について1～4点で得点化し、その合計をたずねたものである。「夫の協力」得点は、18点から66点にわたって図1-9のように分布し(Mean = 47.12 点、SD=8.63)、上・下30%に近く、得点の度数が大きく変化する42点以下を低群とし、54点以上を高群とした。この「夫の協力」は、f2「充実感の欠如」とは、 $F(2,234) = 4.93$ ($P < .001$) で有意であり、多重比較の結果、「低群>中群」「低群>高群」において有意差がみられた(表1-27)。夫の協力が低いほど、「充実感欠如得点」は高くなった(表1-28)。しかし、この「夫の協力」はf3「育児不安」とは関連がみられなかった。

次に、「夫に対する評価」であるが、「夫の育児参加について満足である」・「夫の家事への参加について満足である」・「夫は頼りにならない(コンバート得点項目)」・「夫には何を話しても無駄だ(コンバート得点項目)」という4項目それぞれについて、1～4点で得点化し合計したものである。「夫に対する評価」は、図1-10のように分布し(Mean=11.49、SD= 2.87)、上・下30%に近く、得点の度数が大きく変化する、9点以下を低群とし、13点以上を高群としたものである。

これはf2「充実感の欠如」、f3「育児不安」ともに関連があった。f2「充実感の欠如」に対しては、 $F(2,261) = 14.33$ ($P < .001$) で有意であり、多重比較の結果、「低群>中群」「低群>高群」において有意差がみられた(表1-29)。夫への評価が低いほど母親の「充実感欠如」得点は高かった(表1-30)。f3「育児不安」に対しては、 $F(2,279) = 3.98$ ($P < .05$) で有意であり、「低群>高群」において(表1-31)、こちらも夫への評価が低いほど「育児不安」得点は高かった(表1-30)。すなわち、夫に満足している母親ほど、充実感を感じており、育児や子どもに対する不安も小さいといえる。

これら「夫の協力」と「夫に対する評価」との間にはどのような関連があるのだろうか。「夫の協力得点」と「夫に対する評価得点」との相関を求めた結果、 $r = .61$ ($P < .001$) で中程度の正の相関があった。

このことから、f2「育児不安」に対して、「夫の協力」は、「夫の満足度」を介して間接的に関連しているようである。「育児不安」の減少には、実際の夫の協力よりも、そ

の協力を母親がどのように評価しているかという母親の認知の方が重要となるのである。

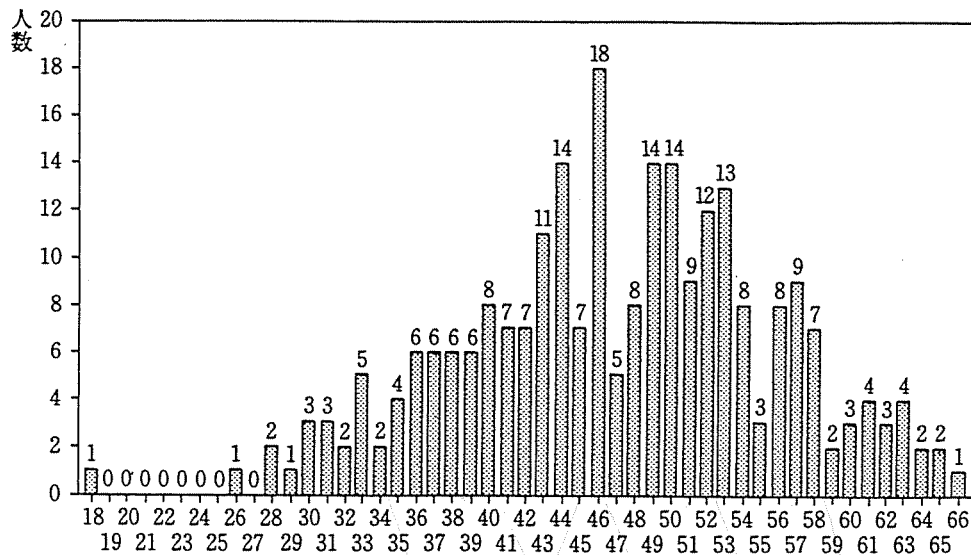


図 1-9 夫の協力得点のヒストグラム

- 夫の協力得点構成項目
- | | |
|------------------------|------------------|
| A. 休日や帰宅後に子どもの遊び相手をする | K. 休日に家族を連れて出かける |
| B. 育児に関することで夫婦で話し合う | L. 夕食を一緒に食べる |
| C. あなたの悩みやグチを聞いてくれる | M. 食品の買いものに一緒に行く |
| D. 保育園の送り迎えをする | N. 食事をつくる |
| E. あなたの外出中に子どもの世話をする | O. 食器洗い |
| F. 子どもを風呂に入れる | P. お風呂の掃除や準備をする |
| G. 子どもの着替えを手伝う | Q. ゴミ捨てをする |
| H. 子どもに食事を食べさせる | R. 部屋の掃除をする |
| I. 子どもを寝かしつける | S. 洗濯をする |
| J. 子どもが病気の時に仕事を休んで看病する | |

表 1-27

多重比較の結果

左項 V S 右項	中群	高群
低群	>	>
中群		=
不等号 P<.05, 等号 n.s.		

表 1-28

夫の協力得点の違いによる f 2 得点
〈質問紙データ〉

	低群	中群	高群
N	65	118	54
Mean	15.9	14.7	14.1
S D	3.4	3.3	2.9

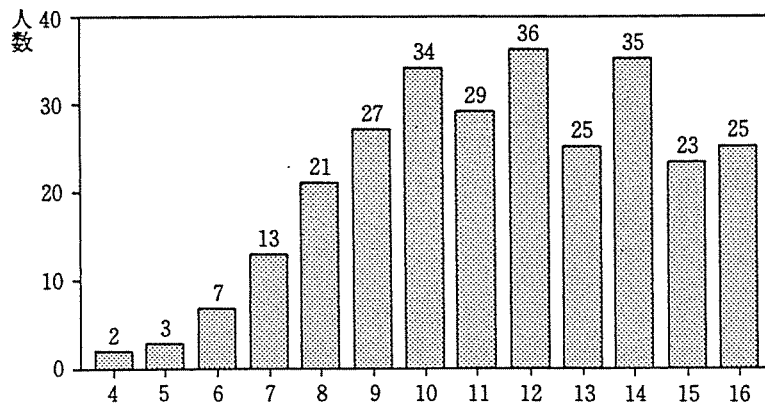


図 1-10 夫への評価得点のヒストグラム

表 1-29

多重比較の結果

左項VS右項	中群	高群
低群	>	>
中群		=

不等号 $P < .05$, 等号 n.s.

表 1-30

「夫への評価得点」の条件による $f^2 \cdot f^3$ 得点
〈質問紙データ〉

	f 2 得点			f 3 得点		
	N	Mean	S D	N	Mean	S D
「夫への評価」 低群	68	16.5	3.20	84	13.3	2.67
中群	93	14.8	2.97	96	12.9	2.76
高群	103	13.8	3.26	102	12.2	2.34

表 1-31

多重比較の結果

左項VS右項	中群	高群
低群	=	>
中群		=

不等号 $P < .05$, 等号 n.s.

2) 夫の協力の実際と母親の認知

母親に影響を与える要因として、夫婦関係や夫からのサポートの重要性は強くいわれている⁽²⁵⁾。また、母親の補助的存在というのではなく父親が養育することの重要性が、子どもの発達からも指摘されているところである⁽²⁶⁾が、今回の調査における夫は、具体的に、どの程度母親に協力しているのだろうか。今回の調査では、父親自身への質問は実施できなかったため母親の回答によって探してみる。表 1-32 および図 1-11 は、質問紙調査における項目別の夫の協力頻度を示している。質問項目中、D「保育園の送り迎えをする」とT「その他」の項目は無回答が多かったため集計から除いてある。選択肢は、「よくある」・「たまにある」・「あまりない」・「まったくない」の4つであるが、最初、夫が恒常的にしてくれていることを表している「よくある」についてみていく。「よくある」の割合5割を越しているものは、頻度の多い順番に、K「休日に家族を連れて出かける」(68.1%)、A「休日や帰宅後に子どもの遊び相手をする」(59.9%)、F「子どもを風呂に入れる」(56.7%)、M「食品の買い物と一緒にいく」(52.8%)の4項目である。これらの内容であれば、9割近くの回答があってもよさそうな項目ばかりであるが、実際には上記のような数値である。いかに夫が家事や育児にコミットメントしていないかを示している。では、「よくある」が3割を越えている項目には、どのようなものがあがってくるのだろうか。やはり頻度の多い順番に、B「育児に関することで夫婦で話し合う」(42.1%)、L「夕食を一緒に食べる」(38.5%)、C「あなたの悩みやグチを聞いてくれる」(36.4%)、G「子どもの着替えを手伝う」(32.6%)である。3割程度の少なさではあるが、BやCといった母親の精神的なサポートをしてくれる夫がいる。反対に、夫の協力が得られない項目とは、どのような内容であろうか。夫の協力が「まったくない」の割合が大きい順に述べると、S「洗濯をする」(68.9%)、J「子どもが病気の時に仕事を休んで看病する」(63.0%)、O「食器洗い」(51.2%)、N「食事をつくる」(43.8%)、R「部屋の掃除をする」(43.0%)である。

今回の調査は専業主婦が8割を占めており、これらの結果は、共働きではない場合の夫の育児参加の現状を反映しているともみれる。しかし、佐々木らの調査⁽²⁷⁾から、乳幼児をもつ専業主婦の疲労が、製鉄所の転炉・高炉作業者、航空路管制官、銀行の手形係や新聞社のキーパンチャーと類似する労働であり、しかも産業労働者が休息によって作業から解放されるのに対して、育児労働は24時間の継続労働という特質をもっていることを考慮するならば、本調査での夫の協力度は、理想からはまだまだ遠いと評価しなければなら

ないだろう。

こうした夫の協力も踏まえて、母親は夫をどのように評価しているのでしょうか。表1-33、図1-12は、母親からみた夫の評価である。Aが「夫の育児参加について満足である」、B「夫の家事への参加について満足である」、C「夫は子どもが好きだ」、D「夫は頼りにならない」、E「夫は仕事が忙しい」、そしてFが「夫には何を話してもムダだ」であり、それぞれについて、どのくらいの頻度で思っているかをたずねている。リスク・ファクターとの関連においては、この項目の中のA、B、D、Fについて得点化したものの合計を「夫の満足度」として用いた。ここでは、個別の項目についてみていく。

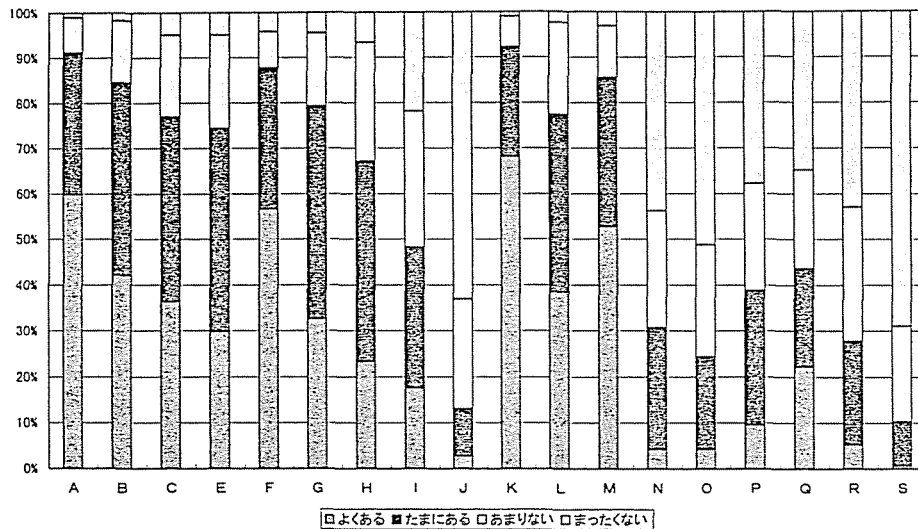
まず、夫の育児と家事への評価（A、B）であるが、先にみた実際の夫の協力の実態と比べて、高い評価になっている。育児については、満足であると思う（よくある＋たまにある）割合は、7割近い（69.5 %）。家事については、育児よりはやや落ちるものの、満足であると思う割合は5割を越えている（50.6 %）。このことを裏付けるように、Eの「夫は仕事が忙しい」と思っている母親が非常に多い。「忙しい」と思うことが「よくある」母親は、約5割（49.6 %）であり、「たまにある」も合わせると8割を越える（81.3 %）ほどである。労働時間は、所定内・所定外ともに減少している⁽²⁴⁾といっても、家族（母親）を感じる夫の労働時間は、まだまだ長いようである。

また、パートナーとしての夫の評価であるDとFについて、両者は、ほぼ同じ結果であり、7割弱の母親は、「夫は頼りにならない」・「夫には何を話してもムダだ」とは思っていない。しかし逆の言い方をするならば、3割の母親が、夫を当てにしていないという現実である。

表 1-32 夫の協力

	よくある		たまにある		あまりない		まったくない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
A	170	59.9	89	31.3	22	7.7	3	1.1
B	120	42.1	121	42.5	39	13.7	5	1.8
C	103	36.4	115	40.6	51	18.0	14	4.9
E	84	29.8	126	44.7	58	20.6	14	5.0
F	161	56.7	88	31.0	23	8.1	12	4.2
G	93	32.6	133	46.7	46	16.1	13	4.6
H	66	23.3	124	43.8	74	26.1	19	6.7
I	50	17.6	87	30.6	85	29.9	62	21.8
J	8	2.8	29	10.2	68	23.9	179	63.0
K	194	68.1	69	24.2	19	6.7	3	1.1
L	109	38.5	110	38.9	57	20.1	7	2.5
M	150	52.8	93	32.7	32	11.3	9	3.2
N	12	4.2	75	26.5	72	25.4	124	43.8
O	12	4.2	57	20.1	69	24.4	145	51.2
P	27	9.5	83	29.3	66	23.3	107	37.8
Q	63	22.2	61	21.5	61	21.5	99	34.9
R	15	5.3	64	22.5	83	29.2	122	43.0
S	2	0.7	27	9.5	59	20.8	195	68.9

図 1-11 夫の協力

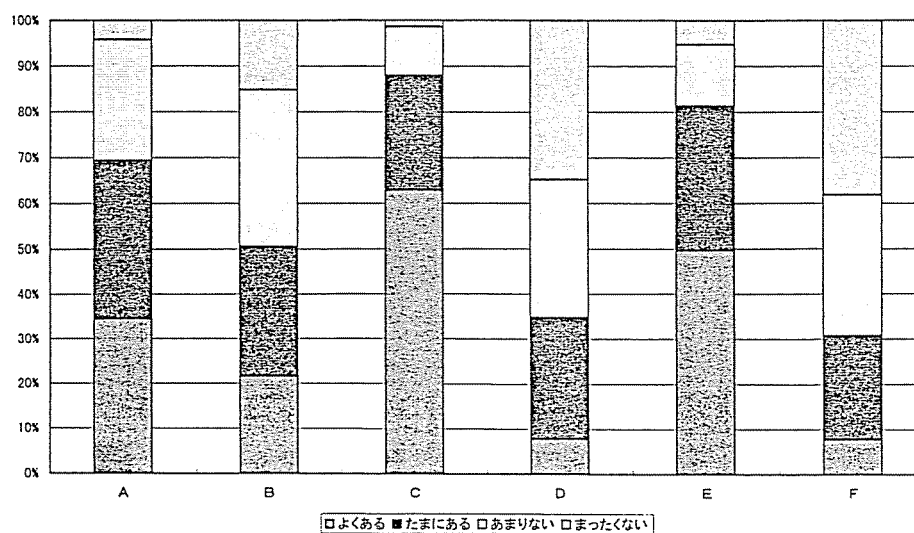


- 夫の協力得点構成項目
- | | |
|------------------------|------------------|
| A. 休日や帰宅後に子どもの遊び相手をする | K. 休日に家族を連れて出かける |
| B. 育児に関することで夫婦で話し合う | L. 夕食を一緒に食べる |
| C. あなたの悩みやグチを聞いてくれる | M. 食品の買いものに一緒に行く |
| D. 保育園の送り迎えをする | N. 食事をつくる |
| E. あなたの外出中に子どもの世話をする | O. 食器洗い |
| F. 子どもを風呂に入れる | P. お風呂の掃除や準備をする |
| G. 子どもの着替えを手伝う | Q. ゴミ捨てをする |
| H. 子どもに食事を食べさせる | R. 部屋の掃除をする |
| I. 子どもを寝かしつける | S. 洗濯をする |
| J. 子どもが病気の時に仕事を休んで看病する | |

表 1-33 夫の評価

	よくある		たまにある		あまりない		まったくない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
A	98	34.4	100	35.1	75	26.3	12	4.2
B	61	21.6	82	29.0	97	34.3	43	15.2
C	178	62.9	71	25.1	30	10.6	4	1.4
D	22	7.8	76	27.0	86	30.5	98	34.8
E	141	49.6	90	31.7	38	13.4	15	5.3
F	22	7.8	65	23.0	88	31.1	108	38.2

図 1-12 夫の評価



- A. 夫の育児参加について満足である
- B. 夫の家事への参加について満足である
- C. 夫は子どもが好きだ
- D. 夫は頼りにならない
- E. 夫は仕事が忙しい
- F. 夫には何を話してもムズだ

ところで、先に述べたように、夫の満足度は f 2「充実感の欠如」因子、f「育児不安」因子ともに関連していたが、夫の協力度は f 2にだけ関連していた。夫の協力度が、f 3「育児不安」に関連しないのは、なぜであろうか。「充実感の欠如」は、母親の社会活動にも関連のある因子であり、母親の心理的な要因に加えて、実際の活動が母親に充実感を与える。幼い子どもをもった母親が社会的活動を行うには、夫を始めとした周囲の人々の実際の行動としてのサポートが必要となる。

一方、「育児不安」は、母親の心理的な要因に依拠している。その際、夫の協力といった、実際にどの程度協力しているかよりは、その協力に対する母親の評価、つまり夫の協力に対する母親の認知が重要となるのである。さらに、夫の協力と夫の満足との間には、中程度の相関 ($r=+.61$, $p < .001$) があった。すなわち、夫の協力は、夫の満足度という母親の認知を媒介にして間接的にも影響を与えているようである。

この結果は、牧野⁽¹⁹⁾の結果とも一致するところがある。牧野が測定している「育児不安」は、筆者の f 2と f 3を総合したものに近いが、牧野の「育児不安」に対しても夫の家事・育児参加の程度は関連がなく、夫の家事・育児に対する母親の満足感が関連があった。しかも夫の家事・育児参加の程度が母親の満足度に関連していたという結果も、本研究の結果と一致している。

また、本研究において夫の協力は、母親のもつネットワークとも相関があった。世間話とは $r=+.21$ ($p < .001$)、家族ぐるみとは $r=+.24$ ($p < .001$) で、いずれも、やや低いながら有意な相関である。夫の協力は、母親が日常のネットワークを広げてゆくことを下支えするという経路からも、f 2「充実感欠如」や f 3「育児不安」に影響しているのであろう。

(5) リスクファクターと家族構成

最後に、f 3「育児不安」だけに関連する要因として、家族の構成がある ($F(3,275) = 3.73$, $P < .05$)。質問紙調査全体の家族の構成は、表 1-3 の通りであった。回答者の中に、「父子家庭」・「父子+祖父母家庭」の家族はいなかったため、「父母子」、「父母子+祖父母」、「母子」、「母子+祖父母」の 1 要因 4 水準で分散分析を実施した。それぞれの家族構成での「育児不安」得点の平均点は、高い順に「母子+祖父母 = 13.2 点」、「父母子 = 13.0 点」、「父母子+祖父母 = 11.9 点」、「母子 = 11.1 点」となった (表 1-34)。多重

比較を行った結果、父母子＞（父母子＋祖父母）については有意差が認められた（表 1-35）。今回の尺度構成でみると、拡大家族よりも核家族の方が「育児不安」の高さに関連があった。しかし、これまでの研究⁽³⁰⁾においては、「育児不安」の程度と家族形態については、関連がないと報告されている。

表 1-34

家族構成の違いによる f 3 得点
〈質問紙データ〉

	父母子	父母子＋祖父母	母子	母子＋祖父母
N	213	52	9	5
Mean	13.0	11.9	11.1	13.2
S D	2.64	2.24	2.57	3.77

表 1-35

多重比較の結果

左項 V S 右項	父母子＋祖父母	母子	母子＋祖父母
父母子	>	=	=
父母子＋祖父母		=	=
母子			=
不等号 P < .05, 等号 n.s.			

第3節 育児問題の解決からみた母親のソーシャル・ネットワーク

第2節では、質問紙調査の結果から、母親の充実感の向上や「育児不安」の低減には、母親が社会活動へ参加することや親戚以外のソーシャル・ネットワークが多いことが有効であると示唆された。本節では、具体的な問題解決をめぐる母親のソーシャル・ネットワークの現状と母親の抱く不安について、面接調査の結果を中心に考察していく。

1. 母親のもつソーシャル・ネットワークの特徴

まず最初に、今回面接調査を実施した44ケースの母親がもっているソーシャル・ネットワークについてみていく。

母親たちは、さまざまなソーシャル・ネットワークをもっているが、その中で実際に機能しているネットワークの種類としては、次の5つの特色がみられた。すなわち、親族のネットワーク、母親の Personal なネットワーク (P ネットワーク)、母親の Maternal なネットワーク (M ネットワーク)、特殊なネットワーク、ネットワーキングの5つである。この5種類のネットワークについて、まとめたものが図1-13である。

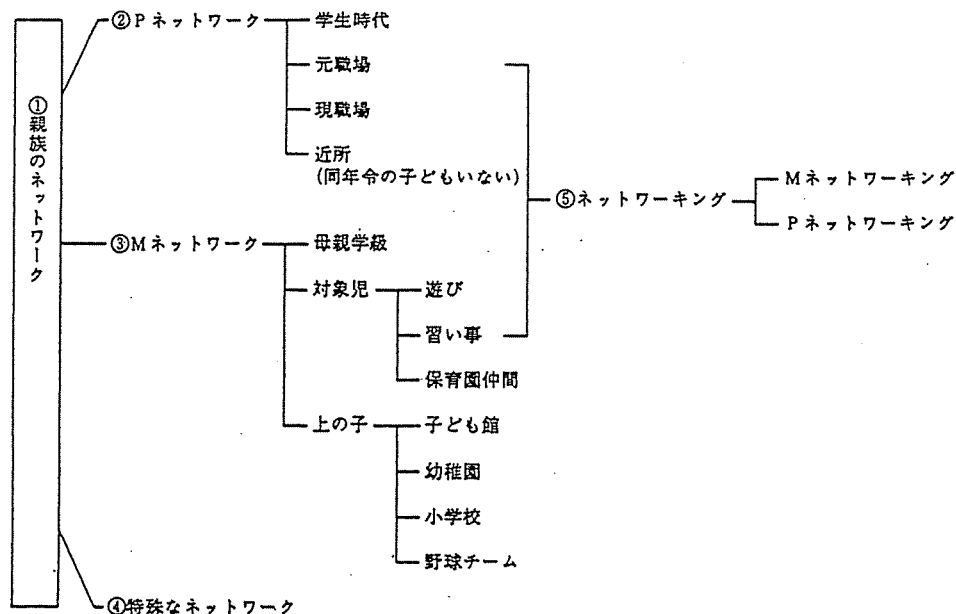


図1-13 母親のソーシャル・ネットワーク

①親族のネットワーク

親族のネットワークは面接の44ケース全てに存在していた。

ここで、夫や親戚がしてくれる援助の特色を質問紙調査の結果から述べておく。表1-36は、こちらが設定した6つの場合について、子どもの預け先をたずねたものである。6つの場合とは、「母親自身の病気」・「二人目のお産」・「家族・親戚の看病」・「まとまった買い物」・「葬式・結婚式」・「趣味・スポーツのための外出」である。その結果、こうした子どもを預かる、すなわち実体的なサポートについては、「母親自身の病気」という差し迫った問題の時はもちろん、「まとまった買い物」や「趣味やスポーツのための外出」の時でさえ、「夫」や「母親自身の親」が首位を占めている。兵庫県で行われた調査⁽³³⁾でも、同様の調査項目があったが、そこでの回答は、やはり夫と親が首位を占めているものの、「夫の親」が「母親の親」を上回るものが多かった。これは、母方の親との同居や、困ったときに行ける距離内に母方の親が住んでいるという割合が、兵庫県の調査と本調査とで異なっているためであると考えられる。両調査では、親の住んでいる距離の区分が異なっているが、兵庫県の調査における「妻方同居」+「妻方隣居（親の住居まで10分未満）」+「妻方近居（親の住居まで10分以上40分未満）」は18.4%であるのに対し、本調査での「母親の親と同居」+「札幌市内」は45.7%であった（図1-14）。

このように、夫や親族によるサポートは母親にとって大きなサポーターではあるが、親族以外のサポートが得られず、それだけでサポートしている場合には、「サポートしている祖母自身が高齢であり、孫の世話で腰痛を患っている（ケース No.274）」といったサポーターである祖母自身の身体的な問題や「祖父母がお菓子ばかり与えて虫歯が治らない（ケース No.5）」、「ウンチだけおむつにしたがる子どもに対して、祖母は叱って治すようにと言うが、母親はじっくりと待ちたい（ケース No.180）」、「便秘がちの子どもに対し、よくないと思いながらも子どもが大騒ぎするのに甘やかして、（親類が）つつい薬を使ってしまう（ケース No.107）」といった、家族内での子どもへの悪影響を改善できないなどの問題を抱えている。

② Personal ネットワーク

これは、母親の学生時代の友人や、元あるいは現職場での友人などで形成されるネットワークである。ネットワークの内容をみると、「学生時代」・「元の職場」・「現在の職場」・「(同年代の子どもはいない) 近所のおばあちゃん」の4つに分類された。

③ Maternal ネットワーク

これは、子どもを通して、あるいは母親役割を通してできたネットワークである。このネットワークについてもその内容を分類すると、妊娠期の「母親学級」があり、対象となる3歳の子どもに関しては「近所での遊びを通して」・「習い事を通して」・「保育園仲間」があり、対象児の上の子に関しては「子ども館」・「幼稚園」・「小学校」・「野球チーム」がある。

Personal、Maternal ネットワークの比較から、Maternal ネットワークの特徴として、「地理的に近く」・「頻繁に会うこと」をあげることができる。Maternal ネットワークが「近所での遊びをとおして」を始めとして、形成理由、活動ともに地域に根付いたものであるのに対して、Personal ネットワークは、必ずしもこれらの条件を必要としない。

反対に Maternal ネットワークは、これらの条件が欠けることで、ネットワークが機能しなくなる場合が多い。例えば、保健所や産院での母親学級については、面接の44人中20人が妊産婦同士の会に参加して友人をつくったが、子どもが3歳になった現在では、20人中12人が年に一度会うか、形式的な年賀状のやりとりで終わっており、日常的な付き合いをしている母親は8名であった。Maternal 友人の特徴の一つに、夫の転勤や引っ越しで住居が変わると付き合いの内容が変わってしまうことがあげられる。これは、Personal 友人が時間が経過し、お互いの環境が変わっても継続しているのと対比的である。だからといって、Maternal 友人が母親を支える友人として劣っているわけではない。同じ立場にある育児上の友人が「近所」で「日常」の育児を支え合っていることが大きなサポーターとなっているのである。

④ 特殊なネットワーク

宗教活動に基づいたネットワークであるが、日常生活にも深くかかわっており、強力なネットワークとなっている。

⑤ ネットワーキング

人が受動的立場から、自発的に動いて生活の中に新しいネットワークを作り出す、すなわち「ネットワーキング（ネットワーク形成）」は、「既存の社会的仕組み（枠組み）を変える」可能性をもったものとしても注目されている⁽³²⁾。こうしたネットワーク形成は、

母親に関しても注目できることであり、半数以上が核家族である現代においては、なおさらである。父母だけによる子育てが子どもの育ちの環境として不足があるとしても、それで直ちに、かつての三世同居が最良であるとは限らず、母親たちは親族を越えた新しい関係を作りだそうとしているのである。そうした新しいネットワークが子育て行為を支えているという実践は、近年数多くみられる⁽³³⁾。また、こうした活動は、第2節で考察したf2「充実感欠如」の因子に関連していた母親の社会的活動から生じているものである。

今回、面接調査を行った44名の中にも主体的にネットワークを作りだした、あるいはネットワークの中で主体的に活動している母親が8ケースあった。これらのケースについても、その内容から、育児サークル的な「Maternal ネットワーキング：3ケース」と母親の趣味活動的な「Personal ネットワーキング：5ケース」に分けられる。

ネットワーキングケースの抽出の際の基準は、母親が自分の生活の中にネットワークでの活動を積極的に位置づけているものとした。すなわち、Maternal ネットワーク、Personal ネットワークをもっているケースの中で、「自分自身の時間の時に何をしているか」・「一週間の中であなたが楽しいと感じるときはどんなときか」・「自分のためのレクリエーションはどんなことか」・「趣味はなにか」の質問の中で、ネットワークでの活動を中心にあげ、しかもその活動をポジティブに評価している母親である。これらのネットワーキングは、Maternal ネットワーキングだけではなく Personal ネットワーキングに関しても「頻繁に合う」という特色がみられた。

表 1-36 子どもの預け先

〈質問紙データ〉

(N=291)

	A	B	C	D	E	F
	件数 (%)	件数 (%)	件数 (%)	件数 (%)	件数 (%)	件数 (%)
夫	121 (41.7)	17 (5.8)	36 (12.4)	121 (41.6)	68 (29.7)	75 (25.8)
夫の親	28 (9.6)	55 (18.9)	16 (5.5)	21 (7.2)	24 (8.2)	15 (5.2)
お母さんの親	80 (27.6)	137 (47.1)	41 (14.1)	50 (17.2)	81 (27.9)	41 (14.1)
親以外の親戚	5 (1.7)	6 (2.1)	8 (2.7)	4 (1.4)	11 (3.8)	2 (0.7)
職場の同僚	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
あなた自身の友人	1 (0.3)	1 (0.3)	4 (1.4)	2 (0.7)	0 (0.0)	3 (1.0)
子どもを通し親しくなった友人	1 (0.3)	0 (0.0)	1 (0.3)	1 (0.3)	3 (1.0)	1 (0.3)
近所の人	4 (1.4)	0 (0.0)	2 (0.7)	3 (1.0)	1 (0.3)	3 (1.0)
保育所	0 (0.0)	2 (0.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
ベビーシッター・家政婦	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)
ベビーホテル	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.3)
会場などで設けている託児室	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)	7 (2.4)
あなた自身（無理をする、連れていく）	23 (7.9)	0 (0.0)	28 (9.6)	58 (19.9)	41 (14.1)	25 (8.6)
その他	1 (0.3)	2 (0.7)	2 (0.7)	6 (2.1)	1 (0.3)	2 (0.7)
子どもだけでおいておく	1 (0.3)	0 (0.0)	1 (0.3)	4 (1.4)	0 (0.0)	2 (0.7)
これまでに、そのような経験はない	16 (5.5)	31 (10.7)	92 (31.7)	6 (2.1)	26 (8.9)	76 (26.1)
NA	10 (3.4)	40 (13.7)	59 (20.3)	14 (4.8)	16 (5.5)	38 (13.1)

A：あなたが病気になる時

B：二人目のお産のとき

C：家族・親戚の看病で忙しいとき

D：まとまった買い物に出かけるとき

E：葬式・結婚式に出かけるとき

F：趣味やスポーツ、教養講座などに出かけるとき

夫の親

	人数N=291 (%)		人数N=250 (%)
同居	30 (10.3)	札幌市内	82 (28.2)
同居していない	250 (85.9)	札幌から100km以内	51 (17.5)
死去	6 (2.1)	その他の道内	69 (23.7)
NA	5 (1.7)	道外	44 (15.1)
		NA	4 (1.4)

母親の親

	人数N=291 (%)		人数N=260 (%)
同居	23 (7.9)	札幌市内	110 (37.8)
同居していない	260 (89.3)	札幌から100km以内	57 (19.6)
死去	7 (2.4)	その他の道内	57 (19.6)
NA	1 (0.3)	道外	36 (12.4)

図 1-14 親の住居までの距離

〈質問紙データ〉

2. 問題解決におけるソーシャル・ネットワーク

(1) 妊娠期の悩みと解決

3歳児をもつ母親は、妊娠からこれまでの育児の中で、どのような悩みをどのように解決してきたのだろうか。まず最初に、妊娠期から見ていく。

妊娠期の問題としては、「妊産婦の間、準備するものなどの面で、わからないことがあるときはどのように解決しましたか。」「妊娠中、体調の面で辛かったことがあるときは、どのように解決しましたか。」「妊娠前後、精神的な面で悩んだときに、どのように解決しましたか。」の3つの質問を設けた。精神的な悩みについてのみ妊娠前後としたのは、面接の中で、出産前後における精神的な悩みは混在しており、母親たちが分けて話すことができなかったからである。特に、出産間近の妊娠後期から実家に帰り、その後もしばらくは実家にいる母親たちにおいては、その区別が難しかったようである。

「出産の準備」については44人全員が回答し、「体調の悩み」を訴えた人は26人であり、「精神的な悩み」は25人であった。

これらの悩みについて、助けとなったネットワークの種類は、表1-37～1-39に示してある。ただし、「妊娠中の体調」についてだけは、病院における医療的な対応を除いた相談者とした。これは、回答者である母親からの指摘に基づいて考慮したのであるが、妊娠中であれば定期的に産院へ通っており、体調の悪い母親が、病院で一応その症状を訴えることは多い。しかし、この質問項目では、病院で受ける医療的なアドバイスを踏まえたうえで、病気ではなく妊娠という体調の変化に対して、周囲のどのような人たちが母親の日常生活を支えてくれたかに焦点を当てたかったので、病院は除いてそれ以外の相談者を載せた。

実際、「妊娠中の体調」の悩みの内容（表1-40）を見ると「つわり」が半数を占めており、その辛さをやわらげてくれたのは、病院の医師よりも辛さに共感して日常の生活をサポートしてくれた夫や親戚なのである。この中で、「妊娠中の体調」の項目の「専門家」は医師ではあるが、母親セミナーでのカウンセラーとして来ており、つわりという相談にも「歌を歌って気を紛らわすように」という回答で対応し、医療的対応というよりも、この母親にとってはカウンセリングに性質に近いものなので「専門家」としてカウントに加えた。

さて、この表1-37～1-39を見ると、おむつや産着の準備などがわからないという「出産準備」と「精神的な悩み」において親戚の割合が高くなっている。親戚の中でも、「出

産準備」では実母（38.6 %）と叔母に代表される自分の方の親戚（27.3 %）が高く、「精神的な悩み」においては実母の割合が少し減り（28.0 %）、姉や妹が多くなってくる（16.0 %）。実母の割合が減るのは、「精神的な悩み」が、出産前後に実家に帰っているときに生じると訴えた母親が多く、その原因の一つに、実母との育児の仕方の違いで対立することを挙げている。ここでの実母は、母親にとってサポーターと同時にストレッサーとなっているのであろう。

一方、夫の動きを見てみると、「体調」の面で辛いときには 50.0 %であるが、「精神的な悩み」では 40.0 %に減少する。これは、先に述べたように「精神的な悩み」が母親の実家に里帰りしているときに生じる場合が多かったため、地理的に夫が側にいないということがある。また、体調のすぐれないときに夫がしてくれたサポートとして、「ご飯を作ってくれたり、洗濯をしてくれたり」という実体的なサポートと回答する母親が多かった。

「精神的な悩み」では、母親は実体的なサポートを求めるよりも情緒的なサポートを求める傾向があった。その際、夫は何をどうやってあげたらよいのかわからず、有効なサポーターとはならなかったのではないだろうか。夫のサポートは、漠然とした精神的な悩みよりも対応策がはっきりとしている悩みや辛さに対して、力を発揮できるようである。

この「精神的な悩み」について、夫が減少したのを補うように増加しているのが、母親の Personal 友人（24.0 %）である。妊娠期を通して、常に Personal 友人が Maternal 友人を上回っている。精神的に悩んだときに、母親たちは、実家や自宅から、Personal 友人に対して電話をし、ただ話を聞いてもらって、それだけ気持ちが落ちついたと回答していた。

この時期、Maternal 友人ができる最も多いきっかけは、保健所や産院の母親学級であるが、前節で触れたように、時間と地理的距離を隔てても交流が続いているというケースは減っている。

表 1-37

出産の準備についての相談相手(M. A) 〈面接データ〉 (N=44)		
相 談 者	件 数	(%)
実 母	17	(38.6)
自分の親戚	12	(27.3)
姑	6	(13.6)
夫の親戚	2	(4.5)
P 友 人	7	(15.9)
M 友 人	4	(9.1)
専 門 家	5	(11.4)
育児情報	15	(34.1)
自分一人で	5	(11.4)

表 1-38

妊娠中の体調についての相談相手(M. A) 〈面接データ〉 (N=26)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	13	(50.0)
実 母	5	(19.2)
姉 妹	1	(3.8)
姑	3	(11.5)
P 友 人	3	(11.5)
M 友 人	3	(11.5)
専 門 家	1	(3.8)
自分一人で	4	(15.4)

表 1-39

出産前後の精神的悩みについての相談相手 (M. A) 〈面接データ〉 (N=25)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	10	(40.0)
実 母	7	(28.0)
姉 妹	4	(16.0)
姑	3	(12.0)
P 友 人	6	(24.0)
M 友 人	2	(8.0)
専 門 家	2	(8.0)
自分一人で	3	(12.0)

表 1-40

妊娠中の体調の悩みの内容 (M. A) 〈面接データ〉 (N=26)		
相 談 内 容	件 数	(%)
つ わ り	14	(53.8)
流産しかけた	4	(15.4)
仕 事	4	(15.4)
妊娠中毒症	1	(3.8)
逆 子	1	(3.8)
そ の 他	3	(11.5)

（２）乳児期の悩みと解決

妊娠期にみられたサポーターの特徴が、子どもが生まれた後には、どのように変化してゆくのだろうか。

乳児期の悩みとしては、こちらから悩みの内容を限定せずに母親自身から申告してもらう「乳児期に特に心配だったこと」の他に、「発育」・「おっぱい／ミルク」・「予防接種」・「離乳食」・「アレルギー」・「歩行」・「おむつ／トイレット・トレーニング」・「いたずら」・「子どもの性格・夜泣き」についての計１０項目を設定して質問していったが、「歩行」と「いたずら」を除いた８項目を採用した。「歩行」は、それを悩みと訴えた母親が１名しかいなかったためであり、「いたずら」に関しては、子どもの性格に関係する悩みと重なるため、「子どもの性格・夜泣き」についての質問に代表させた。

最初に、「乳児期に特に心配だったこと」の項目は、母親が一番気にしていた問題について述べてもらうために、「乳児期に、特に心配だったことはありますか。」という質問に対して得られた回答である。面接では、この質問に続いて、こちらが設定した質問をたずねていった。したがって、後にたずねた個別の項目についての回答よりも「乳児期に特に心配だったこと」は、母親にとって深刻であり重要度が高いと考えられる。これは、次の項で述べる「現在（３歳）特に心配なこと」の質問項目についても同様である。

「乳児期に特に心配だったこと」を訴えた母親は４４人中１９人であり、その内容は表１-41、解決のために相談したネットワークを表したものが表１-42である。ここでの特徴は、「専門家」の割合が高くなっていることである。これは、今述べた「乳児期に特に心配だったこと」の問題の特性によっている。すなわち、この悩みが、母親にとって重要な、気になっていたものであることを考慮すると、乳児期に専門家のサポートが役に立っていたことは納得できる。また、悩みの内容をみると、育児書や医学書を見て解決できそうでもあるが、本や雑誌といった育児の情報が、必ずしもサポーターとなっていない。

育児情報が氾濫している最近の育児とはいえ、「育児情報」が有効であったという回答は、「妊娠期」から後にみる「現在の育児」を通して少なく、「出産準備」の項目で３割を示しているほかには、「MMR接種」・「トイレット・トレーニング」で１割を越えている程度である。

やはり深刻な悩みには、本や雑誌といった間接的な回答ではなく、顔と顔を見合わせて直接に回答してくれることが重要なであろう。

表 1 -41

乳児期に心配だったこと
〈面接データ〉

(N=19)

相 談 内 容	件 数	(%)
病 気	4	(21.1)
性格・夜泣き	4	(21.1)
発 育	3	(15.8)
肥 満・食 事	3	(15.8)
便 秘	2	(10.5)
自分の育て方	1	(5.2)
そ の 他	2	(10.5)

表 1 -42

乳児期に特に心配だったことの相談相手
(M. A)

〈面接データ〉

(N=19)

相 談 者	件 数	(%)
夫	4	(21.1)
実 母	4	(21.1)
姉 妹	1	(5.3)
P 友 人	4	(21.1)
M 友 人	2	(10.5)
専 門 家	8	(42.1)
自分一人で	1	(5.3)

再び乳児期についてみていくと、「発育」についての心配は12人の母親があったと答えており、その内容は、「身長や体重が少し小さめ」が多かった。他に、「言葉の遅れ」などを挙げたが、あまり深刻ではなく、気になっていたこととして話していた。そのため、相談者の中で専門家が上位ではあるが、その割合も33.3%と、「乳児期に特に心配だったこと」での42.1%に比べ低くなっている（表1-43）。「発育」の問題での主要な相談者は、この「専門家」の他には「実母、姉妹、姑などの親戚」と「自分一人で」が上位である。

「おっぱい・ミルク」についての問題は8人が訴え、その内容は、表1-44にあるように「出ない」・「母乳で育てなさい……という他人からの圧力」・「しこり」と、回答した中の5件が母親自身の問題である。ここでの相談者の特徴は、「専門家（全員が保健婦）」が50.0%で上位であり、「自分で」が37.5%とそれに続いている（表1-45）。

「MMR接種」⁽³⁴⁾については、回答してもらえなかった5名を除く39名のうち、14名がMMRを接種していた。また、地方の行政の決定によって接種しなかった者は3名である。対象となった3歳児は、MMRについての対応が、その地域により任意であったり、禁止であったりと様々であり、MMR自体についても賛否両論が、よく新聞などに出ていた頃である。回答者39名から、行政の決定により接種しなかった3名を除いた36名の母親が、誰かに相談したり自分で悩んでその決定をしていった。その特徴は表1-46より「専門家」と「自分で」が25.0%、次いで「夫」が19.4%、「情報」が16.7%である。

Personal 友人と Maternal 友人についての特徴は、乳児期全体を通して後に考察する。

「離乳食」「アレルギー」については、それぞれ12人、14人の母親が悩みを訴えていた。特にアレルギーの問題で、「専門家」よりも「自分で」という項目が高かったことは、アレルギーといっても軽いアトピーが多かったためであろう（表1-47、1-48）。

「トイレット・トレーニング」の問題は、悩みというよりも母親がどのようにしてトイレット・トレーニングを実施したかという回答であり、1歳代までにトイレット・トレーニングを開始した母親は40.9%であり、その中でも0歳代に実施した母親は4.5%であり、「2歳代」・「3歳過ぎ」が「1歳代」に続いている（表1-49）。因みに育児書では、個人差があるとは断ったうえで、おむつがとれる目安は2歳前後、3歳までにとれば良いを目安として、6カ月すぎたら便器に座らせてみせるとある⁽³⁵⁾。また、矢倉・広江らは、子どもが13～18カ月に排泄のしつけを開始したものが、トラブルの出現率が最も低い事を報告している⁽³⁶⁾。今回、回答された年齢が早いとみるか遅いとみるかは、一概には

言えないが、0歳代に開始した2名中、一人は一度失敗して2歳になってからとれ、もう一人は、3歳児健診を機にとれたという結果である。

トイレット・トレーニング自体は、44人全ての母親が実施していたが、その中で悩みをもっていた母親は8人であった。その8人が相談した相手は、専門家が50.0%で半分の母親が相談していた。その内訳を見ると保健所2名、保育園1名、育児相談1名であった。夫に関しては25.0%で2番目に位置している（表1-50）。

最後の「子どもの性格・夜泣き」については19人があったと答え、相談者の特徴（表1-51）は、「自分で」と「親戚（特に実父母）」とが高い。この質問の性格は、他の問題のように、想定される解決策が、「～のようにすればよい」というような、子どもに対しての対応としてあるのではなく、基本的には、母親の方が「子どもの成長を待つ」か「子どもの性格を受けとめられる」ようになっていくことにある。さらに、解決のための決定打がないだけに、同年代の子どもをもった友人に話すことが、他児と自分の子どもとの比較を強めてしまい、かえって悩みを深めてしまうことになるため、友人の割合は少なくなっていたのであろう。

表 1-43

発育についての相談相手 (M. A) 〈面接データ〉 (N=12)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	2	(16.7)
実 母	2	(16.7)
姉 妹	1	(8.3)
姑	1	(8.3)
P 友 人	2	(16.7)
M 友 人	2	(16.7)
専 門 家	4	(33.3)
自分一人で	3	(25.0)

表 1-44

おっぱいについての悩みの内容 〈面接データ〉 (N= 8)		
相 談 内 容	件 数	(%)
出 な い	2	(25.0)
飲 ま な い	2	(25.0)
「母乳で」の外圧	2	(25.0)
し こ り	1	(12.5)
吐 く	1	(12.5)

表 1-45

おっぱいについての悩みの相談相手 (M. A) 〈面接データ〉 (N= 8)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	1	(12.5)
実 母	2	(25.0)
P 友 人	1	(12.5)
専 門 家	4	(50.0)
自分一人で	3	(37.5)

表 1-46

MMR接種についての相談相手 (M. A) 〈面接データ〉 (N=36)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	7	(19.4)
夫の親戚	1	(2.8)
P 友 人	2	(5.6)
M 友 人	6	(16.7)
専 門 家	9	(25.0)
育児情報	6	(16.7)
自分一人で	9	(25.0)

表 1 -47

離乳食についての相談相手 (M. A) 〈面接データ〉 (N=12)		
相 談 者	件 数	(%)
実 母	2	(16.7)
P 友 人	2	(16.7)
M 友 人	3	(25.0)
専 門 家	2	(16.7)
育 児 情 報	1	(8.3)
自分一人で	4	(33.3)

表 1 -48

アレルギーについての相談相手(M. A) 〈面接データ〉 (N=14)		
相 談 者	件 数	(%)
P 友 人	1	(7.1)
M 友 人	2	(14.3)
専 門 家	5	(35.7)
自分一人で(自然に)	7	(50.0)

表 1 -49

トイレット・トレーニングを始めた年齢 〈面接データ〉 (N=44)		
トレーニング開始年齢	件 数	(%)
1 歳 前	2	(4.5)
1 歳 代	16	(36.4)
2 歳 代	15	(34.1)
3 歳 す ぎ	6	(13.6)
不 明	5	(11.4)

表 1 -50

トイレット・トレーニングについての相談相手 (M. A) 〈面接データ〉 (N= 8)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	2	(25.0)
実 母	1	(12.5)
M 友 人	1	(12.5)
専 門 家	4	(50.0)
育 児 情 報	1	(12.5)

表 1 -51

子どもの性格・夜泣きについての相談相手 〈面接データ〉 (N=44)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	1	(5.3)
実 母	5	(26.3)
姑	2	(10.5)
P 友 人	1	(5.3)
M 友 人	1	(5.3)
専 門 家	1	(5.3)
自分一人で	8	(42.0)

さて、これら乳児期の問題について注目されるのは、妊娠中に Personal 友人が Maternal 友人よりも上位の相談相手であったという特徴が、逆転することである。すなわち、子どもに関する問題である「発育」・「MMR 接種」・「離乳食」・「アレルギー」・「トイレット・トレーニング」・「子どもの性格・夜泣き」において、Maternal 友人が Personal 友人と同じかそれを上回っている。特に、Maternal 友人が Personal 友人を上回っている、「MMR 接種」・「離乳食」・「アレルギー」・「トイレット・トレーニング」については、やり方や考え方について、さまざまな情報があり、母親を混乱させている問題である。その際に、同じ立場にある母親たちから「これがよかった」・「この方法はよくなかった」といった経験に基づいたアドバイスが有効となっているのであろう。

反対に、乳児期に Maternal 友人が Personal 友人を上回っている項目は、「乳児期に特に心配だったこと」と「おっぱい」についての悩みであった。この2つの特徴は、前者が深刻な問題であり、後者が、どちらかといえば母親自身の問題が多かった。日常の育児上の問題については Maternal 友人が、そして深刻な問題や母親自身の問題は Personal 友人がサポーターとなっていることがわかる。

このように問題に対応してソーシャル・ネットワークを使い分けている現状は、質問紙調査からも読み取れた。表 1-52 ～ 1-54 は、こちらが設定した 11 項目について、相談者を 3 人まで回答してもらい、問題の性質の似ている項目をまとめたものであるが、母親は医学的な問題、子どもの発達上の問題、母親自身の問題という問題の内容に応じて、相談するソーシャル・ネットワークを使い分けているのがわかる。どの項目についても、夫や親戚が主要な相談相手になっているが、「子どもに湿疹ができた」・「子どもの便秘が 3 日間続いた」・「子どもの発音がおかしい」（表 1-52）という医学的な問題は医師・病院へ、「子どもの性格が短気である」・「子どもが毎晩なかなか寝ない」・「子どもが偏食・小食である」・「子どもがおねしょばかりする」・「子どもに友達ができない」（表 1-53）という子どもの発達上の問題は子どもを通し親しくなった Maternal 友人へ、「あなたの対人関係の悩み」「あなたのやりたいことができない、仕事につけないといった悩み」・「日常の育児についてイライラやクヨクヨすること」（表 1-54）という母親自身の問題は母親自身の Personal 友人に相談している。

面接調査における「おっぱいについての悩み」や質問紙調査における「日常の育児についてイライラやクヨクヨする」のように問題の領域が育児に関するものであっても、その内容が母親自身に関係するものであれば、それは母親の Personal 友人に相談していることは

興味深い。母親は、悩みの詳細な性質までを考慮してネットワークを使い分けているのである。

表 1-52 専門的な悩みに関する相談相手
(3人までの複数回答)〈質問紙データ〉

	「子どもに湿疹ができた」 (N=701)		「子どもの便秘が3日間続いた」 (N=582)		「子どもの発音がおかしい」 (N=629)	
	件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
夫	168	(24.0)	114	(24.7)	180	(28.6)
夫の親	16	(2.3)	19	(3.3)	17	(2.7)
お母さんの親	79	(11.3)	82	(14.1)	84	(13.4)
親以外の親戚	14	(2.0)	11	(1.9)	13	(2.1)
職場の同僚	8	(1.1)	3	(0.5)	2	(0.3)
あなた自身の友人	43	(6.1)	28	(4.8)	31	(4.9)
子どもを通し親しくなった友人	72	(10.3)	63	(10.8)	60	(9.5)
近所の人	21	(3.0)	15	(2.6)	16	(2.5)
保母・保育所	4	(0.6)	6	(1.0)	14	(2.2)
医師・病院	213	(30.5)	102	(17.5)	114	(18.1)
保健所	1	(0.1)	3	(0.5)	52	(8.3)
電話相談	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(0.2)
育児書・育児雑誌を読む	38	(5.4)	32	(5.5)	20	(3.2)
その他	8	(1.1)	5	(0.9)	5	(0.8)
だれ(どこ)にも相談できない	1	(0.1)	1	(0.2)	0	(0.0)
特に誰(どこ)にも相談しない	15	(2.1)	68	(11.7)	20	(3.2)

表 1-53 子どもの発達の悩みに関する相談相手
(3人までの複数回答)〈質問紙データ〉

	「子どもの性格 が短期」 (N=561) 件数 (%)	「子どもが毎 晩寝ない」 (N=539) 件数 (%)	「子どもの偏 食・小食」 (N=578) 件数 (%)	「子どものお ねしょ」 (N=564) 件数 (%)	「子どもに友達 ができない」 (N=550) 件数 (%)
夫	180 (32.1)	167 (31.0)	149 (25.9)	133 (23.5)	161 (29.2)
夫の親	26 (4.6)	14 (2.6)	21 (3.6)	23 (4.1)	16 (2.9)
お母さんの親	99 (17.6)	81 (15.0)	78 (13.5)	96 (16.9)	57 (10.4)
親以外の親戚	16 (2.9)	16 (3.0)	18 (3.1)	19 (3.4)	16 (2.9)
職場の同僚	4 (0.7)	1 (0.2)	6 (1.0)	5 (0.9)	6 (1.1)
あなた自身の友人	49 (8.7)	48 (8.9)	56 (9.7)	42 (7.4)	68 (12.4)
子どもを通し親しくなった友人	69 (12.3)	81 (15.0)	88 (15.2)	69 (12.2)	95 (17.3)
近所の人	11 (2.0)	19 (3.5)	17 (2.9)	15 (2.7)	24 (4.4)
保母・保育所	16 (2.9)	10 (1.9)	17 (2.9)	15 (2.7)	30 (5.5)
医師・病院	4 (0.7)	6 (1.1)	13 (2.2)	37 (6.6)	4 (0.7)
保健所	11 (2.0)	7 (1.3)	37 (6.4)	31 (5.5)	11 (2.0)
電話相談	4 (0.7)	1 (0.2)	1 (0.2)	3 (0.5)	4 (0.7)
育児書・育児雑誌を読む	17 (3.0)	22 (4.1)	23 (4.0)	33 (5.9)	17 (3.1)
その他	6 (1.1)	4 (0.7)	5 (0.9)	2 (0.4)	6 (1.1)
だれ(どこ)にも相談できない	0 (0.0)	1 (0.2)	0 (0.0)	2 (0.4)	4 (0.7)
特に誰(どこ)にも相談しない	49 (8.7)	61 (11.3)	49 (8.8)	39 (6.9)	31 (5.6)

表 1-54 母親自身の悩みに関する相談相手
(3人までの複数回答)〈質問紙データ〉

	「母親自身の対人関係」 (N=597) 件数 (%)	「やりたいことができない」 (N=514) 件数 (%)	「育児についてイライラ・ クヨクヨ」 (N=630) 件数 (%)
夫	152 (25.4)	161 (31.3)	173 (27.4)
夫の親	5 (0.8)	6 (1.2)	8 (1.3)
お母さんの親	114 (19.1)	63 (12.3)	88 (14.0)
親以外の親戚	31 (5.2)	23 (4.5)	28 (4.4)
職場の同僚	15 (2.5)	11 (2.1)	11 (1.7)
あなた自身の友人	166 (27.7)	138 (26.8)	134 (21.2)
子どもを通し親しくなった友人	66 (11.1)	56 (10.9)	127 (20.2)
近所の人	14 (2.3)	10 (1.9)	18 (2.9)
保母・保育所	0 (0.0)	1 (0.2)	3 (0.5)
医師・病院	1 (0.2)	0 (0.0)	1 (0.2)
保健所	1 (0.2)	0 (0.0)	2 (0.3)
電話相談	1 (0.2)	1 (0.2)	2 (0.3)
育児書・育児雑誌を読む	1 (0.2)	0 (0.0)	6 (1.0)
その他	9 (1.5)	6 (1.2)	8 (1.3)
だれ(どこ)にも相談できない	1 (0.2)	5 (1.0)	2 (0.3)
特に誰(どこ)にも相談しない	20 (3.4)	33 (6.4)	19 (3.0)

（３）現在の悩みと解決

最後に、現在（３歳）の育児の悩みについての解決はどうだろうか。乳児期と同様に、最初に問題を設定せずに質問した「現在（３歳）特に心配なこと」では、４４人中３５人が訴えていた。悩みの内容は、その母親、その子どもによって様々であるものの、母親が今の子育てで、一番気になっていること、苦労していることを答えていた（表１-55）。しかし、問題は様々であるが、この時期、母親の解決方法は「自分一人で」が圧倒的に高くなる（表１-56）。この傾向は「現在、特に心配なこと」以外の、こちらから設定した問題についてもいえる。３歳児の現在について、こちらから設定した問題とは、「おねしょ」・「食事」・「子どもの友達」・「子どもの反抗」・「言葉づかい」・「寝付き」・「子どもの性格」・「子どもの癖」の８項目であったが、「おねしょ」・「寝付き」の２項目を除いた６項目で実施した。「おねしょ」の項目は、それを悩みとしている母親がいなかったためであり、「寝付き」の項目は乳児期での「いたずら」の項目と同様に「子どもの性格」に代表されたからである。

これら６項目の悩みについての相談相手を表したのが表１-57～１-60であるが「悪い言葉づかい」と「子どもの性格」については「自分で解決する」が１００％であったので表は省略する。残り４項目全てについても、「自分で」が７～８割近く、その他の相談者を大きく引き離している。

このことは、母親が悩みを一人で抱え込んでネットワークから孤立していることを意味するのだろうか。確かに、地域から孤立したり、十分なネットワークが自分にはないと感じている母親が、質問紙調査から３０％近くいる（表１-61、１-62）。しかし、多くの母親は、身近な友人に対して、日常の諸々の会話の中で悩みも一緒に話してしまい、「～の悩みに対して助けとなった人は誰ですか」と改めて質問された場合には、そうした身近な友人は意識されないようである。

妊娠期や乳児期においても、相手から特別なアドバイスを受けることがなく、ただ話しをするだけで解決できていたことも多かった。しかし、面接での母親たちが、その時期についての回答する際には、「（悩みを）聞いてもらっている」という言葉を多く用いていた。母親も何らかのサポートを求めて話をしていたのである。

現在では、悩みの解決を目的として友人と話すのではなく、不安やストレスといった深刻さを示す前に、日常の会話の中で話すことで、結果として母親の解決能力を高めているのではないだろうか。この点については、Rookが「サポート」と「友好（companionship）」

を区別した研究が参考となる⁽³⁷⁾。すなわち、「サポート」が大きな生活上のストレスを緩和するのに対して、何気ない付き合いである「友好」が、日常的な小さなストレスに対して緩和効果をもつと報告している。本調査においても、母親は子育てをしていく中で生じるストレスが、大きく深刻なストレスとなる前に、日常の友好的な付き合いを通して、予防的に緩和しているのであろう。

表 1 -55

現在, 子どものことで特に心配なこと (M. A) 〈面接データ〉 (N=34)		
相 談 内 容	件 数	(%)
友 人 関 係	9	(26.5)
性 格	7	(20.0)
生 活	4	(11.8)
発 達	3	(8.8)
子 育 て	2	(5.9)
く せ	1	(2.9)
便 秘	1	(2.9)
お む つ	1	(2.9)
対象児以外	7	(20.6)

表 1 -56

現在, 子どものことで特に心配なことの 相談相手 (M. A) 〈面接データ〉 (N=34)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	5	(14.7)
実 父 母	1	(2.9)
姉 妹	1	(2.9)
P 友 人	1	(2.9)
M 友 人	1	(2.9)
専 門 家	2	(5.9)
育 児 情 報	1	(2.9)
自分一人で	25	(73.5)

表 1-57

食事についての相談相手 〈面接データ〉 (N=33)		
相 談 者	件 数	(%)
自分一人で	23	(69.6)
実 父 母	3	(9.1)
姉	2	(6.1)
専 門 家	2	(6.1)
P 友 人	2	(6.1)
M 友 人	1	(3.0)

表 1-58

友達についての相談相手 (M. A) 〈面接データ〉 (N=29)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	2	(6.9)
姉	2	(6.9)
P 友 人	1	(3.4)
自分一人で	26	(89.7)

表 1-59

子どもの反抗についての相談相手 〈面接データ〉 (N=33)		
相 談 者	件 数	(%)
夫	2	(6.1)
実 母	1	(3.0)
M 友 人	1	(3.0)
自分一人で	29	(87.9)

表 1-60

子どもの癖についての相談相手 〈面接データ〉 (N=20)		
相 談 者	件 数	(%)
専 門 家	2	(10.0)
自分一人で	18	(90.0)

表 1-61

私には知人はいるが、気心の知れた人はいない 〈面接データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
よ く あ る	39	(13.4)
ときどきある	47	(16.2)
ほとんどない	101	(34.7)
まったくない	95	(32.6)
NA	9	(3.1)

表 1-62

私には頼りにできる人がだれもない 〈面接データ〉 (N=291)		
	件 数	(%)
よ く あ る	34	(11.7)
ときどきある	48	(16.5)
ほとんどない	90	(30.9)
まったくない	111	(38.1)
NA	8	(2.7)

第4節 母親の不安と社会的孤立

前節では、母親が具体的な問題解決において、自らのネットワークを使い分けている現状をみてきた。ところで、先に概観したネットワークの種類の中で、「ネットワーキング」の母親たちは、その問題解決をめぐっても、意識的に、あるいは予防的に自分の広い社会関係の中に問題を持ち込み、サポートを得ていた。また、反対に母親自身が友人のサポーターの役割をはたしていることも多かった。

こうした母親たちがいる一方で、それとは対照的な、問題を抱えていても解決できずに先送りしている母親たちの存在があった。以下では、これら「ネットワーキング」と「問題未解決」の母親たちとを比較し、「問題未解決」の母親の困難性を考察していく。

ここで用いる「ネットワーキング」タイプの母親の抽出基準は、第3節（P.46）において述べた通りである。また、「問題未解決」タイプの抽出基準は、これまで取り上げた妊娠期から現在（3歳）までの育児における悩みとその解決をたずねていく中で、次の①～③全てを満たした母親とした。

①「自分一人で解決するか、あるいは相談してもその相手が夫、親戚だけである母親」

もちろん、こうした対処行動に問題があるわけではなく、それで解決できていればよいのであが、各々の問題解決について母親の安心感・満足度を聞いて、

②「問題や悩みは、解決できずにきたと訴えた母親」

さらに、

③「相談者が欲しいと答えていた母親」である。

この3つで選別すると、面接者44ケースの中で4ケースが該当した。

最初に、「ネットワーキング」タイプ8ケースについての全体の特徴を述べる。今回の調査では、前で述べたように「ネットワーキング」の内容により、育児サークル的な Maternal ネットワーキング（3ケース）と母親自身のサークル活動といった Personal ネットワーキング（5ケース）との2種類があった。これら8ケースについて、質問紙調査の結果から f 1「生活疲労」・f 2「充実感の欠如」・f 3「育児不安」得点、リスク・ファクターに関連のあった要因である「ソーシャル・ネットワーク」・「夫の協力・夫への評価」・「他児との比較」を表1-63に示した。なお、ソーシャル・ネットワークを構成している「世間話」・「預け合い」・「家族ぐるみ」の項目はコンバートで得点化しており、得点が高くなるにつれて、それぞれのネットワークは大きい、あるいは頻度が多いことを示している。

その結果、「ネットワーキング」タイプの平均点は、f 1「生活疲労」は 8.3 点（291 人全体の平均＝ 8.0 点）、f 2「充実感欠如」は 13.5 点（全体の平均＝ 14.9 点）、f 3「育児不安」も 12.8 点（全体の平均点＝ 12.8 点）で、いずれも平均点に近く、高群はもちろん、低群にも属さなかった。「ネットワーキング」タイプの母親たちは、「社会的な活動」をしており、母親のもつソーシャル・ネットワークも多様であることから、これらの得点は、当然低くなると予想していたが、意外にも平均点近くであった。もちろん、f 1・f 2・f 3 得点いずれもが、高いというわけではないので、「ネットワーキング」活動が、ある程度リスク軽減には効果を果たしていると考えられる。しかし、その効果には限界があり、主体的に社会的活動をしているからといって、あるいは、ソーシャル・ネットワークが充実しているからといって、リスク・ファクターも漸次弱められる性質のものではないことが、面接調査の結果から示された。

一方、「問題未解決」タイプの母親についても同様の得点を集計した結果が、表 1-64 である。表から、f 1「生活疲労」得点は 9.3 点、f 2「充実感の欠如」得点が 19.3 点、f 3「育児不安」得点が 17.0 点と、3 つとも全体の平均点を上回っており、この 4 ケースは、面接 44 ケースの中でも上位に位置している。

次に、ネットワーク得点についてみると、「ネットワーキング」タイプは当然の結果ながら、「世間話」3.8 点（291 人全体平均 3.0 点）、「預け合い」2.5 点（全体平均 1.8 点）、「家族ぐるみ」3.1 点（全体平均 2.5 点）といずれも全体の平均点を上回っており、ソーシャル・ネットワークは充実している。「問題未解決」タイプにおいては、「世間話」2.8 点、「預けあい」1.5 点、「家族ぐるみ」2.0 点と、全体の平均よりネットワークは小さいことが数値からも読みとれた。問題を解決できずにいる母親たちは、f 1・f 2・f 3 得点が高く、社会的にも孤立した状態で育児をしていることが示唆された。

さらに、両者のこうしたネットワークの違いは、居住年数の違い、すなわち「ネットワーキング」タイプが居住年数が長く、「問題未解決」タイプが居住年数が浅いと予想した。その結果、「ネットワーキング」タイプは平均 4.1 年、「問題未解決」タイプは 2.0 年と、約 2 年間の開きがでた。しかし、個別のケースを見ていくと、「ネットワーキング」タイプの中でも 0 年、「問題未解決」タイプの中でも 5 年といった事例があり、単に居住年数という数値だけでは説明できない事例もある。

表 1 -63 「ネットワーク」タイプのケース特徴〈質問紙データ〉

ケース	No.	f 1 得点	f 2 得点	f 3 得点	世間話	預け合い	家族ぐるみ	居住年数
幼児サークル	152	10	14	11	4	4	3	2
	6	9	14	10	4	3	3	2
	165	8	16	14	4	2	3	6
母親サークル	108	9	9	14	4	2	3	4
	180	7	16	12	4	2	3	7
	210	8	14	16	4	3	3	2
	122	9	14	13	2	2	4	10
	287	6	11	12	4	2	3	0
8 ケースの平均		8.3	13.5	12.8	3.8	2.5	3.1	4.1
全体の平均(291 人)		8.0	14.9	12.8	3.0	1.8	2.0	—

表 1 -64 「問題未解決」タイプのケース特徴〈質問紙データ〉

ケース	No.	f 1 得点	f 2 得点	f 3 得点	世間話	預け合い	家族ぐるみ	居住年数
	14	10	22	18	2	1	2	5
	30	11	16	16	3	1	3	0
	244	5	18	17	3	2	2	2
	113	11	21	17	3	2	1	1
4 ケースの平均		9.3	19.3	17.0	2.8	1.5	2.0	2.0
全体の平均(291 人)		8.0	14.9	12.8	3.0	1.8	2.0	—

今度は、面接調査のデータから、この両タイプの母親について、どのような人がサポーターとなっているかを見ていく。サポーターを表すものとしては、コンボイモデルを参考にした3つの同心円の中に母親のもつソーシャル・ネットワークメンバーを描き入れてもらった図と、インタビューの最後に確認した「母親にとっての Key persons」がある。その結果、Key persons に関しては、両群ともに夫と親族によって占められ、大きな違いはみられなかった。3人までという制約が、親族以外のメンバーを入れる余地を与えなかったのかもしれない。

しかし、コンボイモデルでの、母親にとって心理的距離の近い第1円にいるメンバーにおいては違いがみられた（表1-65）。「さまざまな状況で支えを提供することができる」第1円のメンバーである⁽³⁵⁾が、「ネットワーキング」タイプでは、No.108以外の7ケースに、夫や親族だけではない Personal 友人や Maternal 友人が含まれている。さらに、No.122・180・210に関しては、夫以外の親戚は第1円にはおらず、自分が作り出した友人が、夫以外の親戚よりも心理的距離が近いことを表している。反対に、「問題未解決」タイプは大方が、親族で占められている。No.30は、夫以外に「以前に住んでいた所での友人」と「昔の職場の友人」とが第1円に属しているが、現在では、その2人とは頻繁に会える状態にはいなかった。

以上の特徴をまとめると、「ネットワーキング」タイプは、心理的なリスク・ファクターをある程度もっているが、ソーシャル・ネットワークは充実しており、サポーターも夫や親族に限らず自らの友人で構成されている。対極の「問題未解決」タイプは、心理的なリスク・ファクターの得点がかかなり高く、ソーシャル・ネットワークも乏しい。また、サポーターは、夫と親族によって占められていた。

表 1-65

第1円内のメンバー〈面接データ〉
(心理的距離が近い人)

ネットワーキング タイプ		
ケースNo		
幼児サークル	6	夫, 妹, 実父母, 義理姉, 学生友人, 元職場
	152	夫, 姉, 実父母, 前の住居の友人, 学生友人
	165	夫, 姉, 実父母, 夫両親, 学生サークル, ボランティアサークル
母親サークル	108	夫, 妹, 実母
	122	夫, 学生時代, 上の子の友人の親, 元職場
	180	夫, 学生時代
	210	夫, 職場, 社宅, 母親学級
	287	夫, 妹, 実母, 親友
問題未解決 タイプ		
ケースNo		
	14	妹, 姉, 実母, 夫, 弟, 夫両親, 実家近くの小児科医
	30	夫, 前の住居の友人, 元職場
	244	実母, 姉
	113	弟, 実父母, 夫両親, 夫の姉

本章においては、一般に「育児不安」といわれている「育児期の母親の感情の構造」を探ることから出発し、f 1「生活疲労」、母親関連の要因である f 2「充実感の欠如」、子ども・育児関連の要因である f 3「育児不安」という3つの側面からの尺度構成が見いだせた。また、f 2「充実感の欠如」と f 3「育児不安」とは、子どもを大声で怒る、子どもを衝動的にたたく、というストレスフルな育児行動と関連があり、この尺度によって測定される母親の感情を増幅させないことにより、育児行動でのリスクを予防できる可能性があると思われる。

これら「母親の不安」に関連のあったものの中から、母親の主体的な社会的活動と母親のもつネットワークを中心に考察した。母親は、様々なソーシャル・ネットワークをもち、母親が抱える問題の性質により、それを使い分けて解決していた。これらのソーシャル・ネットワークにおいては、「地理的に近い」とことと「頻繁に会う」ということが、有効なサポータの特色であった。さらに、家族や親族を越えた新たな関係をつくりだし、そこで活動を自分の生活の中に積極的に位置づけている母親たちの存在があった。

こうした、いわゆるネットワーキングの母親たちと問題を解決できずに先送りしてきた母親たちを比較したところ、質問紙調査と面接調査との結果において、注目すべき点があった。すなわち質問紙調査から、「社会的活動」は f 2「充実感の欠如」因子と、そして、「ソーシャル・ネットワーク」は f 2「充実感の欠如」因子および f 3「育児不安」因子に関連があったが、その効果については f 2・f 3得点を低める方向には限界があることが、面接調査の結果から示唆された。「ネットワーキング」タイプの事例でみたように、社会的活動をするほどに、またネットワークが大きく・頻繁に会うほどに、f 2・f 3得点も低められるといった性質のものではない。

一方、問題未解決タイプのように「ネットワークが小さく」・「社会関係が乏しい」という状況では、f 2・f 3得点への影響は大きく、母親の充実感もなくなり、「育児不安」も高くなっていた。ソーシャル・ネットワークは、大きければいいというものではないが、それが、乏しい場合には、母親の不安を大きく高めてしまうのである。

これらの結果は、本論文第1章における調査の限界を示している。育児期の母親の感情を構造化する試みについては、大枠ではあるが、把握することができた。しかし、尺度として用いる際には、本村他⁽³⁹⁾の指摘を克服しようとしたにもかかわらず、同様の問題点が残されてしまった。

その前提として、牧野の言う「育児不安」、本章での「母親の不安」尺度の得点が、「低

い場合はより健康的」と捉えたことに問題があったのではないだろうか。不安得点が低くなれば低くなるほど、育児にとって望ましいと考えたことである。だからこそ、「ネットワーク」タイプの母親でさえ、より「低い」不安ではなく「中程度」の不安を示していたのであろう。すなわち、子どもを育てている母親であれば「誰でも」不安を抱くのは当然であるという前提に立ち、その中で問題にすべきことは、極端に不安の高い母親たち、そして見逃してはならないのが、「不安がない（意識されない）」という母親たちの存在である。

ここで、有意な関連はなかったものの、世間話の相手がいない母親の f 2、f 3 得点に注目したい（表 1-15）。ネットワークが「たくさん」から「数名」・「1～2名」と小さくなるに従って、両因子得点は高くなっているが、「ほとんどいない」という母親の所では一転して、両因子得点ともに低くなっている。これは、「育児に関心のない母親」の問題に関連しているのかもしれない。すなわち、母親が子どもに対して無関心であるために、ネットワークがほとんどないというストレスフルな状況にあっても、「充実感欠如」得点や「育児不安」得点に反映しなかったと考えられよう。

第 1 章における調査においては、面接調査協力者の中に、このようにネットワークが小さく、かつ f 2・f 3 得点が低いという母親は存在しなかったため、これ以上の分析はできなかったが、今後の課題として研究に組み入れていく必要がある。また、こうした社会的に孤立している母親たちに、「主体的活動」や「ネットワーク」の形成を促しても、実現することは難しい。しかも、この調査で得られた「問題未解決」タイプの母親たちは、3 歳児健診に出向いて、アンケートを送付し、面接調査にも応じてくれた母親たちであり、すでに「育児不安」を意識している。それ以前に、客観的には、子どもの発達や子育てに問題があっても意識にのぼらないという母親たち、あるいは病院で健診を受けるでもなく保健所の健診にも現れない親たちもいる⁽⁴⁰⁾。こうした親たちに対しては、セルフ・ヘルプ・グループといった支援を強調していただくだけでなく、公的な援助が講じられるべきであろう。

【第1章の注と引用文献】

- (1) 「育児ノイローゼ」についての用語の検討は、佐藤達哉「育児ノイローゼ」『児童心理』Vol.41、金子書房、1987年。
- (2) 高橋種昭・中一郎「母親の育児不安の構造に関する研究—母親の地域社会に対する関心度と育児態度—」『日本総合愛育研究所紀要』第11集、1976年。
- (3) 川井尚・庄司順一「「育児不安」これまでとこれから」『子ども家庭福祉情報』第10号、1995年。
- (4) 服部祥子・原田正文『乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点—』名古屋大学出版会、1991年。
- (5) 兵庫県家庭問題研究所『核家族の育児援助に関する調査研究報告書』兵庫県、1987年。
- (6) 牧野カツコ「育児における〈不安〉について」『家庭生活研究所紀要』第2号、1981年。
牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭生活研究所紀要』第3号、1982年。
牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭生活研究所紀要』第4号、1983年。
牧野カツコ・中西雪男「乳幼児を持つ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連」『家庭生活研究所紀要』第6号、1985年。
牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭生活研究所紀要』第9号、1987年。
牧野カツコ「〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討」『家庭生活研究所紀要』第10号、1988年。
- (7) 本村汎・磯田朋子・内田昌江「育児不安の社会学的考察—援助システムの確立に向けて—」『大阪市立大学生生活科学部紀要』第33巻、1985年。
- (8) 久田満「ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題」『看護学研究』1987年。
- (9) 仲良し子ども館とは、札幌市が独自に昭和35年からはじめた公的な幼児の集団活動の場である。札幌市内に住む満3歳から就学前の子どもを対象とし、幼児の健康づくりや地域での仲間づくりを目的とした、母子共に参加する活動のことである。しかし、平成7年から廃止となった。

- (10) Kahn,R.and Antonicci,T.C.遠藤利彦（訳）「生涯にわたる「コンボイ」―愛着・役割・社会的支え」東洋・柏木恵子・高橋恵子（編集・監訳）『生涯発達心理学 2巻 気質・自己・パーソナリティ』新曜社、1993年。

（Kahn,R.and Antonicci,T.C.（1980））Convoys over the Life Course:Attachment,Roles,and Social Support. *LIFE-SPAN DEVELOPMENT AND BEHAVIOR*,Vol3 Academic Press,Inc. 253-286.)

- (11)『新社会学事典』の「育児不安」の項目、有斐閣、1993年、P.36。
(12) 牧野カツコ、前掲論文、1982年、P.34。
(13) 牧野カツコ、前掲論文、1982年、P.35。
(14) 越川六郎「蓄積的疲労徴候調査について」『労働の科学』2月号、1975年。
(15) 牧野カツコ、前掲論文、1982年・1983年・1985年・1987年・1988年。
(16) 本村汎・磯田朋子・内田昌江、前掲論文、1985年。
(17) 本村汎・磯田朋子・内田昌江、前掲論文、1985年、P.242。
(18) 牧野カツコ、前掲論文、1988年、Pp.25-26。しかし、ここでの指摘に基づいた尺度改訂は、成されていない。また、注（17）にあげた本村他についても、指摘に対する尺度の改訂には取り組んでいない。
(19) 久田、前掲書、1987年。

稲葉昭英・浦光博・南隆男「「ソーシャル・サポート」研究の現状と課題」『哲学』85、1988年。

浦光博『支えあう人と人』サイエンス社、1992年。

- (20) ただし、その行動は受け手が「サポート」と認知した行動であり、送り手の意図は明かでない。送り手がサポートするつもりでとった行動でも、受け手の側がサポートと認知しない場合もあり、反対にサポートするつもりもなくとった行動が、受け手にはサポートとして認知される場合もある。この両者の一致度をとった研究からは、50～60%の一致度として報告されている。

Antonucci,T.C.,& Israel,B.A.(1986) Veridicality of social support : A comparison of principal and network member's response. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 54,424-431.

Shulman, N.(1976) Network analysis : A new addition to an old bag of tricks.

Acta Sociologica , 23, 307-323.

- (21) Kay Donahue Jennings, Vaughan Stagg, and Robin E. Connors 1991 Social Networks and mothers' Interactions with Their Preschool Children. *Child Development*, 62, 966-978.
- (22) Kahn, R. and Antonucci, T.C., 前掲書、1993 年、P.59。
- (23) 牧野カツコ、前掲論文、1982 年。
- (24) 本村汎・磯田朋子・内田昌江、前掲論文、1985 年。
- (25) Belsky, J. 1984 The Determinants of Parenting: A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Ronald L. Simons, Fred O. Lorenz, Chyi-In Wu, & Rand D. Conger (1993) Social Network and Marital Support as Mediators and Moderators of the Impact of Stress and Depression on Parental Behavior. *Developmental Psychology*, Vol.29, No.2, 368-381.
- 大日向正美、『母性の研究』川島書店、1988 年。
- 牧野カツコ、前掲論文、1985 年。
- (26) Lamb, M.E. 久米稔・服部広子・小関賢・三島正秀（訳）『父親の役割—乳幼児発達とのかかわり』家庭教育社、1981 年。
- (Lamb, M.E. 1976 Interactions between eight-month-old children and their fathers and mothers. In M.E. Lamb (Ed.) *The Role of the Father in Child Development*. Wiley.)
- 柏木恵子『父親の発達心理学』川島書店、1993 年。
- 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房、1996 年。
- (27) 佐々木保行・佐々木宏子「乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労（第 1 報）」『宇都宮大学教育学部紀要』29、1979 年。
- (28) 経済企画庁『国民生活白書（平成 4 年版）』、大蔵省印刷局、1992 年。
- (29) 牧野カツコ、前掲論文、1985 年。
- (30) 牧野カツコ、前掲論文、1982・1984 年。本村汎・磯田朋子・内田昌江、前掲論文、1985 年。
- (31) 兵庫県家庭問題研究所、前掲書、1987 年。
- (32) 小林孝一郎「ネットワーク研究の予備的考察 現代における社会的ネットワーク形成とその意味」『東洋大学社会学研究所・研究報告書第 12 集（平成 3 年度）』、1991 年。

- (33) 増山均『子育て新時代の地域ネットワーク』大月書店、1992 年。
『子ども家庭福祉情報 Vol.6 特集これからの子ども・家庭福祉ネットワーク～心の通
いあうネットワークにするために～』日本総合愛育研究所、1993 年。
- (34) MMR接種（新三種混合）とは、はしか（麻疹）とおたふくかぜ（流行性耳下腺炎）
と風疹が一緒になった予防接種のことであるが、副作用が出たケースも多く、厚生省
の平成5（1993）年4月27日の通達により、実施を「見合わせていた」。その後、
平成6（1994）年10月、予防接種法の改正となり、予防接種は勧奨接種となった。
- (35) 母子愛育会（編）『最新赤ちゃん百科』講談社、1988 年。
- (36) 矢倉紀子・広江かおり「幼児の排泄自立に関する研究 ― 三歳児の排便トラブルに
関する要因の検討 ― 」 『日本看護科学学会誌』Vol.12・No.3、1992 年。
- (37) Rooks,K.S. (1987) Social support versus companionship : Effects on life stress,loneliness,and
evaluations by others. *Journal of Personality and Social psychology*,52, 1132-1147.
- (38) Kahn,R.and Antonicci,T.C.前掲書、1993 年。
- (39) 本村汎・磯田朋子・内田昌江、前掲論文、1985 年。
- (40) 参考までに平成5年度、保健所で実施する札幌市の3歳児健診においては、対象者
が16,865人であり、その内の受診者が14,638人（受診率86.8%）であった。

第2章 縦断調査からみた「育児不安」の性格

第1節 本章での課題と研究方法

1. 先行研究と課題の設定

本章では、母親自身による「育児不安」の性格規定を試みる。前章でみてきたように、「育児不安」については、牧野による一連の「育児不安」研究をはじめとした様々な研究が積み重ねられてきているが、その中には、「育児不安」や「育児ストレス」を構造化・類型化することによって把握している研究もみられる。ここでは、その結果を整理したうえで、母親自身による「育児不安」の性格規定が、それらのどこに位置するのかを確認する。さらに、「育児不安」の解消過程を考察する中から、「育児不安」がどのような性質を帯びたものであるのかを深めていく。

「育児不安」（や育児ストレス）に関する構造的把握の結果について概観していくと、佐藤は、「育児関連ストレス」を「子ども関連育児ストレス」と「母親関連ストレス」に構造化し、前者を「子どもについての素朴な評価（脅威・危機の知覚）に基づくネガティブな経験」、また後者を「ストレスフルと評価された事態（例えば、子どもの発熱や人見知り）への対処可能性やサポートへの期待等を反映した上での事態への否定的な評価」とし、「子ども関連育児ストレス」→「母親関連育児ストレス」→「抑うつ重症度」への影響の妥当性を示した⁽¹⁾。岩田は、先に述べた牧野による「育児不安」尺度の改訂と構造化の試みから、「育児不安」全体を育児をしている「母親の不安」とし、その中で「生活疲労」・「母親の充実感」・「育児不安」という3つの要因を見いだした。育児期の「母親の不安」は、誰もが程度“健康的に”抱いているとした上で、子どもとの関わりの中で生じる「育児不安」因子よりも、母親関連の要因である「母親の充実感」因子へのアプローチが、育児をしている「母親の不安」を軽減することを示した⁽²⁾。さらに、川井他は、0～6歳児をもつ母親に対し、「育児不安」概念の明確化と臨床に役立つ知見を得ることを目的として調査を実施し、0～2歳をもつ母親と3～6歳をもつ母親とでは「育児不安」の質が異なっている可能性を示唆した上で、主に「不安・抑うつ因子」と「育児困難因子」を抽出した。前者が母親自身のもつ精神的な問題であり、いわば育児不安の生じる基盤であるのに対して、後者は育児に関する不安、自信のなさ、負担感を示し、しかも子どもの状態と関わりなく育児上の不安を示すことから、この心的状態こそが「育児不安」の本態に近いものと考えた⁽³⁾。また庄司は、「育児不安」についての概念整理として、通

常の不安ともいえる①「現実的な不安」、母親の訴えについて助言しても不安の軽減しにくい②「不安の強い場合（不安状態・不安発作）」、③「うつ状態」、④「不満・イライラ状態」と分類している⁽⁴⁾。

これらの分類や構造化を大枠でまとめてみると、それぞれが用いている用語が規定している内容に相違はみられるものの、佐藤・岩田は母親が抱く不安を母親関連と子ども関連に大別しており、川井らと庄司は、健康的な不安と積極的対応が必要な不安と病的（医療的対応が必要な）不安とに区分しているといえる。

ところで、これまでの「育児不安」研究では、育児の最中にある母親が訴える「育児不安」について、研究者が（主に尺度を通して）客観的に問題性の高い「育児不安」を判断するという方法が用いられてきた。しかしここでは、4年前に「育児不安」についての調査（本論文・第1章での調査）を実施した母親に対して、再び面接調査を実施することにより、育児を担っていた母親本人が「育児不安」を振り返ってみたときに、どのように性格規定が成されるかを把握していく。これは、育児の外にあって「育児不安」を客観的にとらえようとする研究者の視点とも、あるいは育児の最中にある母親が主観的にとらえる「育児不安」とも異なった、いわば母親自身による客観的な「育児不安」ととらえる視点となる。さらに、子どもの成長や、育自といわれる母親自身の成長に伴って、どのように「育児不安」が推移したのかというプロセス研究としての意義も存在している。

これら先行研究を踏まえつつ、本章での主な課題のを次の2点とする。

課題1：3歳児を育てていた時の母親の「不安」・「悩み」は、子どもが小学校へ就学した現在では、いかに変化しているのか。また、4年前に、3歳児を育てながら主観的に述べられていた「育児不安」は、現在、振り返ってみると、どのように特徴づけられるのか。

課題2：「育児不安」が解消されているとしたら、その要因は何であったのかを母親の社会関係を中心に検討する。

2. 調査の概要

ここで用いられる調査は、平成5年に実施した質問紙調査・面接調査の協力者（第1章の調査対象者）に対して、4年後の平成9年に再び面接調査を実施した縦断調査である。

（１）手続きと期間

平成５年に３歳児をもち、質問紙・面接調査を実施した（第１章参照）母親４４名に対して、再び平成９年に面接調査依頼書を郵送し、調査に協力してもらえる人に返送ハガキを送付してもらった。

４４名中１２名が宛名先不明で連絡がつかず、残り３２名中２０名が応諾してくれた。面接は、調査協力者の自宅へ伺い実施したが、１名は職場での昼休みを利用して実施した。実施期間は、平成９年４月下旬～５月下旬。

（２）調査対象

現在小学校１年生の子どもをもつ母親２０人。母親の平均年齢は３７．３歳である。

対象者の詳細は、表２－１に示すとおりである。今回の対象者は、平成５年の郵送法による質問紙調査（２９１名）→平成５年面接調査（４４名）→平成９年面接調査（２０名）という三度の調査全てに協力してくれた母親たちである。最初の質問紙調査における２９１名から比較して、今回の２０名の対象者特徴を表２－２から述べる。最初の質問紙調査から「専業主婦」の割合は約８割と高かったが、今回も「フルタイム」で働いている母親は１割であり、パートや在宅での仕事（多くがカタログ等による生活用品販売）をもちつつも、家での生活が中心の母親となった。母親の学歴では、常に高校卒業が５割を越しているが、平成５（１９９３）年の質問紙調査よりは平成５（１９９３）年の面接調査が、そしてさらに、平成９（１９９７）年の面接調査の方が、より大卒の割合が高くなっている。また、年収では、１９９３年当時における年収で「５００～７００万円未満」の層が、そして夫の職業では「公務員・団体等職員」の層が、相対的に高くなってきている。

（３）面接調査の質問項目（巻末資料３参照）

- Ⅰ．フェイス・シート（家族構成と健康状態、現在の母親の職業の有無・職種・就業形態・収入、世帯年収、平成５年調査からの生活の変化）
- Ⅱ．母親の生活（一日の流れと休日の様子、母親のネットワークについて前回との比較）
- Ⅲ．子ども・子育てについて（習い事の実際と子どもにかかる費用、現在の悩み・不安とその対処、子どもへの期待）
- Ⅳ．母親自身について（子育て以外の悩み、現在の趣味、母親・主婦への評価）
- Ⅴ．母親自身からみた「育児不安」（育児・子育ての時期、振り返ってみた「育児不安」、「育児不安」を抱えている母親へのアドバイス、児童虐待について）

表 2-1 調査対象

No	年齢	家族構成	年 収	学歴	前回の仕事	現在の仕事
5	37	祖父, 祖母, 夫, 子(6)	300～500万円未満	高校	パート	パート
6	36	夫, 子(9), 子(6)	300～500万円未満	大学	専業主婦	専業主婦
8	36	夫, 子(9), 子(6), 子(2)	500～700万円未満	短大	専業主婦	パート
18	37	夫, 子(6)	500～700万円未満	大学	在宅プログラマー	専業主婦
30	32	夫, 子(7), 子(1)	500～700万円未満	高校	専業主婦	専業主婦
80	35	祖父, 祖母, 夫, 子(1), 子(6)	500～700万円未満	高校	ハーブ教室, 生活雑貨販売	パート
103	31	夫, 子(6), 子(1)	300～500万円未満	高校	専業主婦	専業主婦
115	36	夫, 子(4), 子(6)	500～700万円未満	短大	専業主婦	パート
122	40	夫, 子(4), 子(6)	500～700万円未満	短大	イラストレーター	陶芸教室
129	39	夫, 子(4), 子(6)	200～300万円未満	高校	在宅事務	生活雑貨販売
145	38	夫, 子(9), 子(6)	500～700万円未満	短大	専業主婦	教材添削
155	44	夫(不在), 子(7), 子(3), 子(7)	300～500万円未満	高校	専業主婦	パート
165	39	夫, 子(8), 子(6)	500～700万円未満	短大	専業主婦	専業主婦
166	39	夫, 子(6), 子(3)	700～1000万円未満	高校	専業主婦	専業主婦
172	32	夫, 子(6)	700～1000万円未満	高校	専業主婦	専業主婦
210	37	夫, 子(4), 子(8), 子(6)	500～700万円未満	大学	専業主婦	専業主婦
244	32	夫, 子(6), 子(4)	300～500万円未満	専門学校	専業主婦	専業主婦
257	48	祖父, 祖母, 夫, 子(6)	300～500万円未満	高校	自営業, 化粧品販売	自営業, 化粧品販売
282	40	夫, 子(9), 子(6)	1000万円以上	大学	小学校教諭	小学校教諭
287	38	夫, 子(9), 子(6)	1000万円以上	高校	看護婦, 生活雑貨販売	看護婦

表 2-2 平成 5 年（'93）調査から平成 9 年（'97）調査への調査対象者の変遷

		質問紙調査対象者 (291 名)	面接調査('93) 対象者 (44 名)	面接調査('97) 対象者 (20 名)	
母親の平均年齢		データ無	30.5 歳	33.7 歳 ('93 での年齢)	37.3 歳 ('97 での年齢)
母親 の 学 歴	中 卒	12 (4.1)	1 (2.3)	0 (0.0)	
	高 卒	159 (54.7)	20 (45.5)	10 (50.0)	
	短大卒	92 (31.6)	16 (36.4)	6 (30.0)	含専門学校
	大 卒	27 (9.3)	7 (15.9)	4 (20.0)	
	N.A.	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	
母親 の 職 業	フルタイム	21 (6.8)	4 (9.1)	2 (10.0)	2 (10.0)
	パート	19 (6.2)	2 (4.5)	1 (5.0)	5 (25.0)
	内職・自営	26 (8.4)	3 (6.8)	5 (25.0)	4 (20.0)
	専業主婦	242 (78.5)	35 (79.5)	12 (60.0)	9 (45.0)
				('93 での職業)	('97 での職業)
世 帯 年 収	200 万円未満	3 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	～ 300 万円未	14 (4.8)	4 (9.1)	3 (15.0)	1 (5.0)
	～ 500 万円未	114 (39.2)	13 (29.5)	3 (15.0)	6 (30.0)
	～ 700 万円未	95 (32.6)	17 (38.6)	10 (50.0)	9 (45.0)
	～ 1000 万円未	48 (16.5)	8 (18.2)	3 (15.0)	2 (10.0)
	1000 万円以上	9 (3.1)	1 (2.3)	0 (0.0)	2 (10.0)
	N.A.	8 (2.7)	1 (2.3)	1 (5.0)	0 (0.0)
				('93 での年収)	('97 での年収)
夫 の 職 業	自営業	30 (10.3)	6 (13.6)	2 (10.0)	
	公務員・団体等	57 (19.6)	10 (22.7)	5 (25.0)	
	民 間	181 (62.2)	24 (54.5)	11 (55.0)	
	その他	16 (5.5)	4 (9.1)	2 (10.0)	
	無職	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	N.A.	6 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	

第2節 母親からみた「育児不安」

1. 「育児」不安と「子育て」不安

わが子を育てていく過程で、小学校入学という一つのステップを越えたばかり（調査実施は4月下旬から5月下旬と入学間もない）母親たちが、これまでの育児を振り返る中で「育児不安」というものをどのように捉えているのであろうか。まず、全体的印象としては、今振り返ると「時が過ぎたら笑えること、年をとってくればおかしさに変わるようなもの（No.257）」、「今思うと一つ一つがチェと言うぐらい小さな、くだらないことだった（No.129）」、「今思えば、へのかっぱという感じ（No.5）」、「あっという間に過ぎてしまうよ（No.166）・（No.122）」、「今思うと笑ってしまうことが多い（No.6）」、「すぐに楽になる、あっという間のこと（No.172）」という声があがっているように、その深刻さは相対的に小さくなっている。このように母親たちに思わせる背景として、母親自身がとらえている「育児」の期間がきわめて限定されていることがあげられる。母親たちに「育児」・「子育て」について、それぞれ子どもが何歳ぐらいまでを考えているか・イメージしているかをたずねたところ、表2-3に示すような意見が得られた。

表 2-3 「育児」・「子育て」についての全体的特徴

No	育児の期間	子育ての期間	「育児不安」とは？	アドバイス	前回の心配事	今回の心配事
5	幼稚園の年長まで	小学校中学年まで	育児書通りになってしまう	友達作り、本を信じない	同居の姑	同居の姑、子だらしない
6	幼稚園まで	小学校まで	育児の情報が多い	育児書にならず、経験に振り回されない	地域の環境悪い	上の子が精神的に弱い
8	幼稚園へ行くまで	高校が終わるくらい	母と子の相性の違い	気にせず、お金と時間があれば	子どもの遊び食い	遊び食い、言う事をきかない
18	トイレ・食事の自立	子どもが家庭をもつまで	本人の気持ち次第	完璧の壁を打ち破ること	遊び相手	ない
30	小学校の前まで	小学校の前まで	打ち明ける人いなかった、他児比較	ひとりで悩まないで	子の言葉、母の人間関係	子の友人、早口
80	小学校に入るまで	1、3歳～小学校前くらい	初めてのことで全て不安、母の孤立	友人増やして情報集める	上の子の学校の勉強	上隠し事；下勉強嫌い
103	幼稚園入学まで	社会人になるまで	みんな横並びじゃないとダメ	子どもを連れて行ける所がない	でべそ、反抗期	子ども太りすぎ？
115	幼稚園へ入る位まで	中学卒業まで	小さなことでも先が見えず不安	アドバイスしようがない	子が友達と遊べない	勉強について（少し）
122	幼稚園まで	中学生、子に干渉している間	一生懸命やるとなってしまう	あつという間、友人による	言葉遅い	上の子少い？で自家中絶
129	幼稚園に入るまで	子どもが独立するまで	核家族、他児比較	どんどん外へ出るべき	子の心配（自閉的）	なし
145	幼児期、小学校入学まで	育児と同じ	若い母親になる		第2子の偏食	特になし
155	中学まで	育児と同じ	母親の精神状態の病気		第1子の勉強	第1子の勉強
165			暇だから	色々な子どもをみる	子の落ち着きなさ、夫	夫、子どもの学校
166	3歳ぐらい	ずっと	集団の中で他児と比較で	あつという間にすぎちゃうよ	特になし	特になし
172	育児は終わったという感じ	子育ての実感がない	小さいことも気にする母親の性格	あつという間、自信をもって	夫	子の友人、勉強
210	高校卒業まで	育児と同じ	高学歴の母親が子に集中しすぎ	自分のための時間を	子が内弁慶	子の勉強のこと
244	幼稚園に上がるまで	育児に同じ	子の病気、母親の人間関係	時が解決してくれる	団地の人間関係、夫	近隣での人間関係
257	幼稚園の年長まで	育児も含めてずっと続く	社会やマスコミに自分を当てはめる	時が過ぎたら笑える	子離れが寂しい	子が大人びている
282	0～6、7歳	精神的・経済的自立まで	一般化された平均との違い	隣近所で友達作り	他児との比較	友人からの受験の情報
287	幼稚園まで	社会にでて判断できるまで	他児との比較で「それが何」と思えない	本を信じない、自分の時間を	仕事つらい	子の鼻炎（少し）

（空欄は“無回答”）

これらを読みとっていくと、「子育て」の期間に関しては、母親によってばらつきが見られるものの、「育児」の期間については20人中17人が小学校入学をもって「育児」は卒業（終了）したと感じている。ここで、母親が考える「育児不安」の特徴の一つ目として、「育児不安」とは、子どもが乳幼児期である、ごく限られた時期に生じるものであり、その後の「子育て」における悩みや不安とは、一線を画していることがいえる。

では、実際に、母親たちの心配事や子育て上の困難さは、どのように変化してきているのであろうか。4年前の育児上の心配事の内容と現在の子育ての心配事との比較を表2-3からみていくと、その内容は様々であり、大部分の母親が現在でも何らかの困難や悩みを抱えている。すなわち、子どもを育てていく上で自ずと生じる「子育ての不安」としては今もなお継続しているが、「育児不安」という不安は解消あるいは減少しているということになる。ある母親が「子どもが小学校に入っても、高学年になっていったら勉強のことやイジメのことで悩むようになると思う（No.244）」と述べているように、今後は学年が上がるにつれて学力競争に代表される子育て競争へと、子ども自身も家族も巻き込まれていき⁽⁵⁾、母親たちの心配や不安は高まっていくであろうと予想できる。実際に、「現在の心配事」の中にも勉強・学習について心配しているケースが5ケース（No.80・No.115・No.172・No.210・No.282）見られた。それならばなおさらのこと、「育児」と「子育て」という言葉上の違いだけを問題とするつもりはないが、学齢期以降の子育てをしている母親の問題に比べて、取り立てて乳幼児を育てている母親の感情・意識が、「育児不安」としてこれほどまで社会問題視されるのであろうか。

2. 「育児不安」と「育児不安」へのアドバイス

「育児不安」として規定される「育児」の期間については前節で見てきたが、「育児不安」の特徴としては、母親自身にどのように語られるのであろうか。母親たちに対して、「お母さん自身が考える育児不安とは何ですか。お母さん自身にとって育児不安とは何ですか。」とたずねたところ、「育児不安」の特徴として、次のa～gがあげられた（一人の母親の回答に、様々な要因があげられているが、主に該当しているケース番号を記していく）。なお、全体の傾向については前出の表2-3を参照のこと。

小学生をもつ母親からみた「育児不安」

- a 母親の性格：No.8,18,155,172
- b 若い母親：No.145
- c 育児・子どもへの傾斜しすぎ：No.122,210
- d 専業主婦は暇だから：No.103,165
- e 他児比較：No.30,103,122,129,166,257,282,287
- f 情報過多：No.5,6,115,257,282
- g 母親の人間関係（母親の孤独）：No.18,30,80,145,244

以下、a～gについて、aとbをまとめて①母親の性格、cとdをまとめて②子ども・育児への傾斜、eとfをまとめて③他児比較、gを④母親の社会関係とし、「育児不安」と「現在、育児不安に悩んでいる母親へのアドバイス」について母親の声を載せ（複数の分類に該当するケースは、主に該当する方へ載せてある）、キーフレーズとなっている箇所を下線で示していく。

①母親の性格

母親自身の問題というのは、「母親の性格」や「母親自身の気持ちのもちよう」などと述べられているように、母親の内在的な特性を「育児不安」の特徴としているが、そこには、「育児不安」になりやすい特別な母親の性格というものがあるわけではない⁽⁶⁾。「子育てびっちょりで・・・」・「大人同士の付き合いが少ないから」とあるように、母親の閉塞感や孤立感との関連で語られる母親の特徴である。

No.8（パート勤務、3児、36歳）

*「育児不安」：

- ・自分は、（本当は言いたくないんだけど）ついつい、子どもに対して口うるさく言ってしまう。
- そんなときは、口うるさく言う自分も嫌だし、言うことを聞いてくれない子どもに対しても嫌になる。上の子は、何でもサッサとせずに丁寧に片づける（神経質）。でも、自分はパッパッとするのが好き。母と子の性格の違い、相性の違いで「育児不安」が生じるのかなと思う。

- ・社会的な（？）要因としては、前はアパートに住んでいたが、この地域は、一戸建て住宅が多くアパートは少ない。最初引っ越してきたときに、周囲の雰囲気（一戸建て多い）に対して、負い目みたいなものがあった。子どもどうしを見ていても、家に友達を連れてくる機会が増えるにつれて、狭くてかわいそうと思っていた。自分自身も、遊びに来た子どもから「階段はどこ？」とか「洗面所はどこ？（アパートでは流しで顔を洗う）」と聞かれて、気にしていた。狭くて、イライラしてた。

*アドバイス：

- ・誰でも、最初の子どもの時には神経質になってしまう。2人3人産んでみて、経験がものをいうことが多い。それなりにどうにかなるよ…（アドバイスにならないかな？）
あと、お友達、子どもがいる友達をいっぱい作るといいかな…
- ・子どもや育児に対する、ストレスを解消するゆとりの時間をもつこと。
やっぱり、イライラを解消できるお金と時間があれば、育児不安にならないよね。

No.18（専業主婦、1児、37歳）

*「育児不安」：

- ・2歳までは、子育てびっちりで、イライラしていた。シミ・しわ・白髪もあった。でも、「あと一年、あと一年」と思って、いい方に考えてきた。
- ・母親がイライラとストレスを繰り返すのは、自分の心を自由にできないから。そうした余裕をもつには、母親の大人同士の付き合いが少ないから。昔は大家族だったけれど、今は核家族で、孤独感がストレスになる。
- ・他児との比較にしても、母親本人の気持ち次第。理屈っぽく完璧主義で、あれしなきゃ、これしなきゃと思うと不安になる。
- ・自分自身は、不安がなかった。やっぱり、自分をしっかりもっていたからだと思う。情報にも他の子との比較にも惑わされなかった。子育ては、自分の小さかった時のことを思い出せば、習い事にしたって、自ずと詰め込まないはず。

*アドバイス：

- ・「完璧の壁」を打ち破ること。
- ・月に1度でも自分自身の時間をもつ。預け先の問題があると思うけれど、それぞれが見いだすしかない。

No.1 5 5 (パート勤務、3児、44歳)

*「育児不安」:

- ・その人(母親)の精神状態の病気。
- ・家族関係も関連があるとは思いますが、それよりも栄養のバランスが崩れているのだと思う。
イライラするときには、カルシウム不足など。(母親の実家が薬剤師のためか、あらゆる問題の根源を栄養・ビタミン不足で説明する)

No.1 7 2 (専業主婦、1児、32歳)

*「育児不安」:

- ・その母親の性格だと思う。生活の中で小さいことを気にする性格。
- ・いろいろな雑誌も出ているし、全くその通りにしなければという人だと、育児不安になる。
- ・子どもの方も、夫婦喧嘩などがきっかけ→それを察知して反抗→母親の言うことを聞かなくなる
→母親がイライラ。
反対に、例えば離婚して母子二人になれば、母親がしっかりしなければ→子どもも察知して
→子どももしっかりする。
- ・自分は、子どもも未熟児で産まれたが育児不安はあまり感じなかった。保健婦さんからも不安がないと言われた。

*アドバイス:

- ・自信をもって子どもに接する。
- ・すぐに楽になる。あつと言う間のこと。
- ・悩み…子どもが小さいときに、小さいことで悩むのも可愛い。

No.1 4 5 (在宅にて教材添削、2児、38歳)

*「育児不安」:

- ・「公園デビュー」の話を聞いても、若い母親がなるのかなと思う。
22・23歳で母親になって、自分のやりたいことと子育てとで焦りがでるのかなと思う。
自分は、29歳で母親になって、その前に遊びも一通りしてからの子育てだったから、子育ての最中は子育てに専念できた。
- ・母親と子どもと2人きりで外へでられないという現実があって、そんなとき夫が助けてくれると違う。他には、最近では、自分なんかも公共の場(プールなど)で小さな子どもを疎く思うことが

あっていけないなあと反省することがあるけれど、子どもが小さいときには、赤ちゃんに対する周囲の目が気になった。社会で赤ちゃんを見守る（子どもに寛容になれる）目が必要だと思う。

- ・ 子育ての経験がない、子どもに触れたことがないお母さんだと、赤ちゃん一人一人がすべて違うのだということがわからないのだと思う。自分は育児書に頼らなかったけれど、育児書を見るとかわいい赤ちゃんばかりが載っている。

若いお母さんで「自分の子どもは絶対正しい」と自慢して、自分の子どもの欠点をさらけ出せない母親がいる。そういう母親の子どもも、おかしい子が多いと思う。

②子ども・育児への傾斜

子ども・育児への傾斜では、「母親が一生懸命になると…」・「子どもばかりみていると…」・「頑張る母親…」とあるように、母親が一人で育児を頑張れば頑張るほどに「育児不安」が生じてしまうと説明している。

No.1 2 2（陶芸教室、2児、40歳）

*「育児不安」:

- ・ 母親が一生懸命やるとなってしまうと思う。
- ・ 他にも目を向けることが大切で、子どもばかり見ていると「育児不安」に入ってしまう。
- ・ 他の子と比較しても、不安になる。一人目の時は一人ずつ違うんだと思っても不安になったが、二人目からはなくなった。
- ・ 周囲の助言が必要。

公園へ行っても友達づくりにくい。「仲良し子ども館」⁽⁷⁾の廃止はよくないと思う。

「仲良し子ども館」を通して近所の同じ立場の母親と知り合えて、不安があっても、その人たちとしゃべるだけで気が紛れる。本を読むとかえって心配になってしまう

*アドバイス:

- ・ あっという間にすぎるよ…
- ・ 通わせている幼稚園のカラーによっても違ってくる（それを選ぶのは母親だけれど）

周囲のお母さんたちが、一緒に遊んで子どもを育てていくような、昔の長屋のような雰囲気だと、そういう仲間が近くにいると、かえって自分の親よりも安心できる。

自分も、第1子の時には専門家へ相談し、理想的（現実的でない）回答だった。

第2子の時には、リアルタイムで子どもの友人の母親へ相談していた。

- ・アドバイスくれる友人を近所にもつこと。

子どもを預けても安心できるような友人を…

No.210（専業主婦、3児、37歳）

*「育児不安」:

- ・ 高学歴の方が真剣に思いつめる。頑張る母親は、自分の全てが子どもへと向いて、その子のことだけになる。（そうなると母親も子どももつらい・・・）
- ・ 自分子どもには、あれもこれもと期待しすぎ。
- ・ 自分に余裕がないためになる。1人目→2人目→3人目と、時間的には大変だったけれど精神的には楽になっていった（余裕がでてくる）。
- ・ 自分の周囲のお母さんで、よくそこまで子ども中心でやれるなぁ…と思う人がいる。
- ・ 自分はある程度、晩婚だったこともよかったのだと思う。人生経験積んできたし…ヤングママは何も知らずに母親になっていた。

*アドバイス:

- ・ 子どもだけに集中しないで、自分だけの時間をもっと違うことに使う。

No.165（専業主婦、2児、39歳）

*「育児不安」:

- ・ サークルや親戚の子など、いろいろな子どもを見た方が育児不安は減る。自分の子どもをもつ前に、いろんな子どもを見ていないと、子どもが異星人に思える（結婚前は保母をしていた）。
- ・ でも、家の中で1対1でいれば、子どもを知っていても大変。みんなと話して、「私もー」と聞いてホッとする。
- ・ 家族関係では、夫が不在の休日にも子どもたちを連れて出かけたり、お金や時間を工夫して自分でも頑張っているのに、夫が自分の頑張りを評価してくれないことが不満。
- ・ 現在の心配ごとを考えると、やっぱり暇だから不安が生じるのかなあと思う。

小学校からの帰りの時間が少し遅いと気になるが、これも私が働いていて、子どもは学童保育に何かあったとしても帰っているものだと思えば、帰宅の時間は気にならないはず。家で、子どもの帰宅を待ったりしているから、気にしてしまう。

③他児との比較

この「他児との比較」は、①～④の分類の中でも、多くの母親が「育児不安」の特徴として述べていたものである。「横の人と一緒にないとダメ」・「一つ一つの部分を比較して気にしている」・「こうゆう育児方法じゃないとダメ」・「一般化された」・「平均化された」とあるように、ごく近くの他の子どもと、あるいは「平均」との比較をすることが（してしまうことが）、「育児不安」の原因であったり結果であったりすると答えている。

No.103（専業主婦、2児、31歳）

*「育児不安」:

- ・保健所はなんやかんや言っても、枠にはめようするから不安になる。
- ・みんな、横の人と一緒にないとダメ。何かが流行るとそれをもっていないとダメ。

特に今は子どものファミコン。

親にしても個性的な人ほど嫌われる→他の人と合わない→不安へ。

男の人は、あまり他人と比べない。女の人は、特に主婦は暇だったりすると、外へむけて比較する。

*アドバイス:

- ・母親が社会へ出ようと思っても出られないようなサービスが悪い。自分は、昔、保育所のことで区役所の窓口とけんかした。
- ・保育所に限らず、美容室にしても子どもを連れて母親どうしで行けるところが少ない。
- ・自由に預かってくれるところがほしい。半日で千円以内で。
- ・公園デビューについては、子どもが楽しんでいけば、ムリしてデビューすることないよ。

No.129（在宅生活雑貨販売、2児、39歳）

*「育児不安」:

- ・今は、核家族の時代だし、聞いてくれる人がいないことが不安になっていると思う。
- ・育児不安というのは、今思うと一つ一つが「チェ」と言うぐらい小さな、くだらないことだった。けれど、当時は、すごく他の子どもが気になった。育児雑誌もよく読んだし、公園へ行っても他の子と比較していた。他の子の方が早く歩くようになったとか、積み木を高く積めるとか、もう少したつと字が読める・書けるとか……
- ・今思えば、「それがどうした……」という感じなのに、当時はムキになって、自分の子どもの自慢を試みたり、気にして落ち込んだり……

- ・それに、自分の子どもに対して、「自分の子どもは特別だと思いたい」みたいな期待はあった。それで、他の子どもより、ちょっとでも早くにできることがあれば、自慢してみたり…母親自身が確認したいという気持ち。

それだけに、第1子に自閉的な傾向が現れたときにはショックが大きかった。

- ・子どもの全体像でみれば、子どもは、みんな輝いているのに、一つ一つの部分について目盛りを用いてはかって、比較して、気にしている。
- ・しかも、こうした悩みについて、それを後ろ盾してくれる人がいなかった（当時は、夫も親戚も友人も）から、孤独な状況で子に接して、私一人で子育てをやっているという気持ちになって、神経が過敏になったり、気に病んでいたりした。
- ・今は、そうした後ろ盾の必要性を感じているから、若い友人の子どもも1～2時間みてあげて、友人に買い物に行く時間を作ってあげたりしている。
- ・いまの社会は、全体的に「人に聞きたい」と言う要求が高いと思う。→でも聞けない。
- ・何でも、育児不安でも大げさにとらえすぎていると思う。
商業ベースに乗ってるなあ…という感じ。

***アドバイス：**

- ・お母さん達は、家に閉じこもらないで、どんどん外へ出てくるべき。
- ・他人と関わるということが、母親にとっても子どもにとっても、影響が大きい。
- ・苦手な他人もいると思うけれど、人を選んで、怖がらずに出ておいで……

No.166（専業主婦、2児、39歳）

***「育児不安」：**

- ・家の中だけで見ていた我が子が、集団の中でどうか？で生じる。

他の子を見ていて思うのは、一人っ子はやはり恵まれていると思う。その子が幼稚園へ行って、その子とは会わない子もいる集団の中へ、家から外へ出たときに親子ともにどうなるか、が一つの節目だと思う。

***アドバイス：**

- ・あっという間にすぎてしまうよ。
- ・上の子が幼稚園に行っている時期には、下の子に手がかかって、よく見てあげられなかった。けれど、後から園長先生に「それは不安がなかったから、ほおっておけたのでは…」と言われて、なるほどなあと思った。

No.257（在宅化粧品販売、1児、同居、48歳）

*「育児不安」:

- ・今は何でも、社会の風潮やマスコミの言葉を自分の生活に当てはめたがる。
子育てにしても、「こうゆう育児方法でなきゃだめ」と思いこんでしまうために、育児不安はおきる。
- ・今は、何を頼りに、どこに身をおいて生きていったらいいのかわかりにくい。
お金を出せば何でも手に入る分だけ、我慢ができない時代になっていると思う。
- ・子育ての時期は、社会的な活動もできないし、視野の狭ばるとき。
今思えば、「何であの時はあんなふうに思っていたんだろうと…」
- ・けれど、子育てしながら活動していればいいのかといえば、それはそれで大変。
忙しくて、自分の子どもを見つめる時間もなくなってしまうし…
でも、それ（何か活動）をしていないと不安になってしまうんだと思う。
- ・自分は、公園で知り合えたお母さん達が自分と同じ考え方の人だったので、恵まれていたと思う。

*アドバイス:

- ・時が過ぎたら笑えること
- ・年を取ってくれば、おかしさに変わるようなもの

No.282（フルタイム勤務、2児、40歳）

*「育児不安」:

- ・自分の思い通りに行かないと落ち着かず不安になる。特に子育ての場合、一般化された「こうした方がいい」とか、平均された「1歳児では～」といったものがあり、それに合致しないと不安になる。子どもにそってではなく、情報に照らし合わせて不安になっていた。
現在の心配事も情報に振り回されていると思う（わかっているが振り回される）。

*アドバイス:

- ・友達を隣近所につくること・・・ちょっとしたきっかけでもいいから、人をたくさん求めて話に行くこと。
- ・自分の悩みと違う視点からの人と出会くと、一般化された情報とは違っている。
- ・周囲の人が「そんなことないよー」と言ってくれば、助かる。

No.287（フルタイム勤務、2児、38歳）

*「育児不安」:

- ・ 今思えば、あのときの不安はわからない。
- ・ 他の子と比較（例えば、はやくしゃべれるようになったとか歩けるとか）しても、「それが何？」って今だと言える。これは、自分で納得するまでしょうがないのかな。
- ・ でも、反対に他の人と比較して、他の人でも「こうゆう人があるんだ」とわかって、ホッとしたこともあった。
- ・ テレビで、子だくさんの家庭を見ると、気にしない母親だからできるんだなと思う。
反対に、子どもが少ないと子どものことが目に入りすぎて、目が行き過ぎてしまう。

*アドバイス:

- ・ 本を信用しない（特に、叱らないでのアドバイス→無理!）
- ・ 子どもばかり見ないで、自分を取り戻す時間を。24時間一緒にいると、不安になる。
子どもと離れていたって、愛情はかけられる。
- ・ びっしり専業主婦をしている人は、どうやってコントロールしているのかと思う。

No.5（パート勤務、1児、同居、37歳）

*「育児不安」:

- ・ 今思えば、へのかっぱという感じ。
子どもも一個の人間で、赤ん坊でも個々の性格がある。だから、いくら育児書読んでもその通りになるわけがないのに、それがわからずに、不安が生じる。
「人は人、家は家」という考え方が、自分の場合は年をとってからの子どもだから、子どもをもつ前に、いろいろな経験を積んできてわかったのだと思う。
- ・ 幼稚園へ行くと、母親同士の付き合いが広がって、情報交換もできて不安は少なくなる。
幼稚園へ行く前は、友人を作りにくく、自分で得た以外の情報は入らなかった。

*アドバイス:

- ・ 友達を作ること
- ・ 隅から隅まで、本を読んで信じないこと。人と話すと「こんなものだ」と思える。
- ・ 若い母親を見ていて、何かが欠けていると思う。自己中心的で他人のことを考えない（地下鉄の中でのマナーなど）。

No.6（専業主婦、2児、36歳）

*「育児不安」:

- ・今思うと笑ってしまうことが多い。
- ・育児の情報が多し。どれがよくて、どれが悪いのかわからない。実際に自分の子どもに対して、それを自分で選択するのは難しい。
- ・社会的影響も大きい。小学校1年の子どもに流行っている「ストーカーごっこ」。
- ・子どもにも情報が誇大化して入っている。

*アドバイス:

- ・細かいことを心配してもしようがない。育児に神経質にならないで。育児雑誌は、細かいことばかり。自然に、情報に振り回されないで。

No.115（パート勤務、2児、36歳）

*「育児不安」:

- ・本当に小さなことでも不安になると思う。
- ・自分の親の世代だと子どもたくさんいたが、現代は子どもが少なし。そこへ情報が多くて、何歳までに何々をと早期教育に駆られる。
- ・第1子は人見知りで、今でも人に慣れないところがあるが、どんどん年が経てくれば（成長して行けば）普通になっていく。
- ・今は、子どもの将来が見えないから、勉強不安がある。同様に、子が小さいときも先が見えないから育児不安になっていた。
- ・周囲（いとこや親戚）に同じ環境の人がいないため、先が見えない不安がある。

*アドバイス:

- ・幼稚園の時に、他の母親から相談されたことがある。「何でそんなことで悩むのかな」と思った。下の子が母親にまわりついて母親の時間がないという相談で、アドバイスのしようもなく「そんなものだよ。」という返答をした。

④母親の社会関係

母親がひとりで育児を担っていくうえでの孤立感や閉塞感というのは、「育児が24時間体制」の仕事であるという特性をもち、「子どもを連れて行ける安全な場所」が十分に保障されていない現状では、自ずと生じてくるものである。したがって、「育児不安」が

母親の社会関係のあり方によって特徴づけられるのは、現代における育児の必然性であるともいえよう。ここでは、3つのケースしか載せていないが、前出の他のカテゴリーに乗せてある母親たちの「育児不安」特徴やアドバイスからも、「育児不安」と母親の社会関係の関連が読みとれる。また、「①母親の性格」の箇所では指摘したように、この「④母親の社会関係」は、「育児不安」の直接の原因であると同時に、他の①～③を通して「育児不安」を特徴づけているものであると考えられる。

No.30（専業主婦、2児、32歳）

*「育児不安」:

- ・ 話す、打ち明ける人がいなかった。
- ・ それに、他の子ども気になった。幼稚園の時に始めた公文も周囲の子どもよりも読み書きが遅くて、小学校へ行って困るかなと思って始めた。

注) 上の子が、幼稚園へ行って母親のネットワークも広がったが、その広がりはいささか小さい。

現在も、子どもの学校のことや子育てのことで、何かの時にどこへ相談したらいいのか、子どもを連れて行ける集まりなど、情報が全く入ってこないとのこと。

*アドバイス：一人で悩まないで・・・

No.80（パート勤務、2児、同居、35歳）

*「育児不安」:

- ・ 不安って言えば、子育ては全て初めてのことから、全部が不安。
母親はどうしていいかわからない（データ・資料がない）→誰に話していいかわからない（特に熱出したり、吐いたりした時）→夫にも知識がないとムリ。
- 注) 母親は、一人での子育てで育児不安になり、夫方両親と同居し、現在に至る。
- ・ 育児書も実際には意味がない。
- ・ やはり、母親の孤立とストレス。そのストレスは、社会的なストレスだから社会的に発散するしかない。
- ・ 現在なら、経験を通して、新米ママにも教えられる。

*アドバイス:

- ・ 友達増やして、情報集める。
- ・ 自分の場合、公園デビューは初めての人同士だったので、障害もなくためになった。

No.244（専業主婦、2児、32歳）

＊「育児不安」：

- ・私にとっては、子どもの病気だった。子どもが健康なときには自分も大丈夫だった。

育児は24時間体制だから、自分の時間がもてれば…

注）前回の調査でも、団地のネットワークでいじめに遭う。

ここへ越してきてからも、子どもの病気の時に、近所の協力が得られず、他人とは一定の距離を置いて接している。

- ・情報について…私は家にこもるタイプで、育児書も何冊も読んだ。そのときはなるほどと思うけれども、でもそのようにはできない。結局は自分のできる範囲で…。

- ・公園デビューは、私の時にもあった。今思えば、他にも遊ぶところはたくさんある。

親同士のサークルもいいと思うが、作れるかが問題。

親の中には、自分の子どもの悪いところは見て見ぬ振りをする自分勝手な人が多い。

そういう人に限って、自分が被害を受けたときには、文句を言ってくる。

＊アドバイス：

- ・時が解決してくれる。母親のモヤモヤの解消は、母親自身や周囲の努力じゃない。

- ・子どもの成長を待つしかないけど、また子どもが大きくなったらなつたで、勉強面やいじめの問題が生じてくる。

- ・行動派の母親は別だけれど、小さい子がいる母親は、どうしても家にこもってしまう。そういう意味では、もっと子どもを連れて行ける安全な場所を提供してほしい。公園にしても自転車乗り入れ禁止で、でも、道路で自転車の練習をさせるのは危険だった。

公園で練習していたら、他の母親の目もあるし…

こうした母親たちの意見は、先行研究において分類・構造化された「育児不安」のどこに位置するのであろうか。「母親関連—子ども関連」の軸で見ると、子どもの具体的な発達上の問題や育児のやり方がわからなかったために生じる不安よりも、子どもをもっている・育児をしているために感じる「母親の不安」が多く、その内容も、一定の範囲内では子どもの状態に左右されないものである。また、「健康的な不安—積極的対応の必要な不安—医療的対応の必要な不安」の軸で見ると、一部に医療的対応の必要な不安を取り上げている母親（No.155）がいたが、大多数が「健康的な不安」を問題としていた。

それらはまた、「現在、育児不安に悩んでいる母親へのアドバイス」からも読みとるこ

とができる。どの母親にも、「医者・保健婦に相談すべき」といった専門家の対応を必要とするアドバイスは見られず、「育児不安」解消のためには、母親が「自分のための時間をもつこと」や「本や情報に振り回されない」ことが大切であり、具体的には、「外に向かって出かけていく」ことや「育児仲間や友人のネットワークを広げる」ことであるとしている。しかし一方では、「育児不安」とは、母親や周囲の努力では解消しうるものではなく、「時が解決」してくれるものであるという認識もみられる。

いずれにせよ、母親自身からみた「育児不安」の性格は、母親自身に関連した不安であるが、その背景には母親の希薄な社会関係があり、他の子どもとの比較や育児だけに傾斜していくことの中から生じるものである。しかし、その深刻さから言えば、多くが、「たいしたことないもの」であり、その解消も専門家対応ではなく「ネットワークづくり」や「時が解決」に集約されている。

第3節 「育児不安」の解消過程

これまでみてきたように、母親が問題とする「育児不安」とは、子育て全体の中では子どもが乳幼児にある（育児期の）母親の健康的な範囲での不安であった。ここでは、母親たちの、これまでの「育児不安」の解決策を振り返り、どのような援助が母親たちの「育児不安」を「たいしたことないもの」へと感じさせるにいたったのかを考察していく。これまでの先行研究から、「育児不安」に関連する要因として、「夫の協力や理解」・「母親の社会的な活動」・「母親のネットワークの充実」などがあげられており⁽⁸⁾、それらは「育児不安」解消の手だてともなりうる。その中からここでは、母親の孤立化・孤独化が問題となっていることから母親の社会関係を中心に考察していく。

母親に育児上の悩みや不安が生じて、同じように育児をしている母親と話し合うことで、その不安は小さく、あるいは解消される場合も少なくない。そのことは、前節において母親たちの「現在^⑨育児不安^⑩」で悩んでいる母親たちへのアドバイス^⑪として、「友達・仲間作り」が多くあがっていたことから言える。4年前の調査においても、育児の中で生じてきた様々な問題について、自らのネットワークを広げて、その中で解決していった「ネットワーキング」タイプの母親たちとは対照的に、多くの問題や悩みが解決されずに先送りされることが多かった「問題未解決」タイプの母親たちが存在していた。「ネッ

トワーキング」タイプの母親の特徴としては、「母親の不安」をある程度抱いているが、ソーシャル・ネットワークは充実しており、サポーターも夫や親族に限らず自らの友人で構成されていた。反対に「問題未解決」タイプの母親は前回の調査では4ケースが該当したが、その特徴は、「母親の不安」が高く、ネットワークも小さい、また、サポーターが夫や親族によって占められていた（第1章参照）。今回の調査に応諾してくれた母親の中には、前回調査での「問題未解決」タイプの母親が2ケースおり、その母親たちがどのようにして「育児不安」を解消していったかについて検討していく。

最初のケースは、当時の居住年数が2年目で、地域でのネットワークが成立していた（と母親自身は思っていた）が、第2子の出産・育児で家にこもることが多くなったのを契機に、孤立してしまったケースであった。4年前の状況について、母親のもっているネットワークを中心に記す。

No.244

[夫：37歳（団体等職員）、本人：32歳（専業主婦）、子ども：6歳（男児）、4歳（男児）]

～4年前の状況～

- ・居住年数：2年、市営団地、核家族、年収:300～500万円未満。
- ・親族のネットワーク：自分の母親、夫の母親は、ともに札幌から100km以上離れた道内に住んでいる。お盆やゴールデン・ウィークなど年に2・3回、子どもの顔を見せに帰っている。自分も夫も父親は幼いときに死去しており、いない。
兄弟は、姉が3人、弟が1人いる。姉1、姉2は市内に住んでおり、姉3は実家近くに住んでいる。姉1～3とは、個人的な悩みも相談でき、子連れでの行き来もある。最近、姉に下の子が生まれたので、出歩かない。
- ・Personal ネットワーク⁽⁹⁾：実家に帰ると必ず合う友人（図2-1⁽¹⁰⁾中Cさん）が1人いる。
- ・Maternal ネットワーク⁽⁹⁾：同じ団地内に数名おり、以前はお互いの家に行き来して遊ぶこともあった。今は、1名だけ（Aさん）、個人的な話もでき、上の子を病院（アトピー）に連れて行くときに、下の子を見てもらっている。この友人は頼りにしているが、裏切られる。
- ・家族ぐるみの付き合い：子どもが生まれる前はあった。母親は、家族ぐるみでつき合える友人がほしいと思っているが、夫の仕事のスケジュールが平日休みなので難しい。
- ・地域の環境：市営住宅に住んでおり、同じ建物内に同年令の子どももたくさんおり、見かけ上は地

域のネットをもっているように見えるが、第二子を出産して家にいる間に、グループから外されていた。親同士が仲良くならなければ、子ども同士も仲良くなれないと思うから、新しい友達をつくらなければならないと思っている。親族ネットは、姉3人と実母をもっているが、姉も子どもを出産したばかりで動けず、それよりも団地からの疎外感のダメージが大きい。

- ・育児以外のストレス：夫には、子どもともっと接してほしい。休みの日も家でゴロゴロしている。夫も父親のモデルがなく、どのように接していいかわからない。子どもも母親にしかたつかず、悪循環。
- ・母親の趣味活動：やりたいことはあるが、何もしていない
- ・サポーターとして支えになった key persons：姉1、姉2、実母
- ・嫌な思いもさせられる人：近所全般、他には夫
- ・母親が支えとなってあげている人：夫

この母親にとって4年前の「育児不安」は、子どもが病気がちであった状況で、親族の実体的なネットワークは利用できず、夫や地域でのサポートも得られなかったことにあったが、それをどのようにくぐり抜けてきたのであろうか。

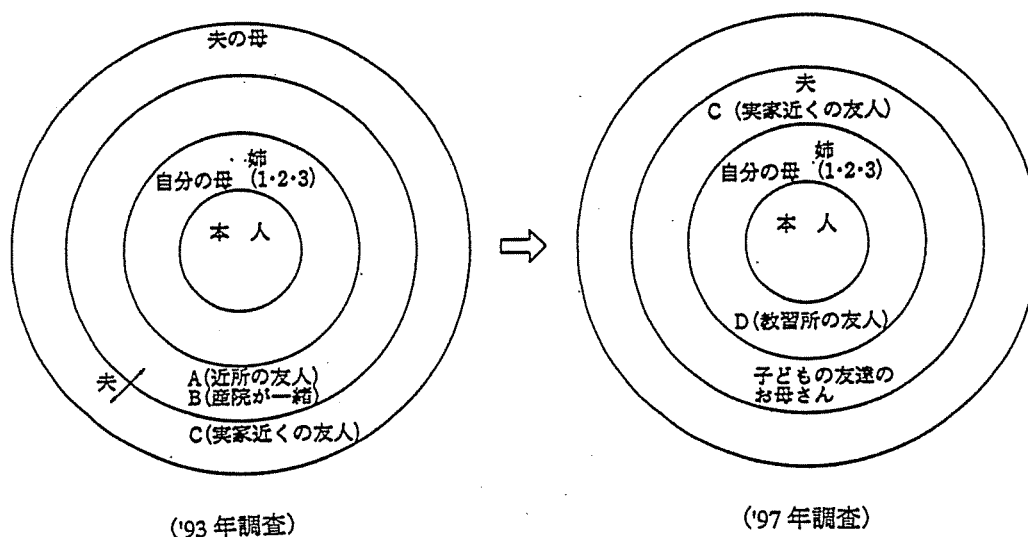


図2-1 母親のもつネットワーク (No.244)

～現在の状況～

- ・前回調査からの、生活上の大きな変化：3年前に一戸建て住居（持ち家）へ転居。
- ・母親のネットワーク（図2-1⁽¹⁰⁾）：前回と比べても、ネットワークはさほど広がっていない。以前の母親と産院が一緒であった近所の友人（Bさん）は、図からは外され、新しい近隣での Maternal 友人が書き加えられている。また、Personal 友人としては、教習所で知り合った友人（Dさん）が、第一円に加わっている。
- ・近隣について（母談）：前回、団地での関係でひどい目にあっているのもう、心を開いて友人を作る気はない。学生時代と違って、大人になってから本当の友人は無理かなとも思う。ここへ引っ越してきてからも、私がダウンしたときに、子どもを病院へ連れていけず、やむなく隣の人に頼んだ。でも、「明日はどうするの？」といった、あちらからの継続的な声かけもなく、自分としても頼みにくくて頼めない。

今は、車の教習所で知り合った年上の友人と電話でよく話す。お互いの子どもの年齢も違っていて、かえってつきあいやすい。彼女からのアドバイスもあり、近所だとかじれたときのことを考えると大変なので、深くつきあわない方がいいと思う。

また、専業主婦をしていると、近所の人から「日中ヒマで何をしているの。」とか声に出して言われる（それもあって、ここでも引きこもりがちとなる）。自分としては、もちろん、経済的にも大変で働こうとは思っているけれど、最近まで姉の子どもを預かっていたりで、最近やっと、ホッとしている所で、今はボーとしていたい時期。確かに何もしていないけれど、今の私はこの時間を楽しんでいるので、他の人に色々と言われたくない。

- ・夫について（母談）：夫は、今も非協力的。子どもが小さいときには、私も夫に対して要求を多く出した。今は、私が諦めた分、夫婦関係はいいのかも・・・
- ・現在の子どもについての悩み：ない。
- ・現在の子育て以外の悩み：夫の収入が減って、経済的に大変。

このケースの場合、母親を悩ます地域での環境は、転居しても生じてしまい、地域における子育て仲間・友人はいない。教習所で知り合えた Personal 友人が、愚痴を聞いてくれているが、あとは、母親自身が自分で精神的に解消するしかなかった。夫の要因についても、この4年間で夫が協力的になったというわけではなく、母親が「諦め」という形で解消している。

ここで、「育児不安」のサポーターとしての「夫の要因」についてふれておく。4年前の調査において、「育児不安」に夫の要因が関連していたケースは、このケースを含めて No.165・No.172・No.244 の3ケースが該当した。No.165 と No.244 は、夫の協力が得られないケースであり、No.172 は夫は協力的であるが母親の夫への評価が低いケースであった。これら3ケースともに、夫の実際の協力や関わりには、4年間で変化が見られず、現在も No.165 と No.244 の夫は、「子育ては母親任せ」と非協力的であり、No.172 は自分の子どもだけではなく近所の子どもも含めて子守をしてくれるほどに協力的である。しかし、母親の夫に対する評価についてみれば、No.165 が「夫の資格のための勉強が終わって、家の中の緊張感も減ったから、その分（4年前に比べて）いいかなと思う。」とあり、No.244 ケースが「夫は、今も非協力的。子どもが小さいときには、私も夫に対して要求を多く出した。今は、私が諦めた分、夫婦関係はいいのかも…」とあるように、母親自身を納得させる形で、また No.172 は、見合い結婚で最初は愛情がわかなかった夫に対して、生活していくとともに夫のことがわかってきて、結果として3ケースともに、夫への不満としてはあがってこなくなっている。こうした母親たちの評価は、第1章における「夫の協力の実際と母親の認知」からも読みとれる。すなわち、夫たちの低い協力度と夫の忙しさに対する母親の認知、そして3割程度の母親が「夫をあてにしていない」という結果である。就業システムの改善も含めて、男性の家事・育児への価値観を再評価してもらうという意味では、「育児不安」における「夫の要因」を強調することは重要であるが、当事者の家族・母親にとっては、未だ「育児不安」解消のための有効な要因とはなっていないと思われる。

さて、「問題未解決」であった母親の2つ目のケースは、当時、引っ越してきたばかりで地域から孤立していたケースである。

No.30

[夫：34歳（民間勤務）、本人：32歳（専業主婦）、子ども：3歳（男児）、1歳（男児）]

～4年前の状況～

- ・居住年数：0年、集合住宅、核家族、年収：500～700万円未満。
- ・親族のネットワーク：自分の両親は札幌から100kmを越えた道内に住んでおり、ゴールデン・ウィークやお正月、お盆に帰る程度で、用がないのに行くという感じではない。

独身の兄が、親と同居しているが、個人的な話はしない。子どもをもっている妹もいたが、現在は、死亡していない。本ケースの母親が妊娠中は、この妹の妊娠期を見て学習していたので、助かった。夫の親は、札幌から 100 km 以内の所に住んでおり、月に 1 回程度、夫の親が寂しくない程度には合意に行っている。

- ・ Personal ネットワーク：昔の職場で知り合った友人（K さん）とは、今でも続いており、その人には個人的な話もできる。前に住んでいた所での友人（Y さん）とは、今は手紙のやりとりをしている。日常的に交流できるネットワークはない。
- ・ Maternal ネットワーク：団地の隣人とは、公園で話したりするがお互いの家に行ったりすることはない。「仲良し子ども館」がいいよ、というアドバイスをもらって参加したが、その結果（ママさん先生の活動が辛くて）流産した経験もある。
- ・ 家族ぐるみの付き合い：夫の仕事関係の家族とは、たまに一緒にご飯を食べる。
- ・ 地域の環境：大きな市営団地、居住してきた年数も浅いためか、公園ジブシーの経験あり。公園に行っても話しかけても、グループができていて入れてくれなかった。近所の人、対個人では挨拶をしてくれるが、集団となると知らん顔をされる。子どもも、部屋でテレビ付けの生活となり、話し言葉が不明瞭。本児に関しては、来年から幼稚園を考えている。つけ
- ・ 育児以外のストレス：姑に対して不満あり。おもちゃをたくさん送ってきて部屋がおもちゃであふれていて、片付かない。
- ・ 母親の趣味活動：とくにない。
- ・ サポーターとして支えになった keypersons：夫、前の住居での友人、昔の職場の同僚。
- ・ 嫌な思いもさせられる人：姑、近所付き合い。
- ・ 母親が支えとなってあげている人：昔の職場の友人。

この母親にとっての「育児不安」の要因は、新しい環境での地域からの疎外感と、姑の問題である。子どもの言葉の状態は、室内で母親と 1 対 1 で過ごす時間が多く、子どもにとって他者からの話しかけよりも、テレビ・ビデオを相手に過ごす時間がかなり多かった（朝から晩まで）ためと思われる。また、母親自身、他の子どもと比較して、周囲と同じレベルにしたいという気持ちがあった。夫は仕事が休みの時や、母親が病気の時には、子どもの面倒を見てくれて、母親の夫への不満はない。

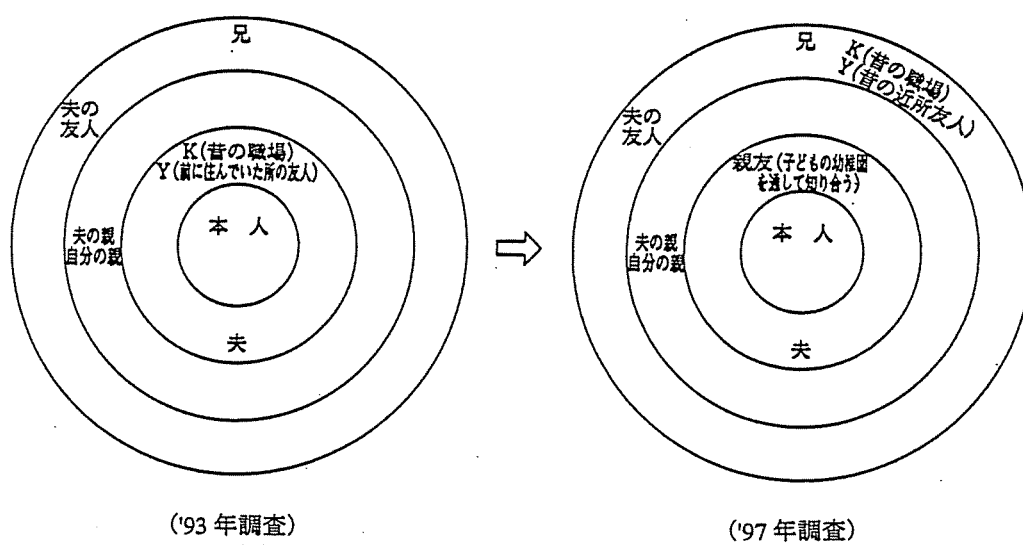


図 2-2 母親のもつネットワーク (No.30)

～現在の状況～

- ・ 前回調査からの生活上の大きな変化：第2子の出産。
- ・ 母親のネットワーク（図2-2⁽¹⁰⁾）：前回と比べ、職場の友人 Kさんと前に住んでいたところの友人 Yさんが第3円へと遠のく。第1円には、新たに上の子の幼稚園を通して知り合えた友人が加わる。
- ・ Maternal 友人について（母談）：第1子の年齢が一緒に、第2子も似たような年齢にある友人が1人だけできた（インタビュー中にも友人から電話が入り、話し込んでいた）。ただ、その友人も子どもが病気がちなため、大変だと思う。
- ・ 近隣について（母談）：仲のよい友人としては、上記の友人だけれど、年月とともに団地内でも、それほど深くはないが友人はでき、前のように嫌な思いは減った。
- ・ 現在の子どもについての悩み（母談）：上の子は、友人関係で大丈夫か心配。あと、強いて言えば、朝から晩までよくしゃべること。下の子は喘息。

上の子は、周囲の子に比べて読み書きが遅かったのも、小学校へ行ったら大変だと思い、小学校へ行って困らないようにと「くもん」をはじめた。プールも、母親自身も「かなづち」だし、子どもも幼稚園の時から泳げなかったのも、小学校へ行ったらプールの授業があるので、2年前から始めた。

自分では、子育ての情報をどこから手に入れてよいのかわからず、困る。将来的に上の子の友人関係とかで困ったときに、どこへ相談したらいいのかわからない。

- ・ 子育て以外の悩み（母談）：おもちゃを送ってくる件については、夫から姑に言ってもらって解決したが、姑のことで悩みはある。けれど、姑も夫を頼っているのも、こちらから行くようにしている。

このケースは、前回転居したばかりで地域から孤立した状態にあったが、年月とともに団地内の人間関係は緩和され、また、同年齢の子どもをもつ母親と知り合えたことが、母親の孤独感を払拭している。しかし、他の子と比べて「先取り」してしまう不安・心配は現在も生じている。この「不安」に対する解決は、Maternal 友人をもっても解決されず、育児産業が提供するサービスを購入することで解決を図ろうとしている。

ところで、先の No.244 ケースと No.30 ケースのネットワークを比較してみると、ともにコンボイの図における第1円に新たな友人が加えられ、その友人が現在の母親の Key Person となっている。No.244 は、「お互い子どもの年齢も違って、かえってつきあいやすい」という言葉にあるように、あえて Personal 友人をもつことによって同年齢の子をもつ親同士のストレス（他児との比較）は軽減されるが、日常的に子どもを預け合ったりする

関係は築きにくく、子どもの病気の時には手だてがない。一方、No.30 ケースは子育て上の小さな出来事についても意見交換できる Maternal 友人ができて、母親の孤立感を乗り越えさせてくれたが、Maternal 友人をもっても解決できない、また時には Maternal 友人をもつことで新たに生じてしまう不安も存在していた。

さらに、両ケースに共通している解決策として、専門家がかかわってアドバイス・解決した経緯は見られず、母親自身のやりくりだけで乗り越えてきたことがあげられる。結局のところ、「育児不安」の解消としては「育児の仲間や友人をつくって、くよくよ悩まない」に還元され、その「仲間づくり」に対して公的サービスが提供しているプログラムは利用されてはいない。これまで見てきた不安の「解消」過程は、単なる「解消」であって根本的な「解決」ではないことがわかる。反対に、一定の階層の母親に顕在化されている「育児不安」とは、「友人・仲間をつくること」や母親の「気のもちよう」で解消される程度のものであるともいえよう。では、なぜ今「育児不安」として騒がれ、何が母親たちを「育児不安」へと追い込んでいるのであろうか。

第4節 他児比較と早期教育

第2節における母親からみた「育児不安」の性格においても、第3章における「育児不安」の解消過程においても、母親の社会関係と他児・他者との比較が、「育児不安」を考えていくうえでの鍵となっている。そこで本節においては、「夫」や「母親のネットワーク」をもっても、問題として残されてきた「他児との比較」を通して「育児不安」を考えていく。

ところで、先の第3節で述べられている「育児不安」に関する他児比較の記述に注目してみると、他児比較のもつ二面性と、その比較にも、段階があることが読みとれる。

他児比較の二面性についていえば、「サークルや親戚の子など、いろいろな子どもを見た方が育児不安は減る。自分の子どもをもつ前に、いろんな子どもを見ていないと、子どもが異星人に思える。(No.165)」、「自分の悩みと違う視点からの人と出会くと、一般化された情報とは違っている。(No.282)」、「他の人と比較して、他の人でも『こうゆう人がいるんだ』とわかって、ホッとしたこともあった。(No.287)」とあるように、自分や子どもの子育てに対する安堵感を与えてくれている一方で、「横の人と一緒にじゃないとダメ。

(No.103)」、「他の子どもが気になった。…ちょっとでも早くできることがあれば、自慢してみたり…母親自身が確認したいという気持ち。(No.129)」、「家の中だけで見ていたわが子が集団の中でどうか？(No.166)」、「一般化された『こうした方がいい』とか、平均化された『1歳児では～』といったものがあり、それに合致しないと不安になる。子どもに沿ってではなく、情報に照らし合わせて不安になっていた。(No.282)」のような他者との差異を通しての焦燥感をも、与えている。前者の安堵感が、ある一定の他者（他児）との比較で落ち着くものに対して、後者の焦燥感については、エスカレートしていく傾向がある。他者との差異が不安をもたらすにも関わらず、その差異を探すかのように、他者（他児）と比較をしてしまうのである。

また、他児比較の段階についてみれば、情報収集としての段階、自分の子どもや子育てを点検・評価する段階、そして、他児比較の中での優位性を求めて奮闘する段階というように、他児比較が段階的に拡大していく特徴が見られる。しかし、いずれの段階においても、そうした「他児比較」を「育児不安」へと結びつけてしまう要因としては、母親の孤立が考えられる。この孤立感は、育児サークルや Maternal 友人ができることで癒されるといった孤立感とは異なっている。他の人や他の子どもと違うということが、「あたりまえ」のことと思えないのは、母親個人が他の母親たち（ひいては、一般化された基準）との対立関係の中に存在しているからである。だからこそ、「育児不安」の解消においても、前節で見たように、育児・教育産業が提供するサービスを購入することに傾斜していくのであろう。

ところで、こうした「他児との比較」と「育児不安」、そしてその解決策としての「早期教育」との関連は、4年前における質問紙調査においても表れていた。他児との比較が頻繁である母親ほど、「育児不安」得点は高く、さらに、その「他児比較」は、母親が抱く子どもへの期待とも関連していた。当時、3歳児をもつ母親が就学前までに「習わせた」習い事を記してもらったところ、「他児比較」をする母親の方が、希望する習い事の数が多かったのである。ここから、母親の発達期待（希望の習い事の数）が、他児との比較を通して、「育児不安」へと関連していると推測された（第1章参照）。

また、早期教育に関しては、その可能性に懐疑的・否定的な立場からの警告⁽¹¹⁾が言われているが、ただ反対するのではなく、それらの可能性や問題点について慎重に吟味する必要性⁽¹²⁾や、日本の幼稚園教育と小学校教育との特性の問題⁽¹³⁾も指摘されており、その評価については慎重にならなければならない。しかし、今回の調査において子どもの習い

事の現状を見ていくと、20 ケース中、17 ケースが何らかの習い事をしていた（表 2-4）。これは、4 年前に習い事を始めていたケースが 5 ケースであったことと比べると、この数年の増加は著しい。しかもそれが、単数ではなく、複数の習い事を実施していることが特徴としてあげられる。このことは、先にあげた 4 年前に実施した 291 人のデータからも示唆されている。4 年前に質問紙調査においてたずねた「子どもに現在どういう習い事をさせているのか」、また「就学前までに何を習わせたいと考えているのか」の結果、スポーツを始めとして、学習や通信教育、その他の幼児教育を含めると 30.2 %の母親が 3 歳の時点で何らかの習い事を始めさせており、それが「就学前までに習わせたい」になると 80.1 %へと一気に増加していた（表 2-5）。

本章の「調査対象」の箇所（P.77）でも述べたように、今回の対象者となった母親たちは、保健所での 3 歳児健診に出向き、アンケートを送付し、縦断的な面接調査にも応じてくれた母親たちであり、すでに「育児不安」を意識している母親たちである。しかし、それ以前に、客観的には子どもの発達や子育てに問題があっても意識にのぼらない（意識している余裕がない）という母親たち、あるいは病院で健診を受けるのでもなく保健所の健診にも現れない親たちもいる。こうした親たちを含めて考えると、やはり、本章における対象者は、かなり限定されているといえる。けれども、育児における母親の問題が社会的に取り上げられるときには、今回の調査で対象となった階層の母親たちに代表される場合が少なくない。すなわち、母親の学歴でいえば高学歴傾向であり、夫の職業も安定し、世帯年収が平均以上であり、差し迫った生活問題のない母親たちである。そして、ここで取り上げたような「育児不安」をもって、育児の問題の本質とされることが多いのである。これは、研究者が対象としてきた母親たちが階層性を帯びていたことをも意味している。

最後に、母親からみた「育児不安」の特徴を整理すれば、その多くが、乳幼児期という限られた時期に生じるものであり、また、少し時間をおき客観化してみれば「大したことのないもの」と思える程度のものであった。しかもそれは、時間とともに自ずと解消されていくものであり、その解決も専門家が関わることなく、母親個人の自助努力や、あるいはそれに支えられた自助グループ的な育児サークルの中で解消されていった。しかし表面的には、悩みを共有することで解消している一方で、孤立した個々の母親は、子育て（教育）期の競争原理に裏付けられた不安と情報に煽られて、育児や教育サービスを購入し（させられ）、さらに不安を増幅させているのである。

表 2-4

習い事の比較

No.	前回の習い事	今回の習い事
5	(なし)	プール, 学研
6	(なし)	習字, 英語, チャレンジ
8	水泳	水泳・ワーク
18	(なし)	(なし)
30	(なし)	公文, プール
80	通信教育, スポーツ	習字, 絵
103	(なし)	サッカー, 学研
115	(なし)	ピアノ, 習字
122	(なし)	水泳, 学研
129	(なし)	エレクトーン, ワーク
145	(なし)	習字, 体操, 陸上
145	(なし)	ピアノ, そろばん, 英語, 算数
165	プール	英語, ピアノ, ワーク
166	体操	水泳, 剣道, 公文
172	七田式	ピアノ, サッカー, テニス, 習字, 英語
210	(なし)	水泳
244	(なし)	(なし)
257	(なし)	(なし)
282	(なし)	バイオリン, 野外活動
287	(なし)	体操, 空手, プール, チャレンジ

表 2-5

習い事の実際と希望の数

('93 年調査)

	質問紙調査対象者 (291名)	
	習っている数	習わせたい数
0 個	203 (69.8%)	58 (19.9%)
1 個	67 (23.0%)	125 (43.0%)
2 個	14 (4.8%)	87 (29.9%)
3 個	7 (2.4%)	19 (6.5%)
4 個	0 (0.0%)	2 (0.7%)

【第2章の注と引用】

- (1) 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則「育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連」『心理学研究』第64巻・第6号、1994年。
- (2) 本論文、第1章参照のこと。
- (3) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する基礎的検討」『日本愛育研究所紀要』第30集、1994年。
川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する臨床的研究Ⅰ—幼児の母親を対象に—」『日本愛育研究所紀要』第31集、1995年。
川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する臨床的研究Ⅱ—育児不安の本態としての育児困難感について—」『日本愛育研究所紀要』第32集、1996年。
- (4) 庄司順一「育児不安に対する援助」久常筋子・島内節（編）『地域看護講座6・母子地域看護活動』医学書院、1994年。
- (5) 久富善之『競争の教育』労働旬報社、1993年。同『豊かさの底辺に生きる』青木書店、1993年。
- (6) ただし、「育児不安」の高低と母親のパーソナリティ特性との関連性をみた調査の結果を見ると、深谷・植木が行った「CAS不安診断検査（慢性不安）」、松本が行った「YG性格検査の抑鬱性尺度」とともに、牧野の「育児不安」尺度との関連性が実証されている。すなわち、「育児不安」と呼ばれている状況には、その基底に高不安状態の存在を仮定することができ、抑鬱度との関連性も深いといえるのである。
深谷和子・植木陽子「母親の不安に関する一考察」『東京学芸大学紀要1部門』37、1986年。松本由里「現代の母親の悩みとその背景」『母子研究』No.16、1995年。
- (7) 「仲良し子ども館」とは、札幌市が独自に昭和35年からはじめた公的な幼児の集団活動の場である。札幌市内に住む満3歳から就学前の子どもを対象とし、幼児の健康づくりや地域での仲間づくりを目的とした母子ともに参加する活動のことである。しかし、平成7年から廃止となった。
- (8) 牧野、前掲論文、1982年。本村他、前掲論文、1985年。本論文・第1章参照。

(9) Personal ネットワーク・Maternal ネットワークとは、Jennings, Stagg, and Connors の分類を参考にしたものである。Personal ネットワークとは、母親の学生時代や元あるいは現在の職場の友人など、母親役割に関係なくできたネットワークのことであり、Maternal ネットワークとは、産院や母親学級で知り合ったり、子どもの幼稚園や学校を通して知り合ったというように、母親としての立場を通してできたネットワークのことである。同様に、ここでは、それぞれのネットワークでの友人を Personal 友人、Maternal 友人と用いる。第1章参照のこと。

Jennings, Stagg, and Connors (1991) Social Networks and Mothers' Interactions with Their Preschool Children. *Child Development*, 62.

(10) 図2-1 および図2-2は、Kahn & Antonicci のコンボイ (convoy) モデルを参考にした図に、母親のもつ親族・友人等のネットワークの中で、その人が母親からみて心理的にどれだけ近いのか、遠いのかを書き込んでもらったものについて、4年前の'93年の時点と現在 ('97年) との変化を表したものである。第1章参照のこと。

Kahn, R.L. & Antonicci, T.C. (1980) Convoys over the Life Course: Attachment, Roles, and Social Support. *Life-Span Development and Behavior*, Vol. 3.

(遠藤利彦 訳「生涯にわたる「コンボイ」愛着・役割・社会的支え」東洋・柏木恵子・高橋恵子 (編集・監訳) 『生涯発達の心理学 2巻 気質・自己・パーソナリティ』新曜社、1993年。)

(11) Elkind, D. (1987) *MISEDUCATION* Alfred A. Knopf, Inc. (幾島幸子訳『ミスエデュケーション』大日本図書、1991年。)

保坂展人『ちょっと待って！早期教育』学陽書房、1996年。

斉藤茂男『お子さま戦争』草土文化、1994年。

(12) 汐見稔幸、前掲書、1996年。

(13) 藤永保『幼児教育を考える』岩波書店、1990年。

第3章 育児困難の構造的分析

第1節 本章での課題と研究方法

1. 「育児不安」の研究から育児困難の研究へ

第1章および第2章においては、「育児不安」をめぐる、「育児不安」を軽減させるための関連要因や「育児不安」の性格を検討してきた。しかし、社会全体の多様な条件にある母親の問題を考えていこうとしたときには、一定の限界があることも示された。

すなわち、育児における母親の困難さやその意識を「育児不安」という枠組みでとらえようとするとき、「育児不安」そのものの対象の曖昧さと、「育児不安」としては、とらえられない層の母親たちが存在してしまうという問題点である。こうした問題点は、第1章で検討したように、「育児不安」尺度の精度を上げることによっても解決できるのではなかった。被調査者が社会階層全体の母親を反映できなかったという限界に加えて、数量的に測定することから生じる「不安が低い」という母親の中の、健康的な育児のために「低い」という結果が出ている母親たちと、子ども・育児に無関心なために「低い」という結果が出てくる母親たちとの違いを区別することができなかったという限界である。「子どもが嫌い」という離反の感情も「育児不安」に含まれるべきものであるのに、子どもが好きか嫌いかさえも意識していない母親は、「不安得点が低い」という形でスコア化され、「健康な母親群」と同一のグループにカウントされてしまう結果となるのである。これらは、「育児不安」研究が用いてきた方法および対象把握から生じる限界である。母親たちを不安得点の高低で振り分け、不安の高いグループに位置する母親を分析していく限り、こうした問題点は克服できないと思われる。

さらに「育児不安」研究の限界は、「育児不安」解決策の提起の限界でもあった。「育児不安」の軽減の一助となる「育児不安」に関連する要因としては、主に「母親の社会的な活動」・「母親のもつネットワーク」・「夫との関係」・「他の子どもとの比較」などがあげられていた。これら「育児不安」を解消するためのものである母親を取りまく要因は、その具体的なアプローチのレベルでは、母親の社会関係の調整に留まっており、やはり、あらゆる条件の母親を対象とした不安解消の鍵とはなりえない。主体的な活動によって自らの社会的な関係を構築あるいは広げることができない母親たち、また、先に問題となった「不安が顕在化しない母親たち」に対しては、具体的な援助策が論じられていないのである。反対に、「母親の孤立・孤独化が育児不安につながりやすい」⁽¹⁾と指摘されつつも、

先の「育児不安」解消の要因自体を欠落させているような、社会的に最も孤立しがちな母親たちの存在は、「育児不安」研究の中心に位置付いてはいない。

こうした限界を克服するためには、対処療法的にではなく、より広く構造的に、母親をそしてその家族を規定している社会的要因を考慮していかなければならないであろう。なぜならば、実際に様々な階層や状況にある家族に対して一律の要求やサポートプログラムを提供することは、時として一部の家族を追いつめてしまうことになり、その不利益を被るのは社会的に弱い立場にある家族の場合が多いからである。

さらに、このことは「育児不安」研究の対象が一定の階層差を反映している、すなわちとらえられた「育児不安」というものが、現代社会における育児困難という現実の一部を意識レベルでとらえたものであって、決して、その全体像をとらえてはいなかったことを意味している。しかし、育児は、ある一定の階層における母親だけが行うものではなく、「育児不安」を感じている母親たちに加えて、先にあげた「育児不安」を感じない・感じている暇がない母親たちにも、意識とは別の生活や行動レベルでの育児困難は生じているはずである。しかも、その育児困難は、一様のものではなく、個人の状況に加えて社会的な階層差を反映して表れると思われる。したがって、マスコミで取り上げられるような「高学歴」で「自由時間が増加」し、数少なくなった子どもとの「母子カプセル」の中での母親がもつ育児困難や「育児不安」と、極端な例では、生活保護受給世帯や母子世帯の母親がもつ育児困難や「育児不安」とは、一部分共通したものはあっても、その現れ方は一様のもとはならないであろう。これらは、どちらも育児における困難を抱えている母親であり、それぞれの問題性は取り上げられているものの、いまのところ、常に分断されて説明されており、両者を組み入れた包括的な説明は成されていない。

したがって、今後、育児をしている母親の不安について明らかにしてゆくべきことは、「育児不安」という枠組みで切り取ってきた母親の特性を問題とするのではなく、どのような生活を営んでいる母親にどのような内容の育児困難があり、また、母親自身がそれをどのように感じているのかについて、生活条件の違いによる差異を明らかにしていくことである。それには、意識の土台にあり、相互に規定しあう関係にある生活構造をも視野に入れていく必要がある。これまでも生活分析の重要性は提唱されてきたが、生活の一部を切り取ってくるという形での「生活」と「意識」との連関を分析するといったものに留まっており、育児をしている母親の生活の全体像を描き出せてはこなかった。こうした生活構造から育児困難を分析することにより、社会全体における「育児不安」の相対的な位置

や社会的な性格も説明することができる。

2. 現代の育児構造と二つの資源

現代家族の育児構造とは、渡邊⁽²⁾によれば、「核家族のシステム境界が鮮明となり、社会の育児機能が核家族に独占・集中されるという単純な育児構造」であり、「こうした構造のもとでは、親以外の育児の担い手は、親を介して間接的に子どもとの関係を結んでいる状態となり、家族外部の諸主体の育児作用は、親によるスクリーニング（ふるい分け）を経て、子どもに達することとなる。すなわち、親が、家族外部の養育（育児）に関わる主体とどのような関係を取り結ぶのか・取り結べるのかが、子どもの育児構造を規定する。家族の外部にどのような育児主体が準備されているか、どのような育児資源・育児機会にアクセス、コントロールしうるかによって子どもの育児構造は規定されている。」のである。実際、親たちは、子どもの環境のため、胎児・乳幼児期から多様な選択をし、環境をコーディネートしている。それは、早期教育といった教育的なものに限らず、幼稚園や保育所の選択から友達作り、おもちゃ、衣服、スポーツ、社会的体験などといった、子どもに関するあらゆるものに及んでおり、容易に「育児産業」と結びつきやすい性格をもって現れる⁽³⁾。もはや、「現代の家族が育児機能を担うに足る資源を保持することは不可能であり、家族に期待される役割は、家族外部の育児資源をコーディネートすることである。」⁽⁴⁾と言える。

これら、親を取り巻く様々な資源のなかで、どのような育児環境が整えられるかは、親が、それらの資源をいかに収集・コントロールし、その活用を図っていくかという親のコーディネート力（問題調整能力）にかかっている。しかし実際のところ、その育児の担い手は、母親ひとりに集中してしまっている。しかも、今や「母親である」ということが、「女性」としての生き方との葛藤を強いられている。母親たちは、「母性」という言葉で象徴される固定的な性別役割の中で、また、同性である女性たちの社会進出が高まっていく中で、「母親である」ということだけでは、自分自身のアイデンティティをもちにくい状況にある。現代において「母親」という存在は、外部からも、そして母親自身の内面からも揺さぶりをかけられているのである。その際、「資源」という概念自体に内包されているように、「乳幼児を育てている母親」といっても一様ではなく、もっている資源の多寡や質の違い、そして、それらの収集能力の違いなど、そこには一定の階層差が存在して

いる。そうした社会的な制約のもと、母親が主体的に資源を取捨選択するという決定プロセスの中で、どのような困難や不安が生じているのかを明らかにすることが、とりわけ重要である。

さらにいえば、こうした母親の主体性に注目した視点は、社会的に弱い立場にある母親たちをとらえ直すという意味においても重要となる。一般に、社会的弱者と言われる家族は、社会的制約が大きいため、常に受動的な立場（援助を受けるだけの立場）にあると思われがちであり、彼女らに対するアプローチも固定的な実態把握が多い。しかし、彼女たちは、問題解決に向かって努力していないというわけではなく、努力してもできない状況におかれており、その結果として問題未解決という状況が残されているととらえた方が、実態に近い⁽⁵⁾。これはまた、近年、家族の再組織化の過程としてとらえるという視点⁽⁶⁾が提出されているように、家族の「能動的」な活動という立場に則して、私的に営まれている育児が社会的に制約されている部分を明らかにすることにもなる。

ところで、「資源」の違いに注目するといっても、従来の社会階層区分に用いられるような夫の収入や財産、学歴、職業によって階層差をみていくだけでは、先に述べた母親の主体的な問題解決の能力差は問題とされなくなってしまう。従来の社会階層的区分では、階層グループごとの相違は説明できても、一定の階層内の個々の母親の能動的な育児（資源のやりくり）が描かれなくなってしまうのである。実際、同じような資源をもつ母親でも、子どもの要望や成長を先取りして、子どもに対して過度にコーディネート（資源配分）してしまう母親から、子どもへの関心が低かったり逼迫した生活問題のために、コーディネートすること自体を放棄してしまっている母親たちまで、広く存在している現実を説明できないからである。

そこで、その問題を埋めるために、より具体的な類型把握のための手続きとして、構造的資源（Structural Resources）と編成的資源（¹⁵Organizing Resources）という資源システム概念⁽⁷⁾を応用して用いてみる。「構造的資源」と「編成的資源」という資源の区分は、Sandra Wallman によって提出されている。彼女は、社会的弱者も、よりよい資源を求めて自分たちの置かれた状況を改善する力をもっているという前提に立ち、様々なカテゴリーに属する都市の住民が、どのような資源の選択を行い、また、制約を受けているのかを明らかにしたのであるが、その際に、従来の経済的資源モデルで用いられている固定的な資源、すなわち土地（住宅）・労働（サービス）・資本（商品とお金）という構造的資源（ハード）に加え、時間・情報・アイデンティティの3つを生活のソフト面にあたる編成的資源とし

て導入した。

しかし筆者は、この編成的資源にネットワークを加えて分析を試みる。というのも、母親と子どもが孤立している現状に注目した点からも、母親が社会の中で取り結ぶネットワークの量と質の把握は重要となる。これらは、時間や情報の資源活用を分析することで得られるような、間接的な分析では不十分と考えるからである。すなわち、所得・職業・学歴などの構造的（ハードな）資源に加え、時間や情報やネットワークといった生活のソフト面にあたる編成的資源を導入し、母親を類型化してとらえていく。

これまでの研究は、母親の心理・意識的な側面（「育児不安」）から、その生活構造を説明しようとしていた。しかし、それでは心理的に「育児不安」を強く訴えている母親の背景要因を説明することはできても、「育児不安」の実態を説明したことにはならない。また、「育児不安」の訴えが低ければ、育児の困難性がないものとしてとらえられてしまう恐れがある。「育児不安」が何であるかを説明するためには、編成的資源の違いや、そのコーディネートの違いから生じる、育児における階層構造から説明していく必要がある。

本章での課題は、こうした二つの次元の「資源」を考慮に入れて、具体的な育児の困難さと意識レベルでの「育児不安」とが、育児の条件の違いによって、どのように表れるのかを明らかにすることにある。具体的には、次の二つの課題を設定する。

課題1：母親の構造的資源の違いによって、母親のもつ育児の資源（編成的資源）とその活用の仕方は、どのように異なるのか。

課題2：課題1での相違、あるいは共通性が、母親が抱く育児の意識・期待とどのように関連するのか。

3. 調査の概要

本章における調査の概要については、以下の通りである。

（1）手続きと期間

以下の機関を通して調査協力を依頼し、調査協力者の自宅・職場・調査協力機関において面接調査を実施した。所要時間は、一人およそ1時間半程度である。

①保育園調査（8名）：

札幌市内の認可保育園において、園を通して依頼書の配布、承諾書の回収を行った。当保育園に入園させている子どもが第1子であり、その子の年齢が3～5歳である母

親 13 名に調査依頼書を配布し、そのうち 8 名が調査承諾をしてくれた（承諾書の回収率 61.5 %）。

調査期間は 1997 年 7 月 4 日～7 月 19 日である。

②幼稚園調査（15 名）：

札幌市内の私立幼稚園において、園を通して依頼書の配布、承諾書の回収を行った。

当幼稚園に入園させている子どもが第 1 子であり、その子の年齢が 3～5 歳である母親 74 名の中から、ランダムに 17 名を選択し調査依頼書を配布した。17 名中、調査に承諾してくれた母親は、15 名であった（承諾書の回収率 88.2 %）。

調査期間は、1997 年 8 月 1 日～8 月 30 日である。

③児童相談所調査（7 名）：

札幌市児童相談所の参事である医師の協力を得て、児童相談所に来所している 3～5 歳児をもつ母親へ依頼書を配布してもらい、後日郵送による回収を行った。21 名に配布し、7 名を回収した（承諾書回収率 33.3 %）。

調査期間は 1997 年 9 月 4 日～11 月 28 日である。

④その他の調査（3 名）：

機関を通さず、個人的に調査に協力してくれた 3～5 歳児をもつ母親であり、その内訳は、筆者の友人、筆者の友人の紹介、前出の相談機関を通して調査に応じてくれた方の友人の計 3 名である。

調査期間は 1997 年 4 月 24 日～10 月 23 日である。

（2）調査対象

調査対象者 33 名の特性は以下の通りである。

①家族構成

父子家族：22 世帯、父子+祖父母家族：8 世帯、母子家族：2 世帯、
母子+祖父母家族：1 世帯。

②子どもの数

1 人：9 世帯、2 人：19 世帯、3 人：5 世帯。

③母親の職業

専業主婦：21 人（在宅での仕事 2 人を含む）、パートタイム就業：5 人、
フルタイム就業：7 人。

④母親の年齢

22 歳～ 43 歳で平均年齢は 32.4 歳。

⑤母親の学歴

中卒：5 人、高卒：13 人、専門学校卒：4 人、短大卒：11 人。

(3) 調査内容（巻末資料 4 参照）

- I. フェイスシート（家族の構成と健康状態、母親の職業の有無、母親の学歴、世帯の年収、夫の職業、居住年数）
- II. 母親の生活（一日の流れと休日の様子、母親のネットワーク）
- III. 子ども・子育てについて（習い事の実際と子どもにかけてよい費用、子どもへの期待、育児不安について）
- IV. 母親の問題解決（育児上の困難・不安についての悩みと解決、生活上の困難・不安についての悩みと解決）
- V. 母親自身について（自分のための趣味、母親であることの評価）

第 2 節 母親たちの階層的相違

1. 母親の分類とその特徴

母親の社会的な条件の違いによって、育児を行う上での資源や生活にどのような違いが生じるのであろうか。そうした差異を比べるにあたって、まず最初に母親をいくつかのグループに区分し、その大まかな特徴についてみていく。

調査に協力してくれた 33 名の母親を専業主婦、パートタイム就業、フルタイム就業に大別し、さらに、それぞれにおいて世帯年収 500 万円未満層と 500 万円以上の層とに区分する。分類基準に母親の就労の有無とその形態を用いたのは、専業主婦か、就労しているか、その就労形態によって、母親の生活の中での時間の使い方が大きく異なるからである。年収については、先に述べたように、現代の育児が、家族外部にある育児資源の量や質とそれらのコーディネートによって特徴づけられるのであれば、そこでの資源は、収入による制約を大きく受けられると思われるからである。

また、年収は 1993 年の年収平均である 657.5 万円（平成 6 年度国民生活基礎調査）を

クリアしているかどうかで区分した。今回の調査では、母親たちが回答しやすいようにという配慮から、年収の金額に幅をもたせて記号で選んでもらう形式とした（巻末資料4参照）ため、上記の条件を考慮したうえで、500万円が世帯年収の基準となった。

その結果、以下の5グループに分類された。なお、保育園を通して依頼したフルタイム就業の母親の職業は、看護婦・団体職員等で占められ、世帯の年収も500万円以上であり、フルタイム就業の母親は1グループのみとなった。また、在宅での事務と下着販売をしている母親2名は、生活パターンがパート勤務よりも専業主婦に近いことから、専業主婦Ⅰ（SⅠ）グループに含まれている。母親たちの分類とフェイスシートを表3-1に示す。

【母親の分類】	SⅠグループ：	専業主婦Ⅰ（世帯年収500万円未満）	11ケース
	SⅡグループ：	Ⅱ（世帯年収500万円以上）	10ケース
	PⅠグループ：	パートタイムⅠ（世帯年収500万円未満）	3ケース
	PⅡグループ：	Ⅱ（世帯年収500万円以上）	2ケース
	Fグループ：	フルタイム（世帯年収500万円以上）	7ケース

①専業主婦Ⅰ（SⅠ）グループ

家族構成は11ケース中4ケースが親との同居世帯（うち2世帯は母子＋祖父母と父母子＋曾祖母）であり、10代で母親となった2ケースも含むことから母親の平均年齢は29.5歳と5グループ中、最も若い。母親の学歴では、専門学校卒業の1ケース以外は高卒と中卒で占められる。夫の職業は運送・建築関係が半数を占める。住居は親との同居4ケースを除き、市営住宅・雇用促進住宅を含めた賃貸アパートが5ケースと高い。家族の健康⁽⁴⁾では、同居している曾祖母や祖母の病気など、母親も付き添って通院を必要としているケースが2ケースみられる。

②専業主婦Ⅱ（SⅡ）グループ

家族構成は10ケース中1ケースだけが親との同居世帯であり、父母子家族が圧倒的に多い。母親の平均年齢は33.3歳であり、学歴は高卒と短大卒の割合が4人ずつと高い。夫の職業は様々であり、職種に傾向性は見られない。住居は親との同居・公宅のそれぞれ1ケースずつを除くと、賃貸と持ち家（持ちマンションを含む）の割合が等しい。家族の健康では、相談機関を通してのケースが4ケース含まれるためか、子どもの言葉の遅れを

訴えているケースが5ケースと高い。しかし、それ以外の健康上の問題や他の家族員の健康上の問題は見られない。

③パートタイムⅠ（PⅠ）グループ

3ケース中2ケースが母子家族であり、いずれも親との同居はみられない。母親の平均年齢は31.7歳であり、学歴は短大卒が2ケース、中卒が1ケースである。母親の職種は損保会社事務・弁当屋・パン屋であり、平均の就労時間は約7時間である。1ケースであるが父母子家族の夫の職業は清掃会社の運転手と夫の実家（廃品回収業）を手伝っている。住居は、母子寮（現：母子生活支援施設）・市営住宅・借家である。家族の健康では、母親自身の喘息と子どもの頭に水が溜まりやすいために発達上の問題が生じているケースが1ケースずつある。

④パートタイムⅡ（PⅡ）グループ

ケース数が2ケースと少ないため、このグループでの特徴というよりも2ケースの特徴をあげていく。家族構成は同居家族と父母子家族である。また、母親の年齢が高いことは2ケースに共通しており、平均年齢は41.5歳と5グループ中最も高い。母親の職種は両者とも事務であり、平均就労時間は6時45分間である。夫の職業は土木関係と大工であり、住居は借家と親世帯への同居である。家族の健康では、子どもが障害をもっているケースと祖父が入院しているケースである。

⑤フルタイム（F）グループ

家族構成では7ケース中3ケースが親との同居世帯であり、残り4ケースは父母子家族である。母親の年齢は33.6歳とSⅡグループに近い。母親の職種は、看護婦・保健婦4人、団体職員・公務員3人であり、夫の職業も団体職員・公務員が多い。母親の平均就労時間は、約8時間と全国平均（1991）の約7時間⁽⁹⁾より長くなっている。住居は同居・持ち家・社宅で占められ、家族の健康では軽いものを除くと、祖母の腰痛と子どもの喘息がそれぞれ1ケースである。

次に、こうした特徴をもつ母親たちの編成的資源や生活の違いを、いくつかの側面から検討していく。

表3-1 母親の分類とフェイスシート

	ケースNo.	家族構成	子どもの数	母親の年齢	母親の学歴	母親の仕事	夫の仕事	世帯年収	居住年数、住宅	家族の健康
S I グループ	9	母方祖父57, 祖母53, ♀5	1	26	中卒	専業主婦		200万円未満	5年、実家に同居	
	2	母方曾祖母72, 夫25, ♀3	1	25	高卒	専業主婦	ダンプ運転手	2～300万円未満	2年、実家に同居	曾祖母と本人が通院
	3	夫29, ♂5, ♂3	2	23	中卒	専業主婦	とび職	2～300万円未満	2年	
	11	夫37, ♂5, ♀3, ♂1	3	31	高卒(通信教育)	専業主婦	印刷関係	2～300万円未満	8ヶ月	Ch.1が少し発音不明瞭
	1	夫36, ♂5	1	31	高卒	下着販売(自宅)	衣料品関係	3～500万円未満	5年、雇用促進	
	4	母方祖父45, 祖母44, 夫22, ♂3, ♂7ヶ月	2	22	中卒	専業主婦	建築関係	3～500万円未満	4年、実家に同居	祖母が腎臓透析
	5	夫方祖父60, 祖母53, 夫31, ♂4, ♀1	2	30	高卒	専業主婦	駐車場・ビル管理	3～500万円未満	4年、実家に同居	
	6	夫34, ♂5, ♀1	2	37	高卒	専業主婦	ホテル勤務	3～500万円未満	3年半	母:秋になると喘息
	7	夫34, ♂4, ♂2	2	34	専門学校卒	在宅2/週	レストラン等勤務	3～500万円未満	2週間、アパート	
	8	夫41, ♂4, ♂1	2	35	高卒	専業主婦	運送	3～500万円未満	5年、アパート	
S II グループ	24	夫31, ♂3, ♀1	2	30	高卒	専業主婦	建設関係会社員	3～500万円未満	5年、市営住宅	Ch.1が言葉の遅れ
	13	夫33, ♂6, ♂1	2	30	中卒	専業主婦	プラスチック設計	5～700万円未満	8ヶ月、持ち家	
	14	夫47, ♂5	1	41	高卒	専業主婦	運送関係	5～700万円未満	4年、借家	Ch.1の言葉の遅れを気にしている
	21	夫36, ♂6, ♂4	2	34	短大卒	専業主婦	公務員	5～700万円未満	5年、公務員宿舎	Ch.1, Ch.2ともに言葉の遅れ
	22	夫35, ♀14, ♀4, ♂3	3	40	短大卒	専業主婦	公務員	5～700万円未満	1年4ヶ月、公務員宿舎	Ch.3が言葉の遅れ
	25	夫35, ♂3, ♀1	2	29	高卒	専業主婦	電気通信	5～700万円未満	4年、持ちマンション	Ch.1が言葉の遅れ
	10	夫30, ♂4, ♂1	2	29	高卒	専業主婦	中古車販売	7～1000万円未満	2年、アパート	
	23	夫36, ♀4, ♂3	2	31	専門学校卒	専業主婦	製薬会社	7～1000万円未満	3年、持ちマンション	Ch.2が言葉の遅れ
	16	夫39, ♀4	1	34	短大卒	専業主婦	団体職員	7～1000万円未満	4年、社宅	
	18	夫方祖父64, 祖母62, 夫38, ♀8, ♀6, ♂5	3	32	短大卒	専業主婦	医師	7～1000万円未満	9年、同居	
P I グループ	12	夫38, ♂4, 妊娠中	2	33	高卒	専業主婦	予備校講師	1000万円以上	4年	第2子を妊娠中
	17	♂6, ♂4	2	34	短大卒	パート(損保会社事務)		200万円未満	1年半、母子寮	母親喘息
	15	♂6, ♂3	2	27	中卒	パート(お弁当)		200万円未満	5年半、市営住宅	
P II グループ	19	夫36, ♂5, ♂3	2	34	短大卒	パート(パン屋)	清掃会社運転手+実家の手伝い	3～500万円未満	10ヶ月、借家	Ch.1が頭に水がたまり認識弱い
	20	夫43, ♂12, ♂9, ♀5	3	40	短大卒	パート事務	土木関係会社員	5～700万円未満	6ヶ月、借家	Ch.3がダウン症
	32	母方祖父77, 祖母71, 夫42, ♀3	1	43	高卒	パート(建設事務)	大工	5～700万円未満	2年、同居	祖父が入院
F グループ	27	夫34, ♂5, ♂3	2	33	専門学校卒	看護婦	団体職員	5～700万円未満	2年半、持ち家	
	30	母方祖父71, 祖母69, 夫32, ♀3	1	34	短大卒	保健婦	市役所	5～700万円未満	9年、同居	祖母が腰痛
	26	夫37, ♂4	1	36	短大卒	公務員	公務員	7～1000万円未満	4年、公務員宿舎	
	28	夫34, ♀4	1	33	短大卒	看護婦(訪問看護)	スチール建具制作	7～1000万円未満	3年目、持ち家	
	31	夫33, ♂5, ♀1	2	34	高校卒	公務員	公務員	7～1000万円未満	7年、公務員宿舎	Ch.1軽いアトピー、Ch.2中耳炎
	33	母方祖父、祖母、妹、夫34, ♀5, ♂2, ♀0	3	29	専門学校卒	看護婦	自衛官	7～1000万円未満	4年、同居	
	29	夫方祖父、祖母、夫36, ♂5, ♀2	2	36	短大卒	公務員	教員	1000万円以上	2年半、同居	Ch.1喘息

注) Ch.1・Ch.2・Ch.3とは、それぞれ第1子・第2子・第3子のことを示す。

2. 母親をとりまく社会関係

母親たちが社会の中で取り結ぶネットワークでは、どのような違いが見られるのだろうか。すなわち、母親たちはどのような人たちによって支えられているのだろうか。今回の調査では、母親のもつ親族・友人等のネットワークをたずね、その人が母親からみて心理的にどれだけ近い・遠いかを母親を中心とした3つの同心円に描いてもらった。これは Kahn & Antonicci のコンボイ概念⁽¹⁰⁾を参考にしたものである。

表3-2から、最初に第1円に属するメンバー、これは Kahn らによれば「様々な状況で支えを提供することができる」メンバーであるが、その違いを専業主婦どうしのSⅠグループとSⅡグループとで比べてみると、SⅠグループが親族だけで占められているケースが多いのに対して、SⅡグループは子どもを通してできた友人（Personal 友人⁽¹¹⁾）や母親自身の友人（Maternal 友人⁽¹²⁾）、あるいは近所といった、親族以外のメンバーをあげているケースが多くみられる。また、こうした専業主婦に比べ、働いている母親のネットは、第1円から職場、中でも育児をしながら働いているという同じ立場にある友人が Personal 友人としても Maternal 友人としてもあげられている。一般に、就業している母親は、日中家にいないため、近所でのネットワークは弱くなる傾向にあり⁽¹³⁾、今回のケースでもその傾向はみられるが、職場や保育園を通してのネットがそれを補っている。

第2円についてみれば、多くのケースにおいて、第1子の子どもの年齢が3～5歳という外に向かって動き出す年齢であること、また、調査の手続きが幼稚園や保育園、児童相談所といった機関を通してしていることもあって、それぞれの機関を核としたネットワークを形成しており、多様なメンバーをあげている。個人が個別に相談に行く児童相談所ルートの母親たちについても、そこでの子どもの療育グループで知り合えた友人が、同様の悩みをもち、お互いに支えあうネットワーク・メンバーとなっていた（No.20・No.21・No.22 ケース）。しかし反対に、今回のようにネットワーク形成の機会が多いであろう母親たちのなかにあっても、親族以外のメンバーがほとんどいないケースがSⅠグループに存在していることに注目したい。家族や親族は、多くの母親たちにとって、彼女の様々な悩みの相談相手として、また、何かの時に子どもを預ける際にも常に重要なメンバーとなっており⁽¹⁵⁾、家族や親族がいるだけで十分であるかのようにも思える。しかし、母親を支える人たちが家族や親族だけで占められてしまうことの限界は、育児上の問題があっても解決できずにきた母親たちのネットワーク分析⁽¹⁴⁾や母子家族への調査⁽¹⁵⁾から示唆されている。

さらに、第3円の特徴をみると、特にSⅠグループにおいて第3円に属するメンバ

一をあげている人が4ケースと少なく、ネットワークの広がりが比較的小さいという傾向がみられた。

表3-2 母親のネットワーク

	ケースNo.	ネットワーク(第1円)	ネットワーク(第2円)	ネットワーク(第3円)
S I グループ	9	自分の両親、姉、学生時代の友人		
	2	夫、子ども、祖母、姉	義妹、実父、夫の両親、近所(幼稚園)、高校親友	
	3	夫、義姉、友人	義姉、近所(幼稚園)、友人(P)	
	11	子ども、夫、両親、親友(M)、幼稚園先生	友人(学生時代)	幼稚園お母さん、近所
	1	夫、子ども	近所(M)、両方の親	趣味の友人、幼稚園、仕事友人
	4	Ch.2	両親、夫、Ch.1	
	5	子ども、夫、姉	両親、夫の両親、親友	
	6	夫、子ども、姉、自分の親、夫の親	親友(学生時代・働いているとき)	
	7	夫、子ども、実家の母親、親友(学生)	兄と義姉、仕事関係の友人	
	8	夫、子ども	自分の両親、夫の両親、親友(学生時代)	幼稚園先生
	24	子ども、夫、父、妹	サークル友人、団地内友人、音の両親、弟	遠い親戚、実母
S II グループ	13	子ども、夫、自分の両親、姉、親友(学生、職場、子)	夫の友人	
	14	夫、姉、両方の母、友人(学生時代、母親学級)	幼稚園先生、児相の先生	幼稚園のお母さん
	21	夫、実母、昔友人、近所友人	親戚	
	22	夫、妹、実父母	近所友人、専門職	
	25	夫、実父母、姉、友人(同僚)	夫の両親、病院の医師・看護婦長、友人(M)	マンション友人
	10	夫、母親	親友(職場)、近所(M)、幼稚園のママ	親戚、幼稚園先生
	23	夫、友人(マタニティスイミング)	近所の友人(M)、教会友人、幼稚園先生、実母	マンション友人、親戚、姑
	16	夫、子ども、自分の両親、夫の親、妹、元職場の友人		団地、習い事
	18	夫、子ども、自分の両親、	近隣(子)、夫の親、友人(学生時代)	夫の友人
	12	夫、自分の親、友人(学生)	夫の親、友人(子)	
P I グループ	17	子ども、友人(学生)、年上の知人、自分の母	友人(M,P)、友人(母子家族の仲間)、親族、寮の先生	寮の友人、会社
	15	両親、妹、親友(P)	幼稚園のお母さん、近所	
	19	子ども、保母、保育園の父母	近隣友人、実母、妹	父、職場
P II グループ	20	夫、子どもたち	両親、親戚、親友(子ども学校、サークル)	保育園先生、友人(親の会、学生時代)
	32	夫、親	友人(近所)、上司	兄弟
F グループ	27	夫、自分の母	友人(同僚)、上司、近所、親友(学生時代)	保育園、保母、親戚、夫の母、家庭医
	30	夫、両方の親、親友(仕事)、同僚、医師、職場(専門職の人)	友人(夫婦で共通の)、友人(学生時代)	上司、保育園
	26	夫、友人(職場・保育園)、自分の両親、妹	友人(保育園)、夫の母、保母、親友(高校時代)	近所
	28	夫、夫の両親、親友(学生時代)、同僚	保母、自分の両親、弟、元同僚、上司、夫の友人家族	姉、友人(高校時代)、近所
	31	自分の母親、親友(職場)、上司、同僚、近所	夫、親友(学生時代)、保育園の親、いとこ	夫の親、保母
	33	夫、自分の両親、妹	職場の友人	親戚、
	29	夫、自分の両親、親友(学生時代)	同僚、友人(近隣)	アトピーの先生

注1) Ch.1・Ch.2・Ch.3とは、それぞれ第1子・第2子・第3子のことを示す。

注2) 表中、(P)(M)とあるのは、それぞれPersonal友人、Maternal友人を示す。ネットワーク形成の経緯について、より詳細な情報が得られている場合には、その旨、記してある。

3. 生活困難と母親の余暇

次節で事例研究によって育児の問題を取り上げるに先だって、ここでは育児を含めた生活全般にわたっての悩みや困難さが、グループごとに、どのように異なるのかをみていく。さらに、母親自身が「母親」としての生活だけではなく、自分自身の時間や趣味をもつことが、母親個人としての充実感を高め、結果として「育児不安」を低めることが、これまでの研究⁽¹⁶⁾から示唆されている。よって、生活の困難さに規定されながらも、母親たちがどのような「リフレッシュのための時間」を過ごしているのかについても考察していく。

①育児の悩みと生活の悩み

母親たちに対し、育児上の困難や不安をたずねた後に、現在あるいはこれまでの生活上の困難や不安をたずねたところ、表3-3のような回答が得られた⁽¹⁷⁾。最初に、育児の悩みについてみると、P Iグループでは育児の悩みが表面化しない、Fグループでは育児と仕事との両立に悩んでいた傾向がみられる。しかし他には、グループごとの差異はみられず、どのグループの母親も子ども関連の悩みをあげていた。

しかし生活の悩みではグループごとに特徴がみられた。S Iグループの生活困難を順にみていくと、まずNo.9ケースは、「子どもが産まれたときが家中で大変だった」と答えている。このケースは、母子家族となった経緯をほとんど語ってはくれなかったが、「自分の親世帯と同居している年数」と「子どもとの年齢」が同じであることからしても、子どもが産まれたときの大変さが親世帯との同居になっていることが伺える。No.2ケースは、現在、曾祖母（母親自身からみて祖母）との同居生活に自由さがいないことの悩みをもっている。また、No.1・No.7・No.8・No.11 ケースは、過去にあるいは現在において、夫の仕事や性格での悩みを回答している。No.4ケースは、改めて第3節において検討するケースであるが、親世帯との同居のために自分たちの家族としてのアイデンティティももてず、自らの子どもに対しても愛情がわからないという問題を抱えている。No.24 ケースでは、最初の子どもが産まれたときに祖母（母親の実母）の精神病が発病し、祖父（母親の実父）も別れて家を出て、この母親が育児と自分の両親の双方を訪ねるといった心労と疲労とが重なっていた。現在は、夫が転職と田舎への転居を希望しているが、田舎へ行くと子どもの相談機関も少なくなるため（第1子の言葉の遅れが気になり児童相談所を訪ねている）心配している。

同じ専業主婦の生活の悩みをS IIグループについてみるとどうであろうか。S Iグループ

ブに比べ、生活の悩みとして回答する母親は少ない。しかも、その内容をみていくと、No.14 や No.25 ケースは「育児不安」とも重なる内容が生活不安として述べられている。すなわち、No.14 ケースは、幼稚園内で自分が比較的高齢であるため、他の若い母親たちから非難を受けないように服装などで目立たないように苦労していることをあげており、No.25 ケースは託児所やベビーシッターに預けることが不安で嫌であることから、育児をはじめとした生活が忙しかったと回答している。また一方で、少数ではあるが、No.10・No.12・No.23 ケースのように夫や育児以外の生活に規定されて問題が生じているケースも存在している。No.10 ケースは、夫が現在の仕事に転職するまでは収入も少なく生活全般が大変だったこと、No.23 ケースは以前に夫の帰宅が遅かったことに加えて、引っ越してきたマンション内での人間関係に悩まされたこと、そして No.12 は夫の仕事が1年ごとに契約更新するため、その時期になると家庭の雰囲気緊張するとのことである。

次に、就業している母親について、グループでの相違をP IグループとFグループとからみていく。P Iグループでは、いずれも金銭的な問題をはじめとした生活基盤の問題を抱えていた。すなわち、No.17 ケースが離婚したときに、住居も仕事も含めて全く生活のめどが立たず、どうしていいか困っていたこと、No.15 ケースが昨年離婚してからギリギリの生活で、お金のないことの不安を述べている。また No.19 ケースは父母子家族であるが、夫の借金の返済が月に10万円近くあり、生活が苦しいと述べている。P Iグループは、そのうちの2人が純母子家族であることから、「母親がパート就労で世帯の年収が相対的に低い」グループの傾向というよりも、「低所得にある母子家族」の傾向とみることもできる。実際、母子家族の就労は不安定なパート就労が多く、年収も低いという現実がある⁽¹³⁾。しかしここでは、「母親がパート就労で世帯年収が低所得」という軸で斬ってみたときに、母子家族の生活の困難性と重複する側面があるのと同時に、父母子家族にあっても、困難性を抱えているということを押さえておきたい。

これに対してFグループでの問題の特徴は、No.29・No.33 ケースが母親自身の仕事上の大変さをあげ、No.26・No.27・No.28・No.31 ケースが「育児の悩み」での回答も含めて、育児と仕事との両立に悩んでいた。

このようにS IグループとS IIグループ、P IグループとFグループとを比較してみると、S IIグループの一部を除いては、社会的な階層に関係なく母親自身の仕事も含めた生活問題に規定されているといえる。しかしその内容をみていくと、Fグループでは、女性の社会進出と関わった生活の悩みであるのに対して、S IやP Iグループは生活の基盤に

関わった悩みを抱えている。

表 3-3 母親の悩み

	ケースNo	育児の悩み	生活の悩み
S Iグループ	9	子が言うことを聞かない、叱り方がわからない	昔) 子が生まれたとき
	2	子どもがわからず、ずっと不安だった	曾祖母との生活が大変
	3	子が言うことを聞かない	
	11	昔) 子が人見知り、現) 体力的にしんどい	昔) 夫が転職でキリキリ
	1	昔) 子が言うことを聞かない	昔) 夫と性格不一致
	4	子が祖母にべったり、自分は育児してない	親世帯と別居したい
	5	昔) 1人目の時、夜中の授乳・離乳食づくり大変	
	6	下の子がかまって、かまって……	将来の教育費が心配
	7	昔) 下の子生まれて、上が赤ちゃん返り	夫の帰りが遅い
	8	昔) 上の子生まれてマタニティーブルーに	夫の帰宅遅い
	24	出産時マタニティーブルー、Ch.1が言葉の遅れ	昔) 自分の母親の精神病発病と育児が重なり大変、現) 夫の転職希望
S IIグループ	13	昔) 扁桃腺で入院、川崎病かと心配	
	14	昔も現も) 言葉の心配、児相では大丈夫と言われたが……	若い母親との調和を気にする
	21	2児ともに言葉が遅かったため、Ch.1の3歳過ぎには育児不安と困難が一緒に	
	22	Ch.2とCh.3が1歳違いなので大変だった、Ch.3の心配はプレイに通って吹っ切れた	
	25	Ch.1が小さく生まれ、喘息で入院、尿道で手術、言葉の遅れと不安だらけ	託児所、ベビーシッターに預けることが不安で嫌
	10	昔) 母子カプセル状態で、心配性だった	昔) 夫転職まで生活大変
	23	Ch.1は足、Ch.2は言葉が心配だった、Ch.1とCh.2の育児重なり体力的に大変	昔) 夫の帰宅遅く、自分も友人少なかった、マンションでの人間関係
	16	昔) ウンチがおむつにしかできなかった	
	18	第1子については常に心配あり、自分の子育てこれでいいか	
	12	昔) おむつがとれなかった、母乳3時間おき	昔) 夫の仕事が1年契約なので、契約更新時
P Iグループ	17	生活が成り立ったうえで、子どもの様子が見えての悩み	離婚して生活のめどが立たないとき、気持ちの子へ行かない
	15	あまりない、強いてあげればCh.1が反抗的	昨年離婚、お金が不安
	19	Ch.1の発達が遅く、姑からの圧力もあり、辛かった	夫の借金の返済が月に10万近くあり、経済的に大変
P IIグループ	20	Ch.1よりCh.2が手がかかった、Ch.3はハンデをもった子がどのように育つか不安	
	32	昔) 昨年1月からアトピー、今はよくなる	
Fグループ	27	昔) 子が登園拒否、仕事辞めようか	
	30	昔) 離乳食も時間をかけてつくる→子待てず泣く	
	26	昔) 保育園で泣かれて仕事の両立とに悩んだ	家事が苦手、夫が非協力的
	28	昔) 生後1年間専業主婦でイライラ	昔) 子が生まれる前、自分が仕事人間で夫イライラ
	31	Ch.1が情緒不安定、爪をかじるなど	昔) Ch.1が生まれたとき仕事との両立が大変だった
	33	Ch.1は生まれてからずっと心配、性格的なこと	仕事の上で忙しい
	29	仕事と子どもの病気のやりくり	自分の仕事が4月から転勤となり、大変

注) Ch.1・Ch.2・Ch.3とは、それぞれ第1子・第2子・第3子のこととする。

②母親の余暇

先に概観した生活問題をはじめ、母親が抱える様々なストレスを緩和してくれるのが母親自身の趣味をはじめとした余暇の時間である。今回、母親たちが仕事や家事や育児以外の時間をどのように過ごしているのかを一日の流れのなかでたずねていったところ、家で家事や育児の合間を使って、テレビや新聞を見たり読書をするといった「在宅型余暇」と、習い事をしたり友人と連れだって外出するといった「積極型余暇」とに大別できた（表3-4）。

そうした余暇の内容をみていくと、在宅型余暇に関しては、就労している母親も専業主婦の母親も大差はみられず、テレビ・新聞・読書をはじめとして、手紙などの書き物や針仕事をあげている。しかし、本来は生理的活動である「寝ること」を自分のための趣味・余暇の項目としてあげている母親がSⅠ・PⅠグループにみられた。一方、積極型余暇に関しては、グループによって、その内容に違いがみられた。専業主婦であるSⅠ・SⅡグループは、ともに積極型余暇をあげてはいるものの、SⅠグループでは主に、近所の公園やマーケットへ親族（自分の姉とその子ども）と一緒に出かけている場合が多いのに対して、SⅡグループでは、語学・アートフラワー・料理教室といった習い事をしている母親や、友人とのお茶や昼食を外食で楽しんでいる傾向がみられる。

働いている母親は、日中、職場で過ごしているため、積極型余暇をする時間が専業主婦に比べて少なく、その回答もPⅠグループでの親業講座に行っている1ケース、PⅡグループでの気功をしている1ケース、Fグループでのアウトドア・乗馬クラブ、バトミントンをしている2ケースである。就業している母親の場合、積極型余暇をもたないといっても「仕事」という場を通して社会との接点があるため、SⅠグループが積極型余暇をもたないこととは性質が異なる。さらに、「社会性」だけに限らず、母親の「生き甲斐」として「仕事」ととらえた場合、パート就労の母親とフルタイム就労の母親とでは、自ずと仕事に対する意味合いも異なってくるであろう。

表3-4 母親の余暇

	ケースNo.	在宅型余暇	積極型余暇
S I グループ	9	子が幼稚園に行っている間が余暇になる	
	2	テレビ	姉と買い物
	3	テレビ、友人へ手紙	姉宅へ遊びに
	11	育児日記、書き物、洋服づくり	
	1	新聞、キルト宿題	パッチワーク、バトミントン、水泳、学習
	4	テレビ、本	買い物で気張らし
	5	テレビ、寝ること	
	6		姉宅へ子連れで入り浸り、姉と公園・買い物
	7		ドライブ、車
	8	ぼーっとする	
	24	寝る、新聞読み、手紙	サークル活動準備
S II グループ	13	テレビ、本	
	14	テレビ、ビデオ	母親同士でお茶・昼食
	21	テレビ、雑誌	友人とお茶
	22	新聞読み	
	25	テレビ	車の運転
	10	入浴時、子どもの小物づくり	ショッピング、カラオケ、友人と飲み
	23		語学・聖書学習
	16	読書、テレビ	アートフラワー
	18	子の習い事多く、それに連れていくことぐらい	たまに料理教室、家族できのこ取り、スキー
	12		子が幼稚園時に他の母と出かける
P I グループ	17	新聞読み、流しに立ってるのが好き	月に2度の親業講座
	15	テレビ、新聞、本	
	19	寝ること、日記を書く	
P II グループ	20		気功
	32	ない	
F グループ	27	読書	
	30	テレビ、読書、パソコン	家族とアウトドア、乗馬クラブ
	26	テレビ、読書	
	28	読書、テレビ	
	31	職場のみんなとおしゃべり	バトミントン、
	33	映画のビデオ、読書	
	29	洋裁(子どものものなどを作る)	

注) 空欄は、回答なし。

4. 育児行動と母親の意識

本項では、育児行動の一つとして、子どもの習い事の実際と、その行動に影響を与えているであろう母親の育児に関する意識について考察する。

親が子どもに対して様々な期待を抱くのは、ある意味で当然のことであり、しかも現代のように情報と子ども関連の産業が氾濫している中であっては、期待だけに終わらず、その期待を行動へと移す親も多いのであろう。その行動の一つとして、ここでは子どもの習い事を取り上げる。それは、家庭の収入という構造的な資源に規定されつつも、教育的効果を期待して子どもにお金をかけているという事実から、家族資源の中での（母）親の選択がみられるものの一つであると考えからである。

現在、就学前の子どもに対して、習い事をさせているケースを拾っていくと、SⅠグループでは11人中3人、SⅡグループが10人中7人、PⅠグループが3人中1人、PⅡグループが0人、そして全ての子どもが保育園へ行っているFグループの子どもでも7人中3人が、幼稚園・保育園以外に何らかの習い事をしている（表3-5）。ここでも、専業主婦のグループ間において差がみられた。SⅠグループに比べ、SⅡグループでの習い事をさせているケースは圧倒的に多く、しかも、複数の習い事をしているという特徴である。しかしこれが、「今後（小学校入学時ぐらいまで）、子どもの習い事として、いくらまでかけてもよいか」をたずねていくと、Fグループにおいて高額化の傾向がみられるものの、全般に、どのグループにおいても5千円～1万円という回答が多かった。

こうした習い事の実際は、母親たちの意識をどのように反映しているのだろうか。今回の調査では、選択肢の質問形式による親の発達期待と、自由回答による親の期待とをたずねてみた。

表 3-5 子どもの習い事と費用

	ケースNo.	習い事(3~5歳児について)	今後、子どもにかけてよい費用(一人当たり、月平均)
S I グループ	9	なし	月1万
	2	なし	エレクトーンやらせてみたい
	3	2児とも学研(2人で¥1,650)	¥5,000-
	11	なし	その時の家計によって
	1	プール(¥5,000)	2つまで
	4	なし	子どもがやりたければ...
	5	なし	¥5,000-
	6	なし	1つ~2つ
	7	なし(前はカワイ)	5千円~1万円
	8	なし	1万まで
	24	スポーツクラブ、サークル	1万円くらい
S II グループ	13	学研プレイルーム(ひらがな、数字)¥6,300-	本人がやりたければ...
	14	プール、体操 ¥12,000-	さらに2つぐらい、1万前後
	21	なし	わからない
	22	なし	わからない
	25	なし	1万円(幼に入ったらプールを)
	10	チャレンジ、ミネルヴァ学園(英語)¥10,500-	本人がやりたければ...
	23	英語(第1子は英語、ピアノ)	他に1科目まで
	16	オルガン	わからない
	18	公文、英語、水泳	一人ずつ+¥5,000-
	12	学研プレイルーム(ひらがな、数字)¥7,000-	運動をもう1ヶまで
P I グループ	17	第1子がチャレンジ	¥5,000~6,000-
	15	なし	小学校から¥5,000-
	19	なし	1~3万円
P II グループ	20	なし	1万円
	32	なし	1万円
F グループ	27	チャレンジ	¥5,000~¥8,000-
	30	なし	1カ所、¥5,000-
	26	なし	¥15,000-~¥20,000-
	28	プール、チャレンジ、英語教材(17万)	¥10,000-~¥20,000-ぐらい
	31	プール、チャレンジ	本人のやる気次第で
	33	なし	¥10,000-ぐらい
	29	なし	一人だと2万ぐらい

就学前教育としてどのような領域を重視するかについて、主要5領域（言語・自立・認知・表現・社会）の中から2つずつの項目を提示して、より重要な方を選択してもらった結果が表3-6に示すとおりである⁽¹⁹⁾。数値は、各項目につき、4回の一対比較判断を求めた場合の「より重要」として選択した回数の平均である。したがって数値が大きいほど、その項目を重視している（何度も選択した）ことを示している。

質問した10項目を次に示す。カッコ内は領域を示す。

1. 正しい言葉話すこと（言語）
2. 人に頼らずに色々なことを自分でする習慣（自立）
3. 文字（ひらがな）をよむこと（認知）
4. のびのびと絵をかいたり、ものをつくったりすること（表現）
5. おもちゃを友達といっしょに使うこと（社会）
6. 子どもの歌を歌うこと（表現）
7. ものおじせずに新しいことをすること（自立）
8. ものごとを人と一緒にしたり、かわりばんこにすること（社会）
9. 新しいことばの意味をおぼえること（言語）
10. 数を数えること（認知）

全体を通して「社会」と「自立」の領域が5～6ポイントとより重視され、反対に「認知」の領域が1～2ポイントと軽視されている（相対的に重要ではない）という結果がでており、グループごとの大きな特徴はみられない。強いて差異をあげれば、SⅠグループとPⅠグループにおいて、「表現」が平均より高く重視され、「認知」が平均よりもやや軽視されている傾向がみられる。これらの発達期待がストレートに子どもの習い事という行動に表れているとすれば、特にSⅡグループでの「認知」や「言語」の領域が、より重視されても良さそうなものである。

表3-6 子どもについて重視する領域

	言語	自立	認知	表現	社会
全体平均	2.8	4.9	1.5	4.2	6.5
SⅠ平均	2.1	5	1	5.2	6.6
SⅡ平均	3.9	4.4	2.2	2.9	6.6
PⅠ平均	3	5	0.3	5	6.7
PⅡ平均	6	4.5	2	3	4.5
F平均	1.6	5.4	1.9	4.4	6.7

同様に「子どもへの期待」を自由回答から拾っていく（表3-7）と、多くが「優しく」・「他者との協調性」・「健康」で占められ、その他に「子ども自身が何か打ち込めるものを見つけてほしい」という期待と希望が述べられ、これに関してもグループごとの差はみられない。また、先ほどの習い事との関連で言えば、プールに代表されるスポーツの習い事が、母親の「健康になってほしい」の反映であると言えるのかもしれないが、他は実際の習い事に反映していない。

これらの結果は、何を意味しているのでしょうか。まず第一に、「親の期待」として回答されている内容とは乖離して、習い事の実際が進行しているということである。これは、自由回答において母親が期待する「優しく」・「他者との協調性」・「健康」という内容が、簡単に習い事によって獲得できるものではない性質のものであるためともいえるが、「母親の期待」は幼稚園・保育園で獲得してもらい、小学校入学のための準備などを念頭に置いた、より現実的な目標（字が書ける、数が数えられる、英語が話せる）などは習い事で獲得してもらいたいという、母親の使い分けが成された結果ともみれる。実際、英語などは、4名が習わせていたが、うち3名までが「数年後に導入される小学校での英語教育」をその理由にあげていた。

また、現在の習い事の実際では、年収などに応じて階層的な差が生じていたが、今後の「子どもにかかる教育費」では、グループ間での差がみられない。第2章での結果からも、就学前の習い事が、小学校入学へ向けて一気に実現していくという傾向がみられ、ここで回答してくれた「今後、子どもにかけてよい教育費」は、実際に実現していく可能性が高い。その際、年収の差が最大で5倍ほどある中であって、同様に、子ども一人あたり月に、5,000円～10,000円の費用を捻出していくことは、所得が低い方の家計にとっては大変な負担となる。その大変さを後押ししているのが、母親たちの「期待」に表れていた等質性であろう。「期待」の回答には表れてこない「現実的な期待」も、階層差を越えて母親たちに存在し、その社会的な「標準」を半ば強制的に実現していかなければならないという、外側から創り出される困難さが存在していると考えられる。

さらにここで、注目しておきたいことは、母親たちが育児や教育の機能を商業的なものに委ねているにも関わらず、母親の責任は、一向に軽くなっているということである。先の幼児期の教育の10項目（「正しい言葉話すこと」～「数を数えること」）について、それぞれの項目は、誰が子どもに教えるべきか、その教育の責任についてたずねた結果が、表3-8である。数値は、「全て母親が」を1点とし、「全て先生が」を6点として、1点

～6点の6段階で評定してもらった平均である。従って、得点が低いほど、母親の責任認識が高いことを示している。どの項目も、2点「大体は母親が」～3点「どちらかといえば母親が」が多くなっており、習い事として外部に委託しているものがみられた「Q 3：文字を読むこと」や「Q 10：数を数えること」といった項目でさえ、母親の責任認識は高い。グループでの階層的な相違をみると、最も習い事を多くさせていたSⅡグループでのQ 1～Q 10での平均得点が2.73とあり、SⅡグループの母親が、他のどのグループの母親よりも、その責任を大きく認識していることがわかる。

表 3-7 子どもへの期待

	ケースNo.	子どもへの期待
S I グループ	9	わからない
	2	好きなことやってもらいたい
	3	相手の気持ちわかる優しい子、大人になって人と付き合い大事
	11	自分の意見を言える子、他人の気持ちが分かる子
	1	相手の気持ちをわかってあげられる、好きなようにのびのびと
	4	それなりの仕事に就いてくれれば
	5	他人に迷惑かけず好きなように
	6	他人に迷惑かけず好きなように、後は本人の意志次第
	7	元気であればいい、期待はプレッシャーになるのではない
	8	自分の考えをちゃんという子
	24	生きて行ける智恵を、後は子どもに合わせて考える
S II グループ	13	いじめる側になってほしくない、良し悪しの区別が出来る子
	14	いっぱいあるが、強い意志をもって優しい子
	21	優しい、他人の気持ちわかる、元気で
	22	会話が出来るように、第2子は友達をいっぱい、夫は第3子に対して野球・合気道を
	25	第1子は元気で幼稚園へ通えるように、第2子は期待なし
	10	今精一杯育てているので結果次第、思いやりのある優しい子
	23	宣教師になって欲しい、他は子どもが決める
	16	転勤が多いのでどこへ行っても順応できるように、心身共に健康で
	18	世間の道理に外れなければ、普通に育ってくれれば、夫は一人は医者になって欲しい
	12	大人になって好きなことを見つけられる、自分のある子
P I グループ	17	自分の意見を言える子、兄弟で助け合って…
	15	人に優しくみんなから好かれる子
	19	精神的に強くなってほしい
P II グループ	20	期待しないで期待する、のびのびと。何か1つ見つける、健康で
	32	なよなよせず、多少きかなくてもたくましく(イジメに遭わないように)、明るく元気で他人に優しい
F グループ	27	元氣、おりこうさん、優しい思いやりのある子、
	30	健康で素直な子
	26	素直で元氣な子、世間の規範から外れないように、将来は成績を気にするかも(両親とも高学歴なので)
	28	協調性があって周囲に目がいく子、夫はみんなから嫌われずに友達を多く
	31	平凡に道に外れないように、勉強よりも運動を頑張っ、何かに一生懸命だと他もがんばれる
	33	他人に優しい、自分で生きて行ける精神的なたくましさ、できれば自立できる仕事を…
	29	健康になってくれれば、夫は、将来食べていけるように手に職を…

表 3-8 誰が教えるべきか

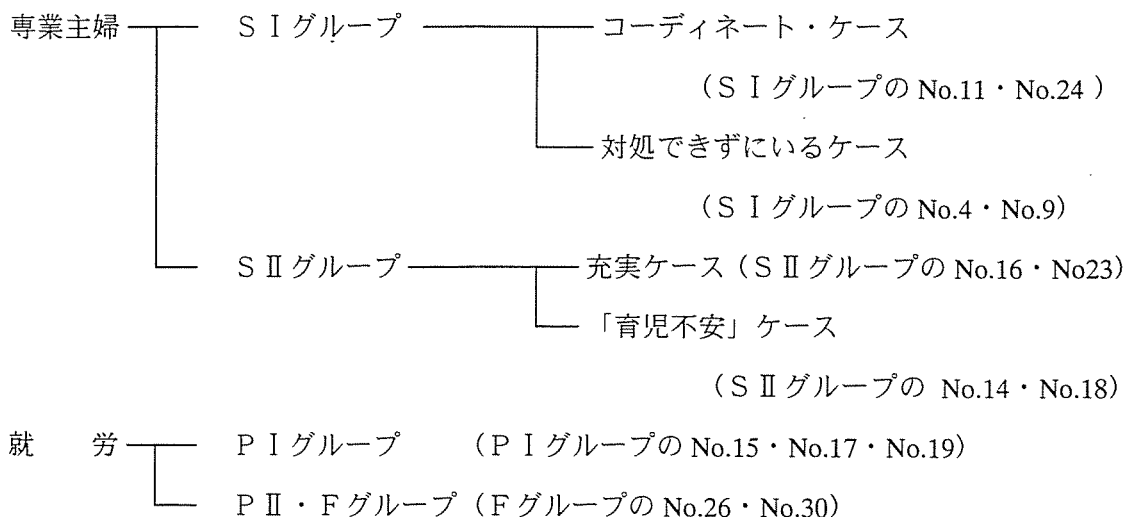
	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5	Q 6	Q 7	Q 8	Q 9	Q 10	Q 1～Q 10での平均
全体平均	2.4	2.6	2.8	3.4	3.2	3.6	3.0	3.0	3.0	3.0	3.00
S I 平均	2.5	2.5	2.7	3.6	3.4	3.9	3.2	3.1	3.3	3.2	3.14
S II 平均	2.2	2.5	2.7	2.9	2.6	3.3	2.8	2.5	2.9	2.9	2.73
P I 平均	2.3	3	2.7	4.0	4.0	3.7	2.7	3.7	2.7	3.0	3.18
P II 平均	3	2.5	4	3.5	4	4	3	4	2.5	3.5	3.40
F 平均	2.6	2.6	2.9	3.3	3.3	3.6	3.0	3.1	2.9	2.9	3.02

第3節 母親の行動にみる資源の活用

前節では、母親たちの社会的な位置によって、自分たちの操れる資源が一定部分、規定されていること、また、そこでの困難性にも、階層的な傾向性があることを確認した。さらに、それらの困難性は、個々の家族がもつ困難さに加えて、意識レベルでとらえる「育児の標準」に向かって、強制的に実現していくことから創り出されていく可能性があることも示唆した。

本節では、個々の家族の資源に制約があるなかで、母親の主體的な側面に注目し、母親が資源をどのように活用し、その結果、解決できる問題と、それでも残されてしまう問題とが何であるのかをケースを検討していくことで明らかにしていく。

以下、下の分類に従って、順に検討を進めていく。



1. 専業主婦の「育児不安」と育児困難

(1) S I グループ

専業主婦のなかでも相対的に世帯年収の低いS I グループは、生活上の悩みを答えている母親が多いにもかかわらず、その悩みを解決するために母親が活用できる資源は制限されていた。親戚以外の社会的なネットワークも少なく、年収も限られているなかにあっては、「育児」を母親以外の人やサービスに外注することも難しく、精神的にも肉体的にも母親一人が担う部分が多くなってくる。しかも、その疲労を回復するための自分の余暇においても、本来は生理的活動である「寝ること」を、自分のための趣味・余暇の項目とし

てあげている母親がいた。

ここでは、S I グループのなかでも、資源をコーディネートして育児をやりくりしている母親 2 ケースと、家族の問題に対して母親が対処できずにいる 2 ケースを取り上げて考察する。

①コーディネート・ケース

最初に、生活が困難な状況の中で、母親が育児資源をコーディネートしている 2 ケースのプロフィールを述べる。

No.11 ケース

家族構成は、夫 37 歳、本人 31 歳、第 1 子（男児）5 歳、第 2 子（女児）3 歳、第 3 子（男児）1 歳の 5 人である。家族の健康状態は良好であるが、第 1 子の発音がやや不明瞭であることを母親が少し心配している。

夫は、印刷関係の仕事で、年収は 200 ～ 300 万円未満の範囲にある。住居は、賃貸のアパートで市内から越してきて 8 ヶ月になる。母親の学歴は、働いていたため通信教育で高校卒業の資格を取る。

・ネットワーク：第 1 円～子ども、夫、両親、親友（Maternal）、幼稚園の先生。

第 2 円～友人（学生時代）。

第 3 円～幼稚園のお母さんたち、近所。

・生活の悩み：第 1 子が生まれた頃、夫が転職し、夫も精神的にキリキリしていたため、それが母親へあたり、母親も子どもへとあたってしまったことがあった。

・育児の悩み：第 1 子が、小さい頃人見知りで、不安だった。現在は、肉体的・体力的にしんどい。

3 人目を産んでから、母親自身が寝込むこともある。

No. 2 4 ケース

家族構成は、夫 31 歳、本人 30 歳、第 1 子（男児）3 歳、第 2 子（女児）1 歳の 4 人である。家族の健康状態は夫がアレルギー神経症腸炎、第 1 子は言葉が遅く保健所や児童相談所へ相談し、週に一度「ことばの教室」へ行っている。母親自身と第 2 子は良好である。

夫は、現在、建設関係の仕事をしているが、田舎で第一次産業をしたいと転職を希望している。現在の年収は 300 ～ 500 万円未満の範囲にある。住居は、市営住宅に住んで 5 年になる。母親の学歴は、高校卒業である。

・ネットワーク：第 1 円～子ども、夫、妹、自分の父親。

第2円～近所（団地内）、友人（育児サークル）、義父母、弟。

第3円～遠い親戚、自分の母親。

- ・生活の悩み：祖母（自分の母親）が精神病を患っているが、それが第1子の出産前後に発病し、祖父（父親）も祖母（母親）と別居、病院へのお見舞いと週に一度の実家の父の様子を見に行くという生活で、マタニティ・ブルーになった。現在は、落ち着いている。

今の悩みは、夫の転職希望で生活のめどが立たないこと。

- ・育児の悩み：第1子が1歳6ヶ月頃から、言葉が遅かった。

生活の悩みと重なって、子どもに言葉の遅れがあるが、田舎へ行くと、子どものための相談機関も少ないため心配である。

【一日の流れ（図3-1・図3-2）】

これらの母親の一日の流れをみると、時間を有効に活用している様子うかがえる。洗濯機を回しながら朝食の用意をしたりというような時間の並行活用や、No.11 ケースは昼食の後かたづけと同時に夕食を用意してしまうことで、また No.24 ケースは夕食後の後かたづけを次の日の朝にもってくることで、忙しいなかにも子どもと遊ぶ時間や家族との団らんの時間を積極的に創り出している。

両者の母親とも、「積極型余暇」を楽しめる余裕はないが、夜、子どもたちが寝てからの「在宅型余暇」を楽しみに一日をやりくりしている。しかし、それらも No.11 ケースでは夜 10 時から、No.24 ケースでは、夜中の 12 時から起き出して楽しむ「余暇」であり、その時間はせいぜい 1～2 時間程度であり、全国的な平均よりは少ない⁽²⁰⁾。これらの母親にとって、自分のための時間を長くするためには、睡眠時間を削ってしか捻出できない。

図 3-1 No.11 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
6:00 ～ 6:30	起床 食事の用意（週に1度お弁当）洗濯 子どもにご飯を食べさせる 身支度用意	6:00 Ch.1 起床 7:00 夫起床 一緒に朝食
8:00 ～ 8:30	幼稚園へ行く	8:15 夫出勤
8:40	幼稚園で下の子と一緒に遊ぶ	
9:30 ～ 9:40	帰宅 洗濯干し 家の掃除	Ch.2 と Ch.3 で遊んでいる
11:00 ～	母親も一緒に子どもと遊ぶ	
11:30 ～	昼食用意	
12:00 ～	昼食 後かたづけ 夕食の用意	12:00 夫帰宅昼食 12:55 夫出社 1:00 ～ 4:30 の間で Ch.3 昼寝
2:00	幼稚園お迎え 外で1時間遊ぶ（公園か友人宅）	
5:00	帰宅 夕食用意	
5:30 ～	子どもたちだけで夕食	
6:00 ～	子どもと母で入浴	
7:00 ～	夫の夕食用意 夫と母親自身の夕食	7:00 夫帰宅
～ 8:00	後かたづけ終了	8:00 Ch.1 寝る
9:00	子ども寝かせる	9:00 Ch.2 と Ch.3 寝る
10:00 ～	自分の時間 洗濯 ・育児日記などの書き物 ・家計簿づけ ・洋服づくり ・夫と一緒にビデオ、テレビ	
11:00 ～ 12:00	母寝る	12:00 夫寝る

注）Ch.1・Ch.2・Ch.3 とは、それぞれ第1子・第2子、第3子のことを示す。

図 3-2 No.24 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉 〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
5:30 ～ 6:00	起床 前日の夕食の茶碗洗い 洗濯 夫の弁当づくり 食事の用意 新聞読み、休憩 子どもと母でご飯	5:30 ～ 6:00 夫起床 7:15 夫出勤 7:30 ～ 10:00 の間に 子ども起床
10:00 ～	子どもと遊びに出かける (公園か育児サークル、 週に1度スポーツクラブ)	
12:30	帰宅 昼食用意 昼食 テレビを見て子どもと一緒に昼寝 新聞読み、読書	1:30 ～ Ch.2 昼寝 3:00 ～ Ch.1 昼寝
5:00 ～	家の掃除	
6:00 ～	夕食の用意	
7:00 ～	夕食 家族で団らん 入浴	7:00 夫帰宅 夫と子で遊ぶ
9:30 ～ 10:00	家族みんな(夫も本人も)で寝る	
12:00 ～	時折、起き出して、育児サークルの仕事や 手紙書きやワープロなど。	

【問題の解決】

次に、それぞれのケースの生活や育児の問題について、どのように解決を図ってきたかをみていく。最初に No.11 ケースについて生活の悩みをみると、子どもが産まれるまでは夫婦で美容師をしていたが、子どもが産まれて母親が仕事を辞め、夫は印刷関係の仕事に転職した。このことは夫自身にとってもストレスの高いものであったと思われる。そうしたストレスを母親が受け止めることとなるが、母親自身は、その悩みを学生時代の友人の所へ遊びに行ったり、そこで話をすることで解消していた。育児の悩みについても、かつて、第1子の人見知りがかかなり強く、幼稚園でも友達の水輪のなかに入っていけないことが契機になって、子どもも母親自身も「この先どうなるか」と「育児不安」になったという。その時は、図書館で何冊か本を借りてきて読んだが、結局、母親自身が楽になったのは、実家の母親や幼稚園の園長先生や担任の先生に相談することを通してであった。この母親は、そうした経験が影響してか、ネットワークが広く、第1円に幼稚園の先生や子育てを通しての Maternal 友人が入れられ、第2円、第3円にも広く友人が分布している。現在の住居に引っ越してきて1年未満であるが、第3円に近所でのネットワークも形成されている。母親が考える「育児不安」についてたずねても、子どもと二人きりでいることが原因であり、育児しているときの親の不安が「育児不安」であると回答している。

こうしたネットワークをもつ母親であっても、現在の育児の問題である肉体的・体力的な大変さは解消されていない。育児の大変さと「育児不安」は異なるものであると母親が回答するように、子どもを3人もつようになって、子どもはみんなそれぞれ違うということや、卒にはめようとするものの無意味さはわかったが、日々の生活の困難は増大し、3人目を産んでからは母親自身が寝込むこともあるという。この世帯にとって、お金がかかるのは食費であると答えているように、母親の育児を省力化するための外食の利用やクリーニングの利用など商業的なサービスを買って時間をつくり出すことは経済的に難しい。休日の過ごし方にしても、どこかへ出かけると大きな出費となるため、実用をかねた1週間分の買い出しや、近所の公園、または道内の実家へ遊びに行くことでレジャーとしている。この世帯の年収は税込みで「200 ～ 300 万円未満」という回答であるが、反対に、この世帯の生活保護基準額から年収を算出すると 2,795,780 円となる⁽¹⁾。回答しやすさの配慮から、年収は金額に幅をもたせて記号で選んでもらう形式にしたため、この世帯の年収が回答の上限に近いのか下限に近いのかは判断できないが、No.11 ケースには税込みの年収で回答してもらっていること、また先ほどの基準額が回答の幅の上限に位置しているこ

とから、この世帯が生活保護基準と同等か、それ以下の年収でやりくりしていると思われる。

No.24 ケースの場合は、どうであろうか。このケースの生活の悩みは、祖母（自分の母親）の精神病の発病と第1子の出産が重なり、子どもが2ヶ月の頃に祖母は入院、祖父も祖母と別れて家を出ることから、自分が小さい子どもを抱えて祖母の病院へのお見舞いや祖父の家へ訪問などを、妹と分担をしてやっていたが、それでも疲労から母乳もでなくなってしまった。姑も心配して来てくれていたが、姑に頼ったことがないので、かえって気を使ってしまったという。結局、時間とともに、それぞれの生活が表面上落ち着いて、現在に至っている。この家族が住んでいる団地の目の前に認可保育園があり、当時、自分もそこを利用したかったが「母親が働いていないとダメ」といわれて利用できなかった。反対に、第2子が生まれる前後の2ヶ月は、「保育に欠ける」という条件に合って預けることができた。とても近いし、お金の面でも助かったと話していた。

育児の悩みについては、子どもが1歳6ヶ月頃から、子どもとの言葉が通じないことにおかしいと気づいたが、その時は、第2子もいたことから電話で保健所に相談した。当時は、子どもを通して知り合った友人に話して「そんなものだね」と言ってごまかしていたり、赤ちゃん用品の卸業者が配布している育児情報誌や地域の育児情報誌を読んでいた。子ども自身の言葉の問題は、まだ残っており、ことばの教室へも通っているが、母親自身の悩みは、現在入っている2つの育児サークルで緩和されている。これらのサークルは、一つが母親が新聞広告で独自に見つけだしてきたサークルであり、もう一つは「仲良し子ども館」に代わってできた「遊びの広場」⁽³⁾を通してできた自主サークルである。先ほどの保育園にしても、この度新しくなった「遊びの広場」にしても、この母親の行政への不満は高い。「遊びの広場」の新しいプログラムでは、1年間継続ではなく1年を4期に分けて、その1期間にしか参加できないという短期間のものなので、子どもも親もプログラムに慣れる前に、他のお母さんたちと仲良くなる前に終了してしまう。それでも、自分たちでサークルをつくり、市の保母が出張で遊びの指導をしてくれることになっていたが、実際に連絡をしても「保母が忙しくていけない」と断られてばかりで、結局、母親たちをとりもってくれるプロのアドバイスは受けられなかったそうである。この母親も、育児サークルと団地での Maternal 友人とを中心にして、育児のネットワークは充実しており、その中で育児を楽しんでいる。母親に、一日のなかでの楽しい時間をあげてもらおうと、夜中の自分のための時間とともに、子どもとのやりとりや、子どもと一緒に遊ぶ時間をあげ

ている。

こうした、母親のやりくりのなかで育児のネットワークをひろげ、何の問題もなく楽しい育児をしてる母親でも、現在抱えている生活上の不安は解消できない。夫の田舎への転職希望が、児童相談所の相談を訪れるきっかけとなっているように、生活のめどが立たないという不安とともに、子どもの言葉のための適切な機関が、転居先でも保障されるかどうかの不安がある。これまでの行政への不満も重なって、先取りした心配となってしまう。また、将来、祖母の病状が悪化した時には、再び、母親自身の育児も巻き込んだ生活が逼迫してしまうというリスクを背負っている。彼女にとっての「育児不安」は、自分が自分の母親から子育てを教えてもらった経験がないという不安が常に心の底にあること、と答えている（彼女が3人兄弟の弟と妹の面倒をみてきた）。これらは、充実した育児サークルをもっても解決・解消されない領域であろう。

②対処できずにいるケース

今度の2ケースは、資源の制約もあり、母親のコーディネートも十分に発揮できずにいるケースである。先のケースと同様に、2ケースのプロフィールからみていく。

No.4 ケース

家族構成は、夫22歳、本人22歳、第1子（男児）3歳、第2子（男児）7ヶ月、母方の祖父45歳、祖母44歳の6人である。家族の健康状態は、祖母が腎臓透析を受けており、週に3回、母親本人が送り迎えをしている。他の家族員は良好である。

夫は、建築関係の仕事であるが、母方の祖父の仕事を手伝っている。2人とも18歳で結婚して以来、仕事・住居ともに全面的に母方の両親を頼っている。年収は300～500万円未満の範囲にあるが、祖父母に出してもらっている部分が多い。母親の学歴は、中学卒業である。

・ネットワーク：第1円～第2子。

第2円～両親、夫、第1子。

第3円～なし。

・生活の悩み：結婚と妊娠が同時であったため、その時の生活をどうするかで大変だった。

今は、生活では落ち着いたが、自分たち（夫と自分の子ども）の家族という実感がなく、親と別居しようか迷っている。

・育児の悩み：第1子が、祖父母ばかりで自分になつかない。第2子は可愛いが、第1子は、このま

まだと自分の子どもという気がしない。

No. 9 ケース

家族構成は、本人 26 歳、第 1 子（女兒） 5 歳、母方の祖父 57 歳、祖母 53 歳の 4 人である。家族の健康状態は、良好である。

本人は専業主婦をしており、祖父の生計で家族 4 人が生活している。年収は 200 万円未満の範囲にある。母親の学歴は、中学卒業である。

・ネットワーク：第 1 円～両親、姉、友人（学生時代）。

第 2 円～なし。

第 3 円～なし。

・生活の悩み：第 1 子が生まれた当時が大変だったと回答してる。（それ以上は、話したがらない。）

・育児の悩み：第 1 子が小さいときは、おむつやミルクで悩んでいた。

現在は、子どもへの叱り方がわからない。

【一日の流れ（図 3-3・図 3-4）】

これらの母親の一日の流れでは、どちらも両親と同居しているため、先のコーディネーターケースに比べると、一日の流れのなかで受けもつ育児・家事の分担が少ない傾向がみられる。単に時間的に少ないだけならば、就労していて祖父母と同居の場合のケースなどにもみられるであろうが、母親たちが子どもの「母親」としての生活よりも、祖父母にとつての「娘」としての生活を送っている様子がうかがえる。

それでも No. 4 ケースは、祖母が週に 3 度病院へ行く日には母親が家事を受けもち、第 2 子についての養育は母親がリードして行っていることから、彼女なりに担っている領域がある。第 1 子についても、朝食を食べさせようとしたり、犬の散歩を子どもと連れだつて行くなど、子どもとの距離を小さくしていこうと試みてはいるが、第 1 子の方が一向に母親になつかず、甘やかしてくれる祖母の方へと行ってしまふ。昨年のゴールデン・ウィークも家族（夫と自分と子ども）で連れ立って外出したが、第 1 子が祖母と一緒にないことから泣いてしまつて、母親自身にとっても楽しい時間は過ごせなかったという。それ以来、最近は家族だけで出かけようとは思わないと話している。今の母親にとっての気晴らしは、家にいることが好きではないので、みんなで買い物に行くことぐらいで、生活の中

での積極的な楽しみは見いだせないでいる。

No.9 ケースは、回答全体を通して、あまり話したがらない母親であったので、得られた情報が少ないが、一日の生活のなかで空欄となる箇所について「どのように過ごすことが多いのか」を再度たずねても、母親自身があまり思い出せず、強いていえば「テレビを見たり、本を読んでいた」という回答で、漫然と一日を過ごしている。この母親にとって、一日のなかで楽しい時間とイライラする時とをたずねると、楽しいのは子どもが幼稚園へ行っている間に買い物へ行く時で、反対に第1子が帰宅後は、「騒がしくてイヤ。」と答えている。

図 3-3 No.4 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
5:00	起床 夫の弁当づくり	6:00 夫起床 6:30 夫出勤
7:00	夫の弁当がない日の起床 朝食 子どもも食べさせたいが、食べない。	7:00 Ch.1 起床
8:40	幼稚園へ行く	
9:30	帰宅 洗濯 家の掃除 (週 3 回は祖母が病院のため、送りお迎え と家の家事は母親本人がする)	Ch.2 起き出して、2 時間 ぐずる。
11:00 ~	午前保育の時の迎えの時間 テレビを見たり読書 昼食	Ch.2 昼寝するときとしな いときあり。
2:00	午後の保育の時の迎えの時間 買い物へ、Ch.1 は祖母についていく (必ず、ねだって何か買ってもらう)	
6:00 ~	夕食 入浴 テレビ 犬の散歩 (Ch.1 も一緒) テレビ	9:00 Ch.1、祖母と寝る Ch.2 寝る (昼寝なしだと 8:00 ~ 9:00、 昼寝すると 10:00)
11:00	母寝る	

図 3-4 No.9 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉 〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
7:00	起床 掃除 家事は、親と半分ずつ行う。 朝食	7:00 すぎ Ch.1 起床
8:30 ～ 9:00	幼稚園へ行く 帰宅 掃除 洗濯 一人で買い物	
11:00 ～	午前保育の時の迎えの時間 昼食 公園へ行く	
2:00 ～	午後の保育の時の迎えの時間	
4:00	夕食用意	
6:00 すぎ	家族みんなで夕食 後かたづけ	
7:00	入浴 テレビ	
10:00	母寝る	8:30 Ch.1 寝る

【問題の解決】

問題の解決については、どうであろうか。No.4 ケースにとっての生活の悩みは、育児の悩みにも表れているように、親世帯への生活の依存とそこから派生する育児実感の無さにある。一日の流れのなかでみたように、この母親も子どもへ接近するためのアプローチは試みているが、子どもからの拒否と祖母による孫への溺愛とで、うまく機能していない。母親が思う「育児不安」をたずねても、「育児じたいしていないから…不安も何もない」という回答であった。けれど、「児童虐待」についての感想をたずねると、「(子どもに)言っても聞かないときなどは、(虐待する親の)気持ちは分かる。カットしたら…何でこんなにしてあげてるのに…と思う」と答えている。「育児不安」は無くとも、児童虐待をしてしまう母親の気持ちには共鳴する部分もあり、(この母親が児童虐待に結びつくという意味ではなくとも)表に現れている「育児不安」を無くすることが児童虐待を防げる、という考え方は、やはり一部分の母親に対する説明にしかない。この母親に対して、周囲の人々はどのように対応しているのだろうか。まず、母親のネットワークをみていくと、母親の両親と夫・子どもだけのメンバーであり、他の友人・知人は円内に記入するほどではないと言う。彼女にとっての友人は、中学時代の友人が主で、この地域や現在の幼稚園を通しての友人はみられない。今回の被調査者のなかにも、No.4 ケースと同様に10代で母親となっているケースもみられ、そのケースはNo.4 ケースとの親近感ももっているが、No.4 ケースにとっては、一定の距離を置いて付き合いたいと話している。また、最も身近にいる祖父母の対応は、結婚の時から親に依存して生活してきているという経緯もあり、娘世帯が独立して(家を出て)自分たちの世帯を築くのは無理と反対している。母親自身は、それでも独立してやってみたいと思う反面、祖母の健康状態の心配もあって、親たちが寂しさからも独立に反対するのであるという気持ちを汲むと、喧嘩してまで家を出る気にはならない。間に立っている夫は、母親の意向に従うと言っており、反対もしない代わりに責任感も弱い。その結果、現状の生活を過ごすこととなり、母親が育児をしようにも、第1子が泣いてわがままを言い、祖父母がそれに従い、母親の子どもや育児への意欲も失せていくという悪循環が生じている。

No.9 ケースの場合も、生活の悩みと育児の悩み(問題)が重なって生じているように思われる。母親自身が訴える悩みとしては、ポツリポツリと過去の悩みについて、子どもが産まれたときに生活全般に大変だったことと、子どもが小さいときのおむつやミルクの仕方で悩んだことを話してくれた。こうした問題は、祖母が手伝ってくれることで、後は

姉に聞くことで解決してきたという。第1子ということで保健婦の訪問もあり、育児書や育児雑誌も読んだが、有効なサポーターとはならなかったらしい。この母親は、前節のグループ分類の箇所でも述べたように、子どもの出生と同時に親世帯との同居をはじめており、母親一人での育児も生活も、親がかりでしか成立しなかったであろう事情があったと思われる。そのためか、このケースも No.4 ケースと同様に、母親のネットワークは小さく、学生時代の友人以外は地域でも幼稚園でもネットワークが広がっていない。

現在の悩みをたずねても、母親からは「悩みは特にはない」と回答していた。プロフィールのところに載せてある現在の育児の悩みは、「育児不安」をたずねていくなかで、子どもが言うことを聞かず、祖父母は何でも「いいよ」と対応してしまうので、子どもにとっては善し悪しが分からず、その結果、叱るのが自分だけとなり、叱り方がわからないという話が出てきていた。一日の流れのなかでは、母親が育児自体を放棄しているかのようにも見受けられるが、休日には、子どもも連れて買い物へ行くといった行動もみられる。母親自身、何が問題かを認識できずに日々を過ごしてしまっているように見受けられる。今後の生活の予定をたずねると、子どもが小学校2・3年生くらいになったら、パートに出たいと話していた。

これら2つのケースに共通してみられることは、母親としての生活の基盤が成立していないために、どちらも育児を主体的にすることはなく、その結果、育児の楽しみも悩みも認識されていないことがあげられる。また、両ケースともに、それを気づかせてくれたり、解決するための励ましをくれるようなネットワークも形成されていないことから、問題が顕在化しないまま放置されてしまっている。家族や親族のネットワークの重要性と限界とが、両ケースともにみられた。

（2）SⅡグループ

これまでみてきたSⅠグループに比べ、SⅡグループは、同じ専業母親でも母親がコーディネートできる育児の資源は多い。また、SⅡグループでは、SⅠグループのNo.4・No.9ケースのようなコーディネートできずにいる母親の存在はみられなかった。SⅡグループの10ケース全てが、程度の差こそはあれ、比較的恵まれた育児資源の中から、家族の状況や母親自身にあった資源を取捨選択し、育児環境を整えていた。しかし、その中であっても、育児のストレスを感じずに自分の生活を楽しんでいる母親と、「育児不安」を常に高く感じている母親とが存在した。ここでは、その対照的な母親を2ケースずつ取り上

げて、両者を分けている要因は何であるのかを考察していく。

①充実ケース

No.16 ケース

家族構成は、夫 39 歳、本人 34 歳、第 1 子（女兒）4 歳の 3 人である。家族の健康状態は、全員良好である。

夫は、団体職員で、年収は 700 ～ 1000 万円未満の範囲にある。住居は、社宅に住んで 4 年になる。以前は、札幌市以外の道内の社宅に住んでいた。母親の学歴は、短大卒業である。

・ネットワーク：第 1 円～夫、子ども、自分の両親、妹、夫の親、もとの職場の友人。

第 2 円～なし。

第 3 円～社宅内の友人・知人、自分の習い事での友人。

・生活の悩み：特になし。

・育児の悩み：2 歳半～3 歳半にかけて、ウンチがおむつにしかできなかった。

No.23 ケース

家族構成は、夫 36 歳、本人 31 歳、第 1 子（女兒）4 歳、第 2 子（男児）3 歳の 4 人である。家族の健康状態は、第 1 子が生まれたときに足の外ハンがひどくて、1 年間通院した。第 2 子は 2 歳の頃から言葉の遅れが気になっており、保健所やことばの指導、児童相談所へ相談に行った。ことばについては、第 1 子も遅い方だった。夫と本人は良好である。

夫は、製菓関係の仕事で、年収は 700 ～ 1000 万円未満の範囲にある。住居は持ちマンションで、市内より越してきて 3 年になる。母親の学歴は、専門学校卒業である。

・ネットワーク：第 1 円～夫、友人（マタニティ・スイミング）。

第 2 円～自分の母、近所のお母さん、教会のお母さん、幼稚園の先生。

第 3 円～同じマンションの友人（Maternal）、弟のお嫁さん、夫の母。

・生活の悩み：精神的に辛かったのは、マンションに引っ越してきたばかりの頃の人間関係。

・育児の悩み：第 1 子が生まれたときの足の問題。体力的には第 2 子が生まれたばかりの頃。

【一日の流れ（図3-5・図3-6）】

No.16 と No.23 ケースの一日の流れをみると、両ケースともに、自分のための余暇や学習の時間が積極的に組み入れられている。また、そうした時間を創り出すために、時間を効率的に使っている様子もうかがえる。No.16 ケースでは、子どもが幼稚園へ行く前に一気に家事を片づけ、昼食時には夕食の用意も同時にしてしまうといった効率の良さから、午前中の子どもが幼稚園へ行っている時間と子どもの就寝後を自分のための時間として、4～5時間確保している。このケースは、夜中の夫の軽食も含めて、夕食の準備の回数が多いにも関わらず、これだけの時間が確保できている。同様に No.23 ケースも、子どもが幼稚園へ行く前の朝の時間と、昼食後の家事を効率的にこなしており、また、朝から夜を通して、隙間の時間を惜しんで自分の英語学習の時間として使っている。どちらも、自分の時間をきちんと確保しつつも、子どもと外遊びに出かけたり、おやつを作ったり、絵本を読んだり、子どもとの生活も大切にしている。

図 3-5 No.16 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
7:00	起床 朝食用意 掃除 洗濯 朝食	7:30 夫起床 ↓ 7:50 出勤
9:00 ～ 10:00	幼稚園のバスへ 家事の続き	
10:00 ～	自分の用事 ・ 買い物 ・ 自分の習い事 ・ 幼稚園の仕事 ・ 町内会の役員の仕事	
12:00 ～ 2:00	昼食用意+夕食用意 昼食	
3:00	Ch.1 帰宅（週に一度 12:00 帰宅） Ch.1 おやつ	Ch.1 夏は外遊び
5:00 ごろ	Ch.1 夕食（お腹がすいて待てない）	
6:00 ごろ	母親夕食 後かたづけ（入浴前に終わらせる）	
7:00 ～ 8:00	入浴	
8:00 ～ 9:00	絵本読み	8:00 ～ 9:00 Ch.1 寝る
9:00 ～	母親自身の時間 ・ アートフラワー ・ 読書 ・ テレビ	
10:00	夫の食事用意	10:00 ごろ 夫帰宅 軽食
11:00 ～ 12:00	母寝る	

図 3 - 6 No.23 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
6:00	起床	
～ 6:30	朝食づくり、お弁当づくり	
～ 7:00	聖書の学習	
7:00 ～	朝食 洗濯 家事をしながら Ch.1 の文字勉強（15 分）みる Ch.1 と Ch.2 の英語のビデオ	夫も子どももみんなで朝食
8:30	幼稚園のバス停へ	8:15 夫出勤 8:30 ～ Ch.1 幼稚園へ
9:30	帰宅 家事の残り、自分の英語の勉強	Ch.2 は一人遊び
10:30 ～	Ch.2 と外へ ↓	
12:00 ～	帰宅、昼食 夕食の下ごしらえ 家事の残り、自分の英語の勉強	
2:30	Ch.1 帰宅	
3:00 ～	おやつ	
3:30 ～	子どもたちと外へ ↓	
5:30	帰宅	
6:00 ～	夕食	
6:30	子どもと入浴	
7:30 ～	子どもに絵本読み	7:30 夫帰宅、夕食
8:00 ～	家事の残り、自分の勉強の宿題 （週に一度、講師が自宅に来て夫と一緒に英会話の学習） ↓	8:00 子ども寝る
11:30 ～ 12:00	寝る	

【問題の解決】

これらのケースは、どのように育児や生活の問題を乗り越えてきたのであろうか。No.16 ケースからみていくと、この母親にとっての育児の悩みは、子どもが2歳半～3歳半の時期に、オムツはとれていたがウンチだけはオムツでしかできない、というものであった。この時は、医師や専門職の友人に相談し、「時間をかけてみていこう」・「子どもが、トイレのことを意識しすぎないように…」といったアドバイスを受け、便を柔らかくする薬も処方してもらった。それに加え、母親も繊維食を中心にした食事を作ることによって、子どもがウンチをするときの痛みが取れて、自信がつき、自然とトイレでできるようになったという。その他には、これまでも現在も、大きな育児の悩みはなく、淡々と育児をこなしている。この母親のコーディネートの特徴として、情報の収集力のよさがあり、しかもそれらの情報に振り回されずに、自分で取捨選択できていることがあげられる。それは、当時義務化が外され、任意となった子どもの予防接種についても、幼稚園選択についてもみられた。この母親が、これまで「育児不安」を比較的感じるものがなく来られたのは、「子どもと部屋で2人で向きあっているよりも」という考えから、3歳児保育で現在の幼稚園に入園させた要因が大きいのかもしれない。こうした幼稚園の入園時期に関しても、事前に友人や情報誌からの情報を集め、彼女の判断を下している。彼女のネットワークは、心理的にごく近くのネットと、やや距離を置いてのネットとの、二つのカテゴリーにネットワークが分けられているのが特徴である。近所に住む自分の両親と、市内に住む親族、および元の職場の友人が、ごく親しい第1円としてあげられ、第2円には該当者はいないが、第3円に、地域や自分の習い事を通して広がった多くの友人があげられている。

また、生活の悩みを聞いてみても、結婚してこれまで、生活の困難さに直面したことはないという。このケースの夫の場合、仕事のために家にいる時間も短く、夫の協力も得にくいことから、専業主婦としての不満についてもたずねてみた。その結果、家にいるだけでも、幼稚園のPTAや町内会の役員やボランティアなどで出る機会が多く、自分が専業主婦として「家に閉じこもっている」という感じもしない。働いているよりは家にいなければならないのかもしれないけれど、その分、自分で時間を好きに使えるという自由さがあると回答していた。夫に関しても、仕事から協力は難しいが、その分金銭的にも育児にも家事にも、完璧を要求されず、うるさくなくないので不満はない。また社会的には、長年働いてきた経験から、女性が仕事と育児を同時にこなすことの大変さと、中途半端にすることでの周囲の迷惑も知っているので、そんなに無理して働くよりも今の生活を大切に

しようと思っている。これが、特別の資格をもっているとか、お金に困っているとかであれば、話は違うと思うけれど…と話していた。

No.23 ケースの母親にとって育児の悩みは、第1子の生まれた頃からの外反足である。第1子が1歳ぐらいの時に、装具をつけようかという話もあったが、親戚の看護婦をしている人を通して専門の医師に相談し、「装具はいらない」ということになった。当時は、よく転び、歯や顎にケガをしやすかった。母親は自分の注意でケガを防げると思って、常に注意をしていて疲れたという。この当時、夫や自分の母親をはじめ、マタニティ・スイミングで知り合った友人が看護婦ということもあって、よく相談していたという。No.23 ケースの母親のネットワークをみると、現在でもこのマタニティ・スイミングの友人は第1円に属しており、重要なサポーターとなっている。この母親も No.16 ケースと同様に、自分のネットワークのメンバーを活用して相談をし、情報を得ることで問題を解決している。生活の悩みとも重なって、精神的に辛かったことは、現在のマンションに引っ越してきた時の人間関係であったという。最初、No.23 ケースの母親は、子どもを預け合ったりできるような、同じマンション内での育児を介したネットワークを広げようと、他の母親たちに話しかけをしたり、子どもたちを家へ呼んだりと働きかけるが、周囲の親たちにとっては、表面的な付き合い以上のものを望んではいなかった。次第に No.23 ケースは、マンションの外へとネットワークを広げていくことになる。当時は、この母親が外にネットワークを広げていくことで、マンション内での悪口に悩まされたこともあったが、現在はマンションを越えた「近所」でのネットワークが支えとなって、気にならなくなったという。ネットワークのメンバーを見ても、マンション内では一人だけが第3円に属しており、他の「近所のお母さん」たちの方が第2円と、母親により近い存在となっている。面接調査に行った日にも、「近所（マンション以外での近所）」の子どもを、相手のお母さんが上の子を病院へ連れていっているからと、預かってみていた。No.23 の母親のもう一つの育児の大変さは、第2子が生まれたばかりの時期に、肉体的に育児が辛かったことであったが、ただ話し合えるだけのネットワークではなく、現在のような「近所で」・「気軽に」預けあえるようなネットワークがあれば、その当時の大変さも軽減できていたのかもしれない。

②「育児不安」ケース

No. 14 ケース

家族構成は、夫 47 歳、本人 41 歳、第 1 子（男児）5 歳の 3 人である。家族の健康状態では、第 1 子の発達に、特にことばが遅いのが気になって病院の医師や保健所、児童相談所へ相談に行った。夫と本人は良好である。

夫は、運送関係の仕事で、年収は 500 ～ 700 万円未満の範囲にある。住居は借家で、市内より引っ越してきて 4 年になる。母親の学歴は、高校卒業である。

・ネットワーク：第 1 円～夫、姉、自分の母、夫の母、親友（母親学級）、友人（学生時代、元職場）。

第 2 円～幼稚園の先生方、児童相談所の先生。

第 3 円～幼稚園でのお母さん。

・生活の悩み：特になし。他の若い母親との調和を気にする。

・育児の悩み：子どもの発達の遅れが、大丈夫といわれているが、毎日不安。

No. 18 ケース

家族構成は、夫 38 歳、本人 32 歳、第 1 子（女児）8 歳、第 2 子（女児）6 歳、第 3 子（男児）5 歳、夫方の祖父 64 歳、祖母 62 歳の 7 人である。家族の健康状態は、全員良好である。

夫は、勤務医で、年収は 700 ～ 1000 万円未満の範囲にある。住居は、夫の親と同居して 9 年になるが、途中道内を転勤した時期もある。母親の学歴は、短大卒業である。

・ネットワーク：第 1 円～夫、子ども、自分の両親、近隣の友人（Maternal）。

第 2 円～夫の親、友人（学生時代）。

第 3 円～夫の友人（家族ぐるみの付き合い）。

・生活の悩み：特になし。

・育児の悩み：第 1 子については、子どもが 3 人産まれても、心配が生じる。

【一日の流れ（図 3-7・図 3-8）】

一日の流れをみると、これらのケースも先の No.16 ケースや No.23 ケースと同様に一日を忙しく過ごしているが、「子ども」中心で一日が流れていることが特徴としてあげられる。No.14 ケースでは、子どもが幼稚園へ行っている間に、親しい友人との会話やランチを楽しんだりといった、自分のために費やす時間もみられるが、日常の子どもの身支度や

食事などに母親がかける時間がかなり多い。母親自身、高齢になってやっとできた子どもであり、一人っ子ということもあって、ついつい目がいてしまうという。子どもと一緒に時間を多く過ごすことが、母親の喜びや楽しみであると同時に、次の「問題の解決」にみるように、母親の「育児不安」をも生じさせている。No.18 ケースは、子どもが3人いる忙しさに加えて、3人ともに習い事が多い。小学生である第1子は週に5日、幼稚園へ行っている第2子と第3子は週に3日が習い事に費やされている。その結果、母親の生活も下の2人の子どもを中心に、習い事へ連れていくことが、生活パターンの中心となっている。

図 3-7 No.14 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
6:30	起床（夫、子どものお弁当つくるとき）	6:30 夫起床、自分のことは自分でやって出勤。
7:00 ～ 8:00	起床 朝食づくり 朝食（つきっきり） 子どもの支度（着替えや排泄） 時間があれば、後かたづけ	7:00 ～ 8:00 Ch.1 起床
8:30 ～ 9:00	幼稚園へ	
9:30	帰宅 洗濯、掃除 ・子どもの習い事がある日は夕食用意 ・親友のグループとお茶や子どもが午後保育の時はランチを食べに行く。	
2:00	Ch.1 帰宅 ・子どもと公園へ ・週に2日は、習い事（帰りに、ごほうびのアイスを食べてくるのが日課）	
5:30 ～ 6:00	帰宅	
～ 6:30	母と子で夕食	
6:30 ～	後かたづけ、お風呂用意 子どもと一緒にテレビ	Ch.1 はテレビ
7:00 ～ 8:00	子どもと入浴	7:30 ～ 8:00 夫帰宅、夕食
8:00	子どもと寝る 再び起き出して、ビデオみる。 又は、アイロンがけ。	

図 3-8 No.18 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
6:30	起床 お弁当づくり 朝食づくり ↓ 朝食（家族の時間でみんな別々に） ↓	7:00 Ch.1 起床、 ↓ 身支度、朝食 7:40 登校
9:00	Ch.2,3 幼稚園へ 帰宅、後かたづけ、掃除、洗濯 ↓ 昼食 ↓	7:30 までに Ch.2 と Ch.3 起床 8:15 夫出勤
2:00	Ch.2,3 のお迎え ・ Ch.2,3 と友人宅へ or 公園へ ・ 週に 3 日は習い事へ ↓	3:30 Ch.1 帰宅、 金曜日以外習い事
5:00	帰宅 夕食準備	
6:00 ～	夕食 後かたづけ ↓ （勉強みる） ↓ 入浴 母寝る or 夫と話す。	6:00 夫帰宅 ・ 夕食後 Ch.たちは公文の宿題と遊び、テレビ。 ・ 夫と子どもで入浴 9:00 Ch.2,3 寝る 10:00 Ch.1 寝る ・ 夫は、入浴後、自分の部屋で過ごす。 ↓ 12:00 ～ 1:00 夫寝る。

【問題の解決】

No.14 ケース・No.18 ケースともに、生活の悩みは特にみられない。No.14 ケースが述べている「他の母親との関係」にしても、幼稚園内で自分が高齢であるため、他の若い母親からの非難を受けないように、服装や言動を目立たなく・無難に、と気を使っているというものであり、生活の悩みというよりも育児での社会関係の悩みと言える。結婚して、かなり経ってからの子どもということもあり、生活もお金の面でも安定している。母親自身が「これだけ生活が安定していて、本当はゆったり育児ができるはずなのに…」と話しているように、生活の基盤は安定していても、この母親にとっての「育児不安」は高い。このケースの場合、子どもが一人であるために、つつい母親の目が子どもにいつてしまうという状況に加えて、子どもの発達の遅れの心配が重なって、不安を高めている。子どもが1歳前後の頃から、友人の子どもと比較し、わが子のことばが出ていないことや歩かないことが心配になったという。早速、病院の医師や保健所に相談したが、経過観察となり、それでも不安が残り、児童相談所で発達検査を受け「心配ありません」と言われている。しかし現在でも、母親は「育児は難しいし、やっぱり毎日が不安」と話している。No.14 ケースのネットワークは、第1円の Personal・Maternal 友人をはじめ、第2円の児童相談所や幼稚園での専門家、そして第3円に地域の幼稚園でのネットワークと幅広く構成されている。これまでの子どもの発達上の悩みや育児の難しさも、母親一人で抱え込むことなく、夫をはじめ、ネットワークのメンバーや専門家に相談してきたが、母親にとっては一時しのぎの解消でしかなく、また次の不安が生じてくるという。ネットワークの中では、Personal 友人であり、子育てを終えている先輩お母さんのアドバイスが一番の解消になっていた。現在の同じ立場にある Maternal 友人は、話は合うけれども、子ども同士の比較にもなってしまうからである。母親自身、自分の「育児不安」を認識しており、「自分自身が考える育児不安」についてたずねると、子どもの悩みではなく母親の悩みであると答える。子どもが生まれたときには、「元気で育ってくれば」という願いだけだったが、だんだんと欲も出てきて幼稚園や他の子どもとも比較してしまい、「人並み」を期待してしまう。自分では、肩に力を入れているつもりもないし、過剰な期待もしていないつもりなのだけれど、成長も発育も発達も標準のレベルがそろっていると、安心できるという気持ちが根底にある。でも、この気持ちは、どんなお母さんにもあると思うし、反対に「育児不安」がない母親はいないと思う、と回答している。

一方、No.18 ケースにとっては、「育児不安」が、どのようなものとしてとらえられて

いるのであろうか。母親は、「育児の大変さとは別に生じるもの」であり、「マスコミでみる親子のモデルが、我が家と違うことに不安を感じ」、また「子どもがどんな子どもに育つのか、自分のしつけに対して不安」になるという、そしてそれは「家で子どもとだけ向き合っていると（「育児不安」が）生じると思う」と話している。

実際に No.18 ケースの母親は、第2子・第3子が生まれることにより、体力的には年子ということもあって大変であったが、精神的には、第2子・第3子に対しては「こんなものかな」と思えるようになったという。しかし、第1子に対しては「こんなもの」とは思えず、第1子の発達段階に応じて生じてくる悩みが、そのまま、母親の不安となっている。第1子が小学校に上がっている現在では、近所に同年齢の友達が少ないという心配が母親を悩ませているが、子どもにとっては異年齢ではあっても親しい友人が近所におり、母親の悩みが子どもの悩みと一致しているとは限らない。この母親のネットワークも、配偶者や同居の親をはじめ、Maternal な近隣の友人や Personal な学生時代の友人、そして家族ぐるみの友人と、多様性をもっており、しかも第3子が生まれた時には、夫の転勤時で義父母との同居もしていなかったことから、保育所も利用している。しかし、そうした母親のもっている育児資源が「育児不安」の軽減へと結びついてかないのは、コーディネートが子ども中心にされすぎている、「子どものため」に母親がコーディネートしすぎているためであると考えられる。このことは、No.14 ケースにも同様にみられる。先の充実ケースである No.16・No.23 ケースと比べても、両者ともに、情報量、ネットワーク、時間について遜色はなかった。しかし、その活用の方向性が、「自分」と「子ども」の両者をとらえているのと、より「子ども」だけをとらえているのとで、分けられてしまっている。

2. 働く母親の「育児不安」と育児困難

次に、就労している母親についてみていく。就労形態として、フルタイム就労（F グループ）とパートタイム就労（P I グループ・P II グループ）とがあったが、フルタイムの平均就労時間が8時間30分、パートタイムで7時間と、労働時間について両者で大きな開きはみられなかった。よってここでは、フルタイム就労とパートタイム就労の区別よりも、経済的基盤の違いによって、就労している母親にどのような差異が生じているのかを考察することとする。その結果、資源に制約のある母親は P I グループだけであり、資源の多い母親は F グループと P II グループとなった。

(1) P I グループ

No. 17 ケース

家族構成は、本人 34 歳、第 1 子（男児）6 歳、第 2 子（男児）4 歳の 3 人である。家族の健康状態は、本人に喘息があるが、子どもたちは 2 人とも良好である。

本人の仕事は、損保会社の事務をパート勤務で行っている。年収は 200 万円未満の範囲にある。住居は、市内から母子寮（現：母子生活支援施設）移りに住んで 1 年半になる。母親の学歴は、短大卒業である。

・ネットワーク：第 1 円～子ども、親友（学生時代）、年上の知人（Maternal）、自分の母親。

第 2 円～親族、友人（Personal、Maternal）、友人（母子仲間）、寮の先生、寮の友人。

第 3 円～会社での知人。

・生活の悩み：離婚時の生活の立て方。将来へ向けてフルタイムの仕事と寮からの自立。

・育児の悩み：生活が成り立って、余裕が出てくると、子どものことが見えてきて心配も増える。

No. 15 ケース

家族構成は、本人 27 歳、第 1 子（男児）6 歳、第 2 子（男児）3 歳の 3 人である。家族の健康状態は、全員良好である。

本人の仕事は、お弁当やさんでパート勤務をしている。年収は 200 万円未満の範囲にある。住居は、市営住宅に住んで 5 年半になる。母親の学歴は、高校中退である。

・ネットワーク：第 1 円～自分の両親、妹、親友（Personal）。

第 2 円～近所（Maternal）、幼稚園のお母さん。

第 3 円～なし。

・生活の悩み：昨年離婚し、お金の不安。

・育児の悩み：あまりない。

No. 19 ケース

家族構成は、夫 36 歳、本人 34 歳、第 1 子（男児）5 歳、第 2 子（男児）3 歳の 4 人である。家族の健康状態は、第 1 子が脳に水が溜まりやすいために認識が弱く、児童相談所や小児センターも受診している。第 1 子、第 2 子ともに気管支が弱く、かぜをひきやすい。夫と本人は、良好である。

夫は、清掃会社の運転手と実家の家業（廃品回収業）を手伝う。本人の仕事はパン屋でパート勤務

をしている。年収は 300 ～ 500 万円未満の範囲にある。住居は、市内から借家に住んで約 11 ヶ月になる。母親の学歴は、短大卒業である。

・ネットワーク：第 1 円～子ども、保育園の父母、保育園の保母。

第 2 円～近隣の友人（Maternal）、妹、実母。

第 3 円～夫、職場の知人。

・生活の悩み：結婚して以来、ずっと生活が大変。夫の借金も月に 10 万円。姑の問題。

・育児の悩み：第 1 子の発達が全般的に遅れていたこと。

【一日の流れ（図 3-9・図 3-10・図 3-11）】

これら 3 ケースの一日の流れをみると、No.17 ケースで 6 時間、No.15 で 5 時間 30 分、No.19 ケースで 9 時間が仕事に追われており、その残りの時間で家事と育児を切り盛りしている。働いている母親にとっての慌ただしい時間は、自分の出勤前の時間と、帰宅後の子どもを寝かせるまでの時間である。No.17・No.15 ケースは、夕方の忙しさを少しでも緩和するために、朝のうちに夕食の用意をしている。また、そうした母親を支えているのが、No.17 ケースと No.19 ケースでは保育園・学童保育であり、No.15 ケースでは幼稚園と、さらにその保育時間の短い分を補うための祖父母である。

No.19 ケースが他の 2 ケースに比べて家事を怠っているように見受けられるのは、母親の就労時間が 9 時間とかなり長いことに加えて、後の問題解決の所で触れるように、現在、保育園の先生たちと協力して、子どもの療育を中心にした生活をはじめたばかりであるためと思われる。

母親たちの余暇の時間をみても、日々「積極型余暇」を楽しめるケースはなく、3 ケースともに、子どもたちが寝てからの「在宅型余暇」を過ごしている。そんな中でも、No.17 ケースは、隔週で「親業講座」に参加して、自己啓発を含めた子どもとの対応を学習しており、No.19 ケースは、保育園の父母会の活動が、母親にとってもリフレッシュできる時間であるという。さらに No.19 ケースでは、夫との関係が悪いこともあって、「本当にたまに、夜中に子どもも夫も寝入ってから抜け出して、保育園のお母さんたちとカラオケに行くことがある（夫に話すと反対するので・・・）」と話しており、夫に話して出かけるときも「保育園での作業のため」と説明して、息抜きをしている。

図 3-9 No.17 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
5:30	起床、布団あげ 朝食用意 お弁当づくり 夕食の用意	
6:30 ～ 7:00	朝食 後かたづけ 身支度	6:30 Ch.1,2 起床 7:30 Ch.1 登校 (下校後は学童保育へ)
8:20 ～ 8:30	出勤 (バス)	Ch.2 は寮内の保育園へ
9:10	仕事場に着く	
9:30 ～	仕事始め	
pm3:30	仕事終了 買い物へ	
5:00	Ch.2 を迎えて、帰宅。 夕食用意	Ch.1 帰宅
6:00 ～	夕食 後かたづけ	子どもたちテレビ、遊び
7:00 ～	入浴 洗濯	8:00 ～ 8:30 Ch.1,2 寝る
8:30 ～ (ch.寝てから)	次の日の用意 (お米とぎなど) 新聞読む 家計簿つけ	
10:00 ～ 11:00	寝る	

図3-10 No.15 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
6:30	起床 洗濯、朝食づくり	7:30 Ch.1,2 起床
7:30 すぎ	朝食 後かたづけ、夕食用意	
8:30	Ch.1,2 幼稚園へ 帰宅 家事の続き	
10:00	食品など買い物	Ch.1,2 実家で過ごす
11:30	出勤、幼稚園で子どもを迎えて実家へ (午後保育の時は、祖父母がお迎え)	
12:00 ～	仕事 ↓	
5:30	仕事終わり	9:00 ～ 11:00 Ch.1,2 寝る
6:00	実家で子どもを連れて家へ 夕食用意	
7:30	夕食 入浴 後かたづけ	
9:00 すぎ	テレビなど 新聞、本読み	
12:00	母寝る	

図 3 -11 No.19 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
5:00	起床 お弁当つくる（夫と自分の分） 朝食づくり 本人と子どもで朝食	6:00 夫出勤 (帰宅は日によってまちまち。 実家の家業の手伝いもあり。)
7:20	子どもと保育園へ	
8:00 ～ pm5:00	仕事	
6:00 ～ 6:30	保育園へ迎え 帰宅	
7:00	夕食用意 、洗濯 夕食 入浴	8:00 子どもを寝かせる
9:00	母寝る or 起き出して、 ・ 保育園の父母会の仕事 ・ 手紙書き	
11:00	母寝る（寝ることがストレス解消）	

【問題の解決】

これらの3ケースに共通している特徴として、生活上の悩みが、日々の生計に関わった問題をあげていることにある。

No.17 ケースは3年前に離婚をして札幌へ来たが、現在住んでいる母子寮（現：母子生活支援施設）に落ち着くまでは、仕事も住居も含めた生活全般のめどが立たず、毎日が精一杯であったという。とにかく、「母子」となってゼロからスタートするに際しての情報が全くなく、母子寮の存在や、「母子連」といった横のつながりとなる団体の存在を教えてくれたのは、人伝で知り合えた先輩の母親からであった。その後、区役所などの公的なところへ相談へ行ったが、そこでは対応してくれた「人しだい」という感じで、いい人にあたれば「ラッキー」だし、悪い人にあたれば「最悪」だという。彼女の場合、A区役所では「何しに来たの？」という対応であったが、B区役所では対応が良く、現在の母子寮へ入所するに至っている。育児の悩みについても、生活が落ち着くまでは、子どもへと目が行かず、「育児不安」どころではなかったという。離婚当時は、子どもも第1子が3～4歳で第2子が1～2歳と可愛い盛りであったのに、今振り返ると、当時の子どもの写真が（保育園などから渡されるものを除いて）全くない。今、生活が落ち着いて余裕も出てきて、はじめて、子どものことについても色々と考えられるようになった。現在の育児の悩みは、子どもとどう向き合っていくかという自分の悩みと、一人で何もかも決定していかなければならないことの不安がある。先に触れた「母親の余暇」でもある「親業講座」への参加は、こうした不安や悩みの解決のためにも役立っているであろう。それが、他のケースの所でみられたように、子どもに対する学習の機会やサービスを購入することによってではなく、母親自身の学習参加によって問題解決を見だし、そこでのネットワークも広げていこうという所に、この母親の独自性がみられる。母親のネットワークをみていくと、学生時代の親友や年上の知人など Personal 友人が第1円に属しており、第2円に母子家族同士の友人や Maternal・Personal 友人に加えて、寮でのスタッフや寮での友人と様々なメンバーが属している。この母親は札幌の出身ではなく、母子家族となって新しい地域でスタートしたこともあり、ネットの形成は難しかったと思われるが、本人が意識して母子家族のネットを核にしてネットワークを広げてきている。こうして広げてきているネットワークの中でも、一番の支えとなってくれているのは、具体的なアドバイスもくれる年輩の女性であるという。母親自身が揺らいでいるときに、同年齢の友人では、同情はしてくれるが、先を見越した情報や支えとはなりにくい。第1子が小学校へ上がった今では、

成績についても、周囲から「どうするの？」と追いつめられて、かえって不安になることもある。

現在の生活上の悩みは、やはり、将来へ向かっての金銭的な問題にある。現在の母子寮での生活は、一応、安定しており、寮内の保育所などに助けられる部分も多い。しかし、子どもの年齢が上がってくるにつれて、門限など、ここでの生活の不自由さが出てくることもあるので、第2子が小学校へ上がったなら、フルタイムで働いて寮を出て生活したいと考えている。市営住宅の2種では、郊外にしか入れるところはなく、民間のアパートの敷金・礼金の準備を考えると、生活は、まだまだ大変である。

次に、No.15 ケースについてみていくと、生活の悩みでは、昨年離婚したばかりということもあって、「お金が不安」と言っている。母親自身が落ち込んだときに、話を聞いてもらったり支えてもらったりしているのは、ネットワークの第1円に属している Personal 友人である。この母親のネットワークが、先の No.17 ケースに比べると、ネットワークの広がり小さい、意識的に拡張していないように見えるのは、両親が近所に住んでおり、多くのサポートがそこで成されているためであると思われる。しかし反対に、既存のネットワークを大切にしている様子うかがえる。このケースの場合、離婚後に夫が家を出て行き、母子はもとの住居に残った。離婚後、母親が就職する際に、「保育所」への変更ではなく「幼稚園」を継続させることにしたのも、近所での、幼稚園でのネットワークを断ち切りたくないという考えからである。育児の悩みについては、「特にない」と答えていたが、話の中で「上の子が反抗的である」ことを述べていた。母親の思う原因としては、子どもは遊びたいが自分は仕事でかまっていられず、結局、兄弟ゲンカとなると兄の方を我慢させているので、欲求不満が溜まっているのかと考え、生活と育児の天秤に、どうしたらいいのかと困っている。

最後の No.19 ケースについては、どうであろうか。このケースは結婚して7年になるが、ずっと生活が大変だったという。夫は、経済観念もなく酒乱気味であり、育児にも非協力的で親離れもできておらず、何度も離婚しようと思った。そのことを姑は知っているが、夫を叱るでもなく甘やかせておいて、嫁であるこの母親への対応はきつかった。第1子の発達の遅れにしても、母親のせいであると、夫からも姑からも言われてきた。一昨年の春に、夫が大きな借金をしていることがわかり、現在の母親自身のパート代金は、月に10万円近い返済へと、全て消えていく状態である。母親が「経済的に大変なことは、生活の全てに影響する。精神的にも影響する。」と話しているように、育児の悩みも生活の大変

さに規定されて、母親一人で背負っている。

母親が第1子の発達の遅れに気づいたのは、3歳ぐらいの時である。物事の認識が悪く、最初は、耳が悪いのかと思っていたが、その後、夫との家庭内でのいざこざもあり、放置したままで時間が過ぎていった。後に、母親が働きに出ることになり、現在の保育園を利用することとなった。保育園で、保母に第1子のことを相談するのがきっかけとなり、保母の方からの専門的にみてもらった方がいいというアドバイスを受けて、小児センターを受診した。第1子の認識の悪さは、脳に小さな傷があるためと水がたまっているためであるという説明を受けたが、手術はリスクも伴うため、当分は保育園と家庭とでの環境を変えていくことでの経過観察となった。母親は、この診断を聞いて、内心ホッとした部分があったという。それまでは、家庭環境も悪かったので、子どもの障害が自分の責任ばかりと思っていたところもあるが、先天的な要因もあると言われて、「自分のせい」だけではないことが分かったからである。夫に対しても、第1子の障害のことについては、「話して話して、やっと理解してもらった」が、それでも「そんな子を産んだのはおまえのせいだ」と言われている。母親が「それはそれで私が悪かったから、今後の子どもの家庭環境のために協力してほしい…」と話をしているが、どこまで協力してくれるかは不確定である。姑も、保育園と母親が積み上げてきたものを壊すように非協力的である（例えば、ひどい虫歯のため、甘いものを制限しているが、姑は好きなだけジュースを与える）。現在の子どもへの刺激としては、働きかけを多くしたり、身体を使って遊ぶことの大切さを言われており、母親は、保育園の保母と第1子の状態を理解してくれている保育園の父母たちとで協力して、子どもへの療育に取り組んでいる。母親のネットワークをみても、夫よりも親族よりも、保育園での父母や保母が第1円に属している。母親の会話の中に、何度も「この保育園で良かった」、「保育園の父母や保母とのやりとりの中でいろいろと学んだ」と出てきたように、自分の子どもを保育園の職員や他の父母と一緒に育てているという実感が、この母親の精神面でも、行動面でも強みとなっている。

(2) PⅡ+Fグループ

就労している母親のうち、世帯の年収が500万円以上であるケースは、PⅡグループの2ケースとFグループの7ケース、計9ケースが相当する。これらの母親は、いずれも、仕事と家事、母親と個人としての生活を忙しく両立させていた。ここでは、核家族のケースと親世帯との同居ケースとを1例ずつあげる。

No. 26 ケース

家族構成は、夫37歳、本人36歳、第1子（男児）4歳の3人である。家族の健康状態は、全員良好である。

夫・本人ともに、公務員で、年収は700～1000万円未満の範囲にある。住居は、公務員宿舎に住んで4年になる。母親の学歴は、短大卒業である。

・ネットワーク：第1円～夫、子ども、自分の両親、妹、友人（保育園と職場が重なる）。

第2円～夫の母親、保母、親友（学生時代）。

第3円～近所。

・生活の悩み：夫の協力が得られない。

・育児の悩み：保育園に預けたときに泣かれて、仕事との両立に悩んだ。

No. 30 ケース

家族構成は、夫32歳、本人34歳、第1子（女児）3歳、母方の祖父71歳、祖母69歳の5人である。家族の健康状態は、祖母が腰痛で足腰が弱い。他の家族員は、全員良好である。

夫は公務員、本人は保健婦で、年収は500～700万円未満の範囲にある。住居は、親世帯と別同居（玄関だけが共通）をして9年になる。母親の学歴は、短大卒業である。

・ネットワーク：第1円～夫、両方の両親、親友（職場のPersonal）、同僚（職場のMaternal）、

職場の専門職の人。

第2円～友人（学生時代）、友人（夫と自分と共通の友人）。

第3円～保育園、上司。

・生活の悩み：特になし。

・育児の悩み：子どもが1歳前後の時に、育児ノイローゼになった。

【一日の流れ（図 3-12・図 3-13）】

No.26 ケースの一日の流れは、今回の調査でみられる、就労している母親の典型的な生活といえる。夫の協力が増えてきているとは言われても、実際には、No.26 ケースのように帰宅が遅い夫が多く、新聞や育児エッセイでとりあげられるような、家事や育児を先頭だってしてくれる夫は、調査協力者の家族にはいなかった。夫が協力してくれる内容としては、子どもの遊び相手や保育園のお迎えといった補助的なものに限られている。

核家族の場合、朝は、8時頃の出勤時間へ向けて、朝食や子どもと自分の身支度を早々に済ませ、夕方は、6時過ぎの帰宅後（途中、買い物をするケースも多い）から一気に夕食・後かたづけ・入浴というメニューをこなしていく。途中、子どもと一緒に過ごす時間や子どもが寝てからの時間が自分の余暇のための時間となるが、より積極的な余暇の時間を創り出すためには、祖父母（No.30 ケース）や帰宅が早いときの夫（No.31 ケース）に子どもを託して出かけるなどの周囲のサポートが必要となる。

祖父母と同居している場合の一日を No.30 ケースからみていくと、朝と夕方の慌たしさは変わらないが、出勤前と帰宅後に、それぞれ1時間程度、子どもを祖父母に預けることができるため、より家事を効率的にこなしている。その結果、朝も自分の趣味のために30分程度の時間をつくりだし、夜も、さほど夜更かしをせずに自分の時間を楽しんでいる。

図 3-12 No.26 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉 〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
6:00	起床 新聞読む 朝食づくり	6:40 夫起床
7:15 ~	朝食	7:15 子ども起床
7:40	自分と子どもの身支度 (朝は片づけはしない)	8:05 夫出勤
8:10	母子出勤 子どもを保育園へ	
8:30	職場に着く、仕事 ↓	
pm5:00 すぎ	仕事終了	
5:20	保育園へ迎え	
6:30	帰宅 夕食用意	
7:00	子どもと二人で夕食 子どもとテレビ	
8:00 ~	後かたづけ、家事	
9:00	子ども入浴 (時に夫の夕食用意)	9:00 ごろ夫帰宅
10:00	子どもと寝る	
11:00 ~	(自分の時間がほしいときは起き出して、 読書、テレビ)	

図 3-13 No.30 ケースの一日の流れ

〈時刻〉	〈母親の主な行動〉〈並行して行う行動〉	〈家族の行動〉
5:30	起床	
5:30 ～ 6:00	パソコン、洗濯取り込み	
6:00 ～	お弁当つくる、朝食づくり 子どもの世話	6:00 Ch.1 起きる
6:30 ～	親子 3 人で朝食（一日のことを話す） 後かたづけ 掃除機 自分の身支度	6:30 夫起こす 7:20 Ch.1 身支度済んだら、 祖母の所へ行く。
8:00 ～ 8:10	親子 3 人で出勤 途中、子どもと保育園へ 夫下車	
8:30	仕事 ↓	
5:15	仕事終了	
5:20	保育園へ迎え（残業時は夫がお迎え） 買い物	
6:00	帰宅 夕食用意	帰宅後、Ch.1 は祖母の所へ。 6:20 夫帰宅（週に 3 日）
6:45 ～	夕食（週 3 日は 3 人で、後は母子で）	
7:30 ～	後かたづけ、洗濯機回す	
8:00	子どもと遊ぶ、お風呂用意、洗濯干し	
8:30	入浴	
9:00 ～ 9:30	母、子寝る 時々起き出して自分のための時間 ・ テレビ ・ 読書 ・ パソコン	9:00 すぎ夫帰宅（週に 2 日）

【問題の解決】

資源が比較的恵まれている中で働いている母親の場合、生活上の悩みは、No.26 ケースで自分の家事の苦手さと夫の無協力への不満、No.30 ケースでは「何もない」という回答で、先の「資源に制約のあるケース」とは、同じ就労している母親でも、かなりの違いがみられる。特に No.26 ケースの場合は、夫の帰宅はいつも遅く、家事も一切しないことから、母子家族のように、この母親が一人で全てを担っているが、それでも生活の基盤が保障されているため、生活の悩みは「悩み」よりも「不満」的性格が強い。そうした不満や悩みは、職場や保育園での友人に話し、聞いてもらっている。子どもが熱を出したときや母親自身が寝込んだときなどの実体的なサポートを必要とする場合には、道内に住んでいる実母が来てくれている。働いている母親の場合、ネットワーク内の友人もまた、働いている場合が多く、友人どうしで子どもを預け合うことは難しい。No.30 ケースの場合も同様に、同居の祖父母が実体的なサポートを提供してくれていた。

これらのケースについて育児の悩みをみていくと、No.26 ケースでは、働いている母親であれば、一度は悩むことがある「仕事と育児の両立の難しさ」である。保育園へ最初に預けて大泣きされたとき、熱はないが子どもの体調がすぐれないときなど、「なぜ、子どもをこれほど泣かせてまで、自分は働くのか。」と悩む。自分が仕事を続けることが、子どもに犠牲を強いているのかなあと落ち込むときも多かったという。けれども、職場へ来てしまえば、その気持ちを引きずっていることもなく、周囲の理解もあって、職場の友人と話したりして気分がもち直す。そして、そのもち直した気分帰宅できるという。この母親をはじめ、働いている母親にとっては、「働く」ということが悩みの原因の一つであると同時に、「仕事」という育児や子どものについての悩みを忘れることができる、一度冷却できる場所と時間が、解消の手だてともなっている。

No.30 ケースの育児の悩みは、第1子が1歳前後で意志表示がでてきて、自分の方は育児時間があけてフルタイムの就労になったときに、離乳食づくりに手が抜けず、イライラしている時期があったことである。子どもは子どもで、保育園から帰ってお腹がすいて、泣いてばかりいた。この時は、職場の友人から「どこかで手を抜くように…」というアドバイスをもらっていたが、手抜きをするということができず、夫にも八つ当たりしていた。結局、自分自身で「育児ノイローゼではないか。」と思って、精神科をたずね、医者のじっくりと長いカウンセリングと精神安定剤をもらって解決した。他の育児上の小さな悩みは、ネットワーク上の様々な友人に、話をすることで解決している。保健婦という仕

事柄、職場に専門職も多く、聞ける人は多いという。そうした専門家やネットワークでの解決と同時に、この母親からあがってきていた要望は、育児をしている母親への社会的な対応である。育児時間にしても、1年間だけだと、ちょうど子どもにも変化がおきる時期とフルタイム就労への切り替え時期とが重なるので、育児時間の期間延長は強い要望としてあった。

第4節 資源の制約と母親

1. 資源の制約と母親のコーディネート

これまで、母親のもつ資源と母親のコーディネートの違いによって、いくつかのパターンの母親たちの日常と問題解決を検討してきた。これまでのグループごとの特徴や個別のケース検討を通してわかったことは、コーディネートという、母親の個人的能力が問われる領域にあっても、構造的資源が規定していることの可能性である。

まず最初に、専業主婦についてみれば、母親が主体者としてコーディネートできていないケースは、SⅠ（専業主婦で世帯年収が500万円未満）グループの2ケースのみで、育児資源の多いSⅡ（専業主婦で世帯年収が500万円以上）グループには、存在しなかった。データが少ないため、「育児資源が小さいために母親がコーディネートできていない」と結論づけることはできない。しかし、No.4・No.9 ケースともに、祖父母世帯が、この家族を丸抱えしていることもあって、母親のネットワークに親族以外の広がりがみられない。その結果、ネットワークでの友人やネットワークを通じての情報によって、母親の「気づき」を起こさせる機会も閉ざされてしまっている。「育児資源が小さいために、母親としての問題が先送りされている」ということは、2ケースからでも示唆されるであろう。

では、コーディネートしている母親については、どうであろうか。コーディネートがうまくいっている母親としては、専業主婦ではSⅠグループのNo.11・No.24 ケースとSⅡグループでのNo.16・No.23 グループである。両者を比較してみると、どちらも時間を活用し、育児仲間や個人的なネットワークを広げ、そこでの問題解決を図っている点では共通している。しかし、母親の余暇の内容や解決される問題の中身については、違いがみられる。母親の余暇をとっても、SⅠグループの方が専ら「在宅型余暇」を楽しむだけであるのに対して、SⅡグループでは「在宅型余暇」も「積極型余暇」も楽しむ余裕がみられる。ま

た、母親のネットワーク間で解決される問題は、夫への不満や、育児の知識、そして「育児不安」といった精神的な悩みが多く、No.11・No.24 ケースが抱えているような生活上の問題については、友人といえども、共感以上のものは提供できない場合が多い。公的な取り組みに沿っていえば、育児の電話相談サービスがで解決できるような「悩み」については、母親のもつネットワークや母親が収集した情報によって解決はできるが、生活基盤の問題に関わってくる施設の利用や児童手当・児童扶養手当に相当するような生活の保障に関する悩みを、個人間のネットワークで支えあうには限界がある。こうした母親の積極型余暇のための時間と費用の捻出や生活問題の解決は、母親が限られた資源をコーディネートすることで、どこまで実現できるのであろうか。

このことは、就労している母親についても言えることであり、P I グループ（パートタイム就労で世帯年収が 500 万円未満）の No.15・No.17・No.19 ケースと F グループ（フルタイム就労で世帯年収は 500 万円以上）の No.26・No.30 ケースを比較した場合、個々の母親がそれぞれに抱える「育児の悩み」については、両者ともに解決してきているが、No.15・No.17・No.19 ケースが抱えている「生活の悩み」については、生活のリスクとして背負ったままである。専業主婦の場合であっても、就労している母の場合であっても、どれだけ母親のコーディネートの能力が優れていたとしても、家族や母親のもつ資源の制約によって、その能力にも限界があることが改めて確認できた。

こうした生活の問題や生活の状態を育児の問題とは切り離して、育児の悩みとそこから見える問題だけを論じていくことも可能であるし、実際に、それらは分断して考察される場合が多い。しかし、No.4 ケースや No.9 ケースのように、子どもとの関わりがないために育児問題が顕在化しない場合や、No.17 ケースのいう「生活が落ち着くまで子どもへと目が行かなかったこと」や、No.19 ケースのいう「経済的に大変なことは生活の全てに影響する。精神的にも影響する。」といった状態は、育児の問題としては取り上げられなくても、育児されている子どものへの影響は少なくない。生活の問題は育児の問題へと根本的に関わっているものであるが、いまだ育児の社会化が進んでおらず、その責任が家族に、なかでも母親に集中している現状にあっては、生活問題が「母親の頑張り」というベールの中に隠れてしまい、育児問題として表れる部分だけが問題とされがちである。

2. 「育児不安」と育児困難

最後に、母親の生活条件とコーディネートの方によって、育児に関する母親の意識がどのように違うのか、その時の「育児不安」とは母親全体にとって、どのような位置にあるのかを考えていきたい。

先のケース検討の中で、「育児不安」が高いと訴えていたケースは、SⅡグループでのNo.14・No.18 ケースであった。これらのケースに共通していることは、子どもに特別の問題を抱えていなくとも母親の不安感が存在しているということ、また、母親は子どものために何もしていないのではなく、懸命にコーディネートしていることがあげられる。No.14 ケースの母親でいえば、子どもが1歳前後の頃から、子どもの言葉の遅れに対しての「大丈夫」を得るために様々な機関を訪問している。さらに、プールや体操の習い事にしても、「子どもが人の中が苦手なので、その苦手感に対して慣れさせるため」と、「男の子としては体も小さくかぜもひきやすいので体力づくりのため」と考え、習わせるまでも先輩の母親や地域雑誌からの情報を入手して検討している。No.18 ケースにしても、3人の子どもを育てる大変さの中で、自分のための時間を犠牲にしても、それぞれの子どもを複数の習い事へ通わせ、その付き添いをしている。「子どものため」のコーディネートのしすぎが、「育児不安」を高めているという皮肉な結果となっている。これが、F（フルタイム就業）グループのNo.26 ケースのように、仕事という子どもや育児を忘れられる時間と場所をもてれば、高まった「育児不安」も客観視できるのであろうが、そうした機会は、単に専業主婦をしているだけでは見だしにくい。さらに「育児不安」とコーディネートの関係は、同じ社会階層のグループに位置していながらも生活全般に充実している No.16・No.23 ケースとの違いからもいえる。充実ケースはコーディネートの方向性が「自分」と「子ども」の両者をとらえているのに対し、「育児不安」ケースは「子どもだけ」をとらえていた。この違いは、単に「母親の性格特性」の違いであるとみることもしる。しかし、No.14 ケースの「人並み」という発言や No.18 ケースの「マスコミでの親子のモデル」の発言にあるように、「育児不安」が高いケースは、常に他児・他者との比較によって、育児の方向性を決定してきたとも考えられる。このことは、第2章における母親の意見にも表れていたように、母親の外にあって「育児不安」を誘発する要因である。どの母親であっても、そのトラップに入ってしまうと、「育児不安」が増大していく可能性は存在している。さらに、こうした比較から生じる「育児不安」に対しては、これらの世帯の経済的余裕も後押しする形で、商業的なサービスを購入すること（他者との差異）によっ

て解決がとられがちとなる⁽³³⁾。今回の No.18 ケースは、まさに数々の「習い事」によって、その不安を払拭しようとしていた。

ここで、これまでみてきた「育児不安」や育児困難について、社会的階層全体の中で位置づけてみたい。第2節でみてきた母親たちの「育児の悩み」は、どのグループの母親にも存在していた（前出表3-3参照）。そしてその内容は、子どもの状態や家族の状態によって様々ではあったが、子どもを育てている母親であれば誰しものが抱く悩みとして、健康な範囲の育児の悩みや育児不安であるといえる。しかしこれに、資源によって規定されやすい生活問題を掛け合わせることによって、「育児不安」を含めた育児困難が、一定の階層的差異を帯びてくる。すなわち、生活問題のありようによって、「育児不安」だけのレベル、生活の困難さによって生じる「育児不安」のレベル、そして「育児不安」としては表れないが育児の困難さとして生じているレベルというように、「育児不安」の表れ方も異なってくる。今回の事例をあてはめてみれば、生活問題はなくとも「育児不安」が強く表れていたのがSⅡグループの No.14 ケースや No.18 ケースであり、「育児不安」としては感じないわけではないが、生活問題の解決が先立って「育児不安」が相対的に弱くなっていたのがSⅠグループの No.11・No.24 ケースやPⅠグループの No.15・No.17・No.19 ケースである。また、SⅠグループの No.4 ケースや No.9 ケースは、育児困難は存在していても「育児不安」としては表れてきていない。

「育児不安」を、構造的資源と編成的資源という二つの資源の大小と母親による編成的資源のコーディネートの違いで示していくと、育児の悩みにも近い広義の育児不安は、現代家族の育児構造⁽³⁴⁾の中では、どの階層の母親にも広く存在しうる。その意味で広義の育児不安とは、現代社会では、誰もが気楽に子育てをし難い、ということの反映であるにすぎないと考えられる。そうした共通の特性の上で、さらに「育児不安」として強く表れやすいのは、構造的資源も編成的資源も豊富な中で、広義の育児不安に敏感に反応し、子どものために様々なコーディネートをしていく母親であり、育児の熱心さと裏表の関係にある。同様の資源とコーディネート能力をもちながら、充実している母親たちというのは、広義の育児不安に反応しつつも、「育児不安」として問題視せずにきたからであろう。また、母親自らが「育児不安」が高いと言っていた No.14 ケースや No.18 ケースの母親でさえ、医師などの専門家のケアを必要としたり、虐待の予防としての介入を必要とするような範囲のものではなかった。育児困難の問題に対して、「育児不安」という看板だけを大きくして注目していくことは、母親たちを（育児産業も後押しする形で）広義の育児不安

の中から「育児不安」へと駆り立てていくにすぎないのではないだろうか。しかし、その一方で、No.4・No.9ケースのように、「育児不安」としては表れていない母親にも、育児困難は存在している。彼女たちは、構造的資源も編成的資源も小さく、「育児不安」はもとより、広義の育児不安も意識の上に上がってきておらず、問題解決も放棄されたままとなっていた。生活基盤の弱い家族が潜在化するように、こうした育児困難は、虐待や放任といったドラスティックな形で表れるまでは、顕在化しにくい傾向がある。

【第3章の注と引用】

- (1) 春日キスヨ・佐々木正美・汐見稔幸・大日向雅美・佐藤達哉「座談会----子育て不安の現状とその背景」においても、子育て調査の全般的傾向からの報告として、「一言で言えば、孤独、孤立が育児不安につながりやすい」と述べている。しかしここでも、本文に述べたような（「育児不安」関連要因が欠落しているような）社会的に孤立しがちな母親たちの存在は問題とされていない。

大日向雅美・佐藤達哉 編『現代のエスプリ 342』至文堂、1996年、P.7。

- (2) 渡邊秀樹「現代の親子関係の社会的分析―育児社会論序説」社会保障研究所編『現代家族と社会保障』1994年。

- (3) 汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店、1996年。

- (4) 渡邊秀樹、前掲書、1994年、P.86。

- (5) 杉村宏・岩田美香『単親（父子・母子）家庭生活実態報告書』北海道民生委員児童委員連盟、1996年。

岩田美香「ひとり親家族の生活と社会関係―全道と札幌市における生別による母親の検討から―」『北海道社会福祉研究』第18号、1998年。

- (6) 藤崎宏子「母子寮世帯の家族解体―再組織過程―方法論的検討―」『家族研究年報 No.5』家族問題研究会、1979年。

松浦勲「離別母子世帯の生活構造―家族解体と再組織化を通して―」『高知大学教育学部研究報告』第一部第40号、1987年。

- (7) Sandra Wallman (1984) *Eight London Household*. Tavistock Publications Ltd., London.
(福井正子 訳『家庭の三つの資源』河出書房、1996年)

- (8) 山田は、ブルデューが分析したような、夫の職業階層で近似される「文化階層」や「経済階層」ので決められる社会階層に加えて、近代家族の原則下では、家族の中に世話が必要な「弱者」の存在とその状況とが、家族の生活水準を決定する要因であるとしている。山田昌弘『近代家族のゆくえ』新曜社、1994年。

- (9) 共働きの妻（週35時間以上勤務）の仕事の平均時間は、7時間4分である。

小野瀬裕子「共働き夫婦の家事と子育て」湯沢雅彦 編 NHKブックス『図説 家族問題の現在』日本放送出版協会、1995年。

(10) Kahn & Antonicci のコンボイ (convoy) 概念とは、Bowlby の愛着理論をもとにして、それを個人の一生を通じての対人相互作用にまで拡張したものである。ライフ・コースを通じて変化するソーシャル・サポート・ネットワークを「個人の援護隊 (コンボイ)」と呼び、個人のを中心にした同心円構造としてモデル化している。

また、その第 1 円に属するメンバーは、「様々な状況で支えを提供することができる」としている。

Kahn, R.L. & Antonicci, T.C. (1980) Convoys over the Life Course: Attachment, Roles, and Social Support. *Life-Span Development and Behavior*, Vol3.

(遠藤利彦 訳「生涯にわたる「コンボイ」愛着・役割・社会的支え」東洋・柏木恵子・高橋恵子 (編集・監訳)『生涯発達の心理学 2 巻 気質・自己・パーソナリティ』新曜社、1993 年。)

(11) Personal ネットワーク・Maternal ネットワークとは、Jennings, Stagg, and Connors の分類を参考にしたものである。Personal ネットワークとは、母親の学生時代や元あるいは現在の職場の友人など、母親役割に関係なくできたネットワークのことであり、Maternal ネットワークとは、産院や母親学級で知り合ったり、子どもの幼稚園や学校を通して知り合ったというように、母親としての立場を通してできたネットワークのことである。同様に、ここでは、それぞれのネットワークでの友人を Personal 友人、Maternal 友人と用いる。第 1 章参照のこと。

Jennings, Stagg, and Connors (1991) Social Networks and Mothers' Interactions with Their Preschool Children *Child Development*, 62.

(12) 兵庫県家族問題研究所『核家族の育児援助に関する調査研究報告書』1987 年。

(13) 母親の妊娠期から子どもが 3 歳児まで、母親の様々な悩みの相談相手を訪ねたところ、夫や家族・親族が上位を占め、また、いくつかの場面を設定して「子どもの預け先」をたずねても、同様の結果が見られた。第 1 章を参照。

(14) 3 歳児をもつ母親に同様のネットワーク調査をした結果、育児上の問題を解決せずに先送りしていた母親たちのネットワークとして、第 1 円が家族・親族で占められているという特徴があった。また、母親のネットワークの中から、サポーターとストレッサーになる人をあげてもらったところ、家族・親族がサポーターであると同時にストレッサーとしても高率であげられていた。第 1 章を参照。

(15) 母子家族に対する調査において、母親の悩みの相談相手は親族のみで占められる場合が多かったが、そこでも母親の年齢が高くなるとともに相談できる親族も減り、あるいは親族であるからこそ相談できない悩みが生じた場合などには、「誰にも相談しない」という結果が生じてしまうというリスクも考えられる。

岩田美香「母子家庭の分析」杉村宏・岩田美香、前掲書、1996 年。

岩田美香「ひとり親家族の生活と社会関係—全道と札幌市における生別による母親の検討から—」前掲論文、1998 年。

(16) 牧野カツコ、前掲論文、1982 年・1983 年・1987 年と、本論文第 1 章参照。

(17) 育児の悩みについて生活の悩みをたずねたことから、多くの母親が両者を区分して回答してくれたが、もちろん、育児の悩みと生活の悩みとは、常に分けて生じるものではなく、お互いに影響し合って生じてくる場合も少なくない。表 3-3 では、生活の悩みの答の中に育児の悩みと思われる回答もあるが、母親が「育児の悩み」・「生活の悩み」のそれぞれの質問において回答してくれた方の領域のまま載せてある。

(18) 岩田美香、前掲論文、1996 年および 1998 年。

(19) この質問は、1972 ～ 1975 年にかけて行われた「日米幼児教育研究」において、考案・使用されたものである。東洋・柏木恵子・R.D.Hess『母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究』東京大学出版会、1981 年。

(20) 総務庁の「社会生活基本調査」では、「在宅型余暇」をテレビ・ラジオ・新聞・雑誌および休養・くつろぎの合計とし、「積極型余暇」を学習・研究、趣味・娯楽、スポーツおよび社会的活動の合計、「交際・付き合い」、「その他」としている。その分類のもと、専業主婦の余暇時間は、「在宅型余暇」で 3 時間 46 分、「積極型余暇」で 1 時間、「交際・付き合い」が 30 分となっている。

総務庁統計局『平成 3 年 生活基本調査報告 第 10 巻』、1993 年。

(21) 『生活保護手帳（平成 9 年度版）』全国社会福祉協議会、1997 年。

(22)「遊びの広場」とは、平成9年度から札幌市が行っている公的な幼児の集団活動の場である。札幌市内に住む1歳半～就学前の子どもと母親を対象とし、地域での育児サークル、仲間づくりを目的として、母子ともに参加する活動のことである。このプログラムの前身は昭和35年よりはじめられた「仲良し子ども館」であった。両者の違いは、「仲良し子ども館」が幼児の健康づくりや地域での仲間づくり、親子遊びの指導などを目的としているのに対して、「遊びの広場」では、より母親たちが主体となって育児サークルを結成していくことに重点が置かれている。また、「仲良し子ども館」が、1年間を通したプログラムであるのに対して、「遊びの広場」は1年間で4期に分け、年に4回の募集を行っている。

(23) 山田は、子どもにとって望ましいことや必要なことが、マーケティングの戦略から次々と提案されて、母親が子どものためにそれらの何かしなければ愛情がないという圧力が、「母性愛」と関わって展開されることから、母親の感情マネージの水準が上昇していく様を示している。山田、前掲書、1994年。

(24) 渡邊秀樹、前掲書、1994年。

終章 育児困難の構造と類型

第1節 育児困難の類型的把握

1. 育児困難の共通基盤

本論文の最後の章として、現代における育児困難全体の中で、先にグループ分けをした母親たちの育児困難や「育児不安」を説明していく。

一般に、今日の育児を行っている母親たち全体をとりまく環境は、どのような状況にあるのだろうか。最初に、現代家族の育児の特徴からみていきたい。近代以降の家族の特徴は、高度経済成長に伴う住居と職場の分離、核家族化、専業主婦の増加、少子化、地域社会の崩壊等々で説明され、それぞれが、「母親が家庭で孤独に育児をすることへの困難性」をもたらした背景要因として説明されている。そうした社会的な要因を踏まえたうえで、育児に関わる諸主体の相互の関係に焦点をおき、現代家族の育児構造の特徴を示したのが先にも述べた渡邊である⁽¹⁾。彼は、家族の育児の様相が、社会の様々な諸主体との分担や共同のいかんによって規定されるという前提に立ち、育児構造の理念型を提示している。すなわち、「現代の家族が育児機能を担うに足る資源を保持することは不可能であり、家族に期待される役割は、家族外部の育児資源をコーディネートすること」⁽²⁾なのである。

現代の育児構造を、そして育児における家族の役割をこのようにとらえたとき、家族をとりまく資源（や機会）として考えられる要因は、経済的基盤や住環境、ネットワーク、情報・知識等々である。これらはいずれも現代社会共通の問題を抱えている。すなわち経済的基盤についてみれば、今日、親が育児環境を整える際には、その機能を外注する、サービスを購入する形でコーディネートされている。そして、消費社会について言われている弊害が、育児においても同様の影響を受けることとなる。また、住環境では、住宅の高層化や子どもを連れて行ける場の減少、地域社会の連携の弱まりなどによって、親、とりわけ母親一人が家の中で孤独な育児を行うこととなる。そこでは、共同で子どもを育てていくという基盤はできにくく、常に他の親の育児や他の子どもの発達との比較がなされ、そこに学歴・競争原理が前倒しする形で入り込んでくる。そうした孤独感や閉塞感を緩和するために、ネットワークや情報・知識は有効な資源となりうるが、これさえも、その関係性と質・量によって、時には、資源が親を悩ませる要因となってしまう。つまり、情報や知識は親の行動や判断のための重要な資源であるが、今日のように、その量が膨大であり、内容も氾濫している状態にあっては、それを整理・処理することも難しく、かえって

混乱を招いてしまうこととなる。夫や親族やその他のネットワークについても同様であり、母親の心理的不安や肉体的疲労を軽減させ、時には物質的・経済的な側面からのサポートの供給源となる一方で、その介入が多すぎたり大きすぎたりする場合は、かえって母親の心理的安寧を軽減させてしまう可能性も保持している。

また一方で、育児における新たな動きとして、「父親の育児参加」の必要性が言われ、父親の育児参加の奮闘振りが紙面等に報告されてきてはいるが、子どもの年齢が乳幼児に限ってみれば、先にも触れたように、それらは少数派にすぎず、まだまだ育児は母親中心に成されていると言わざるを得ない。そこには、いまだに母親たちに深く浸透している「三歳児神話」も後押しをしている⁽³⁾。

こうした視点から母親の行う育児をとらえてみれば、個々の育児の質（その良し悪しの評価は別として）というものが、母親の社会的条件（母親とその家族をとりまく資源の量や質）と、その資源を取捨選択する母親のコーディネート力（問題調整能力）とによって左右されることとなる。しかも先に述べたように、母親たちがおかれている共通基盤というのは、情報や知識が個人の処理能力を超えるほどに氾濫しているにも関わらず、社会的に孤立された、孤独な育児である。そこでの孤独感というのは、自らの子も他の子も共同で育てていくといった基盤が成立しにくく、さらに、その基準が他児との比較のなかで、わが子が「みんなと同じように」それでいて「少しでも早く」といった価値判断に依っていることから生じる孤独感である。

これこそが、現代における育児困難の共通基盤であり、母親を根本的に規定しているものである。現代における育児というのは、それ自体が困難さを伴っており、しかもその役割の負担と責任感は母親に集中している。そして、その役割が強まれば強まるほど、母親の精神的負担は増加していくと予想される。しかし一方で、こうした役割は、現代社会が母親に対して要請しているものでもあるともいえよう。

2. 資源と育児困難の関連

ここでは、現代における育児困難の共通基盤のもと、母親のおかれている生活の諸条件によって、その困難がどういった形で表れてくるのかを構造的資源と編成的資源⁽⁴⁾から整理する。図4-1は、縦軸に構造的資源の大小をとり、横軸に編成的資源の大小をとることで、家族を4つに類型化している。ここで操作的に、それぞれを、構造的資源も編成

的資源も大きい家族が「A」、構造的資源は大きいが編成的資源は小さい家族が「B」、構造的資源は小さいが編成的資源が大きい家族が「C」、構造的資源も編成的資源も小さい家族が「D」とする。個々の母親たちは、家族がもつ資源に加えてその活用の仕方によって各事象内にプロットされる。これらの家族の特徴を、これまでに実施した調査の結果を参考にして概観していく。もちろん、構造的資源は編成的資源を一定部分規定しつつも、その編成的資源の内容によっては、この図のようにきれいに分類されるものでもない。しかしここでは、そうした資源の違いによる変動を考慮に入れながらも、その領域での典型的なケースを示していく。なお、図4-2および図4-3は、編成的資源を「時間」でとった場合と、「ネットワーク・情報」でとった場合について、第3章で分析したケースがどの領域に位置しているのかを図示している。

これらの範疇に該当する家族とはどのような家族であろうか。Aに位置するNo.14・No.16・No.18・No.23 ケース（SⅡグループ）やNo.26・No.30 ケース（Fグループ）は、世帯収入も高く子どもの物的な環境も「整備」さえている。また、母親をとりまくネットワークも広く、情報や知識も豊富に存在している。編成的資源を「時間」でとった場合には、時間に余裕のない共働きの母親（No.26 ケース）は、B領域に位置することとなるが、反対に構造的資源の高さから、様々な育児支援やサービスを活用することで、時間を創り出し、このA領域に位置するライフスタイルも可能となる。

Bに位置する家族は、構造的な資源は保障されていても、母親が活用する時間や情報やネットワークが乏しく社会的に孤立しがちな存在となる。この家族の典型例は、第3章における調査では該当したケースがなかったが、転勤の多い家族が考えられる。母親が築いてきたネットワークは、夫の転勤によって分断され、母親は新たな地域で、自らのネットワークを構築し、情報を入手していかなければならないこととなる。また、先に述べたようにフルタイムで、所得はあっても編成する資源を得にくい就労条件にある母親（No.26 ケース）などもこの領域に位置することとなる。これらA領域とB領域は、編成的資源の内容や母親の動きによって、プロットが変わりうる領域である。

Cに位置する家族は、構造的資源に制約はあるものの、母親の活用する編成的資源が比較的多い。編成的資源を「情報」や「ネットワーク」でみるならば、No.11・No.24 ケース（SⅠグループ）やNo.15・No.17・No.19 ケース（PⅠグループ）が該当する。ここでの例は、現代では少なくなったといわれているような昔の下町の家族や、育児サークル等での活動を主体的に行っている母親が考えられる。しかし、Cに位置して育児のネットワ

ークが充実している母親でさえ、構造的資源に規定された生活問題が育児困難に反映しているケース（No.11・No.24・No.15・No.17・No.19 ケース）が少なくない。また、編成的資源を「情報」や「ネットワーク」ではなく「時間」でみるならば、低賃金でありながら、フルタイムに近い時間のパートタイム就労を強いられている No.15・No.17・No.19 ケース（P I グループ）の母親などは、D 領域に位置することとなる。この C 領域と D 領域のあいだも、A 領域と B 領域のあいだと同様に、編成的資源の内容や母親の動きによって、プロットされる位置が変わりうる領域である。

さて、最後の D 領域であるが、ここに位置する家族は、構造的資源も、それによって規定される情報・ネットワークなども低く、母親は社会的に孤立しがちとなる。ここでの家族の典型例としては、生別母子家族や生活保護受給家族など、社会的に弱い立場にある家族が考えられ、先のケースでは No.4・No.9 ケース（S I グループ）が対応する。ただし、No.4・No.9 ケースとともに、編成的資源を「時間」でとった場合には、祖母による家事・育児のために母親自身の時間が多くなり、C 領域にプロットされる。もちろん D 領域に位置する母親であっても、育児サークルや自らのネットワークで活動を広げている母親は、「情報」や「ネットワーク」について C 領域にプロットされ注目されることもありうる。しかし、No.4・No.9 ケースのように、そうした主体的な動きができないでいる母親は D 領域に位置したままで、たとえ育児困難が存在しても「育児不安」としては顕在化しにくい。

また、先に概観した現代における育児困難の共通基盤のもと、A～D 領域を通しての全体的な傾向と言えることは、構造的資源の大小が生活問題の解決を規定していること、それにもかかわらず一般的な育児不安というのは、どのグループにも一様に存在しているということである。A や B に位置する家族は、これまでに生活上の大きな問題は抱えてこなかったか、問題はあっても、資源の動員によって解決されてきている。一方、C や D に位置する家族は、育児上の問題も、その背景に就労の不安定さや借金等の生活問題があったり、生活問題が解決されているように見えるケースでも、状況が一つ変われば、すぐさま生活と育児の困難さが入り交じって表れてくるというリスクを背負っているケースが見られた。しかし、そうした生活問題の有無や大小に関わらず、育児をしていくうえでの悩みは A～D 領域を通して抱いており、一定の高さ（健康的な範囲）での育児不安として存在していたのである。

その中から、特に A に位置する母親の中には、No.14・No.18 ケース（S II グループ）

のように、一般的な育児不安が社会的に問題視されるような「育児不安」へと増幅して感じている母親がいた。彼女たちには、子どもに特別の問題がなくとも母親の不安感が存在していること、また、自らも「育児不安」が高いと認識しており、その不安を解消するために、子どもに良かれと思うことを賢明にコーディネートしているという特徴がみられた。しかし、実際のコーディネートは、現代の氾濫する情報の一つ一つに過敏に反応し、また、母親自身の生活よりも「子どものため」だけが、コーディネートの方向性を決定してきたことから、コーディネートが空回りしている状態にあるといえる。編成的資源を母親の「コーディネート能力」でみるならば、これらの「育児不安」ケースは、コーディネートの量でみれば「A」にプロットされても、コーディネートの質としては低く、情報に振り回され「B」に位置していると解釈できる。

一方、CやD領域の中には、育児上の問題や困難を抱えているにもかかわらず、生活問題が先に立って「育児不安」として意識していない母親（No.15・No.17・No.19 ケース）、あるいは、育児自体を放棄しかけているために、一般の育児不安としてさえも意識に上ってきていない母親たち（No.4・No.9 ケース）が存在していた。これらのことは、図4-1～図4-3においてA・B領域とC・D領域との境界が太い線で表されているように、構造的資源の大小によりA・B領域とC・D領域とで、問題の性質が大きく2つに分かれてしまうということを示している。

次に、育児困難を構成する、意識レベルの「育児不安」と、実際の行動レベルでの育児・生活問題とが、先のA～D領域の家族について、どのように表れるのかを示してみたい。「育児不安」の高低と行動レベルでの育児・生活問題の有無とで4つの育児困難の表れ方を示せば、①「育児不安」も低く、実際の育児・生活問題も存在しない、②「育児不安」は高いが、実際の育児・生活問題は存在しない、③「育児不安」が高く、実際の育児・生活問題も存在する、④「育児不安」は低いが、実際の育児・生活問題が存在する、が考えられる。これらをA～D領域の家族に当てはめてみると、①や②にはAとBの家族があてはまる。A領域の家族については、これまで育児不安が「育児不安」として強めてしまう要因があることのみに触れてきたが、それと同時に、資源の豊かさから生活が安定し、育児を楽しんでいる母親たちも存在しやすいのである。反対に、③や④は、C・D領域の家族にあてはまり、中でも④の表れ方（潜在化してしまうという表れ方）は、主に構造的・編成的資源の小さいD領域の家族にみられる。

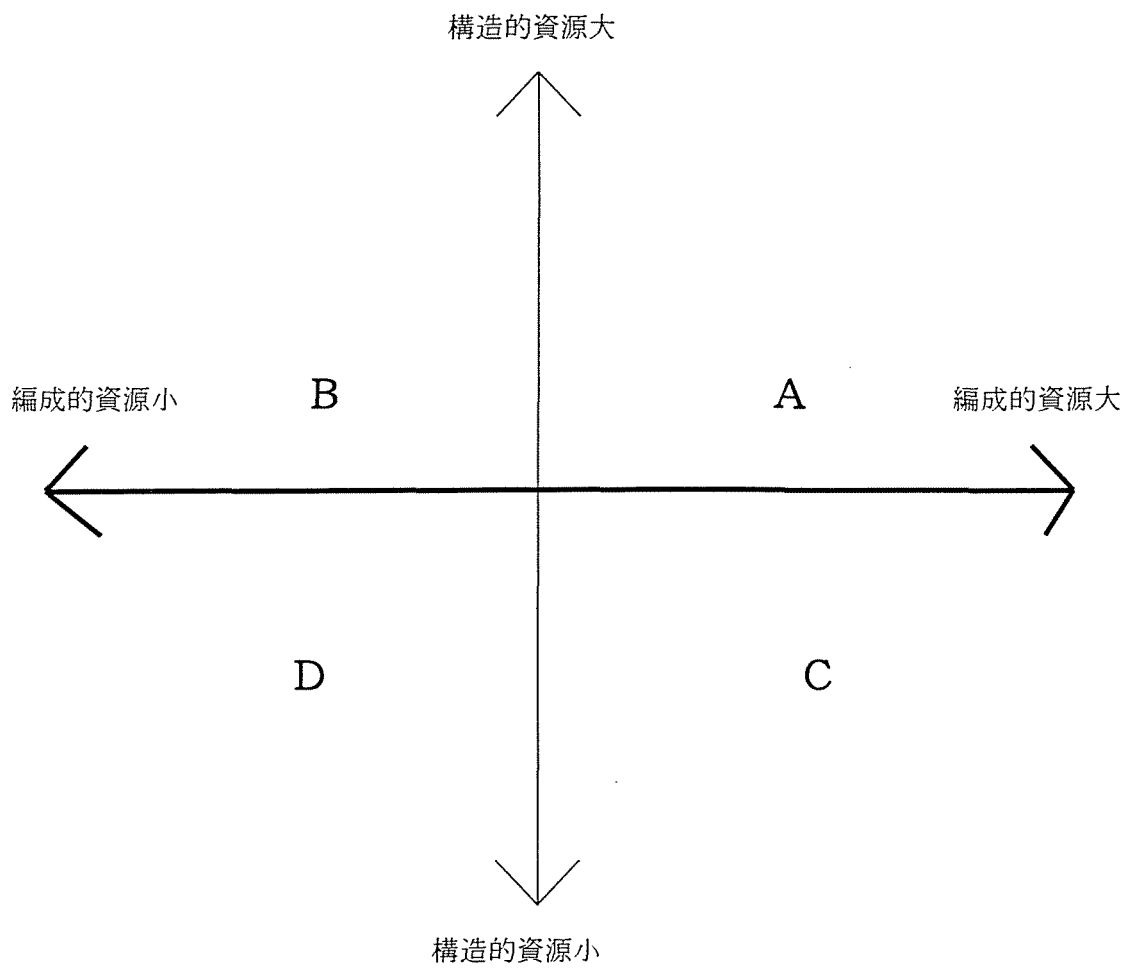


図4-1 家族のもつ資源と家族の分類

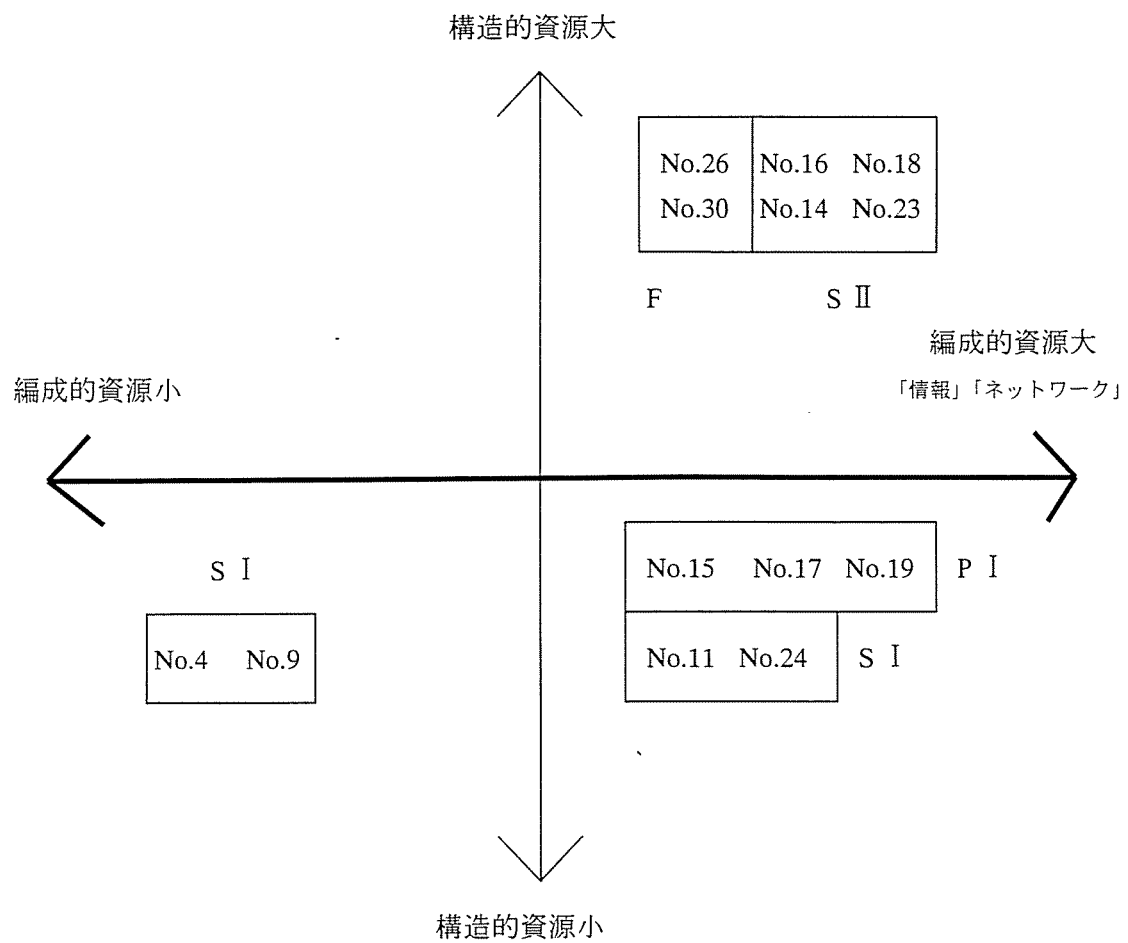


図 4-2 編成的資源を「情報」・「ネットワーク」でみた場合の母親の分類

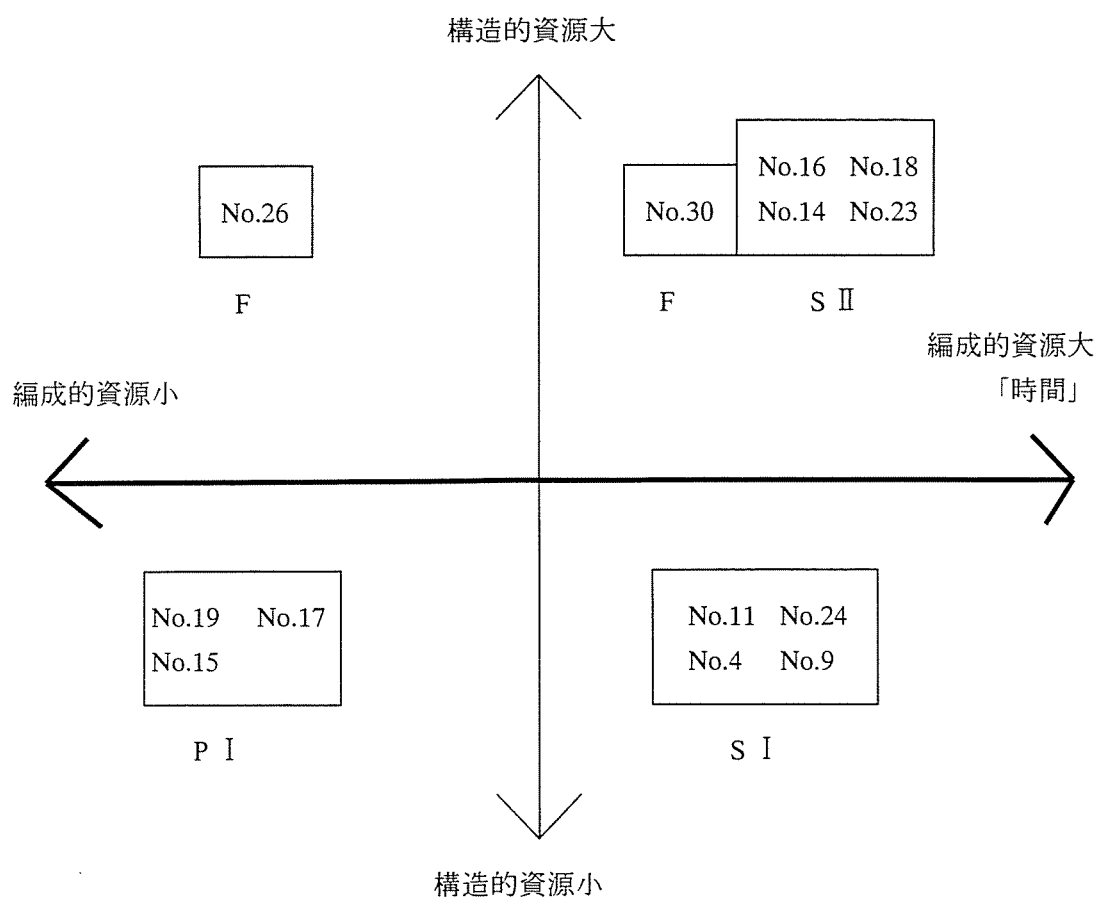


図 4 - 3 編成的資源を「時間」でみた場合の母親の分類

3. 「育児不安」の現象形態

前項において、図4-1のC・D領域からA・B領域への移動は、生活問題の解決を必要とする場合が多く、容易ではないことが確認された。そこは、母親の自助（頑張り）を越えた領域である。すなわち、生活基盤の安定性を通してみることににより、A・B領域に代表される、「育児不安」という形での目に見えやすい育児困難と、C・D領域に代表される周囲からは見えにくい育児困難とに分けられる。

先にも述べたが、一般的な（健康な範囲の）育児不安というのは、生活上の問題や不安がクリアされている・いないにかかわらず、A～D全ての領域にわたって、子どもを育てている親であれば誰しもが抱くものである。いわば、その原因は「親であること」・「育児をすること」にあり、その解決としては、友人をはじめとしたネットワークの中で解消され、あるいはまた、子どもの成長とともに自ずと解消されることとなる⁽⁵⁾。しかし、一般的な育児不安であっても、それに敏感に反応して「育児不安」を高めていくという現象形態は、生活基盤の安定している階層（A領域やB領域）の母親に代表される。さらにそこでは、育児・教育サービスを購入する形で、その解決をはかり、それによって、ますます「育児不安」を高めていくという、「育児不安」の罠とも言うべき状況に陥ってしまう現象が、育児サービスを購入する経済的余裕も手伝って、この階層の母親に代表される場合が多い。健康的な育児不安であっても、他の子どもとの比較や氾濫する情報や育児関連サービスの中で強められてゆき、さらに母親が心理的あるいは物理的に孤立している中では、解消の手だてもないままにケアの必要となる「育児不安」、さらには育児ノイローゼへと強められる場合もある。このことは、「育児不安」がA・B領域の母親だけに起こりうるということを意味しているのではない。先の育児困難の共通基盤で述べたように、他児比較にみられる競争原理と氾濫する情報のなかで、そのコーディネートが母親に集中している現状にあっては、誰もが「育児不安」に陥りやすいリスクを背負っているのである。さらに、生活基盤の安定性の上に位置している健康な範囲の育児不安というのは、その極にあるケアの必要な「育児不安」や、虐待を先取りする形で、マスコミなどにも注目されていく。その結果、一般的な育児不安が、専門家の対応を必要とする「育児不安」として、母親自身にもよっても、また、マスコミや専門家によっても創られてゆく場合が少なくない。

反対に、生活基盤が不安定で、生活問題を抱えている母親たちは、「育児不安」は言うまでもなく、一般的な育児不安さえも生活問題につぶされて後回しとなったり（No.15・

No.17・No.19 ケース)、さらには、育児や責任の放棄という現象形態 (No.4・No.9 ケース) をとる。つまり、育児不安を顕在化し続けることができないほどに生活に余裕がなかったり、中には育児や子どものことを考えることさえも億劫となってしまう母親である。そしてこれらの問題は、実態としてはとらえにくく、ケアの必要な範囲を越えて、虐待や放任が事故・事件となるような形で表れてはじめて、その問題の深刻さを知ることとなる。いわば「放置されている育児困難」として存在するのである。

第2節 「育児不安」の社会的性格

育児をしている母親が抱くネガティブな感情と言っても、育児をしている母親であれば誰しもが抱く、育児上の悩みにも似た一般的な育児不安と、その中から、さらに不安を増幅していく「育児不安」、また反対に、困難さがありながらも育児不安として意識していないという状態が確認できた。

ところで、誰しもが抱く育児不安が、「育児不安」として突出する形で表れ、それが問題視されるのはなぜであろうか。ここでは、第2章における No.30 のケースを中心に考察し、「育児不安」の社会的な側面からの性格規定を試みる。そこから、「育児不安」が、とりわけ社会的に注目されることの根拠が見いだせられると思われるからである。

一般的な育児不安が「育児不安」へと増幅していくには、どのような条件が重なっているのだろうか。第2章の No.30 ケースについて、'93 年調査と'97 年調査の結果から、このケースが「育児不安」を増幅していくプロセスについて、図で示してみると、図 4-4 のようになる。この母親は、'93 年の調査時点で、夫の転勤により札幌へ引っ越してきたばかりであった。図中、母親の背後から影響を与えている要因として「社会的孤立」と示してあるのは、転勤に伴い近所でのネットワークもなく、また、ネットワークを構築するために公園へ行ってみれば、団地内で仲間外れにされて「公園ジプシー」となってしまい、さらに地域で催されている公的な育児教室（仲良し子ども館）に参加してみれば、そこで活動が契機となって流産をしてしまったという経験もあり、日常的に交流できるネットワークをもっていなかった。自分の親族でのネットワークも、以前は子どもをもっている妹がおり、その妹との交流もあったが、今では、その妹が亡くなってしまったため、日常的に行き来する親戚はいない。母親が社会的に孤立してしまうということには、対人関係

の輪を構築していくということが苦手であるという「母親の性格」が影響している部分もあると思われる。しかし、この母親が、不器用ながらも新たな地域での友人関係を創ろうと努力した経過をみれば、問題を「母親の性格」に特化してしまうことでは解決にならないことがわかるであろう。他に、母親に影響を与えている要因としては、「子どもの問題」と「姑の問題」がある。「子どもの問題」とは、子どもの言葉が不明瞭というものであったが、これは先の「社会的孤立」とも関連して、母と子が一日中、団地の部屋の中で過ごす時間が多く、子どももテレビ付けの生活となっていたことから生じていたものである。また、「姑の問題」は、姑が子どもに対しておもちゃをたくさん送ってくるため、部屋がおもちゃで溢れて片づかず、ストレスになるというものであったが、姑が夫に依存しすぎることに對する不快感も影響していた。No.30 ケースの母親が、こうした状況の下、育児・教育産業がもたらす情報やサービスと育児書や雑誌などからの「他児比較」の間を行ったり来たりしている中、母親の育児不安は「育児不安」へと増幅していく。このケースの夫は、時間的に忙しいものの精神的な面では母親をサポートしており、母親がこの「螺旋階段」を登っていく速度を遅めたり、一二歩後戻りさせてくれる役目を担っていても、日中一人である母親は、この階段を「育児の標準」へ向かって登っていくこととなる。

この母親が、4年後の'97年調査の時点では、どのように変化したのであろうか。「母親の社会的孤立」については、子どもの幼稚園を通しての友人ができ、小さなネットワークであるが、母親はそれを大切にしている。「子どもの問題」についても、子どもが幼稚園という集団の中へ参加して行くに従い、今では「朝から晩までよくしゃべる」ほどに成長している。また、「姑の問題」も、夫から姑にはっきりと言ってもらうことで「おもちゃ」の件については解決をした。現在でも、「他にも姑のことでは悩みはある」が、母親自身に精神的な余裕が出てきたためか、「姑も夫を頼っているの、それを思って、こちらから行くようにしている」と、姑へのストレスも減ってきている。こうした、母親の背後の要因が改善されたにもかかわらず、この母親は、4年後も「育児・教育サービス」と「他児比較」との間の階段を登り続けていた。「周囲の子に比べて読み書きが遅かったの、小学校に上がってから困らないように」と「くもん」をはじめ、小学校の授業に備えて「ボール通い」もしているのである。母親のネットワークが広がったことで、その友人と育児の悩みを相談しあうことも多くなり、母親が螺旋階段を登るスピードはゆっくりとなる場合もあったかもしれない。しかし、相談できる友人ではあっても、かえって、その相手の育児や子どもとの比較が生じてしまい、ネットワークが広がったことでの「他児比較」が

膨張していくこともある。結局、この母親は、子どもが小学校に上がっている現在も「育児の（子育ての）標準」への階段を登り続け、さらに「子育ての情報をどこで入手したらよいのか」と心配している。

母親が「社会的に孤立しがちで、母親だけに責任が集中しやすい」という現代の育児を担っていく時、氾濫している情報や知識の中では、「他の子どもや他の母親との比較」をしていくことでしか「育児の標準（スタンダード）」は見いだせない。しかし、その「標準」は母親の「期待」とも重なって、常に上昇傾向にある。その結果、他の母親や他児との比較には「これで十分」というゴールはなく、母親たちを慢性的に「育児不安」という意識状態へと追いやっていく。その「育児不安」にしても、大部分は「育児仲間や友人」との話し合いの中で緩和されるものであり、取り立てて「育児不安」として問題視しなくとも、子どもの成長とともにいつの間にか解消されてしまうものである。しかし、時には悩みを共有できるような友人をもてなかったり、相談をしてもかえって混乱や比較を強めることとなり、再び、その回答を情報や商業的サービスに求めるという悪循環をもたらす。こうして「育児・教育サービス」と「他児との比較」とを往復しながら、ますます「育児不安」を高める方向へと上昇していく螺旋階段のような構図が考えられる（図4-4は、No.30 ケースに即したものであり、個々の母親によって、その背後に影響する要因は異なっている）。

母親のもつ資源とコーディネートに即して「育児不安」の増幅を説明すれば、「育児不安」を解消しようとコーディネートするための情報や知識などの資源が豊富に存在していることが必要であり、コーディネートを決定づける方向性としては、「母親自身と子ども」の両方を向いているのではなく「子どもだけ」を向いているという特徴がある。さらに、そうした情報・知識の収集や、子どものためのコーディネートを実施するための時間と余裕が、母親の生活の中になければ、この「育児不安」への螺旋階段を登り続けることはできない。反対に、そうした余裕があるからこそ、母親の育児は創られた「標準」へ向かって上昇し続けるのである。因みに No.30 ケースを前節のA～D領域で分類してみれば、AまたはB領域に位置することとなる⁽⁶⁾。

子どもが乳幼児である「育児」の段階では、その比較する内容も「他の子の方が早く歩いた」、「他の子の方がおむつが早く取れた」といった単純なものが多い。こうした差異は、多くの場合、成長に伴って、どの子もクリアしていく発達課題である。しかし、子どもの成長とともに「子育て」の段階に入っていくと、それらは成績という目に見える形で、

「他児との比較」や「子育て不安」は強く表れてくる傾向にある。「育児不安」は、こうした子育て競争における不安が前倒し的に（年齢が若い段階へと）覆い被さってきている現象であるとも考えられる。

子どもを育てていれば、わが子に対して、このように育てほしいという期待や願望を抱くのは当然の感情である。しかし近年では、そうした期待が母親個人の期待というよりも、母親の外側から創り出されたものといった方が実状に近く、母親たちは否が応でも、他児との比較をしてしまう環境にある。この領域は、育児・教育産業のマーケットとして、かなり大きなシェアを占めており、実際にテレビや新聞・雑誌でのコマーシャル、さらに幼児のいる家庭へのダイレクトメールで送られてくる早期教育や育児サービスの案内は、母親をそうした教育やサービスへと駆り立てる内容であふれている。母親個人に則して言えば、「よその子に遅れをとらないように…」・「後で困らないように…」といった子どもを“想って”の行動であるにすぎない。しかし社会の側から、特に産業の側に立てば、これは、子どもが大事にされているのではなく、子どもが一種の「商品」としての意味をもちはじめたに過ぎない⁽⁷⁾。こうした育児産業の流行について、子どもの社会化との関連でみれば、今や商業的支援の内容は、早期教育に代表される「子どもの知能・才能」を伸ばすことに終始しておらず、母親のニーズに応えるという名目で（実際にはニーズを創り出してもいるが）、衣食住という育児や生活の基本的な領域にさえも「支援」が行き届いている。そして皮肉なことに、育児や生活を外部化すればするほど、家族の外部との接触が増えているにも関わらず、母親が孤立化していくのである。これまで、塾通いに代表される学歴社会において、いわゆる「三次的社会化」の領域において商業的支援が家族の教育機能を代行してきていることは言われている⁽⁸⁾。しかしそれが、「二次的・一時的社会化」の領域においても、家族の機能が商業的支援に代行されてきており、それを後押ししているのが、「育児不安」の社会問題化ではないだろうか⁽⁹⁾。すなわち、今日の「育児不安」は、現代の育児困難を共通基盤としながらも、母親の心理的側面に注目することによって、問題の表面的な解決が育児サービスへと傾斜していく中で創られた産物であると考えられる。そして、そうした母親の意識と育児サービスとの間で、「育児不安」が増幅していく側面において「社会問題化」してきていると言えるのではないだろうか。

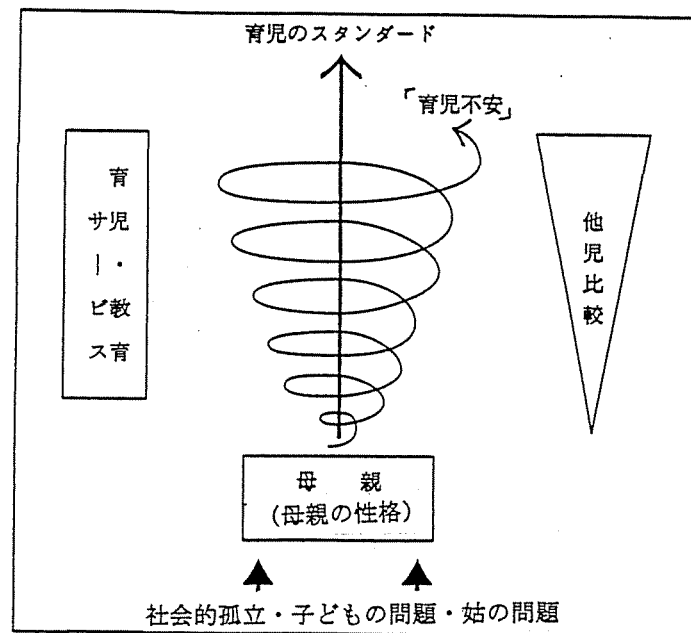


図4-4 No.30ケースにおける「育児不安」のプロセス

【終章の注と引用】

(1) 渡邊秀樹「現代の親子関係の社会的分析―育児社会論序説」社会保障研究所編『現代家族と社会保障』、1994年。

(2) 渡邊秀樹、前掲書、1994年、P.86。

(3) 『臨時増刊アエラ 子どもがわからない』朝日新聞社、1998年、Pp.144～149。

また、母親たちが頭では三歳児神話を否定していても、現実の行動では、それと相反する行動をとっていることを示しているものとしては、『子育ては地域のネットワークで』東京・生活者ネットワーク、1999年。

(4) Sandra Wallman (1984) *Eight London Household*. Tavistock Publications Ltd., London.
(福井正子 訳『家庭の三つの資源』河出書房、1996年)

本論文、第3章・P.111 参照のこと。

(5) 本論文、第2章を参照のこと。

(6) No.30 のケースは、専業主婦で世帯年収が 500 ～ 700 万円未満であり、第3章における分類では、SⅡグループに位置する。さらに、構造的資源と編成的資源との類型化では、編成的資源を「ネットワーク」でみるならば、'93年時では夫の転勤で引越してきたばかりでB領域に位置していたが、Maternal 友人ができたことによりA領域へと移行している。また、編成的資源を「情報」でみるならば、'93年当時のネットワークが小さいときであっても、育児書・雑誌からの情報収集能力が高く、A領域に位置している。

(7) 山下恒男、『子どもという不安』、現代書館、1993年。

(8) 育児産業の流行について、子どもの社会化との関連で説明しているのが汐見である。
彼は子どもの社会化を、生まれたあとの家庭での養育による「一時的社会化」と家の近所での遊びや近隣の人間関係、さらに家の仕事などに加わることによる「二次的社会化」、そして、学校に行って制度化された教育を受けることによる「三次的社会化」という3つに分類している（この3つの社会化は段階論ではなく、同じ時期に平行して関連をもちながら機能するとしている）。そして、この二次的社会化の変化によって家庭養育機能の負担が増えたことが、商業的支援である育児産業を流行らせると述べている。汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店、1996年。

(9)「不安」が産業の対象となることは、竹内が、「心身」の不安が強くなればなるほど、巨大な市場ができあがり、「不安産業」とでも呼ぶべき分野が組織され、不安の産業化が進展していくとしている。竹内真澄「現代の不安と救い」飯田哲也・浜岡政好『人間性の危機と再生』法律文化社、1988年。

まとめと今後の課題

最近でこそ、子育て不安、子育て困難、育児困難といった用語が意識的に用いられるようになってきている⁽¹⁾ものの、母親たちが日常的に使う語彙のレベルでは、「育児不安」によって、育児期における母親のネガティブな感情が表されている。それは、「育児ノイローゼ」というほどに重い病的なニュアンスを含んだものではなく、日常の育児での苛立ちや自信喪失感を表したものである。それならば、なぜ、「育児不安」として、育児雑誌などに特集が組まれるほどに、社会的に注目されているのであろうか。こうした疑問をもとに、本論文の目的は、「育児」期の母親に焦点を合わせながら、「育児不安」の性格を相対化して検討し、「育児不安」を含めた育児困難の構造を表していくことであった。

「育児不安」の検討については、牧野による「育児不安」尺度を精密化していく試みの中で、母親の「育児不安」を軽減すると同時に、母親の充実感を高めていくことの重要性が見いだされた。さらに、それらに関連する要因としては、「母親の社会的な活動」や「社会的なネットワーク」、「夫の協力と精神的サポート」、「他の子どもとの比較」があげられた。また、育児期までの問題解決を母親の主体的な活動とネットワークに注目して分析した結果、家族や親戚を越えた新たな関係をつくり出し、問題を主体的に解決している、いわゆるネットワーキングの母親と、問題を解決できずに先送りしている母親たちとの存在があった。彼女たちについて、先の不安尺度での結果をみると、問題未解決の母親たちの不安得点が高いのは予想できたが、反対に、ネットワーキングの母親であるからといって、不安得点が低いという結果は出なかった。自ら、社会参加し、ネットワークを広げ、そこでの問題解決をはかっている母親でさえ、一定の高さの「育児不安」が存在したのである。

これらの結果は、「育児不安」研究のもつ対象把握に限界があることを示すと同時に、社会的にも注目されている「育児不安」が、育児に伴う一般的な感情である育児不安とは、別の性格を帯びたものになってしまっているのではないかと考える契機となった。そこで、「育児不安」の性格規定について二つのアプローチからの相対化を試みた。すなわち、母親自身への縦断調査を実施し、自らの育児を振り返る中で「育児不安」の性格規定をするという時間軸での相対化と、育児困難（育児不安も「育児不安」をも含む）を社会全体の育児構造を通して分析していくという、社会的な条件の違いによる相対化である。

縦断調査による母親からみた「育児不安」の特徴では、「育児不安」と言うよりも、一般的に育児期の母親が抱く育児不安に近い性格のものであった。すなわち、その多くが乳幼児という限られた時期に生じるものであり、また、少し時間をおいてみれば「大したことのないもの」と思える程度のものであった。しかもそれは、時間とともに自ずと解消されていくものであり、その解決に専門家が関わることもなく、母親個人の自助努力や、あるいは自助グループ的な育児サークルの中で解消されていた。こうして、表面的には悩みを共有することで解消されている一方で、個々の母親は、競争原理に裏付けられた不安と情報に煽られて、育児や教育サービスを購入することで解決をはかり、さらに不安を増幅させている現状も確認できた。

社会的条件の違いによる相対化では、育児困難を母親の主体性に注目しつつ構造的に把握しようと、従来の固定的な構造的資源に加えて、より柔軟な編成的資源を用いて分析した。そこでは生活基盤の安定性（構造的資源の大小）が生活問題の解決を規定していること、また問題の性質も、そこで二分されていることが示された。育児不安という母親の意識の現象形態も、「育児不安」や育児ノイローゼとして顕在化していく一方で、反対の極には母親の意識が潜在化し、育児困難の実態さえも社会からは潜在化してしまっている「放置されている育児困難」として存在していた。近年、少子化の問題が取りざたされ、その要因として、「子育てにお金がかかるから」という理由が第一位を占めている。実際に育児をするうえでは、子どもの「もの」の購買力にしても、その子どもを育てる母親の「もの」や「時間」の捻出のためにしても、様々な状況において、家族のもつ構造的な資源に規定される部分は少なくない。しかもそれが、物質的な育児の側面に限らず、育児における母親の心理的な側面をとらえた「育児不安」というものでさえ、家族のもつ資源、すなわち生活構造によって規定されているのである。

ここで、社会的な条件の違いからみた、育児不安、「育児不安」、そして育児困難の関係を整理すれば、育児不安は、社会的にどのような条件にある母親についても、育児をしている中で生じるものであり、それは、育児の悩みにも似た性格をもっている。だからこそ、その多くが、「大したことのないもの」であり、子どもの成長とともに自然に解消されていったのである。しかし、そうした育児不安も生活基盤の安定性を基軸にみることで、より、問題が顕在化する母親たちと、問題がみえにくくなっている母親たちとに、大別される。生活基盤が安定している母親たちに代表される育児問題は、マスコミ等でも取り上げられ、その母親の心理的側面は「育児不安」として注目される。反対に、生活基盤が脆

弱で生活問題を抱えている母親の育児問題は、生活問題につぶされて後回しとなったり、育児や責任の放棄という現象形態をとりやすく顕在化しにくい。問題が顕在化しなくとも、育児の、そして子どもから見れば子育ての問題が生じており、そこには育児困難が存在している。本論文で用いた育児困難とは、顕在化している育児の問題だけではなく、潜在化している育児の問題も含めたものである。こうした構造の中、今日の「育児不安」というのは、現代の育児困難を共通基盤としながらも、母親の心理的側面に注目することによって、問題の表面的な解決が育児サービスへと傾斜していく中で創られた産物であると考えられる。すなわち、母親自身が「育児不安」として強く意識化し、育児・教育サービスを購入することで解決を図り、かえって、その不安を高めていくのである。そこからは、研究者さえもが、母親を悩ませる「育児不安」の軽減に役立とうと思いつつも、その一端で「育児不安」の看板を大きくし、それが母親たちの不安を煽っている可能性があることを自戒を込めて痛感した。そして、そうした母親の意識と育児サービスとの間で、「育児不安」が増幅していく側面において「社会問題化」されてきていると言えるのである。

ところで、こうした資源の大小の極に位置する問題に共通する概念が「孤立」であろう。これまでみてきたように、母親の存在も、資源のありように規定されながら二種類の孤立化が考えられる。一つは、情報やサービスを求めて育児を外注化していけばいくほど、母子のカプセルが社会から孤立していくというパラドックスのような孤立化であり、いま一つは、経済的要因や社会的偏見などにより、物理的に社会から遮断する（される）形での孤立化である。こうした二方向の孤立化（＝困難）に対して、どのような「支援」策が成されてきたのであろうか。

育児支援に代表されるサービスは、主に、終章の図4-1で示されたところのB領域→A領域の方向性（編成的資源の組み替え）を援助することに重きが置かれてきた。もちろん、夫のサポートや電話相談、育児サークルをはじめとした、顕在化された「育児不安」への様々な育児支援については、その重要性を否定するものではない。しかしそれらは、育児困難全体の中では、一部分を対象とした支援であり、しかも、それらの対応さえも万能ではなく、「育児不安」の社会的性格からも示唆されたように、母親のネットワークづくりが解決とはならず、かえって他児との比較を通して「育児不安」を高める場合も多いのである。そうであれば、一方で「競争圧力」を緩和させる努力の中で上述の支援を強化するとともに、他方では、「放置されてきた育児困難」を抱えている母親たちも視野に入れた保障を中心に考えていくことが必要となる。すなわち、二つの孤立化に対応していく

ことである。それらの極に位置する母親たちには、C・D領域→A・B領域の方向を援助するための生活基盤の充実（就労条件の整備や児童手当等の所得保障に限らず、住環境の整備や専業主婦をも対象にした保育施設や育児教室の充実等も含まれる）とともに、相談業務にしても、「待ち」の姿勢の電話相談や育児サークルづくりの場の提供だけではなく、より個別的な援助や、時には積極的な介入が必要となる。

もちろん、C・D領域にあっても、主体的に行動や解決をはかっていく中でA・B領域へ移動していく母親も存在する。例えば、母子家族の母親が就職して生活基盤の安定性を得る場合などである。しかし、それさえも、母親の過重な労働時間が犠牲となって経済的安定性を得ているような場合には、母親が過労から健康状態を害し、再び生活が不安定な状況へと戻ってしまうといったリスクを負っている。生活基盤の脆弱である母親たちというのは、単に構造的資源である経済的基盤が弱いというだけではなく、編成的資源である時間の使い方や、情報やサービス（それは公的なものも民間のものも含めて）への接近の仕方において、また、それらを実際に利用する時点において、選択の幅が限られてしまうという制限がある。さらに、社会的にはサポートが必要な状態であるにもかかわらず、本人は自覚していないという状況も考えられる。母親の、子どもの世話や家事といったことに関する、問題認識や対処能力の問題である。そこには、母親個人の性格も関連しているとはいえ、母親をそこまで追いつめる現在の生活環境や、それ以前の問題として、これまでに、子ども・育児に対する喜びや親としての自覚を学ぶ機会に恵まれなかったという、母親の育ちの生活環境の不備も存在している。

これを、個々の母親に対する具体的なアプローチの方向性として考える際には、母親のコーディネート能力（問題解決能力）を高めていくことであると思われる。この際の「コーディネート能力」とは、単にコーディネート量の大小を意味するのではない。「育児不安」ケースが、コーディネート量は多くとも、情報に振り回されていたように、その質が問われるのである。育児におけるコーディネート能力を高めるには、「充実ケース」のコーディネートにみられたように、母親が子どもと関わる中で培われる「育児」の能力だけではなく、母親個人としての「自分育て」の能力も必要となる。このことは、近年言われている「父親の育児・子育て」の重要性が、子どもの発達や母親へのサポートという面だけではなく、父親自身の成長としても評価されていることにも繋がるものと思われる。また、本論文における編成的資源の選択の際には、母親のアイデンティティについては、その把握と評定についての難しさから、編成的資源としては取り上げなかったが、この母親

のコーディネート能力を高めるということが、母親の個としてのアイデンティティを高めることに近似していると考えられる。

さらに、構造的資源が、編成的資源である母親のコーディネート能力を規定していたことを考慮すれば、一見、母親の個人的な能力と思えるコーディネート能力を高めることに關しても、生活構造を見据えたアプローチが必要となる。前項における「A」～「D」領域の図でいえば、CやD領域の母親に対するコーディネート能力の高まりを促すには、母親の「コーディネート能力」という編成的資源をみるだけではなく、母親のおかれている構造的資源についても注目しなければならないのである。

このように、育児に関するニード自体が個別性をもっており、しかもそれが、特定の階層に集中的に生じる可能性があることから、より個別的・積極的援助の重要性が確認できるであろう。加えて、こうした「育児不安」だけに限らず、育児困難全体へのアプローチの重要性は、社会的に弱い・潜在化している立場にある家族だけへの対応に終わらず、ひいては子どもを育てている親全体の生活条件を底辺から保障することに他ならないのである⁽²⁾。

今後に残された課題としては、第1に、歴史段階での「現代の育児困難」の特徴を把握し直すことである。本論文では、現代における育児困難について現状の説明をするに留まっていたが、30年・50年前の育児や子育てとの相違から、現代における育児の特徴を浮き彫りにする必要がある。第2には、母親以外の「育児不安」についてである。最初に述べたように、本論文は「母親」の「育児期」の不安や困難に限定して検討をしてきた。しかし、育児は母親だけではなく、父親や親に代わる人々によっても成されるべきものであり、現代の育児構造にあっては、育児に関わっている誰もが「育児不安」になりうる可能性がある。それらの不安や困難性について、今後、検討していく必要がある。さらに、それらの不安や困難が、乳幼児期や就学期を越えた子どもの成長とともに、どのように変化していくのかを、生活構造の中から引き続き検討していく必要がある。また、第3の課題としては、「支援」ではなく、「保障」という視点から育児や子育てを展望するならば、先に述べた二つの孤立化へのより具体的な対応策の内容とともに、育児・子育て期にある家族にとっての生活基盤の安定とは何を示すのか（育児・子育て家族の最適・最低生活保障）ということが、新たな課題となる。

【まとめと今後の課題の注と引用】

- (1) 大日向雅美・佐藤達哉編『現代のエスプリ 342 子育て不安・子育て支援』、至文堂、1996 年。
- (2) 「育児不安」ではなく育児困難からのアプローチすることの必要性は、最近の児童手当と児童扶養手当の動向からもいえる。児童手当が少子化対策として見直されてきている一方で、児童扶養手当は支給対象の所得制限の引き上げなどが行われ、図 4-1 における A～D 全ての領域の子育てを見通した支援にはなっていない。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、様々な形で私を支えてくださったみなさんに、この場をかりてお礼を伝えたいと思います。

お茶の水女子大学の牧野カツコ先生には、本論文についての丁寧なご指導をいただき、深く感謝しております。牧野先生の「育児不安」研究を追いかけて、そして深めていく中で、こうした形での学位論文をまとめることができました。本当に、どうもありがとうございました。また、慶應大学の渡邊秀樹先生には、分析枠組みの構築の際に、お忙しいなか、お時間を割いていただき、ご助言をいただくことができました。

私の長かった大学院生活にわたり、研究でつまずいたり、諦めそうになったときにも、励まし指導をしてくださった北海道大学教育学研究科教育計画講座の杉村宏先生、青木紀先生、どうもありがとうございました。また、北海道大学教育学部の諸先生からは、講座を越えて様々なご指導や助言をいただき、感謝しております。

調査では、心の里親保育園の浜栄子先生（現：札幌大谷短期大学）、発寒幼稚園の吉村幸子先生、札幌市児童相談所の石川丹先生をはじめ、諸施設・機関の方々に、大変お世話になりました。そうした調査を通じて知り合えたお母さんたちからは、たくさんのお話を通じて学ばせていただきました。早いもので、私の修士論文の調査で最初に知り合えたお母さんたちとは、もう5年以上のお付き合いになります。中には、季節ごとにくださったお便りに、とても励まされました。改めてお礼を申し上げます。

さらに、勤務校である北海道医療大学看護福祉学部医療福祉学科の諸先生にも感謝いたします。古瀬徹先生・金田廸代先生をはじめ、担当科目が一緒であった佐々木敏明先生や志水幸先生、また、助手の横山登志子先生、松川敏道先生、実習事務の沼田知穂さん、みなさんのご配慮をいただいて、こうした形でまとめることができました。

最後になりましたが、家事や子育ての面で全面的に協力してくれた夫の努さん、横浜から何度も駆けつけて手伝ってくださった母の岩田和子さん、心から感謝しています。そして、いつもながら、息子の幸義には、励まされ、助けてもらいました。夜中にもってきしてくれたお茶がとてもおいしかったよ。

みなさん、本当にどうもありがとうございました。

1999年2月

岩田 美香

参考文献

- Antonucci,T.C.,& Israel,B.A.(1986) Veridicality of social support : A comparison of principal and network member's response. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*,54,424-431.
- 東洋・柏木恵子・R.D.Hess『母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究』東京大学出版会、1981年。
- Belsky,J.(1984) The Determinants of Parenting: A process model. *Child Development*, 55,83-96.
- 母子愛育会編『最新赤ちゃん百科』講談社、1988年。
- Elkind ,D.(1987) *Miseducation* Alfred A. Knopf ,Inc.(幾島幸子 訳『ミスエデュケーション』大日本図書、1991年。)
- 藤永保『幼児教育を考える』岩波書店、1990年。
- 藤崎宏子「母子寮世帯の家族解体—再組織過程—方法論的検討」『家族研究年報 No.5』家族問題研究会、1979年。
- 深谷和子・植木陽子「母親の不安に関する一考察」『東京学芸大学紀要1部門』37、1986年。
- 服部祥子・原田正文『乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点』名古屋大学出版会、1991年。
- 久田満「ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題」『看護学研究』1987年。
- 保坂展人『ちょっと待って！早期教育』学陽書房、1996年。
- 兵庫県家族問題研究所「核家族の育児援助に関する調査研究報告書」1987年。
- 稲葉昭英・浦光博・南隆男「「ソーシャル・サポート」研究の現状と課題」『哲学』85、1988年。
- 岩田美香「育児期の母親の心理および生活とソーシャル・ネットワークの活用」修士論文（未公刊）、1994年、北海道大学。
- 岩田美香「育児期の母親の不安とソーシャル・ネットワーク」『北海道大学教育学部紀要』第68号、1995年。
- 岩田美香「ひとり親家族の生活と社会関係—全道と札幌市における生別による母親の検討から」『北海道社会福祉研究』第18号、1998年。
- Jennings, Stagg, and Connors (1991) Social Networks and Mothers' Interactions with Their Preschool Children *Child Development*,62.
- 『児童をとりまく世帯の状況』厚生統計協会、1995年。
- Kahn,R.L. & Antonucci,T.C.(1980) Convoys over the Life Course : Attachment, Roles, and Social Support. *Life-Span Development and Behavior*, Vol3.(遠藤利彦 訳「生涯にわたる「コンボイ」愛着・役割・社会的支え」東洋・柏木恵子・高橋恵子(編集・監訳)『生涯発達の心理学2 巻気質・自己・パーソナリティ』新曜社、1993年。)
- 柏木恵子 編『父親の発達心理学』川島書店、1993年。
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する基礎的検討」『日本愛育研究所紀要』第30集、1994年。
- 川井尚・庄司順一「「育児不安」これまでとこれから」『子ども家庭福祉情報』第10号、1995年。

- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する臨床的研究―幼児の母親を対象に一」『日本愛育研究所紀要』第31集、1995年。
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也「育児不安に関する臨床的研究Ⅱ―育児不安の本態としての育児困難感について―」『日本愛育研究所紀要』第32集、1996年。
- Kay Donahue Jennings, Vaughan Stagg, and Robin E. Connors 1991 Social Networks and mothers' Interactions with Their Preschool Children. *Child Development*, 62, 966-978.
- 経済企画庁『国民生活白書（平成4年版）』、大蔵省印刷局、1992年。
- 小林孝一郎「ネットワーク研究の予備的考察 現代における社会的ネットワーク形成とその意味」『東洋大学社会学研究所・研究報告書第12集（平成3年度）』、1991年。
- 『子ども家庭福祉情報 Vol.6 特集これからの子ども・家庭福祉ネットワーク―心の通いあうネットワークにするために～』日本総合愛育研究所、1993年。
- 越川六郎「蓄積的疲労徴候調査について」『労働の科学』2月号、1975年。
- 『子育ては地域のネットワークで』東京・生活者ネットワーク、1999年。
- 久富善之『競争の教育』労働旬報社、1993年。
- 久富善之『豊かさの底辺に生きる』青木書店、1993年。
- Lamb, M.E. 1976 Interactions between eight-month-old children and their fathers and mothers. In M.E. Lamb (Ed.) *The Role of the Father in Child Development*. Wiley. (久米稔・服部広子・小関賢・三島正秀 訳『父親の役割―乳幼児発達とのかかわり』家庭教育社、1981年。)
- 牧野カツコ「育児における〈不安〉について」『家庭教育研究所紀要』第2号、1981年。
- 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要』第3号、1982年。
- 牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第4号、1983年。
- 牧野カツコ「中学生をもつ母親の生活と意識」『家庭教育研究所紀要』第5号、1984年。
- 牧野カツコ・中西雪男「乳幼児をもつ母親の育児不安―父親の生活および意識との関連」『家庭教育研究所紀要』第6号、1985年。
- 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』第9号、1987年。
- 牧野カツコ「〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』第10号、1988年。
- 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子『父親の発達と父親の役割』ミネルヴァ書房、1996年。
- 増山均『子育て新時代の地域ネットワーク』大月書店、1992年。
- 松本由里「現代の母親の悩みとその背景」『母子研究』No.16、1995年。
- 松浦勲「離別母子世帯の生活構造―家族解体と再組織化を通して」『高知大学教育学部研究報告』第一部第40号、1987年。
- 本村汎・磯田朋子・内田昌江「育児不安の社会学的考察―援助システムの確立にむけて―」『大阪市立大学生活科学部紀要』第33巻、1985年。
- 落合恵美子「現代の乳幼児とその親たち―母子関係の神話と現実」三沢謙一他著『現代人のライフコース』ミネルヴァ書房、1989年。
- 大日向正美、『母性の研究』川島書店、1988年。

- 大日向雅美・佐藤達哉編『現代のエスプリ 342 子育て不安・子育て支援』至文堂。
『臨時増刊アエラ 子どもがわからない』朝日新聞社、1998 年。
- Ronald L. Simons, Fred O. Lorenz, Chyi-In Wu, & Rand D. Conger (1993) Social Network and Marital Support as Mediators and Moderators of the Impact of Stress and Depression on Parental Behavior. *Developmental Psychology*, Vol.29, No.2, 368-381.
- Rooks, K.S. (1987) Social support versus companionship : Effects on life stress, loneliness, and evaluations by others. *Journal of Personality and Social psychology*, 52, 1132-1147.
- 佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典編『ゆらぐ家族と地域』岩波書店、1998 年。
- 斉藤茂男『お子さま戦争』草土文化、1994 年。
- Sandra Wallman (1984) *Eight London Household*. Tavistock Publications Ltd., London. (福井正子 訳『家庭の三つの資源』河出書房、1996 年)。
- 佐々木保行・佐々木宏子・中村悦子「乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労 (第 1 報)」『宇都宮大学教育学部紀要』29、1979 年。
- 佐々木保行・佐々木宏子「乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労 (第 2 報)」『宇都宮大学教育学部紀要』30、1980 年。
- 佐藤達哉「育児ノイローゼ」『児童心理』Vol.41、金子書房、1987 年。
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則「育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連」『心理学研究』第 64 巻・第 6 号、1994 年。
- 『生活保護手帳 (平成 9 年度版)』全国社会福祉協議会、1997 年。
- 『新社会学事典』、有斐閣、1993 年。
- 汐見稔幸『このままでいいのか超早期教育』大月書店、1993 年。
- 汐見稔幸『幼児教育産業と子育て』岩波書店、1996 年。
- Shulman, N. (1976) Network analysis : A new addition to an old bag of tricks. *Acta Sociologica* , 23, 307-323.
- 庄司順一「育児不安に対する援助」久常筋子・島内節 (編)『地域看護講座 6・母子地域看護活動』医学書院、1994 年。
- 総務庁統計局『平成 3 年 生活基本調査報告 第 10 巻』、1993 年。
- 杉村宏・岩田美香『単親 (父子母子) 家庭生活実態報告書』、北海道民生委員児童委員連盟、1996 年。
- 高橋種昭・中一郎「母親の育児不安の構造に関する研究----母親の地域社会に対する関心度と育児態度」『日本総合愛育研究所紀要』第 11 集、1976 年。
- 竹内真澄「現代の不安と救い」飯田哲也・浜岡政好『人間性の危機と再生』1988 年。
- 上野加代子『児童虐待の社会学』世界思想社、1996 年。
- 浦光博『支えあう人と人』サイエンス社、1992 年。
- 渡邊秀樹「現代の親子関係の社会的分析—育児社会論序説」社会保障研究所編『現代家族と社会保障』、1994 年。
- 矢倉紀子・広江かおり「幼児の排泄自立に関する研究 — 三歳児の排便トラブルに関する要因の検討 — 」『日本看護科学学会誌』Vol.12・No.3、1992 年。
- 山田昌弘『近代家族のゆくえ』新曜社、1994 年。

山下恒男『子どもという不安』現代書館、1993 年。

吉田義仁『僕らのパパは駆け出し主夫』朝日新聞社、1992 年。

湯沢雅彦 編 NHKブックス『図説 家族問題の現在』日本放送出版協会、1995 年。

資料 1

質問紙調査の質問項目（平成 5 年調査）

I. 今回保健所の健診を受けられるお子さんとご家族についておたずねします。

- ＜1＞このアンケートにお答えいただく方はどなたですか。
- ＜2＞対象となるお子さんの年齢と性別を教えてください。
- ＜3＞お子さん全員の年齢と性別をお答えください。
- ＜4＞あなたの配偶者の御両親、あなたの御両親はおたくに同居していますか。同居していない場合は、おたくから御両親の家までどのくらいかかる所にお住まいですか。
- ＜5＞あなたの家族は次のどれにもっとも近いですか。
①父母＋子 ②父母＋子＋祖父母 ③父＋子 ④父＋子＋祖父母
⑤母＋子 ⑥母＋子＋祖父母 ⑦その他
- ＜6＞現在の住所での居住年数は、何年ですか。

II. お母さんについておたずねします。

- ＜1＞あなたの学歴は次のどれですか。さしつかえなければ教えてください。
- ＜2＞次のような「家事以外の活動」のうちで、あなたが現在なさっているものをすべて選んでください。
①フルタイム勤務の仕事 ②パートタイム勤務の仕事 ③内職 ④自営業
⑤自由業 ⑥ボランティア・地域活動 ⑦趣味・教養に関すること
⑧その他 ⑨「家事以外の活動」はしていない
- ＜3＞＜2＞で①～⑤の項目を選んだ方におたずねします。
あなた自身の仕事から得られる収入は、現在、月平均いくらですか。さしつかえなければ教えてください。
①2万円未満 ②2～5万円未満 ③5～8万円未満 ④8～15万円未満
⑤15～20万円未満 ⑥20万円以上 ⑦わからない
- ＜4＞あなたは将来、現在なさっていない「家事以外の活動」のうちで、将来してみたいとお考えのものがありますか。次のうち最もしたいと思っているものを一つだけ選んでください。
①フルタイム勤務の仕事 ②パートタイム勤務の仕事 ③内職 ④自営業
⑤自由業 ⑥ボランティア・地域活動 ⑦趣味・教養に関すること
⑧その他 ⑨「家事以外の活動」をするつもりはない
- ＜5＞＜4＞で①～⑧のいずれかの項目を選んだ方におたずねします。
あなたは、いつからそのような活動を始めたいですか。
- ＜6＞あなたは、次のような感じを抱くことがどのくらいありますか。
A. 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている
B. 私には頼りにできる人がだれもない
C. 私はその気になれば、人とつきあうことができる
D. 私には知人はいるが、気心の知れた人はいない

Ⅲ. 育児についておたずねします。対象となっているお子さんについてお答えください。

- 〈1〉現在、平日の昼間、あなたのお子さんの世話をしているのは、主にだれですか。
- 〈2〉〈1〉の他に補助としてお子さんの世話をしている方がいらっしゃいますか。
- 〈3〉親戚以外に、ふだん世間話をしたり、子どもの話をしたりする人がいますか。
- 〈4〉親戚以外に、ふだん子どもを預けたり、預かったりするようなお付き合いをしている人はいますか。
- 〈5〉あなたのご家族は、親戚以外の家族と、子どもを含めた家族ぐるみでのお付き合いがありますか。
- 〈6〉あなたはご近所で他のお母さんたちと一緒に、子どもを遊ばせることがありますか。
- ①だいたい毎日ある ②週に2・3回ある ③月に3・4回ある
④ほとんどない
- 〈7〉〈6〉で①、②、③のいずれかを選んだ方におたずねします。
1. そうするようになったきっかけは何でしたか。
2. どのようなことをして遊ばせますか。
- 〈8〉あなたのお住まいは、次のどちらですか。
- ①一戸建て住宅 ②集合住宅（マンション、アパートなど）

Ⅳ. 夫の家事・育児について、お母さんにおたずねします。

- 〈1〉あなたの夫の職業は次のどれですか。さしつかえなければおしえてください。
- ①自営業 ②公務員、団体職員など民間企業以外の常勤勤務者
③民間企業の常勤勤務者 ④臨時・パートなどの勤務者 ⑤その他の職業
⑥無職
- 〈2〉あなたの夫の帰宅時間は、次のどれですか。
- ①だいたい毎日定まっている（ ）時ごろ
②日によってまちまち（ ）時ごろ～（ ）時ごろ
③だいたい一日中家にいる
- 〈3〉あなたの夫は、次の項目をしてくれることが、どのくらいありますか。
- A. 休日や帰宅後に子どもの遊び相手をする
B. 育児に関することを夫婦で話し合う C. あなたの悩みやグチを聞いてくれる
D. 保育園の送り迎えをする E. あなたの外出中に子どもの世話をする
F. 子どもを風呂に入れる G. 子どもの着替えを手伝う
H. 子どもに食事を食べさせる I. 子どもを寝かしつける
J. 子どもが病気の時に仕事を休んで看病する K. 休日に家族を連れて出かける
L. 夕食を一緒に食べる M. 食品の買い物と一緒にいく N. 食事をつくる
O. 食器洗い P. お風呂の掃除や準備をする Q. ゴミ捨てをする
R. 部屋の掃除をする S. 洗濯をする T. その他
- 〈4〉あなたは、夫について次のように思うことがどのくらいありますか。
- A. 夫の育児参加について満足である B. 夫の家事への参加について満足である
C. 夫は子ども好きだ D. 夫は頼りにならない
E. 夫は仕事が忙しい F. 夫には何を話してもムダだ

V. 育児情報と習いごとなどについておたずねします。

- ＜1＞自分の子どもを他の家の子どもと比較して気になるところがありますか。
- ＜2＞育児書を読むことがありますか。
→役に立ちますか。
- ＜3＞育児雑誌を読むことがありますか。
→役に立ちますか。
- ＜4＞子育てやしつけのことで、テレビやラジオの教育番組などを参考にすることがあります。
- ＜5＞電話などの育児相談を利用したことがありますか。
- ＜6＞育児書・育児雑誌・電話相談などを利用して、かえって混乱したことがあれば、ご自由にお書きください。
- ＜7＞小学校入学前に、あなたのお子さんに習わせたいと思っていることはありますか。
次のうち、習わせたいことすべてについて（ ）内に○をつけ、そのうち現在すでに習わせているものには◎をつけてください。
- ①水泳、体操などスポーツに関すること ②文字、数、英語など学習に関すること
③ピアノ、バレエ、お絵かきなど芸術に関すること
④お行儀などしつけに関すること ⑤通信教育 ⑥その他の幼児教室
- ＜8＞保育所や幼稚園、その他の習い事のために、お子さんを一人につき、合計して1ヶ月いくらまで支払ってもよいとお考えですか。
- ①1万円未満 ②1～3万円未満 ③3～5万円未満 ④5～7万円未満
⑤7～9万円未満 ⑥9～11万円未満 ⑦11万円以上
- ＜9＞あなたの世帯年収は税込みで次のどれにあてはまりますか。さしつかえなければ教えてください。
- ①200万円未満 ②200～300万円未満 ③300～500万円未満
④500～700万円未満 ⑤700～1000万円未満 ⑥1001万円以上

VI. 育児の楽しみや苦勞についておたずねします。

- ＜1＞近頃のあなたは、次のように感じることはありますか。
- A. 毎日くたくたに疲れる B. 朝、目覚めがさわやかである
C. 考えごとがおっくうでいやになる（何も考え宅なくなる）
D. 生活の中にゆとりを感じる
E. 子どもがわずらわしくて、イライラしてしまう
F. 自分は子どもをうまく育てていると思う
G. 子どものことでどうしたらよいか、わからなくなることがある
H. 子どもは結構一人で、育っていくものだと思う
I. 子どもをおいて外出するのは、心配で仕方がない
（人に預けて出かけた場合も含む）
J. 自分一人で子どもを育てているのだ、という圧迫感を感じてしまう
K. 育児によって、自分が成長していると感じられる
L. 毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う

- M. 子どもを育てるために、がまんばかりしていると思う
- N. 子どもが好きでない O. 子育てが楽しく毎日が充実している
- P. 子どもが足手まといに感じられる Q. 子どもがとても可愛い
- R. 子どもとばかりいて、孤立した感じがする
- S. 子どもにかまけてばかりで、自分の能力や意欲を生かしているという
充実感がない

＜2＞あなたがイライラしたり、子どもに対して大声でおこったり、手をあげてしまうことがありますか。ある場合は、それはどのようなときですか。

VII. 育児の悩みについて、あなたの解決の仕方についておたずねします。

＜1＞仮に、次にあげる項目について困ったり悩んだりしたとき、あなたは、おもにだれ（またはどこ）と話しますか。

- A. 子どもに湿疹がでてきた B. 子どもの便秘が3日間続いた
- C. 子どもの発音がおかしい D. 子どもの性格が短気である
- E. 子どもが毎晩、なかなか寝ない F. 子どもが偏食・小食である
- G. 子どもがおねしょばかりする H. 子どもに友だちができない
- I. あなたの対人関係の悩み（しゅうとめや近隣の付き合いなど）
- J. あなたのやりたいことができない、仕事につけないといった悩み
- K. 日常の育児について、イライラやクヨクヨすること

＜2＞＜1＞に回答した中で、一番役に立つと思う人（ところ）は、だれ（どこ）ですか。

＜3＞次にあげる項目は、子どもや子育てに関する相談業務を行っているところです。知っている機関には○をつけ、利用したことがある機関には◎をつけてください。（いくつでも結構です）

- 1 保健所 2 児童相談所 3 教育研究所幼児教育センター 4 福祉事務所
- 5 公立保育園の電話育児相談 6 心の里親乳児保育園の育児相談室
- 7 保育センター 8 北海道立家庭生活総合カウンセリングセンター
- 9 北海道クリスチャンセンター（家庭福祉相談室） 10 その他

＜4＞次にあげる項目は、お母さんがお子さんを連れて参加できる集まり（場所）です。知っているものには○をつけ、参加したことがあるものには◎をつけてください。（いくつでも結構です）

- 1 仲良し子ども館 2 児童会館 3 子育て広場 4 幼児教育センター母親教室
- 5 心の里親乳児保育園母親教室 6 育児懇談会 7 その他

＜5＞＜3＞や＜4＞について、使用して困ったこと、知っていても利用しない理由があればお書きください。

＜6＞これまでにあなたが次のような状況のとき、お子さんの世話をしたのは、おもにだれ（またはどこ）ですか。

- A. あなたが病気になったとき B. 二人目のお産のとき
- C. 家族・親戚の看病で忙しいとき D. まとまった買い物に出かけるとき
- E. 葬式・結婚式などで外出するとき
- F. 趣味やスポーツ、教養講座などで外出するとき

＜7＞仮に長期間子どもを預けるような場合についてお答えください。

1. だれに頼めますか。

2. その人に、どのくらいの期間頼めますか。

＜8＞育児について困っていること、かつて困ってことがあれば、何でも具体的に書いてください。できれば、それをどう解決したか、解決しようと思っているのかもお答えください。

Ⅷ. 育児についての感想や要望などあれば、ご自由にお書きください。

＜これで質問は終わりです。長い間、ご協力いただきありがとうございました。＞

資料 2

面接調査の質問項目（平成 5 年調査）

I. [お母さんのネットワークについて]

1. これから、お母さんを中心とした人間関係について聞いていきたいと思います。お話を進めながら、お母さんの場合をこの紙（コンボイモデル）にイニシャル（あるいは記号）で書き込んでください。お母さんからの距離は、同居・別居といった物理的距離ではなく、心理的にどれくらい近いか・遠いかで表してください。
2. 家族構成（年齢、健康）を教えてください。
3. 夫の両親の同居
夫の両親とは、どのような付き合いをしていますか：
4. 自分の両親の同居
自分の両親とは、どのような付き合いをしていますか：
5. お母さん自身のご兄弟を教えてください。
→① 5 の中で、あなたが個人的な悩みを相談できる方はいますか：
→② 5 の中で、子どもを連れて行ったり来たりできる方はいますか：
6. その他に、あなたが悩みを相談できる親戚はいますか：
7. その他に、子どもを連れて行ったり来たりできる親戚はいますか：
8. 世間話をする人の有無
→① その人とは、どのようなきっかけで知り合いになりましたか：
→② その人とは、あなたの個人的な悩みまで相談することができますか：
→③ いない場合、そうした話をする人が必要だと思いますか、
必要でない場合、なぜですか：
→④ 必要な場合、妨げとなっている要因が何かありますか：
9. 子どもを預け合う人の有無
→① その人とは、どのようなきっかけで知り合いになりましたか：
→② いない場合、親戚以外に子どもを預け合う人が必要ですか、
必要でない場合、なぜですか：
→③ 必要な場合、妨げとなっている要因が何かありますか：
10. 家族ぐるみの付き合いの有無
→① その家族とは、どのようなきっかけで知り合いになりましたか：
→② その家族とは、どのような付き合いをしていますか：
→③ いない場合、子どもを含めた家族ぐるみの付き合いは必要ですか、
必要でない場合、なぜですか：
→④ 必要な場合、妨げとなっている要因が何かありますか：

11. 他のお母さんと一緒に子どもを遊ばせるかの頻度
→①そうするようになったきっかけをお話ください：
→②どのようなことをしているかをお話ください：
→③ほとんどない場合、こうした集まりは必要だと思いますか、あまり必要ないですか。
必要でない場合、なぜですか：
→④必要な場合、妨げとなっている要因が何かありますか：
→⑤「ご近所」でなければ、こうした集まりを持っていますか：
12. 育児書・育児雑誌・育児相談の利用
→①育児情報をどのようなときに利用しようと思いましたが：
→②育児情報から得た知識が、自分の考えと合わないときにはどうしていますか：
13. 育児で以外でストレスとなる要因がありますか

Ⅱ. [子どもが産まれるまで]

1. 子どもはつくろうと思ってつくったのですか、それともたまたまできてしまったのですか：
2. 妊産婦の間、準備するものなどの面で、わからないことがあるときは、どのように解決しましたか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
3. 妊娠中、体調の面でつらかったことがあるときは、どのように解決しましたか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
4. 妊娠中、精神的な面で悩んだときに、どのように解決しましたか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
5. 胎教など、おなかの赤ちゃんの為に何かしたことがありますか。夫はどうですか：
6. 妊娠中、子どもの将来や子育てについて、夫と話し合ったことがありますか。
それはどんなことですか：
7. 妊娠中、妊産婦同士が集まるような場所へ行きましたか。どこですか：
→行った場合
①今でも、付き合いが続いている仲間（人）がいますか：
②どのくらいの頻度で、どのような付き合いをしていますか：
8. 出産の時、夫は立ち会ってくれましたか：
その感想があれば：
9. 出産は正常でしたか：

Ⅲ. [これまでの育児について]

1. 子どもは、よく病気をしましたか：
病院通いはどうでしたか：
2. よく泣く子どもでしたか：

3. 乳児期に、特に心配だったことはありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
4. 発育について、心配だったことはありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
5. おっぱい／ミルクについて、心配だったことはありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
6. 予防接種について、心配だったことがありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
7. 離乳食について、心配だったことがありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
8. アレルギーについて、心配だったことがありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
9. 歩行について、心配だったことがありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
10. おむつ／トイレット・トレーニングに関して、心配だったことがありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
11. いたずらについて、心配だったことがありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：
12. 子どもの性格について、心配だったことがありますか：
①だれに（何に）相談しましたか： ②どんなことを：
③その対応は： ④安心できましたか：

IV. [現在の子育てについて]

1. 一日の生活の中で、あなたが楽しいと感じるのはどのときですか：
2. 一日の生活の中で、あなたが一番疲れるのはどんな時ですか：
①そんなときには、イライラしたり、子どもから離れたいと感じますか：
②解消するために、何かしていますか：
3. あなたや夫が子どもと一緒に朝食や夕食をとるのは、一週間のうち何回くらいですか：
4. 一日の中で、御主人と話し合う時間はどのくらいありますか。その時間で十分（満足）ですか：

5. 近頃、お子さんがよくしている遊び／関心を持っていることは、
どんなことですか：
6. 次は、テレビについていくつかお伺いします（ビデオも含む）：
- ①――ちゃんは、いつも一日にどのくらい見えていますか：
- ②お宅では、――ちゃんが見たがる番組はどんなものでも見せますか。それとも親
が番組を選んで見せていますか：
- ③――ちゃんに見せたくない番組がありますか、何ですか：
- どうしてですか：
7. お母さんやお父さんが、――ちゃんに本を読んであげることがありますか：
- それはどのくらいの時間ですか：
- この頃、子供向きの本がたくさん出ていますが、――ちゃんに買ってあげる本
は、どうやって決めていますか：
- （親が決めるのか、子どもが欲しがるものか、決めるときの方法・決め方をきく）
8. ――ちゃんが学校に行ってから役立つようにという考えで、何か一緒にやってい
らっしゃいますか、どんなことでしょうか：
- （おけいこではなく、母親が子どもと一緒に何かしたり、教えたりする活動をきく）
9. （学習には関係なく）自分の子どもにしてあげていることで、自分ながら、
よくやっていると思うことはどんなことですか：
10. 習いものは、始めていますか（具体的に何ですか）：
- 始めている場合
- ①始めたきっかけは何ですか： ②誰かに相談しましたか：
- ③習いものについての、御主人の意見はどうですか：
- ④子どもの様子はどうですか：
- ⑤そこでは、お母さん同士の付き合いがありますか：
- 始めていない場合
- ①習わせていない理由がありますか：
- ②将来は、習わせたいと思っていますか。何を：
- ③それについての御主人の意見はどうですか
11. 幼稚園・保育園・仲良し子ども館などの集団保育に行かせていますか。何ですか：
- （行かせていない場合は、行かせる予定があるかどうかをたずねる）
- 行かせている場合
- ①そこへ行かせている一番大きい理由は何ですか：
- ②行かせること／園の選択について、決める際に誰かに相談しましたか：
- ③それについて、御主人の意見はどうですか：
- ④そこでの子どもの様子はどうですか：
- ⑤そこでは、お母さん同士の付き合いがありますか：
12. ご家族一緒になさるレクリエーションは、どんなことですか：
13. この数ヶ月間に、週末に家族で出かけたことがありますか：
- （キャンプとか動物園とか）

14. 子どもについて、今悩んでいることはありますか：
- ある場合
- ①どのようなことについて、どのような頻度（どのくらい）で気になりますか：
- ②どのように解決しましたか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）：
- ない場合
- ①子どものことはあまり気になりませんか：
- ②子どもがいても、いなくても自分の生活は、あまり変わりませんか：
15. おねしょについて、悩みはありますか：
- ①どのくらいの頻度でありますか：
- ②どのように解決していますか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）：
- ③おねしょのことで、あなたがカッとすることもありますか：
- その時はどうしていますか：
16. 子どもの食事に関して、悩みはありますか：
- ①どんなことで、どのくらいの頻度でありますか：
- ②どのように解決していますか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）：
- ③そのことで、あなたがカッとすることもありますか：
- その時はどうしていますか：
17. 子どもの友だちについて、悩みはありますか：
- ①どんなことで、どのくらいの頻度でありますか：
- ②どのように解決していますか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）：
- ③そのことで、あなたがカッとすることもありますか：
- その時はどうしていますか：
18. 子どもが反抗することについて、悩みはありますか：
- ①どんなことで、どのくらいの頻度でありますか：
- ②どのように解決していますか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）：
- ③そのことで、あなたがカッとすることもありますか：
- その時はどうしていますか：
19. 子どもが悪い言葉を使うことはありませんか：
- ①どんな言葉で、どのくらいの頻度でありますか：
- ②どのように解決していますか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）：
- ③そのことで、あなたがカッとすることもありますか：
- その時はどうしていますか：
20. 子どもの寝付きはいいですか：
- ①悪い場合、どのように解決していますか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）
- ②そのことで、あなたがカッとすることもありますか：
- その時はどうしていますか：

22. 子ども性格について、悩みはありますか：

①どんなことで、どのくらいの頻度でありますか：

②どのように解決していますか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）：

③そのことで、あなたがカッとすることもありますか：

その時はどうしていますか：

23. 子どもの癖について、悩みはありますか：

①どんなことで、どのくらいの頻度でありますか：

②どのように解決していますか（他者に聞いた場合は、満足度も聞く）：

③そのことで、あなたがカッとすることもありますか：

その時はどうしていますか：

V. [しつけ、育児観について]

1. 子どもを育てていて、夫と意見が食い違うことがありますか：

→ある場合

①どんな場合に、どんなことで： ②どちらが妥協しますか：

→ない場合

①育児の方針について、夫と話し合うことは多いですか：

②どのようなことを話し合いますか：

2. これまでに、子どもに対して、あなたがしつけとして、あるいは「親としてこれだけは譲れない」と思って、本気で怒ったことはありますか：

①どんなことで、どのように怒りますか：

②その時の子どもの様子はどうですか：

③その時の夫の様子はどうか（いる場合）：

3. これまでに、子どもに対して、御主人がしつけとして、あるいは「親としてこれだけは譲れない」と思って、本気で怒ったことはありますか：

①どんなことで、どのように怒りますか：

②その時の子どもの様子はどうですか：

③その時、あなたはどうしていますか（いる場合）：

4. 子どものしつけ方について、お母さんの意見を聞かせてください。

この質問紙に答えてください。＊PCPQを手渡す：

5. 子どもが学校にあがるまでに、親は子どもにいろいろなことを教えてあげた方がよいと思いますか：

6. ＊MTQIT-1を手渡し、回答してもらう：

7. ＊MTQIT-2を手渡し、回答してもらう：

8. ーちゃんには、どのくらい上級の学校まで行ってほしいと思いますか：

VI. [お母さん自身の生活・社会活動について]

1. 結婚する前は、どんな生活（社会活動）についていましたか：

→結婚してから（子どもが産まれてから）、仕事を辞めた場合

①勤続年数は何年でしたか：

- ②実際に仕事を辞めたのはどうしてですか：
(お母さんの意志か、他者の働きかけかをきく)
- ③これから仕事に就きたいと思っていますか。いつから・どんなことを：
- ④仕事に就きたいのにできない場合、それはどのような妨げがあってですか：
それに対して、どのように思っていますか：
- 結婚しても、仕事を続けている場合
 - ①結婚前から、仕事を続けようと思っていましたか。違う場合、なぜですか：
 - ②結婚前と同じ仕事ですか。違う場合、なぜ変えたのですか：
 - ③出産休暇の取り方は？職場の周囲の様子はどうでしたか：
 - ④仕事の面で、つらいことはありますか：
- 2. 一日の生活の中で、お母さん自身の時間はありますか：
- 3. 一週間の中で、あなたが楽しいと感じるときはどんなときですか
→誰と、どんなことを：
- 4. 定期的ではなくても、よく読んでいる雑誌がありますか。それは何ですか：
- 5. この2ヶ月ほどのうちに、お読みになった本がありますか。
それは何という本ですか：
- 6. お母さん自身が、余暇によくするレクリエーションは、どんなことですか：
→デパートには、どのくらい行きますか(頻度)：
誰と行きますか：
- 7. お母さん自身の趣味は何ですか：
- 8. 女性の生き方について、どのようにお考えですか。このカード(*I aカード提示)の中から、お母さんの考えに近いものを一つ選んでください：
- 9. 今より時間的余裕があったら、あなたは何にその時間を使いたいですか。このカード(I bカード提示)の中から、お母さんがしたいと思うことを3つ選んでください。
もし、このカードにないようでしたら、それは何ですか：
- 10. この4年をもう一度やり直せるとしたら、今とは違った生き方をしたいですか：
- 11. 母親になる前と比べて、今の生活の方が楽しいですか、大体同じくらいですか：
- 12. 母親であることで一番いいことは何だと思えますか。一番いやなことは：

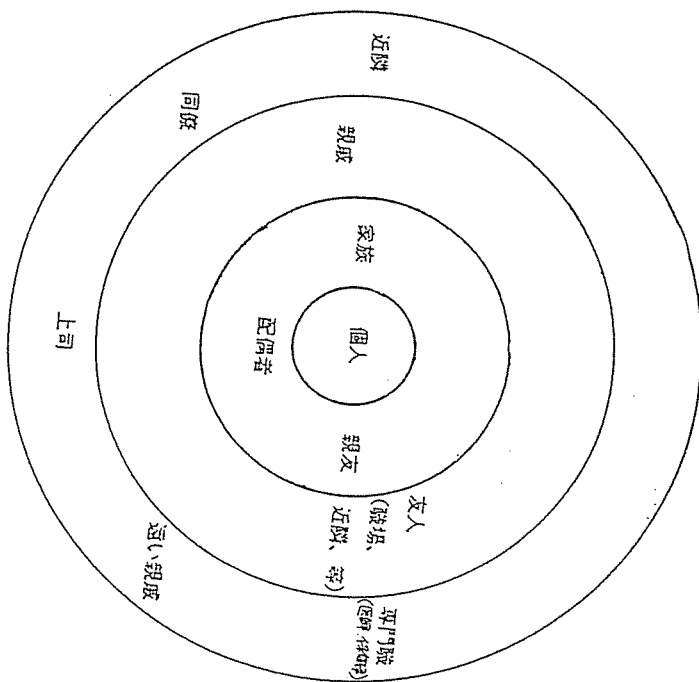
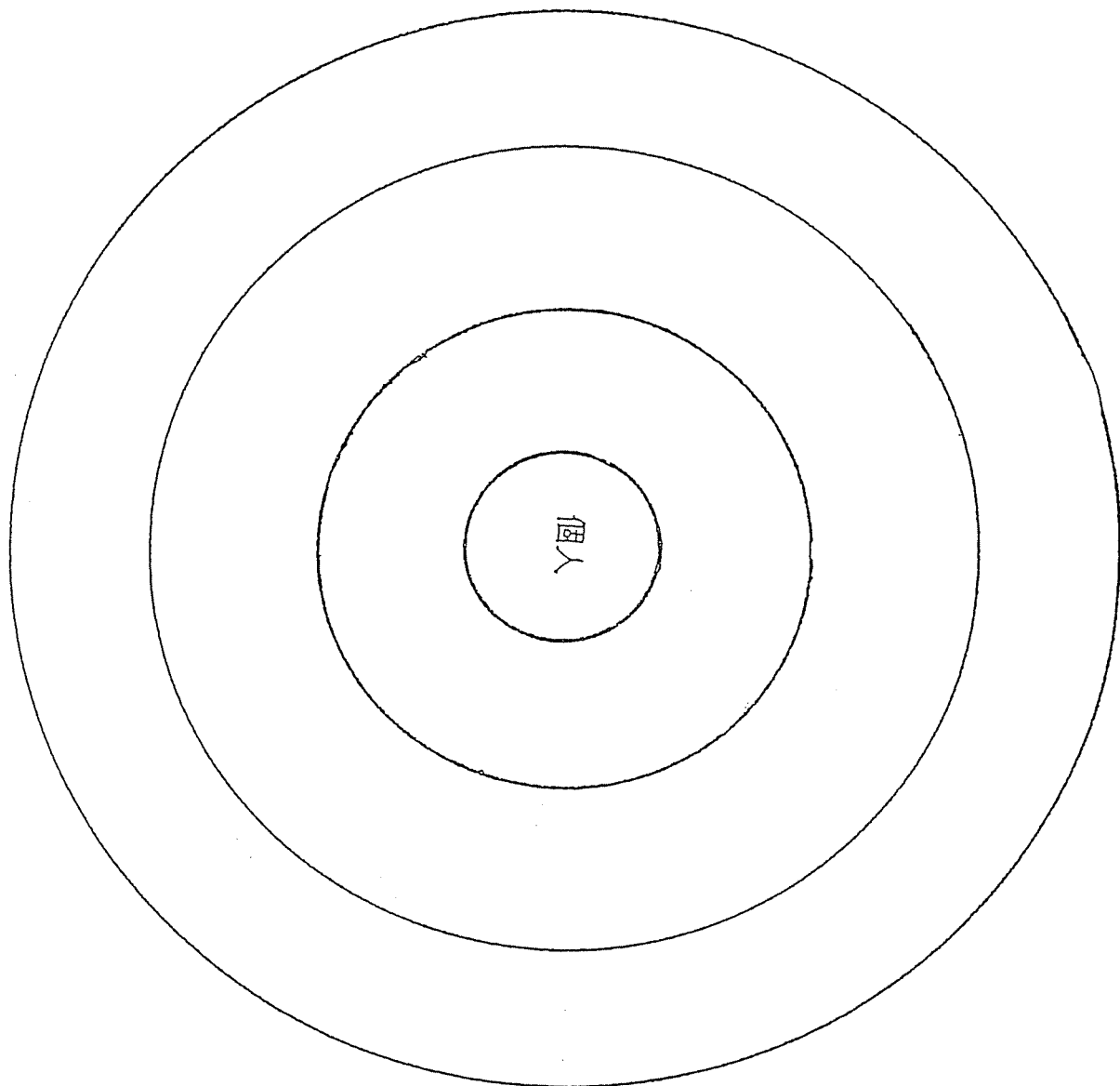
VII. [確認]

- 1. (コンボイの図を見ながら) お母さんを中心としてできあがっている人間関係の図は、大体こんな感じでよろしいでしょうか？誰か書き忘れた方がいますか：
- 2. 全般的に見て、この図の中で、あなたにとって支えとなってくれた人は誰でしょうか。上位3人を挙げてください(1、2人でも可)：
- 3. 反対に、あなたとしっくり行かなかったり、嫌な思いをさせられた人は誰でしょうか：
- 4. この人のために、あなたが支えとなってあげた方はいますか：
それは誰ですか：

[以上で終わりです。本当に長い間、どうもありがとうございました。]

母親のネットワーク（前回との比較で心理的・地理的距離）

コンボイモデル



お母さんが記入する図

P C P Q (1)

子どもが、よいことをしたときやわるいことをしたときに、いろいろなしつけ方がある
 と思います。子どもの扱い方について、あなたの御意見をお聞かせください。
 最近、お子さんがよいことをしたときのことを二つ三つ思い出してください。そのよ
 うな時に、親はどんなふうに子どもにしてやるのがよいとお考えですか。下に挙げて
 ある1～8の扱い方一つ一つについて、右側の1～4のこたえのうち、あなたのお考
 えがだいたいあてはまるところ1つをえらんで、○をつけてください。

	1 非常に よい 方法だ	2 わり に よい 方法だ	3 あまり よく ない 方法だ	4 非常に よく ない 方法だ
1. ぼろぼろしたり、頭をなでたり、だいたりする				
2. “よくできたわ” “とてもいいわ” などという				
3. うなづいたり、にこにこしてあげたり、満足そうに見つめたりする				
4. “——ちゃんはいいい子ね” “——ちゃんはすばらしいわ” などという				
5. 子どもの欲しがっているものを買ってあげる約束をしたり、ごほうびをあげる				
6. だまって、みまもっている				
7. ごほうびとして、好きなことを自由にさせてあげる				
8. ほかの人の前で、 め ぼろぼろあげる				
	1	2	3	4

P C P Q (2)

今度は、最近お子さんがわるいことをしたときのことを二つ三つ思い出してください。

そのような時、親はどんなふうに子どもにしてやるのがよいとお考えですか。下の1～10までの扱い方について、右欄の1～4の答えのうち、あなたのお考えがだいたいいあてはまるところ一つをえらび、○をつけてください。

	1 非常に よい方法 だ	2 わり に よい方法 だ	3 あまり よく ない方法 だ	4 非常に よく ない方法 だ
1. ぶったり、たたいたりする				
2. “よい子は、そんなことはしないものよ”という				
3. 首を横にふったり、めっという顔をしたり、いけません、というふうに、眼でしらせる				
4. (こらしめとして) その子の好きなものや、欲しがっているものをやらなかったり、しばらくおあづけにしたりする				
5. “ダメ”とか“わるい子ねえ”などといって、ことばで、たしなめる				
6. ほかの部屋につれていって、一人だけにしておく				
7. “そんなことをすると、お父さんに叱られますよ”という				
8. “そんなことをすると、かわいがってあげませんよ”とか“そんなことをする——ちゃんはきらいよ”などという				
9. だまって、みすどしておく				
10. “——ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなあ”などという				
	1	2	3	4

おなまえ _____

No. _____

やり方

左にある1から20の各対について、子どもが幼稚園または
保育園の1年保育（5歳児）に行く前にならっておくとした
ら、二つのうち、どちらの方を、できるようになっているこ
とが、大切だと思いますか。各対ごとに二つをくらべて、より
大切な方の_____の上に○をつけてください。

1. { _____ 正しいことばが話せる
_____ 人に頼らず、いろいろなことを自分でできるようになる
2. { _____ 新しいことばの意味をおぼえる
_____ 数が数えられるようになる
3. { _____ 文字（ひらがな）がよめる
_____ おもちゃを友達といっしょに使えるようになる
4. { _____ 正しいことばが話せる
_____ のびのびと絵をかいたり、ものを作ったりする
5. { _____ ものごとを人といっしょにしたり、かわりばんこにすることができる
_____ 新しいことばの意味をおぼえる。
6. { _____ 数が数えられるようになる
_____ ものおじせずに新しいことをする
7. { _____ のびのびと絵をかいたり、ものを作ったりする
_____ 人に頼らずいろいろなことを自分でできるようになる
8. { _____ ものごとを人といっしょにしたり、かわりばんこにすることができる
_____ ものおじせずに新しいことをする
9. { _____ 子どもの歌がうたえる
_____ 数が数えられるようになる
10. { _____ おもちゃを友達といっしょに使えるようになる
_____ のびのびと絵をかいたりものを作ったりする

11. {
 - ___ ものおじせずに新しいことをする
 - ___ 新しいことばの意味をおぼえる
12. {
 - ___ 文字（ひらがな）が、よめる
 - ___ 正しいことばが話せるようになる
13. {
 - ___ 数が数えられるようになる
 - ___ ものごとを人といっしょにしたり、かわりばんこにすることができる
14. {
 - ___ 新しいことばの意味をおぼえる
 - ___ 子どもの歌がうたえる
15. {
 - ___ おもちゃを友達といっしょに使えるようになる
 - ___ 正しいことばが話せる
16. {
 - ___ 人に頼らずいろいろなことを自分でできるようになる
 - ___ 文字（ひらがな）が読める
17. {
 - ___ ものおじせずに新しいことをする
 - ___ 子どもの歌がうたえる
18. {
 - ___ 人に頼らずいろいろなことを自分でできるようになる
 - ___ おもちゃを友だちといっしょに使えるようになる
19. {
 - ___ のびのびと絵をかいたり、ものを作ったりする
 - ___ 文字（ひらがな）が読める
20. {
 - ___ 子どもの歌がうたえる
 - ___ ものごとを人といっしょにしたり、かわりばんこにすることができる。

M T Q I - 2

次のような事からは、家庭で母親が教えてやることでしょうか。それとも、幼稚園，保育所，小学校などで、先生が教えてやることでしょうか。1～10の各項目ごとに、あなたのお考えが
だいたいあてはまるところに○をつけてください。

	全部 母親 が	大体は 母親が	どちらか と母親が	どちらか と先生が	大体は 先生が	全部 先生が
〔例〕 トイレが一人でできる（練習問題）						
1. 正しいことばを話すこと						1.
2. 人に頼らずにいろいろなことを自分でする習慣						2.
3. 文字（ひらがな）をよむこと						3.
4. のびのびと絵をかいたり，ものをつくったりすること						4.
5. おもちゃを友達といっしょに使うこと						5.
6. 子どもの歌をうたうこと						6.
7. ものおしせずに新しいことをすること						7.
8. ものごとを人と一緒にしたり，かわりばんこにすること						8.
9. 新しいことばの意味をおぼえること						9.
10. 数を数えること						10.

I a カード

1. 女性も社会参加の手段として職業をもちつづけることが望ましい。
2. 女性も経済力をもつ必要があるから、職業をもちつづけることが望ましい。
3. 職業をもちつづけることは望ましいが、家事・育児をおろそかにしてまでもちつづけるべきではない。
4. 経済的に苦しいのならしかたがないが、なるべくなら職業をもたない方がよい。
5. 女性は家庭を守ることに専念すべきであるから、職業をもつのは望ましくない。
6. その他

I b カード

1. 趣味を楽しむ。
2. 休養する。
3. 知識・教養を身につける。
4. 美容師・保育等の資格をとる勉強をする。
5. あみもの・料理等、習いごとをする。
6. レクリエーション・スポーツ等をする。
7. 家事・育児にもっと手をかける。
8. 旅行をする。
9. 色々な人とつきあう。
10. 地域や社会のための活動をする。
11. その他

資料3

追跡再調査での面接質問項目（平成9年調査）

I. フェイス・シート

1. 家族構成と健康状態：
2. 現在の母親の職業の有無、職種、就業形態、収入
3. 前回調査から、生活の大きな変化
4. 家全体での年収
 - ① 200万円未満
 - ② 200～300万円未満
 - ③ 300～500万円未満
 - ④ 500～700万円未満
 - ⑤ 700～1000万円未満
 - ⑥ 1000万円以上

II. 母親の生活

1. 母親の平日の一日の時間
2. 休日の様子：どのように過ごすことが多いですか？
3. 母親のネットワーク（前回との比較で心理的・地理的距離）

III. 子ども・子育てについて

1. 習い事の実際と費用
2. 子どもにかかる費用
3. 現在の悩み・不安（どのような時に、どのような内容？）
→対処は？
4. 現在、子育て以外に不安はありますか。
5. 子どもへの期待

IV. 母親自身について

1. 現在の趣味
2. 「母親」「主婦」への評価

V. 「育児不安」について

1. 「育児」「子育て」とは、子どもが何歳ぐらいまでだとおもいますか？
2. いま振り返ってみて、お母さん自身が考える「育児不安」って何だと思いますか？
3. 現在、「育児不安」で悩んでいるお母さん達へアドバイスを…
4. 「児童虐待」をどう思いますか？

資料4

育児困難に関する面接調査質問項目（平成9年調査）

I. フェイス・シート

1. 家族構成と健康状態
2. 現在の母親の職業の有無、業種、就業形態
（夫婦共働きの場合は両者、専業主婦の場合は夫）
3. 住居
4. お母さんの学歴
①中学卒業 ②高校卒業 ③専門学校卒業 ④短大卒業 ⑤大学卒業

II. 母親の生活

1. 母親の平日の一日の時間
2. 休日の様子：どのように過ごすことが多いですか？
3. 母親のネットワーク
【親族／Personal／Maternal ネットワークについて】

III. 子ども・子育てについて

1. 習い事・養育の実際と費用
2. 子どもにかかる費用
3. 家族全体の年収
① 200 万円未満 ② 200 ～ 300 万円未満 ③ 300 ～ 500 万円未満
④ 500 ～ 700 万円未満 ⑤ 700 ～ 1000 万円未満 ⑥ 1000 万円以上
4. 子どもへの期待

IV. 育児の困難さと育児不安について

1. 現在（これまで）の子育ての困難・不安
2. 現在（これまで）の生活上の困難・不安
3. 「育児」・「子育て」は子どもが何歳までか？
4. お母さん自身が考える「育児不安」について
5. 最近問題となることが多い「児童虐待」をどう思うか？

V. 母親自身について

1. 自分自身のための時間・趣味
2. 「母親であること」の評価（母親でよかったと思うこと、損をしたなと思うこと）